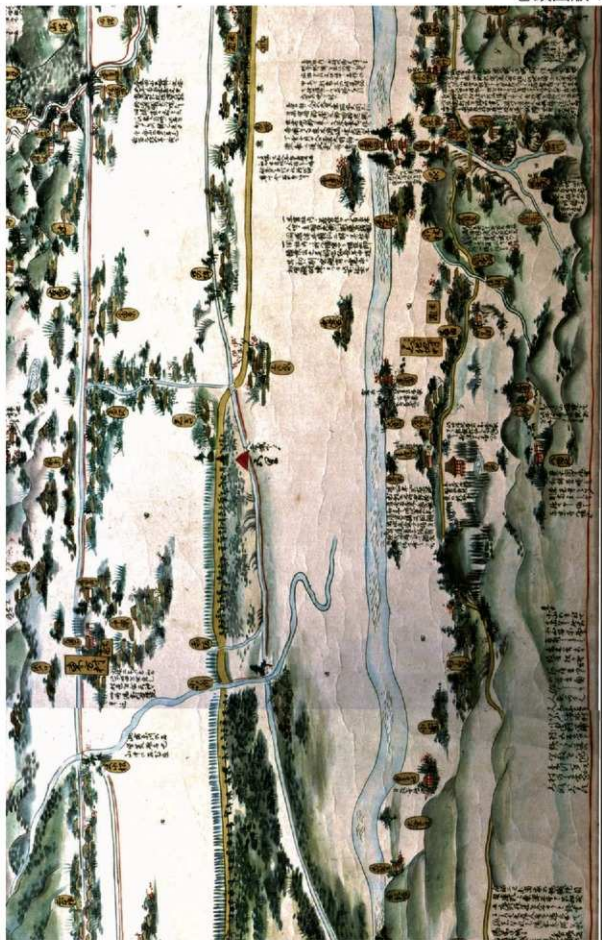


# 多良木相良氏遺跡

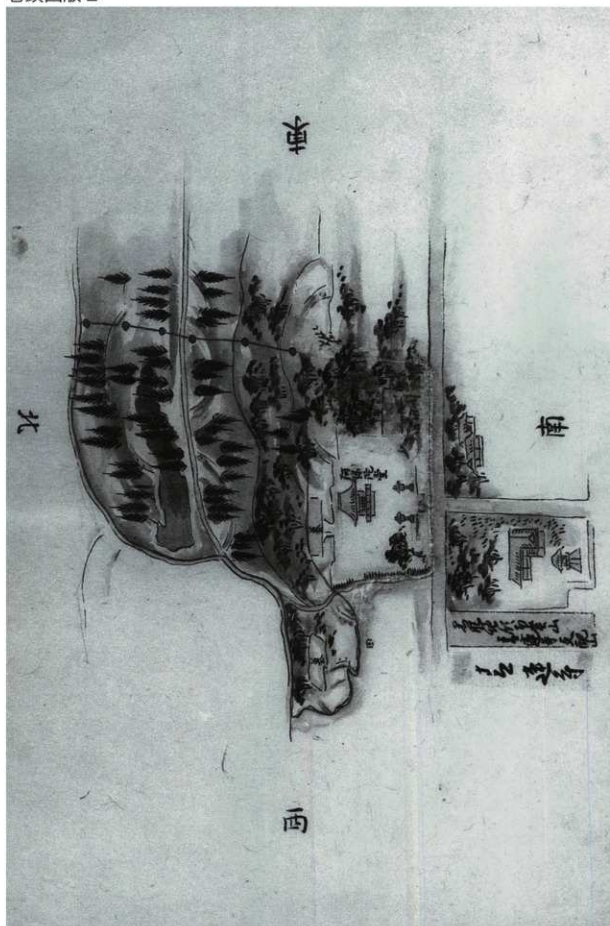
多良木相良氏関連遺跡群総合調査報告書

2024  
多良木町教育委員会





球磨絵図 [部分](1773) (人吉市教育委員会提供)



広島大学図書館所蔵「相良家文書」(寛政8年山絵図のうち、青蓮寺絵図)





球磨川右岸の蓮花寺跡・相良頼景館跡・青蓮寺周辺の様子 ※出典：USA-M319-35



米軍が撮影した昭和 22 年の多良木町 (USA-M319-35 を編集・加工して使用)

巻頭図版 4



石積堤防 (東から)



石積堤防・広場・切落し (東から)



石積堤防 (西から)



石積堤防 (東から)



石積堤防基礎部



石積堤防背後の状況 (北から)

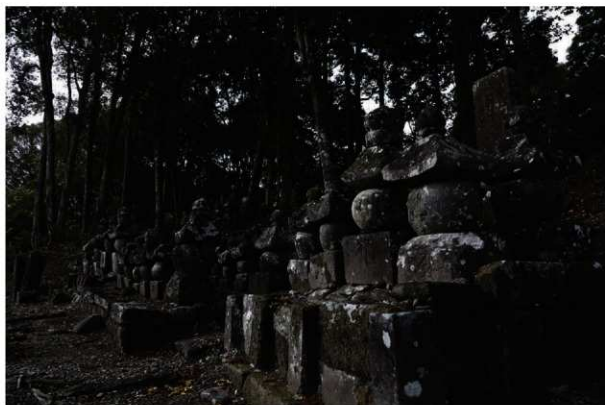


石積堤防・東濠跡の接続状況 (南から)

熊本県文化課調査写真(昭和 49 ~ 50 年)



青蓮寺阿弥陀堂の背後から球磨川を眺む



県史跡・青蓮寺古塔群



相良頼景館跡北側土塁トレンチ断面



相良頼景館跡北側堀トレンチ断面



東光寺磨崖板碑オルソ画像 S=1/25



卷頭図版 8



調査前懸崖板碑・石窟状況



石窟内部状況



石窟内右側壁から奥へと続く空洞状況

## 序 文

今回、刊行しました調査報告書「多良木相良氏遺跡」は、熊本県球磨郡多良木町に所在する遺跡の調査報告です。

多良木町は、鎮西相良氏の惣領家である多良木相良氏が本拠を構えた場所です。多良木相良氏の足跡は、遺跡・建造物・仏神像・石造物・伝統芸能など多岐にわたり、私たちの生活空間の中に溶け込んでいます。これほどまでに豊かな中世の歴史文化遺産が存在する地域は全国的にみても、さほどないものと自負するところです。

令和3年度から始動した調査では、伝相良頼景館跡・青蓮寺・東光寺磨崖板碑といった重要な遺跡を対象に、発掘調査や石造物調査を行いました。その調査の成果は、これまでの相良氏研究に一石を投じるだけでなく、日本史研究の視野を広げることができるような成果を得ました。今回の調査成果が、学術資料としてはもとより、広く、地域の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただけることを願ってやみません。

最後に、各種調査を実地するにあたり、多大なご支援とご協力を頂いた文化庁・熊本県文化課・多良木町教育委員会の皆様、並びに指導助言を賜りました諸先生方、更に地域の方々、発掘・遺物整理作業に携わられた方々に対し、心から感謝の意を表し厚く御礼申し上げます。

令和6年3月31日

多良木町長 吉瀬 浩一郎  
多良木町教育長 佐藤 邦壽

# 報告書抄録

ふりがな	たらぎさがらしいせき
書名	多良木相良氏遺跡
副書名	多良木相良氏関連遺跡群総合調査報告書
シリーズ名	多良木町文化財調査報告
シリーズ番号	第3集
編著者名	永井孝宏 上村麻紀
編集機関	多良木町教育委員会
所在地	〒868-0595 熊本県球磨郡多良木町大字多良木1648番地
発行年月日	2024年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
町史跡 相良頼景館跡	熊本県球磨郡多良木町 大字黒肥地字蓮花寺 825-1 地	435058	多23	32度 16分 22秒	130度 56分 45秒	2021/9/2 ～ 2022/3/29 2022/9/21 ～ 2022/12/1	約62.8㎡	遺跡範囲確認
青蓮寺境内	熊本県球磨郡多良木町 大字黒肥地字北山下 3992		多25	32度 16分 40秒	130度 56分 46秒	2021/9/2 ～ 2022/11/2	-	遺跡内容確認
町史跡 東光寺磨崖梵字	熊本県球磨郡多良木町 大字黒肥地字坂川 4939-3		多20	32度 17分 41秒	130度 57分 3秒	2021/9/2 ～ 2022/2/14 2022/9/1 ～ 2022/11/2	約7.7㎡	遺跡範囲確認

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町史跡 相良頼景館跡	館	中世～近世	堀跡 土塁跡 石積堤防 切落し 広場 土器溜 溝 石積基壇 石造物群	土師器 青磁 白磁 天目 瀬戸 常滑 中世須恵器 滑石製品	川湊関連施設 か居館の可能性 がある
青蓮寺境内	寺院	中世～現代	石造物群・壇上積基壇		一旗の供養所
町史跡 東光寺磨崖梵字	宗教施設	中世	磨崖板碑・石崖	青磁 土師器 中世須恵器	磨崖板碑

要約	<p>多良木相良氏遺跡は鎌倉時代に西遷し、鎮西相良氏の惣領家として存在した多良木相良氏に関する遺跡である。相良家文書に登場する「多良木村」は多良木相良氏の本拠地である。</p> <p>相良頼景館跡は鎌倉時代から機能した遺跡である。多良木相良氏が開発したとされる灌漑域に占地し、当初は堀によって方形に区画され、球磨川に面し石積堤防を整備した遺跡であった。北側の堀は15世紀中頃には一度埋め戻され、多良木相良氏滅亡後の16世紀後半には再度堀が掘られ、土塁が造成される。遺跡の形成は、史料から得られた多良木相良氏の活動時期と一致しており、地域開発の拠点施設と考えられる。</p> <p>青蓮寺境内の当初の姿は、鎮西相良氏の祖・頼景の廟所が設けられ、廟所の中に阿彌陀三尊を安置、その後中軸線上に壇上積基壇配置、その上に五輪塔を設置するという墓所景観が復元できる。これらの墓所整備は、永仁3年(1295)に多良木相良氏主催のもと行われており、一族の墓所として機能していたと考えられる。</p> <p>青蓮寺境内には多良木相良氏にとって支配の正当性を示すものであり、多良木相良氏滅亡後も、墓所空間は支配の正当性を保持する装置であった。</p> <p>東光寺磨崖梵字は磨崖板碑であることがわかった。その隣には石崖も確認できた。東国御家人である多良木家にとって、自らの出自を主張するための装置であるとともに、地域社会への権威付けの機能があったものと考えられる。</p>
----	--



## 例 言

1. 本書は、熊本県球磨郡多良木町に所在する多良木相良氏遺跡の総合調査報告書である。
2. 総合調査は、国指定を目指す動きに伴い史跡指定を目的として実施した。相良頼景館跡（町史跡）、青蓮寺境内（「青蓮寺古塔碑群」県史跡）、東光寺磨崖梵字（町史跡）の調査は、令和3・4年度に「国宝重要文化財等保存整備費補助金」の交付を受けた「町内遺跡発掘調査」により実施したものである。多良木相良氏関連遺跡群の総合調査報告書の刊行は、令和5年度に「国宝重要文化財等保存整備費補助金」の交付を受けた「町内遺跡発掘調査」により実施したものである。
3. 調査は多良木町教育委員会主導のもと、多良木町企画観光課が担当した。令和3年4月より、文化財行政は多良木町教育委員会から多良木町企画観光課に移管され、補助執行となっている。
4. 発掘調査は令和3年4月1日から令和5年3月31日までの期間で実施した。詳細な工程は第1章第2節に記した。
5. 発掘調査における水準点・基準点測量、地形測量は（株）九州文化財研究所に委託した。
6. 自然科学分析はバリノ・サーヴェイ（株）に委託した。
7. 整理・報告書作成作業は平成28年度から令和2年度までは基礎的の再整理作業を行い、令和3年4月から令和6年3月までの期間で実測、デジタルトレース、図版作成などの報告書作成を行った。詳細な日程は第1章第3節に記した。
8. 遺物の実測・トレースは、永井及び整理作業会計年度任用職員が行った。
9. 遺物の写真撮影は、永井及び整理作業会計年度任用職員が行った。
10. 方位及び座標は、国土地理「平面直角座標系Ⅱ系」による。標高値は海拔高である。
11. 本書で用いた土壌・胎土の色調名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」に基づく。
12. 報告書内の遺跡名は、令和5年4月1日時点での熊本県遺跡地図に基づく遺跡名である。相良頼景館跡は多良木町、青蓮寺古塔碑群は熊本県、東光寺磨崖梵字は多良木町の史跡指定を受けている。
13. 昭和49～50年にかけて行われた熊本県文化課による発掘調査を「県調査」、その成果である昭和52年刊行の「蓮花寺跡・相良頼景館跡」「熊本県文化財調査報告第22集」を「県22集」と記す。
14. 本書の編集は永井・上村が担当した。
15. 多良木相良氏に係る史資料の分析を次の方に依頼し、また次の方々から玉稿をいただいた。  
稲葉維陽（熊本大学 永青文庫研究センター長）  
小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）  
狭川真一（大阪大谷大学文学部教授）  
鶴嶋俊彦（元人吉城歴史館長）  
有木芳隆（公益財団法人 永青文庫副館長）  
村木二郎（国立歴史民俗博物館准教授）
16. 発掘調査記録及び出土遺物は多良木町教育委員会で保管している。

# 凡 例

## 1. 出土遺物の分類方法

土師器、輸入陶磁器、国内産陶器、瓦、土師質製品、石製品、古銭、金属器に大分類し、さらに種別や産地、器種を考慮して再分類し、本報告はこの順に図を掲載している。

土師器	坏、小皿、土鍾など
輸入磁器	青磁（碗、皿、浅型碗、小碗、坏、盤） 白磁（碗、皿、坏） その他の青磁白磁 青白磁（坏、壺、合子、小皿） 青花（碗、皿、大皿、その他）
輸入陶器	中国陶器（天目碗、盤、鉢、水注、四耳壺、壺、甕、その他） 朝鮮陶器
国内産陶器	中世陶器（瀬戸、美濃、常滑） 中世須恵器（東播系、在地系） 瓦質土器
銭貨	
金属器	刀剣、金具、鏡
石製品	滑石製品、砥石
その他	
近世陶磁器	磁器（碗、小坏、皿、鉢、蓋、瓶） 陶器（碗、小坏、皿、鉢、蓋、瓶）

なお、貿易陶磁器の分類は、小野正敏氏・村木二郎氏らによる全点調査に基づき、次の文献をもとに分類した。巻末の観察表に記載している。

・池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎「中世琉球における貿易陶磁器調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集 43-84頁 2021

また、出土遺物の分類・年代や編年にあたっては、次の文献を使用した。

- ・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 2005
- ・九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年」2000
- ・山本信夫ほか「大宰府条坊跡XV陶磁器分類編」『大宰府条坊XV』2000 太宰府市教育委員会
- ・森田勉「14～16世紀の白磁に分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982
- ・小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982
- ・美濃口雅朗「榊番城窯（熊本県）」『中世窯業の諸相』2007「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会
- ・美濃口雅朗「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究X』1994
- ・新版「概説 中世の土器・陶磁器」2022 日本中世土器研究会編

## 2. 人吉盆地産出石材の識別方法

これまで人吉盆地に所在する石造物の石材は、色調の違いから暗い色調の凝灰岩を阿蘇溶結凝灰岩、明るい色調の凝灰岩を加久藤溶結凝灰岩として認知されてきた。しかし、本報告では、バリノ・サーヴェイ（株）現地指導のもと、肉眼観察による岩石含有物（岩片・角閃石・輝石・長石・基質）の特定を行い、その特徴をもとに凝灰岩の識別を行った。その結果に基づき石材名を記載している。

## 3. 中世相良氏の認識について

本報告における中世相良氏の認識については、稲葉龍陽・小川弘和編「中世相良氏の展開と地域社会」(成光祥出版、2020年)を参考としている。

# 目 次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 多良木相良氏の歴史文化遺産	1
第2節 計画の経緯と調査体制	5
1. 計画までの経緯	5
2. 調査・報告書作成の体制	5
第3節 調査の概要	5
1. 調査の概要	5
2. 調査に係る事務経過	6
3. 調査日誌抄録（令和3年度）	6
4. 調査日誌抄録（令和4年度）	7
5. 整理作業の経過	8
6. 各種の関連調査	8
7. 調査成果の公開と報告	8
第4節 多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会の記録	10

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 多良木町の位置と環境	12
1. 地理的環境	12
2. 歴史的環境	12

## 第Ⅲ章 蓮花寺跡・相良頼景館跡の再報告

第1節 「蓮花寺跡・相良頼景館」の再報告の概要	20
1. 再報告の趣旨	20
2. 再整理の方法	20
3. 出土遺物の分類方法	20
4. 熊本県文化課調査の経過	20
第2節 蓮花寺跡の再整理の成果	21
1. 蓮花寺跡の概要	21
2. 熊本県文化課調査（県調査）の概要	21
3. 遺構及び出土遺物	22
第3節 相良頼景館跡の再整理の成果	62
1. 相良頼景館跡の概要	62
2. 熊本県文化課調査の概要と資料の整合	62
3. 遺構及び出土遺物	63

## 第Ⅳ章 相良頼景館跡の調査

第1節 調査の方法	97
第2節 調査の成果	97
1. 令和3年度の調査成果	97
2. 令和4年度の調査成果	98

## 第Ⅴ章 青蓮寺境内の調査

第1節 遺跡の概要	106
1. 遺跡の概要	106
2. 青蓮寺阿弥陀堂の履歴	106
3. 平成25年度下水道再設置時の調査	106
4. 平成27年度下水道設置工事時の調査	106
5. 平成28年度の青蓮寺阿弥陀堂保存修理事業に伴う確認調査	107
第2節 青蓮寺古塔碑群の調査	113
1. 石造物の調査	113
2. 壇上墳墓の調査	113

## 第VI章 東光寺磨崖梵字の調査

第1節 遺跡の概要	121
第2節 東光寺出土の経筒	121
1. 経筒発見の経緯の整理	121
2. 経筒の出土状況（『九州日日新聞の記事から』）	121
3. 経筒出土地点の特定	122
第3節 調査の成果	122
1. 調査の方法	122
2. 調査の成果	123

## 第VII章 科学分析

1. 相良領景館跡の自然科学分析	133
2. 東光寺の自然科学分析	150
3. 人吉盆地に分布する石塔に用いられた黒色物質の材質調査	156

## 第VIII章 総括

第1節 多良木相良氏研究の諸論	164
1. 稲葉重陽 『文献史料からみた多良木相良家・相良氏』	165
2. 小野正敏 『蓮花寺・伝相良領景館跡と相良氏関連遺跡出土の貿易陶磁器調査』	176
3. 狭川真一 『青蓮寺壇上積基壇の系譜』	182
『東光寺磨崖梵字の系譜』	186
4. 鶴嶋俊彦 『多良木相良氏の城館遺跡』	190
5. 有木芳隆 『中世多良木の仏像と多良木相良氏』	199
6. 村木二郎 『東光寺経塚と出土資料について』	213
第2節 総括	221

## 挿図・目次

第1図 多良木町位置図	2
第1表 多良木村における遺跡概要	2
第2図 多良木相良氏関連遺跡位置図	3
第3図 相良氏系図	4
第4図 人吉盆地の地質図	16
第5図 人吉盆地の活断層と地形分類	16
第6図 多良木町遺跡地図	17
第2表 多良木遺跡地名表	18
第7図 多良木町字図	19
第8図 熊本県調査時の遺跡配置図及び旧地形図	26
第9図 蓮花寺跡トレンチ配置図及び墳構配置図	27
第10図 石積基壇検出状況図	28
第11図 石積基壇基礎部確認図及び蔵骨器出土状況図	29
第12図 石積基壇上に配置された石造物実測図	30
第3表 石積基壇上五輪塔計測表	31
第13図 石積基壇出土遺物(1)	32
第14図 石積基壇出土遺物(2)	33
第15図 石積基壇出土遺物(3)	34
第16図 A区埋藏遺構及び石造物位置図・埋藏遺構出土遺物	35
第17図 A区溝土層断面図	36
第18図 A区溝出土遺物(1)	37
第19図 A区溝出土遺物(2)	38
第20図 A区溝出土遺物(3)	39
第21図 A区溝出土遺物(4)	40
第22図 A区溝出土遺物(5)	41
第23図 A区溝出土遺物(6)	42
第24図 A区溝出土遺物(7)	43

第25図 A区溝出土遺物(8)	44
第26図 A区溝出土遺物(9)	45
第27図 A区溝出土遺物(10)	46
第28図 B区溝及び土層断面図	47
第29図 B区溝出土遺物(1)	48
第30図 B区溝出土遺物(2)	49
第31図 B区溝出土遺物(3)	50
第32図 B区溝出土遺物(4)	51
第33図 B区溝出土遺物(5)	52
第34図 B区溝出土遺物(6)	53
第35図 B区溝下層出土遺物(1)	54
第36図 B区溝下層出土遺物(2)	55
第37図 B区石敷遺構検出状況図	56
第38図 A区出土遺物	57
第39図 B区出土遺物	58
第40図 C区出土遺物(1)	59
第41図 C区出土遺物(2)	60
第42図 注記不明遺物	61
第43図 相良領景館跡旧地形図及び土層断面図	68
第44図 相良領景館跡遺構配置図及び土層断面図	69
第45図 東外塚出土遺物(1)	70
第46図 東外塚出土遺物(2)	71
第47図 西外塚出土遺物(1)	72
第48図 西外塚出土遺物(2)	73
第49図 西外塚出土遺物(3)	74
第50図 B区遺構配置図及び断面図(1)	75
第51図 B区遺構配置図及び断面図(2)	76
第52図 B区遺構配置図及び断面図(3)	77
第53図 A区遺構配置図	78

第54図	A区断面図	79
第55図	柱穴出土遺物(1)	80
第56図	柱穴出土遺物(2)	81
第57図	B区土器面出土遺物	82
第58図	B区土器(褐色土・盛土)出土遺物(1)	83
第59図	B区土器(褐色土・盛土)出土遺物(2)	84
第60図	B区土器(褐色土・盛土)出土遺物(3)	85
第61図	石積堤防詳細図	86
第62図	石積堤防立面図	87
第63図	広場出土遺物及び石積堤防基礎部出土遺物	88
第64図	B区出土遺物(1)	89
第65図	B区出土遺物(2)	90
第66図	B区出土遺物(3)	91
第67図	B区出土遺物(4)	92
第68図	B区出土遺物(5)	93
第69図	A区出土遺物	94
第70図	C・D区出土遺物	95
第71図	D区・注記不明遺物	96
第72図	相良頼景館跡地形図及びトレンチ配置図	99
第73図	令和3年度調査 北側土塁断面図	100
第74図	令和3年度調査 北側堀断面図	101

第75図	令和3年度調査時の出土遺物	102
第76図	令和4年度調査 北側堀断面図	103
第77図	令和4年度調査 北西側トレンチ・東側トレンチ	104
第78図	令和4年度調査時の出土遺物	105
第79図	青蓮寺境内地形図	108
第80図	青蓮寺阿弥陀堂立面図	109
第4表	青蓮寺阿弥陀堂家遺表	110
第81図	アンカーウエイト掘削時の土層図	112
第82図	青蓮寺古塔碑群配置図	114
第83図	壇上積基壇実測図及び組立塔実測図	115
第5表	青蓮寺古塔碑群一覧表	116
第84図	東光寺磨崖梵字地形測量図	125
第85図	東光寺地区CS立体図	126
第86図	東光寺磨崖梵字法線マップ及び実測図	127
第87図	磨崖断面概略及び概断面図	128
第88図	トレンチ土層断面図	129
第89図	令和3年度調査時の出土遺物	130
第90図	石窟版図	131
第91図	石窟土層断面図及び令和4年度調査時の出土遺物	132
第6表	多良木相良氏に關する資料目録	224
観察表		228

## 巻頭図版

巻頭図版1	球磨絵図[部分](1773) (人吉市教育委員会提供)
巻頭図版2	広島大学図書館所蔵「相良家文書」(寛政8年山絵図のうち、青蓮寺絵図)
巻頭図版3	球磨川右岸の蓮花寺跡・相良頼景館跡・青蓮寺周辺の様子 米軍が撮影した昭和22年の多良木町
巻頭図版4	熊本県文化課調査写真(昭和49～50年) 石積堤防・東摩跡
巻頭図版5	青蓮寺阿弥陀堂の背後から球磨川を眺む 県史跡・青蓮寺古塔碑群

巻頭図版6	相良頼景館跡北側土塁トレンチ断面 相良頼景館跡北側堀トレンチ断面
巻頭図版7	東光寺磨崖板碑オルソ画像
巻頭図版8	調査前磨崖板碑・石窟状況 石窟内部状況 石窟内右側壁から奥へと続く空洞状況

## 写真図版・目次

令和3年度	北側土塁トレンチ 南側土層断面	268
令和3年度	北側土塁トレンチ 中央部土層断面	268
令和3年度	北側堀トレンチ H-27層青磁出土状況	268
令和3年度	北側土塁トレンチ 北側土層断面	268
令和3年度	北側堀トレンチ H-27層青磁出土状況	268
令和3年度	北側堀トレンチ下層状況	268
令和3年度	北側土塁・堀トレンチ土層断面	269
令和4年度	北西側トレンチ 土層断面	269
令和4年度	北西側トレンチ 石積堤防状況	269
令和4年度	北側トレンチ堀検出状況	269
令和4年度	北側トレンチ北側2階座敷状況	269
令和4年度	北側トレンチ 北側之覆土炭化物散在状況	269
令和4年度	東側トレンチ土層断面	269
磨崖板碑	上部梵字残存状況	270
磨崖板碑	下部梵字残存状況	270
令和3年度	東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面(西側)	271
令和3年度	東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面(東側)	271
令和3年度	トレンチ10層出土状況(1385)	271

令和4年度	石窟前庭～内部状況	271
令和4年度	石窟内 湧水の水道	272
令和4年度	石窟右側壁内	272
令和4年度	石窟天井に残る加工痕	272
令和4年度	石窟内部 土層断面	272
令和4年度	石窟奥床検出状況	272
令和4年度	石窟左側壁内	272
令和4年度	石窟左側壁に残る加工痕	272
青蓮寺	壇上積基壇(南側)	273
青蓮寺	壇上積基壇(東側)	273
青蓮寺	壇上積基壇(西側)	273
相良頼景館跡	B区土器溜め出土・土師器	274
蓮花寺跡	出土・中世黒磁器(乙具)	274
蓮花寺跡	出土・瓦質土器(火舎)	274
蓮花寺跡	B区溝下層出土・土師器	274
蓮花寺跡	B区溝出土・粘土塊	274
蓮花寺跡	B区溝出土・鉄洋	274



## 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 多良木相良氏の歴史文化遺産 ※大日本古文書家わけ『相良家文書之一』[相1号]と記す

肥後国球磨郡の荘園公領制は、平頼盛の太宰大貳時代に蓮華王院領とする球磨御領立荘から始まる。在地領主が上納を共同で請け負うという国領御領の強い半輪租領であった。その後、鎌倉幕府の成立を機に一旦没官領化された後、再び球磨白間野荘として頼盛へ安堵され、建久3年(1192)に球磨御領は上球磨を中心とする公田、中球磨を中心とする鎌倉殿御領、下球磨を中心とする人吉荘に再編成される[相2号]。この公田の中には没官領「多良木村百丁」が設定され、それを相良頼景が獲得し、その嫡子・長頼が元久2年(1205)に人吉荘地頭に補任[相3号]されることから、相良氏の球磨郡支配は人吉盆地の東西両端から出発する。以後、彼らを祖とする鎮西相良氏は、領家側の権限を侵食しつつ、地域開発を行っていく。

このように、相良頼景が球磨郡多良木村や肥後国山北・山井などを獲得するところから鎮西相良氏ははじまるが、そもそも、相良頼景は遠江国相良荘を本貫とする御家人であった。頼景の嫡子・長頼は元久2年(1205)に人吉荘地頭職に補任され、安貞3年(1229)の頼景讓状[相5号]によって、多良木村も継承している。また、頼景は庶子たちに山北・山井を分領相続し、宗頼の泉本庄高橋や頼平の筑後三池北郡内など、庶子も熱功所領を経て鎮西相良氏各家を分出していく。

相良庶家が出される中で、建長元年(1249)頃に長頼は嫡子・頼氏に多良木村を継がせたと考えられ[相11号]、ここから鎮西相良氏全体の嫡流・多良木家がはじまる。一方、長頼は庶子たちに入吉荘南方の名々を分与するが、その中の庶子・頼俊から佐牟田家が始まり、また、長頼の庶子・頼親の流れがのちに戦国大名へと成長する永富家へと繋がっていく。

鎌倉時代をとおして多良木家が惣領権を有しており、佐牟田家の菩提寺である願成寺の管理権も多良木家が掌握していた[願成寺文書]。その多良木家の本拠となったのが「多良木村」である。鎌倉時代後期の鎮西相良氏の権益地をひろくと、本拠である多良木村をはじめ、人吉荘や熊本県北部の山井山北、泉新荘、京都、鎌倉、遠江などにあり、惣領家である多良木家はそれらに対し、権益を有していた。また、異国警固番役の諸役の沙汰も惣領が所管していた[相32号]。

南北朝期の相良氏の情勢が窺える『相良経頼契約状』[相62・63号]は、元弘3年(1333)に頼広(佐牟田家)が経頼(多良木家)から人吉荘地頭職の証文を借り出したもので、寛元元年(1243)の鎌倉幕府による人吉荘北方の没取判決に対する回復活動を建武政権に訴訟

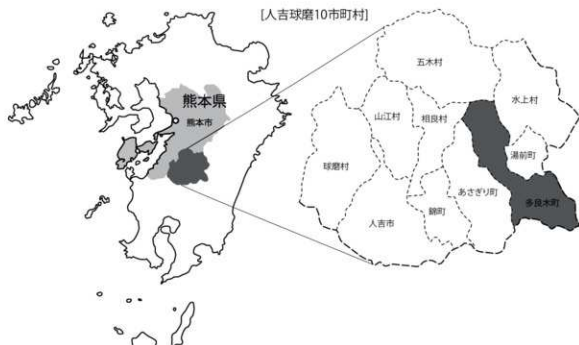
をおこす際の契約状である。人吉荘重要文書を多良木家が所持していることがわかる。では、佐牟田家がその担保として多良木家に出した条件は、回復時には四分の一の権益を譲渡すること、訴訟に際しては何度でも証文を貸し出すこと、互いに約束を破った場合には、人吉荘の全てをどちらか一方が支配することであった。結果的に佐牟田家は建武5年(1338)8月に回復に成功[相80号]するが、借り出した際の約束は履行されることはなかった。何故ならば、この回復は南朝側の多良木家を討伐した功績として与えられたものだったからである。このように鎌倉時代における多良木家の惣領家たる地位を、南北朝期を境に佐牟田家が圧倒するようになる。

球磨郡は上球磨を中心とする勢力をまとめた多良木家と、下球磨の勢力をまとめた佐牟田家が、南北朝内乱では互いに抗争するが、元中8年・明德2年(1391)には、佐牟田家と多良木家は和解している[相186号]。その頃の多良木家の活動を挙げれば、応永19年(1412)に御大師像造像(仏像紀年録)、応永23年(1416)に王宮神社楼門整備、嘉吉3年(1443)に青蓮寺阿弥陀堂大規模改修(棟札)を行っている。

室町時代の文安5年(1448)、永富家の永富長親が佐牟田家・多良木家の両家を統一、相良本宗家を継承する。この文安5年の内訌によって、多良木相良氏は滅亡した。以後、相良氏の名跡は辰膳奉還まで続き、相良氏のように鎌倉初期から明治初期まで所領・本拠を安んずるに封建領主として名跡を継承した武家は全国でも大変珍しい事例である。相良家に伝来した国重文『相良家文書』(慶應義塾大学蔵)や中世以来の建造物などの豊富な資料群は、中世社会を知る好史料群となっている。

人吉球磨地域には、このような相良氏の足跡を具体的に物語る歴史文化遺産が保存状態良く残されている。その上、一向宗の禁制やウンスンカルタ遊戯法、白太鼓踊り・球磨神楽・球磨拳などの伝承、独特の意匠を継承した多くの社寺建造物群など、有形無形の独特の文化が継承されている。

特に、多良木町大字黒肥地地域は相良氏惣領家が本拠を構えた土地で、鎌倉から室町時代にかけて形成された遺跡・山城跡・菩提寺・神社などが状態良く残されている。第1表・第2図に多良木相良氏関連の歴史文化遺産の位置図・一覧表を、第3図で相良氏系図を掲載しているので参照いただきたい。



第1図 多良木町位置図

第1表 多良木村における遺跡概要

No	遺跡・城館・寺社等	歴史文化遺産の概要
①	蓮花寺跡 蓮花寺跡古塔群 [県(建)]	嘉禎元年(1235)、多良木相良家・頼氏の創建と伝わる。五輪塔102基、石塔30基が残る 文永6年(1269)銘の笠塔婆は、多良木相良家・頼氏の極楽往生を祈願したもの
②	相良頼景館跡 [町(史)]	相良頼景の館跡比定地 [外・南・副・当]
③	青蓮寺阿弥陀堂 [国(建)] 青蓮寺古塔群 [県(史)] 青蓮寺阿弥陀三尊 [国(彫)]	多良木家・頼宗が、頼景を供養するために永仁3年(1295)に廟所を創建、その3年後に青蓮寺創建 堂内には、永仁3年銘の阿弥陀三尊が安置、背後斜面に五輪塔群が残る
④	伝弥勒寺跡	鍋城に安置されていた大治5年(1130)銘の薬師如来像が安置されていた
⑤	内城跡	青蓮寺背後の台地の北端に所在し、多良木家・頼親が城主とされる
⑥	貼之瀬井手	「永仁三年五月 貼之瀬井手碑 領主相良頼宗建」記銘の石造物が所在
⑦	里ノ城跡	多良木家滅亡後、水富家の城代が城番となる
⑧	伝横瀬館跡	永吉荘を領知した横瀬(平河)高実の館跡との伝承が残る
⑨	伝妙法寺跡 東光寺薬師堂 [町(建)]	仁治元年(1240)土井口妙法寺再興とある 多良木家・頼氏の再興と伝えられる
⑩	東光寺経塚及び経筒 [県(工)]	凝灰岩壁に彫刻された磨崖板碑があり、隣接地から経筒8口が出土している
⑪	東光寺磨崖梵字 [町(史)] 玉宮神社・楼門 [県(建)]	銘文には頼氏をはじめ大神氏、太秦氏などの名がみえる 創建には日向在庁土持氏が関わる。楼門は多良木家・頼久が応永23年(1416)に再建した建造物
⑫	東城跡	多良木家・頼親及び舎弟頼仙が城主であったが、文安5年(1448)多良木相良家が滅亡すると廃城になる
⑬	久米城跡	戦国時代の相良氏が久米支配のために置いた支城の一つで、南北朝期・室町期の城跡も残る
⑭	鍋城跡	南北朝期の多良木家の居城と伝えられる
⑮	長運寺阿弥陀如来坐像 [県(彫)] 長運寺厨子 [県(工)] 西光寺厨子 [県(工)]	長運寺は元々鍋城にあった寺院で、火災のため弘和3年(1383)に現在地の長野に再建されたと伝わる 堂は3間×3間で江戸時代後期頃の建造物、堂内に室町時代の禪宗様の厨子があり、鎌倉時代後期の阿弥陀如来坐像(※地元では薬師如来として信仰)が安置

※球麻外史(外)、南藤蔓錦録(南)、嗣族独集覽(嗣)、御当家人書(当)



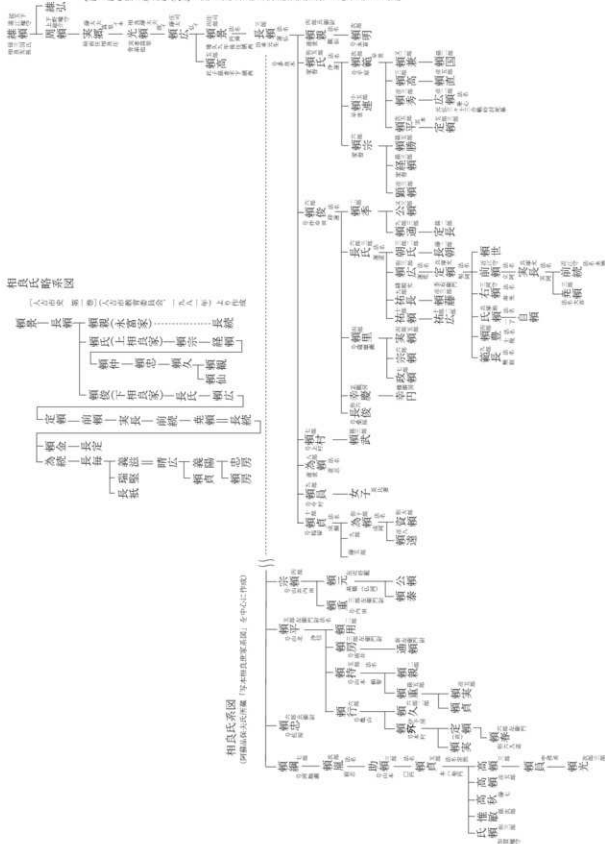


第2図 多良木相良氏関連遺跡位置図

# 相良氏系図

相良系図(部分) 相良系圖(部分) 相良系圖(部分)

【三ノ石行 重元親の系】 【三ノ石行 重元親の系】 【三ノ石行 重元親の系】



第3図 相良氏系図

## 第2節 計画の経緯と調査体制

### 1. 計画までの経緯

多良木町では、平成21年度から歴史回廊事業に着手した。この歴史回廊事業は、歴史文化遺産の調査と活用を推進することを目的とした事業である。その一環として、歴史的建造物調査及び仏神像調査を実施した。平成21～24年度にかけては、建造物・仏神像・遺跡・山城跡・石造物・経筒・文獻・連歌などの各分野の専門家を招聘した講演会及び現地見学会を実施した。平成26年度には、指定文化財及びその他の歴史文化遺産の悉皆調査(文化財の総合的把握)を実施した。これらの成果をもとに、平成27年度「多良木町歴史文化基本構想(以下「基本構想」という。))を策定している。この基本構想の中で「相良氏関連遺跡群」を地域の文化財の特性と位置付けた。

平成27年には「相良700年が生んだ保守と進取の文化」と題した物語が日本遺産に認定された。この構成文化財においても「多良木相良氏遺跡群」を構成文化財として位置付けた。

こうした歴史文化遺産に光をあて、遺産価値を明らかにして国レベルの文化財指定を図って保存と活用を推進し、人吉市の人吉城跡や国宝青井阿蘇神社を中心とした相良氏に係る史跡・国宝・重要文化財と併せて、「相良氏遺跡群」をキーワードに人吉球磨地域全体を周遊する核に位置付け、周辺の観光素材を取り込んだ「歴史回廊」の実現を目的に、本調査は計画された。

さらに、多良木相良氏関連遺跡群の歴史的な変遷や機能を総合的に考察することが必要になり、令和3年度から多良木相良氏関連遺跡群を対象とした、国庫補助事業として多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に着手した。

この事業は令和4年3月に策定された「第6次多良木町総合計画」「多良木町教育大綱」に、「歴史回廊たが交流促進事業」として位置付けられている。

### 2. 調査・報告書作成の体制

#### 【調査・報告書作成機関】

(令和3年度)

【事業主体】	多良木町長 吉瀬 浩一郎 多良木町教育長 佐藤 邦壽
【事業総括】	企画観光課長 林田 浩之
【事業担当】	歴史観光係長 永井 孝宏 歴史観光係学芸員 上村 麻妃 歴史観光係主事 宗像 星磨
【調査・整理作業】	久保 なつ子 大原 絵梨加
【発掘調査協力】	荻田 温子 八橋 正徳

(令和4年度)

【事業主体】	多良木町長 吉瀬 浩一郎 多良木町教育長 佐藤 邦壽
--------	-------------------------------

【事業総括】	企画観光課長 林田 浩之
【事業担当】	歴史観光係長 永井 孝宏 歴史観光係学芸員 上村 麻妃 歴史観光係主事 宗像 星磨
【調査・整理作業】	大原 絵梨加 谷口 千香
【発掘調査協力】	荻田 温子 八橋 正徳

(令和5年度)

【事業主体】	多良木町長 吉瀬 浩一郎 多良木町教育長 佐藤 邦壽
【事業総括】	企画観光課長 林田 浩之
【事業担当】	歴史観光係長 永井 孝宏 歴史観光係学芸員 上村 麻妃 歴史観光係主事 平田 真人
【調査・整理作業】	大原 絵梨加 谷口 千香
【調査協力者・見学者】	

浅野晴樹	荒木和憲	有木芳隆	池田朋生	石井伸夫
市村高男	伊藤裕偉	今岡 稔	上床 真	榎本 渉
大石一久	大木公彦	小川弘和	海邊博史	岸田裕一
黒川信義	佐々木健策	佐藤亜聖	島津義昭	島田豊彰
下村 悟	鈴木康之	杉村彰一	高津 孝	高橋 学
竹田宏司	田中大喜	千々和至	塚本和弘	出合宏光
手塚由美子	中司健一	中島圭一	中山 圭	西田尚史
西山昌孝	橋口 亘	長谷川倫和	花岡興史	原田昭一
福島金治	藤井佐由里	前川清一	松下善和	溝下昌美
美濃口雅朗	三村謙介	村木二郎	森山由香里	
柳原敏昭	山口博之			

### 第3節 調査の概要

#### 1. 調査の概要

相良領景館跡は、隣接する蓮花寺跡とともに昭和49・50年に熊本県文化課による調査が行われ、昭和52年に報告書が刊行されている。出土遺物や図面を含む関連資料は、平成27年に熊本県から多良木町に譲渡された。

今回の調査は「蓮花寺跡・相良領景館跡」「熊本県文化財調査報告書第22号」の再整理作業、保存目的の重要遺跡確認調査、青蓮寺及び蓮花寺跡の石造物調査で構成した。

「蓮花寺跡・相良領景館跡」の再整理作業では、当時作成された図面の整理・デジタル化、写真資料のデジタル化、出土遺物全点を対象に再分類・再実測を行った。その成果を、再報告するものである。

重要遺跡確認調査では、相良領景館跡の範囲確認のためのトレンチ調査や、遺存する土塁及び堀の構築時期の特定及び構造確認のためのトレンチ調査を行った。

東光寺磨崖梵字では、令和3年第1回の調査指導委員会において、磨崖梵字ではなく磨崖板碑であることの確

認めなされたために、この委員会会議では「東光寺磨崖板碑」と呼称している。調査は、磨崖面の実測、磨崖面前面でのトレンチ調査、磨崖面脇に穿たれた石窓の調査を行った。

青蓮寺境内地の調査では、解体修理調査の報告及び周辺開発による試掘確認調査の整理、県指定史跡「青蓮寺古塔碑群」の記録調査・主要五輪塔の実測を行った。また、現蓮花寺に移設された石積基壇上の主要五輪塔の実測も併せて行った。

## 2. 調査に係る事務経過

### 【令和3年度】

令和3年5月22日付け多企発第27号(相良頼景館跡)及び28号(東光寺磨崖梵字)にて法99条の通知。

令和4年3月29日付け多企発第2177号(東光寺磨崖梵字)、2178号(相良頼景館跡)で、埋蔵物発見届を多良木警察署長に提出。

### 【令和4年度】

令和4年6月3日付け多企発第451号(相良頼景館跡)及び453号(東光寺磨崖梵字)にて法99条の通知。

令和5年3月31日付け多企発第2188号(東光寺磨崖梵字)、2187号(相良頼景館跡)で、埋蔵物発見届を多良木警察署長に提出。

## 3. 調査日誌抄録 (令和3年度)

### (相良頼景館跡)

9/2	調査開始 写真撮影
9/6	土塁断面掘削中に、土留め材に転用された整形切石を確認。1点は記念碑からの転用材。
9/7	整形切石の背後から近世陶磁器出土。
9/8	土塁断面部分の掘削がある程度進んだところで、下位確認のためにトレンチを設定。土塁構築土から瓦質土器出土。
9/9	北側土塁トレンチ掘削。
9/10	土塁北側石積の裏込め部分掘削。地権者・橋本氏見学。
9/13	北側土塁トレンチ掘削。北側堀子想部分にトレンチ設定し、掘削始める。
9/15	北側土塁トレンチ掘削。北側堀トレンチ掘削、近代以降の溝跡確認。
9/16	台風14号の影響で午後から雨。北側土塁断面の精査及び3D測量。
9/21	北側土塁及び堀トレンチの掘削。

9/22	北側土塁及び堀トレンチの掘削。隣家の黒川氏からヒアリング。土塁北側の石積(1975-1985)構築後に、土塁掘削が行われたとのこと。基礎掘り込みは石積構築に伴うもので、昭和50年の調査時の断面と比較した結果、50年調査後に大きな改変をうけていることがわかった。
9/24	北側堀トレンチの旧耕作土から近代の陶磁器出土。
9/27	北側堀トレンチの掘削。
9/29	多良木中学校職場体験(発掘体験)。
9/30	北側堀トレンチの掘削。
10/1	北側堀トレンチの掘削。水田耕作に伴う溝覆土の掘削終わる。
10/2	出合氏(相良村)来跡。北側堀トレンチの掘削。北側土塁の整地層を土壌サンプリング。
10/4	北側土塁トレンチにて整地層を掘削。土師器多数出土。北側堀トレンチにて、堀覆土の礫層を確認。
10/6	木村氏(泉文化課)、溝下氏(元湯前町)来跡。北側堀トレンチの掘削。北側堀跡の南側を確認。
10/7	北側土塁トレンチ掘削。北側堀トレンチの掘削。耕作土を掘削。
10/8	北側堀トレンチの掘削。
10/12	転落防止柵設置。
10/14	重機による表土除去及び安全養生。北側堀跡の北側対岸を確認するためトレンチを延長。北側堀トレンチ延長は9mとなる。層位は現代水田土、床土、旧水田土、旧床土、その下に礫層(地山)を確認。その上面にて堀の掘り方を確認した。堀跡は上端幅が6mを測る。その後、堀掘り方中位まで掘削した。中位層までは、拳大から頭大の礫が多く出土した。中位下からは植物遺体を含む粘質土を認め、その中から青磁碗が出土した。断面確認の堆積状況から、当初堀跡が埋没した後に、堀を掘り直していることがわかる。この掘り直し堀の埋没は、人為的に礫を中心に廃棄。その礫層中から土師坏が1点出土。
10/15	堀覆土粘土層から出土した青磁碗の取上げ。その後、堀覆土掘削。
10/18	中司氏(益田市)来跡。北側土塁トレンチ整地層掘削。堀覆土掘削。
10/19	堀覆土最下層まで掘削。
10/21	写真撮影のための清掃作業。土層精査及び分層。

10/22	写真撮影。北側土塁トレンチ掘削。北側土塁下の中世整地層及び地山と思われる明褐色シルト層まで掘削した。この北側土塁トレンチ南側では黒褐色土（カーボン含む）が中世整地層から10cm落しても消えなかったため、これをS-1とし、ここから出土した遺物もS-1として取り上げた。
10/27	北側土塁堆積状況精査。
10/30	北側土塁堆積状況精査。
11/2	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/4	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/5-6	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会
11/15	北側土塁トレンチ南側の掘削。
11/16	北側土塁トレンチ掘削。中世整地層の下を全体的に掘削。明褐色シルト層、その下の赤味帯びる粘性のある明褐色土、その下に礫層が堆積。明褐色シルト層、その下の赤味帯びる粘性のある明褐色土は、トレンチ南側には堆積していない。トレンチ北側では、明褐色シルト層、その下の赤味帯びる粘性のある明褐色土の下に、黄褐色シルトが確認され、その下が礫層となる。また、土塁直下の黒色シルトを中世整地層として整理していたが、精査の結果、上から鉄分混じりの黒褐色シルト、炭化物が多く混じる黒褐色シルト、明褐色シルトが混じる黒褐色シルトに分層した。さらに、トレンチ南側で確認した炭化物・焼土が混じる層を便宜上、中世整地層②とした。
11/18	北側土塁トレンチ北側石積付近の中世整地層の低位を掘削。堆積状況を確認。堆積状況は次の通り。 土塁構築土 中世整地層①：カーボン、土器片多く含む 中世整地層①-2：上下の漸移層 明褐色シルト：混じりないシルト、 水性堆積物 赤味ある褐色粘質土：遺物出土なし 明褐色シルト：混じりないシルト、 水性堆積物 礫層：基盤層、土塁付近が最高所、 自然堤防跡か
11/19	土塁トレンチ写真撮影。土層図作成。
11/24	奥球磨セミナー現場見学（25人）教育委員会現場視察。
11/26	奥球磨セミナー現場見学（24人）
11/29	多良木町議会による現場視察。
12/1	杉村彰一氏による現場指導。県調査についてヒアリング。
12/21	科学分析土壌サンプル採取。

1/5	土層注記作業。
3/29	北側掘跡トレンチ、重機による埋め戻し。

#### 〔東光寺磨崖梵字〕

9/2	調査開始。
10/8	調査前状況撮影。
10/11	トレンチを設定、掘削始める。
10/12	トレンチ掘削、竹根除去。
10/13	トレンチ掘削。
10/20	表土下の暗褐色シルトを掘削。
10/30	堆積状況は、表土の下に明褐色土（混入物あり）が約60cm堆積していた。その下位層から土器破片が出土。この層の下位が岩盤と予想。
11/2	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/4	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/5-6	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会
12/3	トレンチ掘削、磨崖梵字周辺の地衣類を除去。
12/7	トレンチ掘削、暗褐色シルト層を掘削。
12/8	トレンチ掘削、写真撮影。基盤層と思われる層は、凝灰岩風化土と思われ、白灰色土のブロックが目立つ。その中に、褐色ブロックも少々混じっており、盛土の可能性もある。現段階では、これを基盤層としているが、この直上にて、土師器や青磁碗が出土した。
2/3	基盤層と予想していた層を掘削。
2/4	基盤層と予想していた暗褐色シルトから瓦質土器が出土。出土状況の撮影を行い、周辺を精査。この層が客土であることを確認。その下位からグライ化した層を確認。この層が調査対象時期の堆積物と思われる。グライ層は斜めに堆積している。
2/7	グライ層まで掘削。
2/10	グライ層掘削。
2/14	グライ層掘削。写真撮影。図面作成、調査終了。

#### 4. 調査日誌抄録（令和4年度）

##### 〔相良頼景館跡〕

9/21	台風14号により倒木した樹木の撤去。
10/5	調査前撮影、除草作業、トレンチ設定。
10/6	北西トレンチの掘削、表土直下に現代の焼土層確認。
10/12	北西トレンチの掘削。
10/14	北西トレンチの掘削、整地層確認。常滑出土。
10/18	北西トレンチの掘削、トレンチ北側で石積確認。
10/19	東側トレンチの設定及び掘削。
10/24	北側トレンチの設定、重機掘削の準備。

10/25	北側トレンチ重機による表土除去・遺構検出。北西トレンチ重機による北側伸長。
10/26	北西トレンチの掘削。北側トレンチの掘削、旧耕作土及び溝跡を掘削。
10/27	北側トレンチの掘削、堆積層の分層作業。
10/28	北側トレンチの掘削、旧耕作土・床土の除去完了。トレンチ配置図の作成。
11/4	北側トレンチの掘削。
11/7	北側トレンチの掘削。 掘削り方北側にて頭大の礫層を確認。
11/8	東側トレンチの掘削。北側トレンチの掘削、掘削り方南側部分を掘削。
11/9	東側トレンチの掘削。旧溝を確認。 北側トレンチの掘削。堀1と堀2の位置確認。 堀2覆土にて炭化物の散在層を確認。
11/10	北側トレンチの掘削・清掃。 北側トレンチの土層断面図作成、写真撮影。
11/15	東側トレンチの掘削、旧暗渠確認。
11/17	東側トレンチの掘削、東側堀の掘り方を確認。
11/21	下村氏（別府大学）視察
11/24	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備。
11/25	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員による視察。
12/1	北西トレンチの掘削、整地層の下が水性堆積層で無遺物層、その上面から遺構掘り方を確認、その覆土は堀1覆土に似る。 東側トレンチの掘削、水性堆積層の下に礫層を確認。

#### 〔東光寺磨崖梵字〕

9/1	調査着手、写真撮影、調査準備（清掃・除草）。
9/5	台風11号接近による現場養生。
9/6	台風11号接近による現場養生。 午後から台風通過後の清掃作業。
9/7	石窟前面の崩落土の掘削。
9/8	石窟前面の崩落土の掘削、土壌の採取。
9/12	石窟の掘削、前庭部に礫を確認。
9/13	石窟及び前庭部の掘削、土壌サンプル採取。
9/14	石窟及び前庭部の掘削、断面にて土層検討。
9/15	石窟の掘削、磨崖面の地衣類の除去。
9/16	磨崖面地衣類の除去、台風14号接近による現場養生。
9/20	台風14号の影響により倒木あり。
9/21	台風14号により倒木した木の撤去。
9/23	狭川委員による専門指導。 西教育委員、高橋氏（太宰府市）視察。
9/26	石窟奥壁部分の掘削、土壌サンプル採取。

9/28	石窟奥右奥の撮影、前庭部の掘削。 磨崖面左側の窟内部の撮影。
9/29	石窟清掃、土層精査、磨崖面の除草。
9/30	石窟土層断面撮影、土層注記。
10/4	石窟の実測作業。
10/7	東光寺調査撮影。
11/2	石窟展開図・土層図作成。調査終了。

#### 5. 整理作業の経過

【平成28年度（2016）～令和元年度（2019）】

- 1次整理：現場図面一覧表及び遺物一覧表の作成  
現場図面と遺物の整理  
出土遺物の清掃

【令和2年度（2020）】

- 2次整理：現場図面のデジタル化  
現場写真のデジタル化  
遺物の分類、実測、デジタルトレース

【令和3年度（2021）】

- 令和3年度出土遺物の洗浄・注記  
遺物実測及びデジタルトレース  
図版作成

【令和4年度（2022）】

- 令和4年度出土遺物の洗浄・注記  
遺物実測及びデジタルトレース  
図版作成

【令和5年度（2023）】

- 遺物実測及びデジタルトレース  
図版作成  
レイアウト編集  
報告書作成

#### 6. 各種の関連調査

令和5年1/10～12：小野委員による灰塚遺跡陶磁器全点調査

令和5年3/16～18：牧之原市・菊川市調査

令和5年8/18：バリノ・サーヴェイ株式会社による石材調査

令和5年9/30～10/3：小野委員による相良領後館跡・中原城跡・山田城跡・高城跡陶磁器全点調査

令和5年9/29：九州国立博物館協力による石造物蛍光X線分析

#### 7. 調査成果の公開と報告

発掘調査は原則公開とし、現場説明会や地元依頼の見学会を積極的に行った。

2021.11.24 多良木町教育委員会による見学



2021.11.29 多良木町議会視察



2022.3.12 黒肥地 1.2.3 区へ公開



2021.11.24-26 奥球磨セミナー



2022.11.1 久米2区公民分館視察





## Taragi Town Topics



### 町内文化財を国史跡に 調査指導委員会開催

7月1日、多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会が開催されました。当委員会は、多良木相良氏関連の文化財を国史跡にすることを目的に、令和3年度から開催され、今回で2回目となります。委員によって、これまでの発掘調査の成果や、今後の調査方針が議論されたほか、伝相良頼景館跡・青蓮寺古塔跡群・東光寺磨崖梵字の現地視察を行いました。

### 第4節 多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会の記録

多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会を令和3年4月1日付けで設置（令和3年3月24日多良木町教育委員会告示第5号）した。

〔多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会〕

- 稲葉 継陽（熊本大学永青文庫研究センター長）
- 小野 正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）
- 狭川 真一（大阪大谷大学文学部歴史文化学科教授）
- 鶴嶋 俊彦（元人吉城歴史館館長）
- 巽田 温子（多良木町文化財保護委員）

【令和3年11月5日～6日 第1回委員会】

委嘱状交付

委員長及び副委員長の互選

互選により稲葉委員長、鶴嶋副委員長に決定

報告事項（事業趣旨説明）

検討事項

- ・相良頼景館跡及び東光寺トレンチ調査の成果報告
- ・東光寺磨崖梵字は磨崖板碑

現地見学

・相良頼景館跡・青蓮寺・東光寺磨崖梵字・中山観音堂

【令和4年7月1日 第2回委員会】

令和3年度調査の報告

令和4年度の調査方針

総合調査報告書について

現地視察

- ・相良頼景館跡・青蓮寺・東光寺磨崖梵字

【令和4年11月25日 第3回委員会】

令和4年度調査の報告

遺跡の名称と範囲について

総合調査報告書について

将来の方向性について

現地視察

- ・相良頼景館跡・東光寺・青蓮寺・内城跡・里城跡
- ・八日薬師堂・古多良木・久米城跡

【令和5年8月4日 第4回委員会】

委嘱状交付

委員長及び副委員長の互選

互選により稲葉委員長、鶴嶋副委員長に決定

令和4年度調査の報告

総合調査報告書について

中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会について





①左側は新築中の建物の基礎 ②左側は新築中の土留壁 ③奥は多良木相良氏の邸宅跡

協力していただく専門家のごま

氏名	所属	役職
藤原 龍樹 さん	熊本大学文学部 研究センター長	専門は文化史学。 古文書から遺跡の発掘を断続、整備付けを行います。
小野 正敏 さん	国立歴史民俗博物館 名誉教授	専門は考古学。特に福岡県北九州市の第一人者。 福岡県博物館から出土した陶器の分析を行います。
柳川 真一 さん	大塚本館大学歴史 文化資料館長	専門は考古学。特に石巻市歴史の第一人者。 東北博物館館長を歴任し、整備付けを行います。
齋藤 俊彦 さん	元ノ宮城歴史館館長	専門は歴史学。
新田 謙子 さん	多良木町文化財 保護委員会	歴史文化遺産の保護と活用を担います。

ただ今、発掘中！

## 多良木相良氏遺跡群

「これは多良木相良氏が築き上げた城の遺跡の跡か」といふ  
噂が、今もなお残っています。この遺跡群は、多良木相良氏の居  
る城跡と、その周囲に築かれた土留壁や土留壁の基礎

### 本格的調査の翌年 調査委員会設置

「多良木相良氏の城跡」といふ噂が、今もなお残っています。この遺跡群は、多良木相良氏の居る城跡と、その周囲に築かれた土留壁や土留壁の基礎

「これは多良木相良氏が築き上げた城の遺跡の跡か」といふ  
噂が、今もなお残っています。この遺跡群は、多良木相良氏の居  
る城跡と、その周囲に築かれた土留壁や土留壁の基礎

「これは多良木相良氏が築き上げた城の遺跡の跡か」といふ  
噂が、今もなお残っています。この遺跡群は、多良木相良氏の居  
る城跡と、その周囲に築かれた土留壁や土留壁の基礎



【文化の街】YouTube  
「いせきへ行く」vol.9  
中津川遺跡群  
— 熊本県多良木町 — 製作中

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 多良木町の位置と環境（第4・5図）

#### 1. 地理的環境

##### 【多良木町の位置と地勢】

熊本県南部に位置する人吉盆地の中央を、市房山（標高1721.8m）を源に発する球磨川が盆地を西流し、八代海に注ぐ。多良木町の東側は、湯前町・水上村・宮崎県児湯郡西米良村、西側はあさぎり町、南側は宮崎県小林市に接している。多良木町は、東経130度56分18秒、北緯32度15分38秒に位置し、熊本県の南部、人吉盆地の東部に所在する。標高160.51m、東西21.0km、南北22.8km、中央部は平坦地で、南部と北部は九州山地の支脈を形成する山地におおわれている。面積は165.86km<sup>2</sup>、人口8,682人（令和5年3月31日時点）を有し、面積の約80%は山林原野で、水利の便に恵まれ農業が発達している。土地は肥沃で、温暖多湿の気候にも恵まれ良質米や果樹等が栽培されるとともに、豊富な森林資源により椎茸等の林産物も数多く産出されている。

明治4年の廃藩置県後、明治22年の市制及町村制施行により多良木村、黒肥地村、久米村が誕生した。大正15年5月1日には多良木村は町村制を施行している。昭和30年4月、町村合併促進法により、多良木町、黒肥地村、久米村が合併、現在の多良木町に至っている。

産業は、農業及び林業を中心とした第1次産業を基幹産業として栄えてきた。しかしながら、本町の総就業人数は昭和55年以降、年々減少している。第2次産業、第3次産業の就業人口は、それぞれ激減及び横ばいとなっているものの、第1次産業における就業人口の減少は大きく、昭和55年（2,967人）と比較して平成17年（1,389人）は約半数である。産業別業者割合における第1次産業の業者割合は、昭和55年に38.9%を占めていたが、後継者不足、従事者の高齢化などのために、平成17年には23.9%までに急激に減少している。これと相反して、第2次産業、第3次産業の業者割合は増加して、平成2年には第1次産業を逆転し、平成17年にはそれぞれ、28.6%、47.5%となっており、町の産業構造は著しい変化をみせている。

##### 【地質】

人吉盆地は、九州山地に開口した断層盆地であり、北部は八代・球磨山地、東部は九州山地、南部及び西部は肥薩火山群に囲まれている。この肥薩火山群の活動によって、低地形の球磨盆地の西側が陥没し「古人吉湖」が形成された。約100万年前に、侵食によって湖水の出水とともに猛烈な河流侵食を受けて深い峡谷が形成された。やがて湖水が枯渇して人吉盆地の祖形が削出される。人吉盆地の地質は、四万十層・人吉層・安山岩類・

火砕流堆積物・洪積層・沖積層に大きく分けられる。球磨川流域から球磨川両岸にかけて、四万十層帯コンプレックスの後期白亜系諸塚層群が分布し、火山岩類の玄武岩・堆積岩類の砂岩・頁岩およびチャート・変成岩類の片状砂岩・粘板岩及び千枚岩によって構成されている。また、市房山には諸塚層群および日向層群が貫入して、中新世の深成岩類の花崗閃緑岩が分布し、花崗閃緑岩と周囲の地質帯との接触部には、接触変性作用によりホルンフェルスが生じている。

多良木相良氏関連遺跡群が所在する人吉盆地東部には、新第三紀後期～第四紀にかけて形成された段丘堆積物や、阿蘇カルデラや加久藤カルデラを起源とする火砕流堆積物が分布する。盆地北側では未固結堆積物や火砕流堆積物からなる小起伏段丘が発達し、南側では段丘が広く分布するという特徴を有している。

多良木町のほぼ中央の球磨川両岸は、低平地で形成され、礫層を中心とした表層である。北部は九州山地から幾多の支脈とともに球磨川への支流を形成、宮ヶ野・永谷・柳野の溪谷から小椎川・牛瀬川が山間地を縫うように流れ球磨川に合流する。北部山地末端から球磨川河岸段丘沿いにかけては、加久藤溶結凝灰岩が発達、この上位に礫層が堆積し周囲は急崖をなし、崖の高さは数十メートルに達するところも多い。

球磨川左岸は、南部山地山麓から北西に向い球磨川に達する複合扇状地を形成し、その末端はほぼ河岸段丘沿いに達している。南部は黒原山の分水嶺を境にしだいに緩やかな傾斜をもって南北に分かれる。北に向かって仁原川・枝川内川が複合扇状地を形成しつつ球磨川に合流する。また、南へは鏡北川が槻木の細長い渓谷を縫うように宮崎県に抜け、大淀川に注いでいる。

中部は、南北両山地に挟まれた球磨川の開析による沖積平野が広がり、国道219号線一帯には、商店街や住宅、公共施設が展開する。

人吉盆地から産出される石材は、阿蘇溶結凝灰岩・加久藤溶結凝灰岩・安山岩・砂岩等がある。盆地内に残る建造物や石造物には、加久藤溶結凝灰岩が利用されていることが多い。

### 2. 歴史的環境（第6・7図・第2表）

#### 【旧石器時代】

人吉盆地は、熊本県下でも旧石器時代の遺跡が多い地域である。特に、入戸火砕流（AT）の上位と下位の層で石器文化の存在が明らかとなっている。多良木町内の里城遺跡からは細石器、大久保遺跡からは角錐状石器や細石器などの後期旧石器時代の石器が出土している。

## 【縄文時代】

縄文時代草創期の資料は、里城遺跡から槍先形尖頭器、隆起線文土器・細石刃が出土している。

縄文時代早期になると、沖積地を望む台地上や丘陵上に集落が形成されるようになる。代表的な人吉盆地の遺跡は、狸谷遺跡、大丸藤ノ追跡跡、城ノ馬場遺跡、村山間谷遺跡、波ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、鳥魁遺跡、赤坂水谷遺跡、石清水遺跡・灰塚遺跡等が挙げられる。人吉盆地の縄文時代早期の土器は、手向山式土器・中原式土器・石清水式土器・塞ノ神式土器が主体で、南九州地域の影響を多分に受けている。

大久保遺跡群の調査では、早期の竪穴9基・集石35基が確認されている。これらの遺構からは、手向山式土器・石清水式土器・中原式土器・平橋式土器・塞ノ神式土器が出土している。特に、北井出遺跡の竪穴からは、良好な状態で手向山式土器・石清水式土器が出土している。追ノ原遺跡では、滑石製の岩偶が出土し、その造形は鹿児島県上野原遺跡出土の土偶に似る。

縄文時代前期の遺跡は町内には現在のところ確認されていない。

縄文時代中期になると、川辺川流域を中心に遺跡が形成され、阿高式土器が出土している野原遺跡・逆瀬川遺跡などが挙げられる。また、深水谷川遺跡・金川遺跡・頭地田口A遺跡・逆瀬川遺跡・波ヶ峰遺跡で船元式土器が数点確認されている。大久保遺跡群では、上球磨地域では初見となる船元式土器が出土するとともに、船元式土器の影響を受けた縄文施文と条痕施文の土器群が一定量出土している。このように、人吉盆地は九州西海岸・東海岸の文化圏が重なる地域である。

縄文時代後期になると、球磨川右岸に数多くの遺跡が形成されるようになる。町内の軍野地区から獣型土偶が表採されている。また、熊山遺跡から石刀片が出土している。

縄文時代晩期では、久米字思川から黒川式土器の壺型土器が確認されている。大久保遺跡群からは晩期の土器とともに、刻目突帯文土器が一定量出土している。

## 【弥生時代】

人吉盆地の弥生時代前期・中期の遺跡は不明な点が多い。沖松遺跡や深水谷川遺跡からは、亀ノ甲式土器が出土している。中通遺跡では住居跡が確認され、城ノ越式土器が出土した。

大久保遺跡群の調査では、刻目突帯文土器・精製の浅鉢・組織質土器が出土している。また、弥生時代前期～中期前半の亀ノ甲タイプや、板付Ⅱ期並行期の土器群も確認されている。特に、北大久保B遺跡では、当地域初となる弥生時代前期末～中期初頭の竪穴建物確認されている。表採資料ではあるが、大久保台地では有柄二

段柄式磨製石剣、台地西側の緩斜面に位置する縄掛松遺跡から細型銅剣も採集されている。このように、大久保台地には縄文時代晩期から弥生時代の拠点集落が形成されていたことがわかる。

あさぎり町に所在する夏女遺跡は、盆地の拠点集落であることが確認され、集落内より青銅鏡・銅剣が出土している。

弥生時代後期の遺跡としては、大丸藤ノ追跡跡、荒毛遺跡、中通遺跡、夏女遺跡、本目遺跡などが挙げられる。

## 【古墳時代】

人吉盆地の古墳時代は、在地的墓制の伝統が強く継承され、畿内型高塚古墳の造営開始が遅れることが特徴である。在地的墓制である板石積石棺墓や地下式横穴墓が分布し、大久保遺跡群においても前者の存在が指摘されていた。荒毛遺跡や新深田遺跡などでは、板石積石棺墓の存在が古くから認識されている。また、南九州固有の墓制である地下式横穴墓も、天道ヶ尾遺跡で確認されている。

一方、畿内型の高塚古墳では、盆地中央を中心に5世紀後半以降に造営が開始される。錦町亀塚古墳群は、盆地内唯一の前方後円墳であり、「景行紀」にみえる「熊果」との関係が指摘されている。そのほか、鑿金帯甕鏡をはじめ豊富な副葬品が出土した才園古墳群2号墳や、巨石を用いた横穴式石室の鬼ノ釜古墳などがある。また、人吉市鬼塚古墳は、横穴式石室を有し、出土須恵器や鉄製品から5世紀後半の造営である。

町内では、球磨川左岸に複数の馬具が埋葬された赤坂古墳や、中原古墳・雀森古墳の円墳が確認されている。また、球磨川右岸の大久保台地には、大久保夫婦古墳が造営されている。

赤坂第1号古墳は昭和9年10月に坂本経免氏による調査が行われている。大久保夫婦古墳も昭和42年8月に実測調査が行われ、7世紀前半頃という評価を得ている。横穴墓は、小椎野古墳・土屋横穴群・大塚横穴群・内の城横穴群・小路追墳穴群・大塚下横穴群・廻野原横穴群が球磨川右岸に展開しており、加久藤溶結凝灰岩の露頭が発達した位置と重複する。

## 【奈良・平安時代】

『和名抄』には、久米・球玖・人吉・東村・西村・千脱の六郷が確認できる。古墳時代の古墳造営地を、有力勢力の影響地域として想定すると、郷城の比定が可能である。この内、現在の多良木町は、概ね東村・久米にあたる。また、郡家の場所は諸説あるが、須恵器窯跡や平安中期の古瓦を出土している前田遺跡が位置するあさぎり町免田周辺が、最有力な候補地となっている。郡家を構成する四等官には、在地勢力である須恵氏・久米氏・

人吉氏・平河氏が担っていたと考えられ、彼らの所領は郡一帯に散在していた可能性が高いという。

人吉盆地には、平安時代の神仏像が多く現存している。多良木町の場合、中山観音堂内の木造観世音菩薩立像及び四天王像をはじめ、栖山観音堂内の木造千手観音菩薩立像及び四天王像、馬門薬師堂内の木造薬師如来坐像、そして、大治5年(1130)の銘を持つ元は鍋城にあった西光寺の釈迦如来坐像、長運寺由来の薬師如来坐像などがある。

## 【中世】

球磨郡の荘園公領制の展開は、球磨御領の成立を嚆矢とする。郡面機構を構成する有力在地勢力が荘園領主への納納を事実上共同で請け負うという国領的性格の強い平輪御領であった。源平内乱期には院領であり、平頼盛の大宰大貳時代に平家領、鎌倉幕府の成立を契機とし、一旦没管領化されたのち、球磨白間野荘の頼盛への安堵という複雑な変遷過程をたどる。その後、建久3年(1192)、球磨御領は上球磨を中心とする公田、中球磨を中心とする鎌倉殿御領、下球磨を中心とする人吉荘に再編成されたといった展開が、既往の研究により明らかになっている。この内、東国御家人であった相良頼景が得たのが「多良木村」である。

『歴代 嗣誠独集覽』に「頼景公其前御当地居住始ハ多良木蓮花寺ノ上二大川端、今東ノ前ト御屋敷也」と相良頼景の居住地に関する記載があり、「東ノ前」地名や小字名「蓮花寺」が現在に残る。昭和49～50年、方形居館跡と隣接する蓮花寺跡の調査が行われ、昭和52年に報告書「蓮花寺跡・相良頼景館跡」が刊行された。

相良頼景館跡の調査では、球磨川に面し護岸施設が確認され、船着場の機能を有する館跡として評価されていた。また、蓮花寺跡では、石積基壇や溝が確認され、鎌倉時代から江戸時代の五輪塔が確認されている。

頼景を祖とする鎮西相良氏は、その嫡子・長頼が人吉荘地頭職に補任され、頼景が得た多良木村を相続する。その後、長頼は嫡子・頼氏に多良木村を継がせて、その家系が鎮西相良氏全体の嫡流・多良木家となった。その多良木相良氏の菩提寺が青蓮寺であり、永仁3年(1295)銘の阿弥陀如来立像を安置した青蓮寺阿弥陀堂が所在し、その背後の斜面には五輪塔78基、石塔22基が遺存する。

東光寺は、経筒出土地や磨崖梵字、薬師堂、八幡神社など濃厚な宗教的要素を持つ地域である。相5号文書には「東光寺村」との記載があり、多良木相良氏の権益地であることがわかる。東光寺地域を流れる川も「祓川」という。

文安5年(1448)に多良木相良氏が滅亡するまでの間、多良木家と佐牟田家の両家を中心に、南北朝内乱には双

方とも武家方や天皇方に目まぐるしく変遷し、敵対と和平をくりかえす。室町時代中頃、山田城主永留長統が佐牟田家と多良木家を滅ぼして相良氏の名跡を継ぎ、球磨郡を統一する。

相良庶家を統一した長統は、四男の頼泰を多良木に譲り、頼泰の知行は文明3年(1471)まで続く。その後、一旦頼泰は知行を解かれるが、文明16年(1484)に多良木知行に復帰し、翌年には多良木村に入部し鍋倉城で祝儀を行っている。長享元年(1487)に頼泰は謀反の疑いにより生害。以後、多良木村は相良氏の直轄領として代官が置かれるようになる。

相良氏は戦国時代、芦北郡や八代郡に出兵して領地とし大名に成長、人吉と八代を本拠とし「相良家法度」と呼ばれる法律を作り、徳潤津を利用して海外交易ももっている。永禄2年(1559)には、東長兄と丸目頼美の間に内訌がおり、大久保台地上で郷野原合戦が起こっている。

天正9年(1581)、水俣合戦で島津軍に下った相良氏は球磨郡のみが領土となり、天正15年(1587)の豊臣秀吉の九州出兵では直ぐにその軍門に下る。朝鮮出兵を経て、関ヶ原合戦の時、当初西軍として大垣城を守護していた相良氏は東軍側に寝返り、その開城に協力したことから、江戸時代も人吉城を拠点に球磨地方を治めることになる。

以上のように、多良木町には相良頼景館跡・蓮花寺跡・内城跡・久米城跡・里ノ城跡・鍋城跡など相良氏に関連する遺跡が多数存在する。また、中世の建造物は、青蓮寺阿弥陀堂・王宮神社樓門・大久保阿弥陀堂・久米治頼神社・東光寺八幡神社・槻木四所神社がある。また、西光寺厨子・長運寺厨子・八日薬師堂厨子も中世のもので貴重である。

## 【近世】

近世を通して人吉盆地は人吉藩の支配下にあった。元禄～宝永年間に多良木には百太郎溝・幸野溝が開削され、前者は農民主導、後者は人吉藩士高橋七郎衛政重の差配による施工と伝えられている。百太郎溝は球磨川南岸の多良木町・百太郎が取入口であり、多良木町、あざぎり町を通り、鈴町・原田川にいたる灌漑用水路である。現在全長18.9km、灌漑面積は1490haに及ぶ。この本流の工事は鎌倉時代に始まり、農民の手によって何度も受け継がれ、約320年前に雁工事の末に完成したと伝わる。取水口構築にあたり百太郎という人物が人柱に立ったことが伝説として残っており、溝名の由来とされる。幸野溝は球磨川の上流の幸野ダム(球磨川)より取水し、湯前町・多良木町、あざぎり町にいたる灌漑用水路である。現在全長15.4km、灌漑面積1381haに及ぶ。この工事は元禄9年(1696)、人吉藩が高橋政重に開田

に必要な水利施設の工事を命じたことにより始まった。堰の工事は難航し、洪水による流失もあり、苦勞の末に着工から10年目の宝永2年(1705)に完成した。同3年(1706)には高橋発願により多良木町中原に天神社と観音堂が建立され、十一面観音像が安置されたという。また、同地を中心に入植者を集めた結果、新田村が形成された。しかし、寛政元年(1789)には、人吉藩は新田村の年貢免除を取り消したことから、庄屋と目付が訴願に及び2名は斬首され、新田村は湯前・久米・多良木の3ヶ村に分割併合されてしまった。世に云う「新田くずれ」である。

「天保郷帳」には多良木・久米・奥野・槻木の4ヶ村がみえるが、延宝4年(1676)、多良木村から黒肥地村が分かれている。

近世中期以降、人吉藩では家作り規制が厳しく、上級武士以外は、梁間三間以上の住宅が禁止されていた。領内に鉤型の民家が多いのは、こうした制限下で、住宅の部屋数と規模を拡大するために鉤型に棟を伸ばす方法がとられたからである。重要文化財である太田家住宅は二鉤を有する民家であり、この地域を代表する建造物である。また、近世中期の分棟型住宅跡が北大久保C遺跡から確認されている。

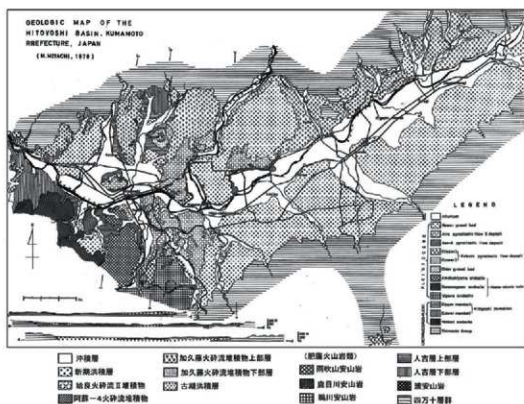
太田家住宅以外にも近世以来の建造物は、王宮神社本殿、槻木菅原神社、白鳥神社本殿、長運寺業師堂、栖山観音堂、諏訪神社本殿、久米熊野座神社本殿、中山観音堂、木下家住宅、東家住宅などがある。

## 【近代】

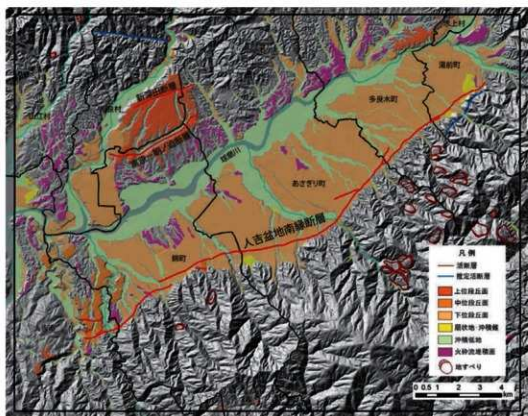
明治4年(1871)、人吉県から八代県へ、同6年(1873)には白川県を経て、明治9年(1876)に熊本県に再編される。明治5年(1872)10月には、多良木・黒肥地・久米など、球磨郡の6ヶ村の農民が年貢米の依作りや高税などに関して強訴におよぶという騒擾事件が発生する。明治10年(1877)の西南戦争の際には、花立山〜槻木峠〜黒原山にかけて、台場や陣地が築造され、槻木地域には薩軍敗走の伝承が残る。

その後、明治20年(1887)人吉警察署多良木分署、翌年には熊本大林区署人吉出張所多良木派出所が開設され、同24年(1891)には人吉区裁判所多良木出張所が開庁、同23年(1890)4月に高等球磨小学校多良木支校、大正7年(1918)には多良木村ほか8か村組合立の郡立実科高等女学校(旧熊本県立多良木高校)も設立された。大正13年(1924)、人吉から湯前にいたる国鉄湯前線が開通して多良木駅が開業したほか、郡立多良木病院が多良木ほか9か村組合立病院となり、上球磨の拠点として体制を整えていった。明治22年(1889)の町村制施行に伴い、多良木を上球磨の中心都市とする計画が策定され、当時先進地であった北海道札幌市の状況を視

察、帰郷のち、幅員5間の道路を東西に貫通・整備に到る。この幅員5間の道路は、現在も面影を残している。熊本県による近代和風建造物調査では、第一次調査リストとして59件の調査が実施されている。



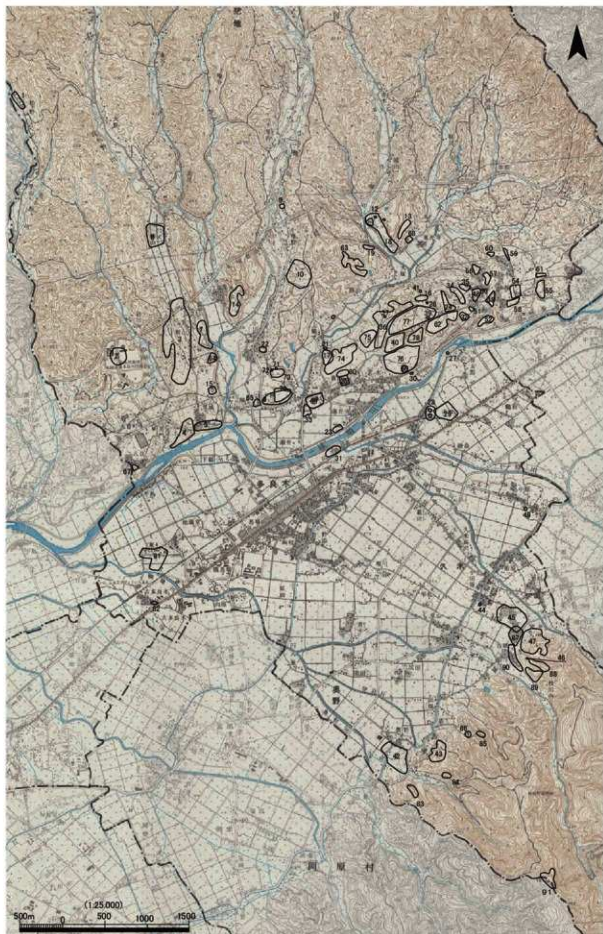
第4図 人吉盆地の地質図



第5図 人吉盆地の活断層と地形分類

基盤地図情報「数値標高モデル10mメッシュ(標高)」から国土地理院作成。  
活断層線及び地形分類は本調査の結果による。

千田 昇(2015):1:25000都市圏活断層図人吉盆地南縁断層とその周辺「人吉盆地」解説書 国土地理院技術資料D1-No.740.19P



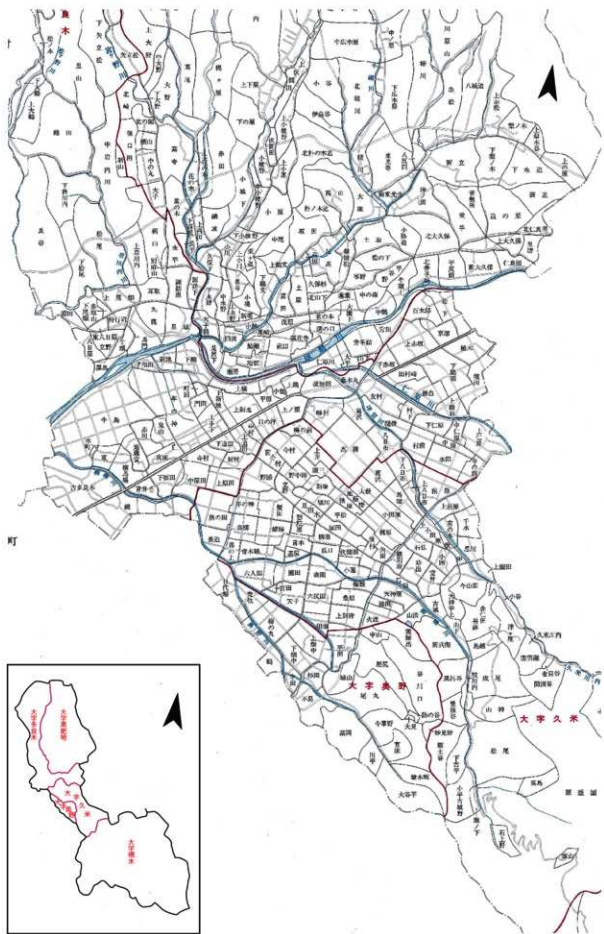
第6図 多良木町遺跡地図



番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考	出典
1	1)松ヶ野	多良木 松ヶ野	縄文	竊塚地		石室	1)
2	2)川立石	多良木 川立川	縄文~古代	竊塚地		石室・土器	1)
3	3)多良木	多良木 新川	縄文・弥生	竊塚地		縄文後期遺跡、土器石室・弥生土器・酒器類出土	1)2)
4	4)野原	多良木 野原	縄文	竊塚地		多良木の遺跡、瓦葺	1)5)
5	5)竹林	野原 新堀	縄文・中世	竊塚地		石室、土器類	1)2)
6	6)北平	野原 北平	縄文・弥生	竊塚地		縄文文・後・戦国土器、磨製石剣、弥生土器	1)2)
7	7)磯山	野原 磯山	縄文	竊塚地		縄文後期土器、石剣	1)
8	8)1)野井古蹟	野原 小川	古蹟				1)
9	9)1)野井	野原 小川	縄文	竊塚地		石室	1)
10	10)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
11	11)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
12	12)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
13	13)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
14	14)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
15	15)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
16	16)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
17	17)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
18	18)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
19	19)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
20	20)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
21	21)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
22	22)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
23	23)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
24	24)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
25	25)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
26	26)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
27	27)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
28	28)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
29	29)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
30	30)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
31	31)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
32	32)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
33	33)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
34	34)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
35	35)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
36	36)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
37	37)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
38	38)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
39	39)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
40	40)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
41	41)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
42	42)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
43	43)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
44	44)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
45	45)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
46	46)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
47	47)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
48	48)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
49	49)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
50	50)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
51	51)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
52	52)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
53	53)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
54	54)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
55	55)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
56	56)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
57	57)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
58	58)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
59	59)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
60	60)1)野井	野原 取田	古蹟			町 瓦葺	1)
61	61)トキボトケ	野原 取田	縄文	竊塚地		縄文早期 葬ノ跡(注)か	1)
62	62)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
63	63)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
64	64)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
65	65)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
66	66)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
67	67)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
68	68)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
69	69)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
70	70)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
71	71)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
72	72)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
73	73)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
74	74)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
75	75)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
76	76)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
77	77)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
78	78)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
79	79)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
80	80)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)
81	81)東城跡	多良木 東(城山)	中世	城跡		東城跡あり	2)
82	82)多良木寺跡古蹟群	多良木 古多良木	中世	古蹟		阿弥陀堂、五輪塔15基	3)
83	83)上ノ原の城跡	野原 本島	中世	城跡		上ノ原の城、堀切	3)
84	84)古久城跡	野原 古久	中世	城跡		野原古久(注)1)半城	3)
85	85)山田原平城跡	野原 原田	中世	城跡		山田原村(注)1)下ノ原、堀切	3)
86	86)山田寺跡	野原 中山	中世	寺跡		石室	3)
87	87)久米城下平城跡	久米 原下	中世	城跡		石室	3)
88	88)久米新平城跡	久米 大崎平下	中世	城跡		堀切	3)
89	89)久米山平城跡	久米 山下	中世	城跡		堀切	3)
90	90)東平城跡	久米 古城	中世	城跡		北寺	3)
91	91)古城野内南平城跡	久米 古城野	中世	城跡		堀切	3)
92	92)下城跡	久米 下城	中世	城跡		堀切	3)
93	93)1)野井	野原 取田	縄文	竊塚地		注)1)	1)

第2表 多良木遺跡地名表





第7図 多良木町字図

# 第三章 蓮花寺跡・相良頼景館跡の再報告

## 第1節 『蓮花寺跡・相良頼景館』の再報告の概要

### 1. 再報告の趣旨

蓮花寺跡・相良頼景館跡の発掘調査（以下、「泉調査」という。）は、昭和49～50年にかけて熊本県文化課が行った。その成果は、昭和52年に『蓮花寺跡・相良頼景館跡』『熊本県文化財調査報告第22集』（以下「泉22集」という。）として刊行され、出土品及び記録類は熊本県文化財収蔵庫にて保管されていた。

多良木町では平成21年度から始まった大久保地区畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査や、「たろぎ歴史回廊事業」に伴う有識者による仏神像・建造物等の調査によって、調査成果が蓄積されてきた。平成24年度には、歴史資料を保存・活用するための施設の必要性から、旧黒肥地農業協同組合倉庫（昭和17年棟上）を埋蔵文化財センターに改修する基本方針が示された。この方針に基づき、平成24～26年度にかけて改修工事が行われ、平成26年7月に多良木町埋蔵文化財等センター（愛称：古代の風 黒の蔵）が設置された（平成26年多良木町条例第8号）。施設設置により、熊本県所有の蓮花寺跡・相良頼景館跡出土遺物等の譲与が可能となり、次に記す手続きを行い、泉資料の譲与がなされた。

平成27年1月26日付け多数発第1622号（相良頼景館跡）1622号の2（蓮花寺跡）にて、熊本県文化課に出土文化財譲与申請を行った。熊本県文化課では平成27年2月5日付け教文第2067号（相良頼景館跡）2068号（蓮花寺跡）2069号（里の城跡）2070号（奥野城跡）により、熊本県から多良木町に譲与された（※文化財としての認定は平成26年7月9日）。

所有権移転後、多良木町・多良木町教育委員会では平成28年度から令和5年度までの間、譲与資料の再整理作業を行った。今回、多良木相良氏遺跡の歴史的価値を明らかにするために、再整理の成果を再報告するものである。

### 2. 再整理の方法

熊本県からの譲与資料は次のとおりである。

#### ・出土遺物 ・現場図面 ・写真記録 ・遺物実測図

資料の譲与後、譲与資料の台帳をそれぞれ作成し、泉22集と記録類との突合作業を行った。また、発掘調査記録や発掘調査日誌などの内容確認を進めた。

現場図面は泉22集や現場写真を確認しながらデジタルトレースを行った。本報告の掲載図面はデジタルデータをもとに、作成・編集したものである。泉22集には、調査日誌とともに遺構及び遺物の解釈が記載されている。本報告では遺構説明は泉22集に沿いながら、加筆・修正を加えている。遺構名は泉22集に準じている。発

掘調査の段階でしか得られないような重要な所見は括弧書きで引用した。

出土遺物は現場図面と遺物注記を頼りに、出土地点の特定に努めた。巻末の遺物観察表に泉調査時の「出土地区・層位」と、今回の再整理作業後の「出土地区・層位」を併記している。

譲与資料の中には、経年劣化のため注記が読解できなかった資料、出土位置が復元できなかった資料も多数ある。それらの資料も観察表にその旨を記載している。

### 3. 出土遺物の分類方法

出土遺物全点を実見・再分類を行った。

再整理作業の中で最も時間を要したのは資料の再分類である。凡例に基づき、土師器、輸入陶磁器、国内産陶器、瓦、土師質製品、石製品、古銭、金属器に大分類し、さらに種別や産地、器種を考慮して再分類し、本報告はこの順に図を掲載している。

### 4. 熊本県文化課調査の経過

昭和36年度、熊本県教育委員会による総合的な基礎調査（『熊本県文化財調査報告 第4集』）が実施され、昭和44年3月20日、蓮花寺跡古塔碑群は県指定史跡になっていた。その後、蓮花寺跡・相良頼景館跡の指定解除から発掘調査までの経過は次のとおりである。

日時	発掘調査・指定解除までの経過・内容
S48年7/18	多良木町教育委員会社会教育課長から熊本県教育庁文化課に電話連絡によって「建設者から49年度に球磨川の改修工事に着手するので、蓮花寺跡古塔碑群の調査、移転を48年度中に終了して欲しいとの相談があった」ことが伝えられた。
7/19	町社会教育課長が県文化課に出向く。事情聴取。県史跡の現状変更であり、全面的に遺跡が消滅するので指定解除の可能性が高い。県指定として初めてのケースであり、建設者から事情説明と正式な書類提出を求める必要があるとの結論に達する。
7/20	建設者八代工務事務所工務課工務第1係長、用地課主任に県文化課への来庁を願う。その結果、49年度着工ということではなかったが、上流からの改修が始まっており、計画変更はありえないとの状況であった。そこで、熊本県文化財専門委員会に諮問する必要がある、同年9月の同委員会に諮問して検討することになる。その際に、文化財包蔵地であることから発掘調査を実施する必要があることが提起される。

8/4	宮元多良木町長はじめ町当局、町教委、地区代表者及び建設者関係者の協議が行われ、古塔碑群の移転先の用地問題、発掘調査について検討がなされ、地元は全面的に協力するという合意が形成される。
9/7	多良木町文化財保護委員会。蓮花寺跡の調査、移転等について審議。
9/14	熊本県文化財専門委員会にて、八代工事事務所工務課長、多良木町教委社会教育課長から説明。 (建設省) 改修計画は昭和41年にたてられたもので、蓮花寺跡も同計画内に含まれている。すでに左岸は工事を完了しており、現段階での計画変更は無理である。 (文化財専門委員) 文化財を無視した計画は困る。県指定の解除は前代未聞で、移転するだけという安易な処理は問題である。計画を立てる段階で協議すべきである。しかし、工事はすでに始まっており、計画変更は無理であろうから、事務手続きをとって発掘調査を行い、史跡の指定解除を行い、有形文化財として改めて指定する方針をとることになった。
S49 1/9	熊本県文化財専門委員の現地調査。この調査により、発掘調査の方針が固まる。
10/9 ～10	松本寿三郎氏、花岡興輝氏が現地調査。
12/24	地元代表者主催の発掘安全祈願祭。

発掘調査の届出は、蓮花寺跡古塔碑群は昭和50年1月17日付け教文第791号で、相良領景館跡は昭和50年8月7日付け教文第322号で提出された。昭和50年2月14日付け委保第5の104、昭和50年8月29日付け委保第5の1879で許可となる。

昭和50年1月10日から蓮花寺跡古塔碑群発掘調査開始。

昭和50年8月23日から相良領景館跡発掘調査開始。  
当時の発掘調査の経過については、県22集を参照のこと。

## 第2節 蓮花寺跡の再整理の成果

### 1. 蓮花寺跡の概要 (第8回)

相良家史によれば、多良木家の相良頼氏が嘉禎元年(1235)に創建したとされる。また、蓮花寺は正長元年(1428)に没した多良木家の相良頼久の位牌所とされる。文安の内訌では、蓮花寺は多良木相良氏側に属していた。  
永正11年(1514)に相良長毎によって蓮花寺は再興される。堂内に安置された木造阿彌陀如来立像の背面に

は、「大旦那藤原長毎并満乗丸、當寺院主大願主尊尊敬白、于時永正11年甲戌八月被申廿八日」、台座裏に「大法見之子、佛師与次良重元(花押)」との墨書銘がある。また、箱台座裏には「弘化三丙午歳、再興佛師弓削田市内、諸込人柳原郡八、盛山高左衛門、飛田弥兵衛、一、後光并御殿彩色家根茸替致候事」との銘がありこれを証左する。元龜4年(1573)、相良義陽は蓮花寺の僧を薩摩に遣い隣堂を求めている。

江戸期の「村明細帳」によれば、蓮花寺は3間×4間の阿弥陀堂一字があり、青蓮寺の管理となっている。現在でも蓮花寺の法要は青蓮寺が所管している。

県調査時の蓮花寺跡は球磨川の右岸に所在し、阿弥陀堂を中心に五輪塔や板碑などの石造物群が遺存していた。蓮花寺跡南側の85～102号は、相良領景館跡の南東部の開墾時に確認されたものを移転したものである(県22集27頁)。

### 2. 熊本県文化課調査(県調査)の概要(第9回)

県調査では、調査区をA区(グランサン:阿弥陀堂周辺)、B区(A区の北側:石塔群移転地)、C区(A区西側)に分け、各区にてトレンチ調査が実施されている。現在A・C区は球磨川堤防下となり、B区には移転された蓮花寺跡古塔碑群(県指定)を見ることが出来る。県調査当時の蓮花寺跡古塔碑群の内訳は、板碑24基、五輪塔102基の総数128基である。

県調査当時の灌漑用水・貼之瀬井手は、B区東側を南進し、A区とB区の間を流れ、C区北側を西流していた。調査区にA-A～C Tr、B-A～G Tr、C-A～E Trのトレンチが設定され調査が進められた。

各区の層序は次のとおりである。

#### 【A区の層序】

- I層(表土)
- II層(砂層)
- III層(礫層)

#### 【B区の層序】

- 第I層(水田耕作土:黒灰色の粘質土)
  - 第II層(砂礫を含む褐色土)
  - 第III層(砂礫層:大小の礫を多量に含む)
- 遺構検出面はA区ではII層上面、B区ではIII層上面である。A区II層は水性堆積層、A区第III層及びB区第III層は地山の礫層である。蓮花寺跡の層序を整理すると上から次のような堆積となる。
- A区I層・B区I層
  - B区II層(砂礫を含む褐色土)
  - A区II層(砂層) 水性堆積物
  - A区III層・B区III層:地山礫層

### 3. 遺構及び出土遺物

#### (1) A区：石積基壇（第10・11図）

本報告での各石造物の番号は、泉22集の掲載番号に対応している。

石積基壇は阿彌陀堂の北側にて確認され、石積基壇上には15～38号の五輪塔が二列に並べられていた。検出時の石積基壇は東西約5.7m、南北3.7m、高さ1.3mの不定形である。東側、西側及び南側の各裾部には、積石の露出箇所が多く見られ、上面・北裾部は土が積石を薄く被っていた。東西端部には火輪及び水輪が、川原石や土と一緒に積まれ表面に露出していた。泉22集によれば、川原石とともに多くの五輪塔の各部位が積まれており、中には火葬骨を入れたままの水輪も含まれていた。

東側の基礎部は不明瞭であり、下部と上部に石を多く用い、中には土を多く用いていた。壁面はなだらかな斜面を形成しているが、本来の形状を示すものではない。西側の肩部には50年以上を超える大木が生え、その下に五輪塔が埋没していた。

#### 【石積基壇の構築】

泉22集では、この石積基壇の構築工期を3回に分けている。

1回目は東西4.0m、南北4.0m、高さ1.0～1.3mの方形を呈する石組である。基礎には平坦面をもつ川原石の小口を外側に向け、隅には直角を保つような石が配置されていた。内部は大小の川原石が不規則に充填されていた。上面には薄く「玉砂利」が敷かれ、「26号五輪塔直下、第1回目の築造の東辺より西寄りのほぼ中央」にて蔵骨器が出土している。

2回目は1回目を、東に1.3m、西に2.8m、北に1.8m、南に1.6m拡張し、東西8.2m、南北6.8mの平面長方形となる。西側の拡張部基礎は1回目とは異なり、大石を横置き区画している。東・南・北拡張部基礎は、基礎部に大型の川原石を並べる部分もあるが、存在しない箇所も多い。

3回目は、2回目を東に2.8m、西に1.2m拡張する。西拡張部は基礎部に大川原石を南-北に直線的に築いていたことが確認されている。

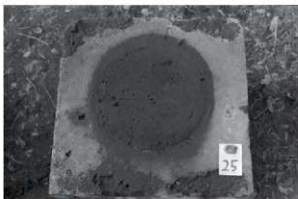
#### 【石積基壇上の石造物群】（第12図・第3表）

石積基壇上の石造物は「因説石塔調べのコツとツボ」（狭川真一・藤澤典彦編、2017）をもとに計測した。

泉調査以前に、石積基壇北西袖から笠塔婆が出土している。この笠塔婆は加久藤溶結凝灰岩で、高さ108cm、幅24.3cm、柄長12cm、柄幅18cmを測る。塔身上部の四面には、阿彌陀三尊の種子を葉研に刻む。正面種子の下には次のような紀年銘がある。



25号塔水輪上面の柵穴



25号塔地輪上面に残された基準線



蓮花寺跡出土・相輪

右石塔志願者奉為沙弥上蓮尊靈  
往生極樂證大菩提造立如件  
文永六年己巳七月十四日 比丘尼妙阿弥陀佛敬白  
孝子藤原□□敬白

「沙弥上蓮」は相良頼氏のごことで、「比丘尼」は頼氏の妻、「孝子」は頼氏の嫡子・頼宗のごことである。

石積基壇上に設置されていた五輪塔の実測図及び部位

計測値は第12図、第3表に掲載している。一部の紀年銘は形状・型式から明らかに追刻である。

基壇上の五輪塔の石材は全て加久藤溶結凝灰岩である。23号塔・25号塔(伝頼仲塔)はそれぞれの部位寸法誤差は1cm以内に取りまり、近似した形態である。各部位に基準線を縦に刻み、五大種子の四転、種子は面に對し大ぶりの葉研彫りである。火輪軒裏の反りは緩やかである。地輪幅52cmに対し、軒高は100cmを測る。水輪はやや縦長を意識している。23号塔・25号塔は部位形式に古相を有していることから13世紀後半に位置付けられる。

20～22号塔・24・26号塔・30号塔は23号塔・25号塔よりも軒高が一寸程度高くなる。また、種子は23号塔・25号塔に比べ小ぶりの葉研彫りとなる。

29・31・37号塔は、火輪軒裏の反りがやや顕著である。大型の29号は、水輪がより楕円形化の傾向にあり、37号塔は火輪軒口が肥厚、31号塔は各部位が縮小している。

4号塔は徳仁2年(1468)の紀年銘があり、小型の五輪塔である。火輪軒口が肥厚し、軒裏の反りも大きくなる。また、27・28号塔は弘治3年(1557)という紀年銘を有し、火輪軒口が厚く壺型の水輪を持つ。35号塔(伝頼宗塔)は、建武3年(1336)の紀年銘を有し、地輪幅は61cmを測る。水輪はやや壺型を呈する。4号塔と、27・28号塔の紀年銘は、追刻ではない。

#### 【出土遺物】(第13・14・15図)

出土地点・層位が確実なものは、1回目の石積基壇(石組墓)から出土した羯鞠の四耳壺のみである。他の出土遺物は、石積基壇構築1回目から3回目のどの構築面期に該当するのかが明確ではないが、参考として観察表に出土地点を記載している。

1～4は土師器杯、5～35は土師器小皿である。22のみ底部切り離しはへら切りで、その他は全て糸切りである。36は羯鞠四耳壺VI-1類に該当し、13世紀に位置づけられる。26号塔直下から出土したものである。口縁内面に目痕が残る。37～46は中世須恵器の瓶で、仏具である。頸部へ口縁はナゼ調整で、内面はハケメ調整を施す。41の体部外面には山形タタキ痕を残す。47は中世須恵器の鉢である。48は瓦質の火鉢で、口縁帯に巴文のスタンプを施す。49～53は新寬永通宝、54は元豐通宝、55は輸入銭と思われる。56は短刀である。57は肥前広東碗、58・59は内底に蛇の目軸剥ぎ痕を残す染付皿である。60は肥前のコンヤク印判手の小杯、61は透明釉の陶器碗、62は肥前内野山窯の碗である。

#### (2) A区:埋鏡遺構(第16図)

A・Bトレンチの西端で検出された。第II層(砂層)

中に埋設され、掘り込み面及び掘り方は不明である。鏡は背面を下に置き、上から完形の挿鉢の口縁部を下に、ほぼ水平に伏せている。鏡は斜になって挿鉢より約1/3ほどはみ出している。

63は中世須恵器の挿鉢で、7本単位の御目玉が施されている。64は銅製の双輪鏡である。

#### (3) A区溝(第17図)

A区の東端で検出された。溝幅3.5m、溝底幅0.58m、深さ0.9mを測る。検出面は第II層(砂層)上面である。A区溝とB区溝は同一の遺構である。泉22集には、溝の北側セクションA-A'が掲載されている。今回、新たに原因をもとにA-A'、B-B'、C-C'の土層図を作成し、第17図に掲載した。

A-A'では、覆土は3層に分層されている。②層は礫と五輪塔部材を含む黒褐色土、③層は大きな礫を含む褐色土、④層は粘質を帯び小礫を含む黄褐色土である。B-B'では、5層に分層されている。①層は土器を多く含む黒褐色土、②層は小礫を含む褐色土、③層は土器を含む黄褐色土、④層は黄褐色の砂層、⑤層は暗褐色の砂層で土器を含んでいる。C-C'では、5層に分層されている。②層は土器を含む暗褐色土、③層は褐色土、④層は黄褐色土、⑤層は黒褐色土、⑥層は砂質の黄褐色土である。

A-A'の断面で、溝掘り方が砂層上面であることが確認できる。B-B'の断面で、溝埋没後に石塔群が配置されていることが確認できる。C-C'の断面で、溝の掘り直しがなされていることが確認できる。

#### 【出土遺物】(第18～27図)

65～227は土師器杯である。底部切り離しは全て糸切り離しである。100・103・111・143・144・171・178・182・188・191・194・209・217・218・219の底部に板目圧痕が、221の底部は簾状圧痕が残る。161は口縁が大きく歪む。227は底部糸切り離し後に脚が付く。228～356は土師器小皿である。底部切り離しは全て糸切り離しである。274・323は底部に板目圧痕が残る。270の底部に穿孔痕が残る。239・254・352・353の口縁内面にはスガが付着する。

357～367は、土師器土鉢である。

368～371は龍泉窯系A類の青磁碗である。369・370の内底に片彫りの草花文を施す。372～376は龍泉窯系B類の青磁碗である。374は無銘である。377・378は同安窯系青磁皿である。379は龍泉窯系の小型酒海豪の蓋で、外面に貼付け文を施す。380は青磁瓶の下半部と思われる。381は白磁IX類の皿、382は白磁梅瓶である。383は中国産天目碗で、厚い天目軸がかかる。384は備前の甕、385は常滑焼の甕で5型式に該当する。

386～390は中世須恵器の瓶である。388・390には体部外面に山形タキ痕、内面にハケメによる調整が残る。391～401は中世須恵器の鉢・播鉢である。外面はユビ押し後ナデ調整、腰部はヨコ方向のヘラケズリを基調とする。402は瓦質の火鉢で、体部外面に山形タキ痕、内面にハケメ調整が残る。また、体部には透かしが入る。403は瓦質の火鉢で、外反した口縁上面と外面に巴文スタンプを施している。404は瓦質の甕である。

405・406は土師質の輪菊口である。407～410は鉄製品。

411は肥前の端反碗である。412は近代の銅板転写の染付碗である。413は肥前染付の蛸唐草文の瓶で、御神酒徳利である。414は内底蛇の目軸割きの皿である。415は透明釉の陶器皿で内野山窯産。



B区溝西側にて確認された杭

#### (4) B区溝 (第28図)

B区東側にて、第三層(砂礫層)上面にて検出された。泉22集第29図(B区溝断面図)のII層は、砂礫を含む褐色土である。B区ではA区II層(砂層)は認められないため、A区II層(砂層)は河川沿いに堆積する水性堆積物である。

B区溝は北側でやや東側にゆるく北方向にカーブする。南側は比較的直線的でA区溝へと延びる。溝幅は北側で3.0m、中央で3.4m、南側では3.5～3.6m前後である。溝底標高も南方に向かって緩やかに傾斜する。検出面から溝底まで約1.6mである。溝覆土は、Aは淡灰色の砂礫層で含まれる礫は小さい。多量の遺物がA層から出土していた。Bは大きな礫を含む粘質土である。C層は粘質土で鉄分を多く含む。D層は小さな礫を含む層で、わずかに褐色土を混える。E層は青灰色粘土である。

土層断面図作成地点から少し南側では、C層とD層の間に黒色の有機物を多く含む層が確認されている。この層には木葉・植物の種子が含まれていた。溝西側の肩に、7本の杭が検出されている。径5cm前後の丸太杭で、30～40cm間隔である。トレンチ南端で1～4m北方

に、赤く焼けた部分がみられ、点々とスラッグが確認されている。

B区溝からは土師器杯・小皿をはじめ、陶磁器、中世須恵器などが出土している。また、鉄洋や粘土塊も出土している。

泉22集では、「溝の中からは、青磁・白磁・陶質土器・鉄器など、多量の遺物が出土したが、そのほとんどはA層からの出土で、次いでB層、C・D層ではまったく含まれていない」「B区南側で人為的に埋められたように、褐色の粘質土が満たされていた。溝の中心以下では遺物がなく、上層から遺物が多く出土することから、廃絶されたのは早い時期と考えられる」との所見が記載されている。

以上の調査所見から、D層の堆積とその上位のA・B・C層の堆積には時期差がある。また、この溝は人為的に廃棄されている。

再整理の過程で、B区溝出土遺物を確認したところ、「溝I・II層」「溝III層」「溝4層・溝IV層」と注記されていた。注記の中では「溝4層・溝IV層」が最下部を意味しており、このI・II・III・IV層がA・B・C・D層に対応していると考えられる。よって、本報告では、溝I・II・III層と溝IV層出土遺物を分けて掲載している。

#### 【出土遺物】(第29～36図)

再報告にあたり、I・II・III層とIV層の出土遺物を分けて掲載する。416～566がI・II・III層からの出土遺物。567～636がIV層出土の遺物である。

416～448は土師器杯である。425・429・430の底部には板目圧痕が残る。449～472は土師器小皿である。449の底部には板目圧痕が残る。456の口縁にスス付着。470～472は口径が10cmを超える大型の皿である。

473・474は龍泉窯系A類の青磁碗である。474の内底にスタンプを加えている。475～495は龍泉窯系B類の青磁碗である。477・488・489の内底に草花文・印花文が施されている。492・493は浅形碗である。494・495は束口碗である。496・497は龍泉窯系B4類の青磁碗底部で、胎土は粗である。498は龍泉窯系C類の青磁碗である。499・500は龍泉窯系D類の無文端反の碗である。501は折縁皿である。502は元様式の大型青磁盤。503・504は白磁V形碗、505は白磁IX形碗である。506～512は白磁IX形皿である。513は白磁皿B群。514～517は白磁合子である。518は青白磁の播座小壺である。519は染付C群碗である。520は軸垂れを残す大型の甕である。521は6b型式の常滑焼の甕である。

522・523は中世須恵器の甕で、格子目タキ痕が体部に残る。524は体部に菱形文の押型を施している。525は中世須恵器の瓶である。526～560は中世須恵

器の鉢・播鉢である。561は瓦質の盤である。542・545は、胎土の状態から榑香城窯の製品である可能性がある。

562は肥前系の碗蓋。563は肥前系の染付碗。565は内野山窯の皿、566は肥前の打刷目目の皿である。

567は高台付の土師器環である。568～583は土師器杯である。576の底部に糠状圧痕が残る。572は内外面にユビ押しが残る。584～613は土師器小皿である。586・601の底部には板目圧痕が残る。

614～621は龍泉窯系B類の青磁碗である。622は龍泉窯系D類の無文端反の碗である。623は同安窯系の青磁皿である。624は白磁合子である。625は白磁四耳壺である。626は中国天目碗である。627は褐釉の四耳壺である。628は軸垂れが残る大型甕である。

629は中世須恵器の壺である。630～634は中世須恵器の鉢・播鉢である。635・636は滑石製の鈎付石鍋である。

#### (5) B区石敷遺構 (第37図)

B区の北端にて検出された。調査区の西側及び北側へと遺構は広がりを見せる。西端で幅1.1m、B-B'断面で幅1.7m前後を測る。西側から15.3mのところまで北方向へと直角に曲がる。溝の上面のほぼ全面に円礫がしかれている。礫の大きさは拳大から人頭大までである。

#### (6) A区出土遺物 (第38図)

637・638は土師器杯である。639は龍泉窯系B類の青磁碗で無銘蓮弁である。640は龍泉窯系C類の青磁碗で、外面口縁に雷帯文、体部下半にラマ式蓮弁をもつ。

641は中世須恵器の瓶である。642は大型の瓦質の火鉢である。鈎上面及び側面に巴文スタンプ、体部には山形タタキ痕が残る、底部には脚を貼り付ける。643は罫反り碗。644は肥前染付の小坏、645は内野山窯の碗である。

#### (7) B区出土遺物 (第39図)

646・647は龍泉窯系A類の青磁碗で、内底に片彫蓮花文を施している。648～650は龍泉窯系B類の青磁碗である。651は龍泉窯系B4類の青磁碗である。652は白磁V類碗、653は白磁VI類皿、654は白磁IX類皿である。655は白磁皿C I群である。656は白磁合子の蓋で、体部に貼り付け文を加えている。657は染付皿C群で漳州窯の製品である。658は褐釉四耳壺。659は軸垂れが残る大型甕である。660は瀬戸の天目碗である。

661・662は滑石製の鈎付石鍋である。633は鉄製の鈎である。664は肥前の染付皿。665・666は肥前小坏である。667は染付蓋である。668は肥前の陶器皿である。

#### (8) C区出土遺物 (第40・41図)

669～675は土師器環である。676～700は土師器小皿である。677の口縁にスガが付着する。

701～704は龍泉窯系A類の青磁碗である。705～712は龍泉窯系B類の青磁碗である。713は折縁皿、714・715は折縁盤である。716は同安窯系の青磁皿である。717は白磁IX類碗、718は白磁IX類皿である。719は白磁梅瓶の口縁部である。720は白磁合子である。721は白磁四耳壺である。722・723は16世紀後半の染付の内湾大皿である。724は染付F群の皿である。725は褐釉壺である。

726～731は常滑焼の甕である。726は4型式、727は5型式、728・729は6a型式、730は7型式である。732は中世須恵器の播鉢である。

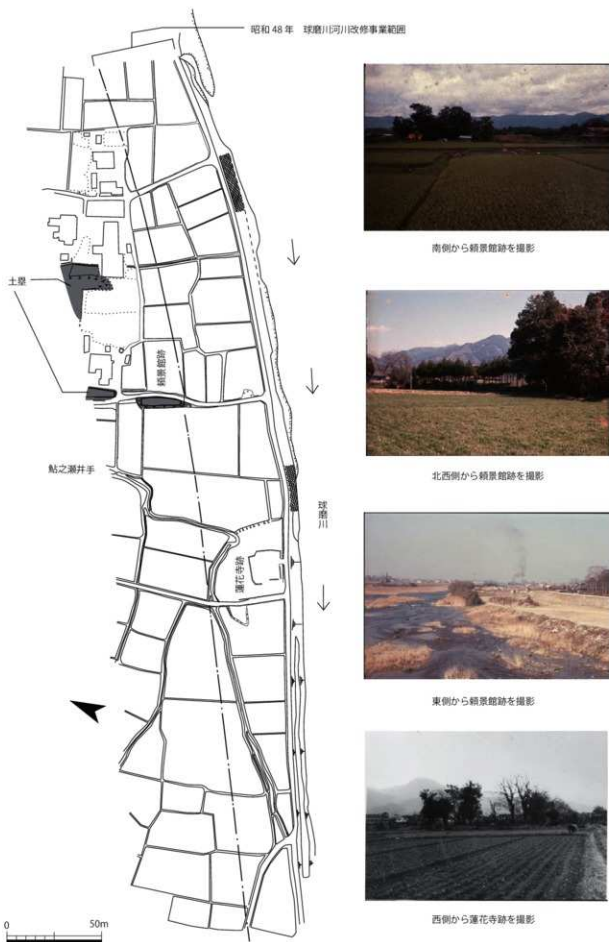
733～735は肥前系の染付碗である。736は肥前の染付碗である。737は染付小碗である。738～744は小坏である。745は内底蛇の目軸測ぎの皿である。746は一勝地の碗である。747・748は内野山窯産の碗・皿である。749は白化粧土を刷毛塗り後、鉄銹を施す皿である。

#### (9) 注記不明分 (第42図)

750～758は土師器環である。759～763は土師器小皿である。

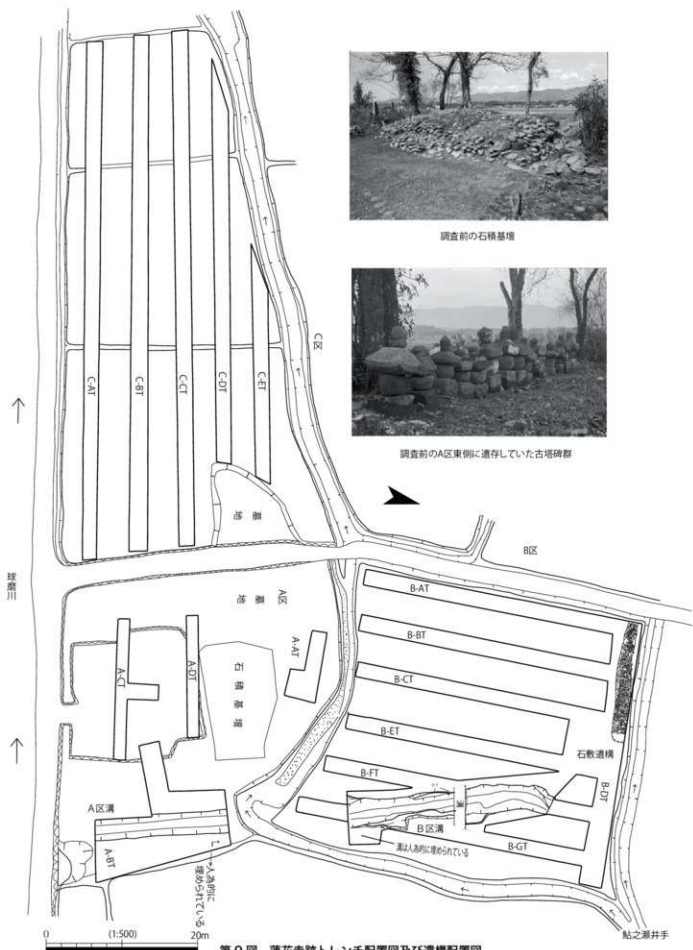
764は龍泉窯系A6類の青磁碗で、縦に柳目その後片彫り蓮花文、内面は草花文を施している。765は龍泉窯系A類の青磁碗である。766は龍泉窯系B類の青磁碗である。767は龍泉窯系B0類の碗である。768は白磁V類碗、769・770は白磁IX類皿である。771は染付碗B群、772・773は染付碗C群。774～776は宝相花唐草文の染付皿B1群の粗皿である。

777は中世須恵器の壺である。778が肥前の染付碗、779・780は肥前の染付小坏である。781は肥前の染付瓶、782は一勝地の碗である。

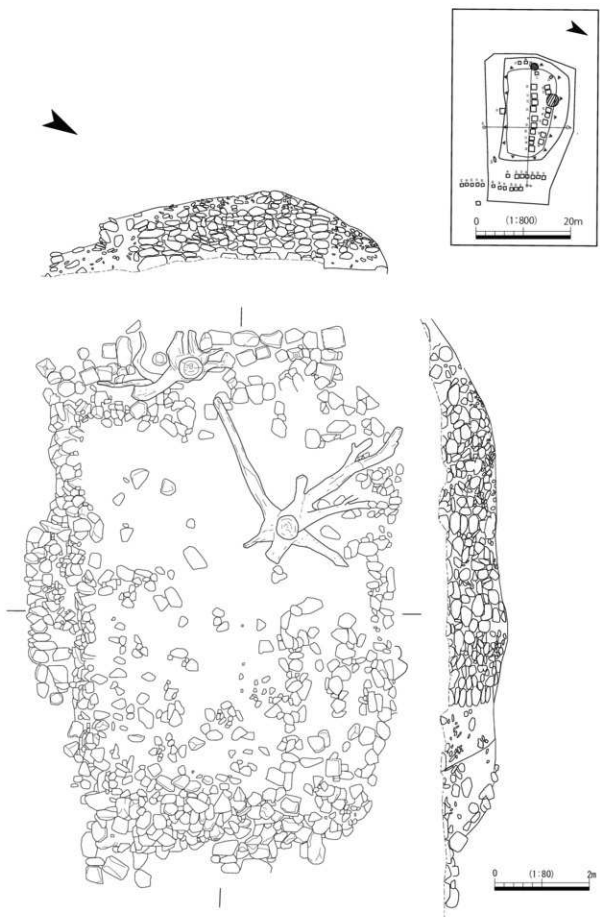


第8図 熊本県調査時の遺跡配置図及び旧地形図

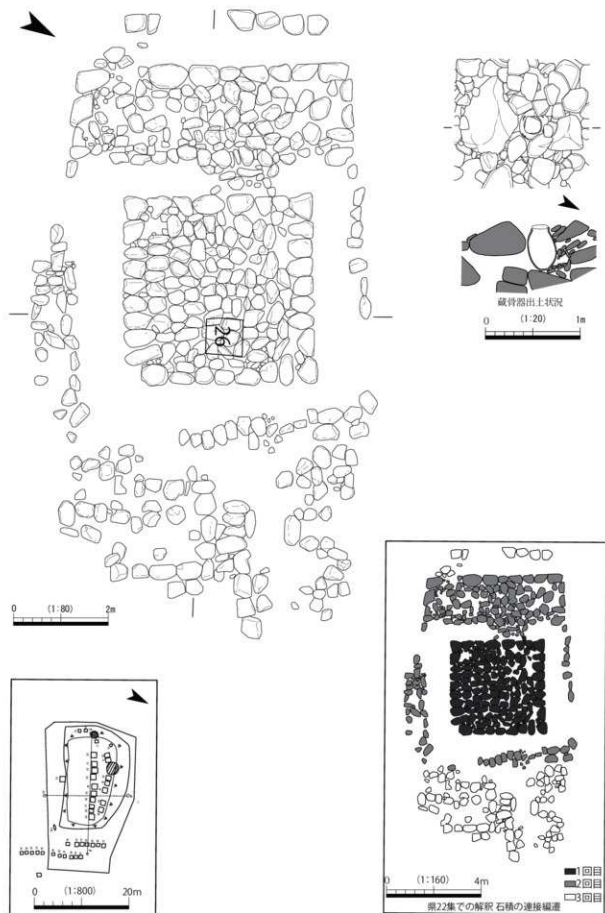




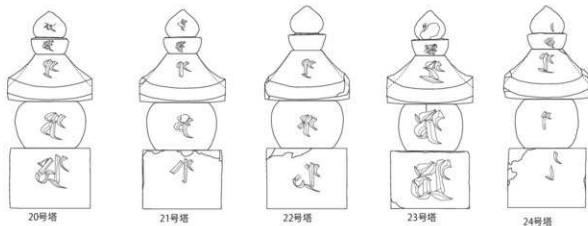
第9図 蓮花寺跡トレンチ配置図及び遺構配置図



第 10 图 石構基礎検出状況図



第 11 図 石積基礎基礎部確認図及び蔵骨器出土状況図



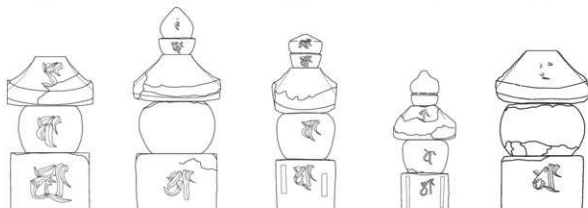
20号塔

21号塔

22号塔

23号塔

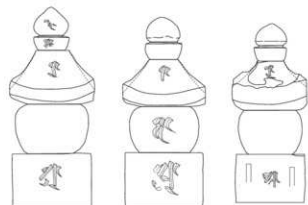
24号塔

25号塔  
佐瀬仲塔26号塔 (1358)  
佐瀬頼塔

27号塔 (1557)

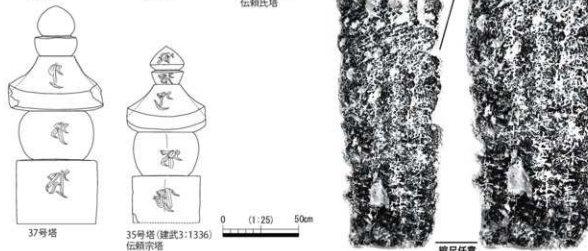
28号塔 (1557)

29号塔



30号塔

31号塔

34号塔 (1468)  
佐瀬氏塔

37号塔

35号塔 (建武3:1336)  
佐瀬示塔

0 (1:25) 50cm

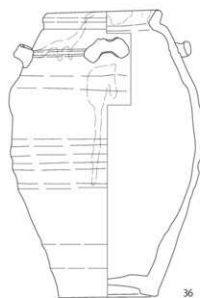
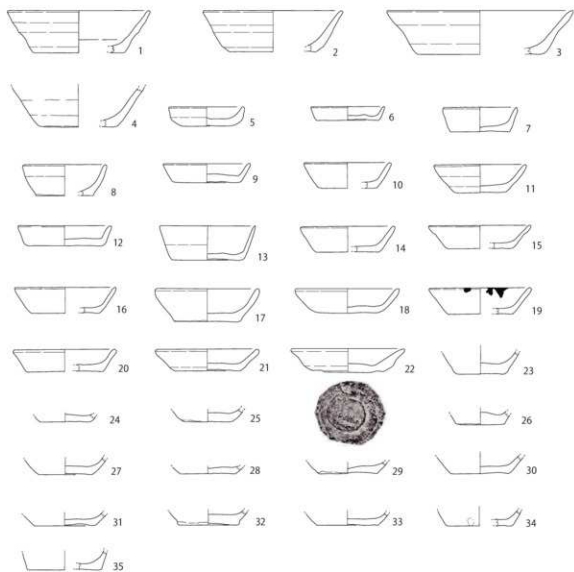
縮尺任意

笠塔婆托本

第12図 石積基壇上に配置された石造物実測図

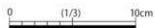
址	地盤			水輪			火輪										風輪			空輪			塔高 ch:or:tw	紀年銘	石材					
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v				w	x	精中 〔遺刻〕	精空 〔遺刻〕	精氏 〔遺刻〕
報告23号	52	52	38	0	33	42.7	31	31	-	20	56.5	56.5	7.5	10	32.5	2	24.5	-	9.5	1	20.6	18	19.5	6	130.5	加久藤				
報告25号	52	52	37	0	-	42.6	-	31	-	20	56	56	8	10	32	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	精中 〔遺刻〕	正長元年(1400)	加久藤		
報告20号	53	53	40	0	34	47	33	31	19	20	55.5	55.5	7	9	31	9	25	18	10	2	22	16	18	6	130.0	加久藤				
報告21号	52	52	39	0	-	46	34	31.5	19	20	56	56.5	7	9	32	-	25	17	10	1	22	16	19	6	131.5	加久藤				
報告22号	53	53	40	0	-	47.5	35	31.5	19	20	56	56	8	9	33	1	25	17	10.5	1	22	16	19	8	134.0	精空 〔遺刻〕	正長元年(1428)	加久藤		
報告24号	51	51	39	0	-	48	30	32.5	21	21	56	56	8	10	33	1	26	17	10	0.5	22.5	19	19	6	133.5	加久藤				
報告26号	52.5	52.5	38	0	-	50.5	33	34.5	21	19	57	57	8	8	31	24	18	11	0.5	22	18	21	7	135.5	加久藤					
報告27号	38	39	33	0.5	-	38	-	31	23	19.5	41	40	13	16	30	3	22	17.5	9.5	1	22	19	13	8.5	116.5	加久藤	弘治3年(1567)			
報告28号	30	31	25	0	-	30	20	22.5	18	17	41	41	6	-	22.5	3	18	14	6.5	3.5	19	10	17	7	93.5	加久藤	弘治3年(1557)			
報告29号	53.5	53.5	36	0	-	56	-	35	23	20	61	-	7	-	35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	加久藤				
報告30号	52	52	35	0	-	48	32	33	21	22	56	55	7	9	35.5	4	23.5	16	10	1	23.5	15.5	19	6	132.5	加久藤				
報告31号	51	51	36	0	-	46	30	30.5	18	19	54.5	54.5	7	9	31	2	24	17	10.5	0.5	22	14	17	5	125	加久藤				
報告34号	45	45	32	0	-	42.5	31	29	20	18	48	48	9.5	10	32.5	3	21.5	17	9.5	1	21.5	15.5	17	8	120	精氏 〔遺刻〕	応仁2年(1468)	加久藤		
報告35号	44	45	32	0	36	42.5	32	29	21	18	50	51	7	7	32	3	20	14	8	1	21.5	16	17	5	118.0	精宗 〔遺刻〕	建武元年 甲辰は建武元年 (1337-1336)	建武元年甲辰 甲辰は建武元年 (1337-1336)	加久藤	
報告37号	53	53	42	0.5	49	35	32.5	21	24	82	80	9	10	36.5	1	28	20	12.5	1	24.5	20	20	7	143.5	加久藤					

第3表 石積基礎工五輪塔計測表

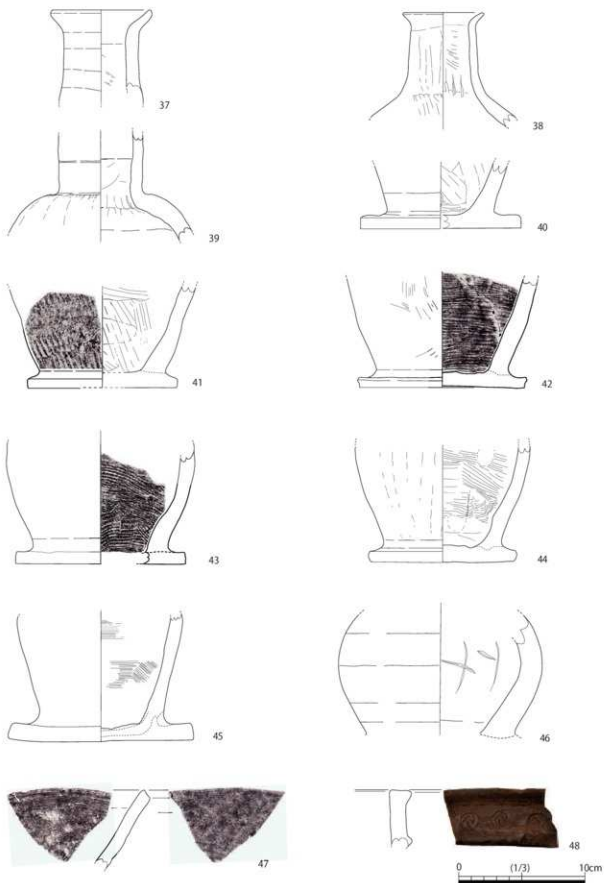


戴骨器実測図

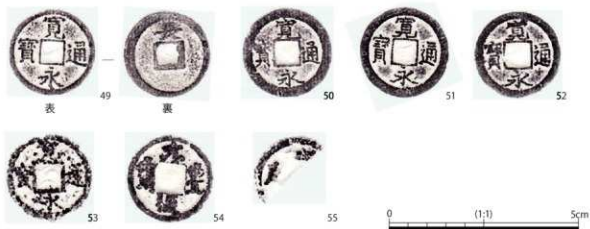
36



第13圖 石横基壇出土遺物(1)



第 14 図 石積基壇出土遺物 (2)



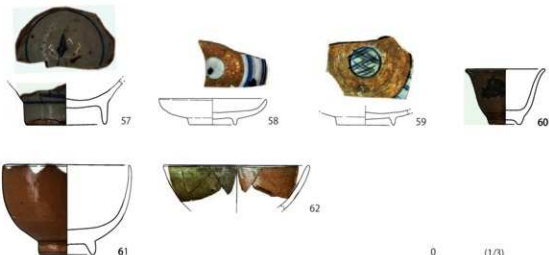
掉回 番号	出土地区	種別	材質	法量 (cm)		残存度	備考
				長さ	厚み		
49	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.3	0.01	完形	寛永通宝
50	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.4	0.01	完形	寛永通宝
51	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.4	0.015	完形	寛永通宝
52	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.3	0.01	完形	寛永通宝
53	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.4	0.015	完形	元豊通宝
54	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.3	0.01	完形	元豊通宝
55	A区石槨基壇	古銭	銅製	2.2	0.01	1/5	祥符元宝or祥符通宝



56

掉回 番号	出土地区	種別	器種	備考
56	A区石槨基壇	鉄器	短刀	全長32.3cm 刃渡り25.8cm 反り8mm

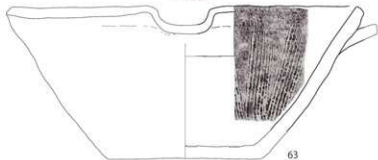
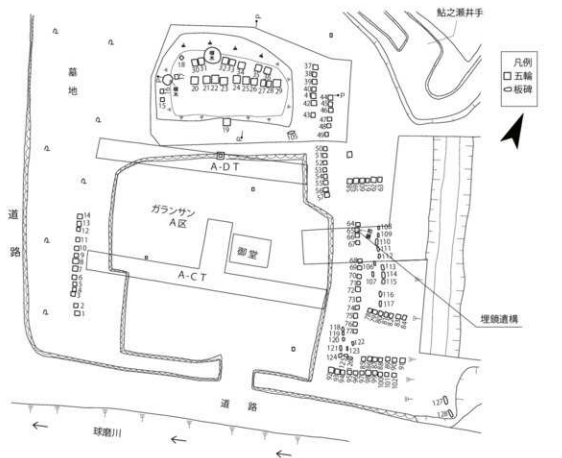
0 (1/3) 10cm



0 (1/3) 10cm

第 15 図 石槨基壇出土遺物 (3)





A区古塔碑群配置図  
0 (1:600) 20m

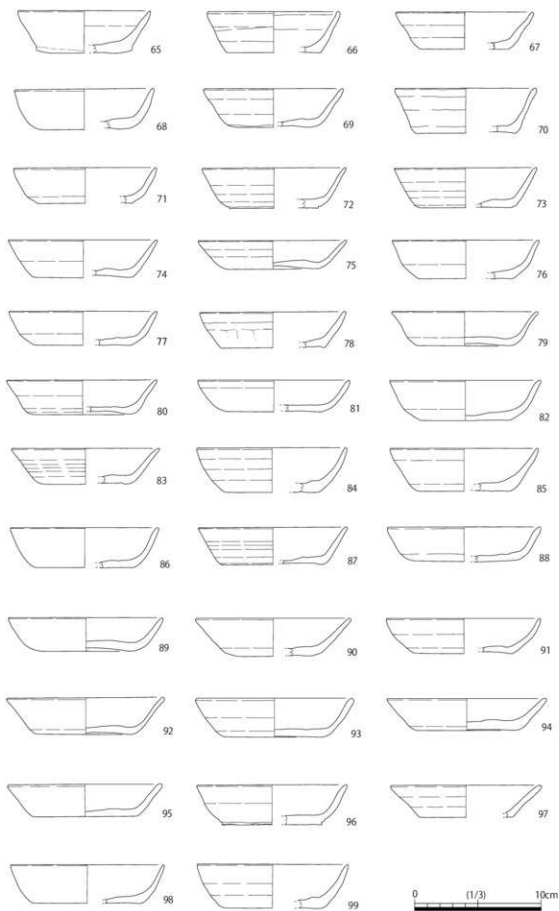


64

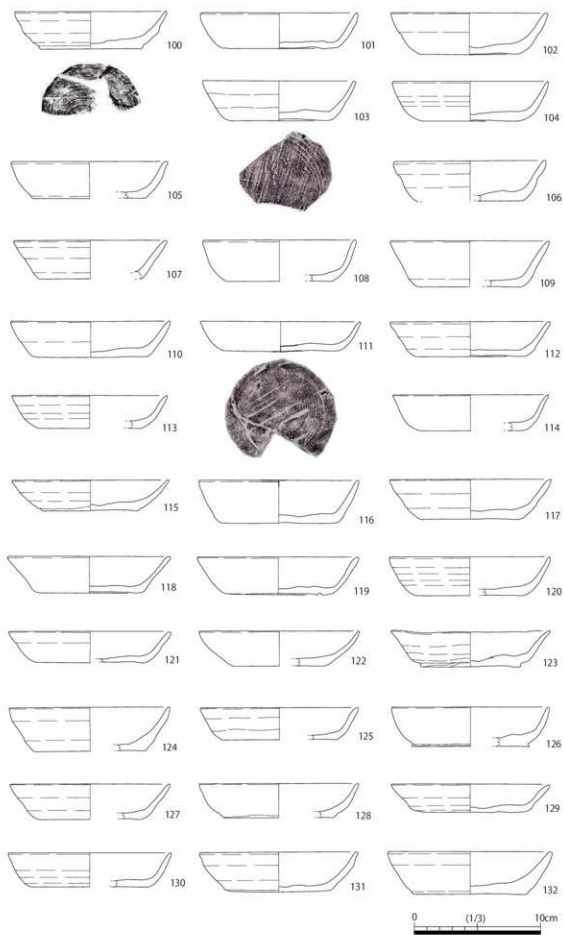
0 (1/3) 10cm

第16図 A区埋鏡遺構及び石造物位置図・埋鏡遺構出土遺物

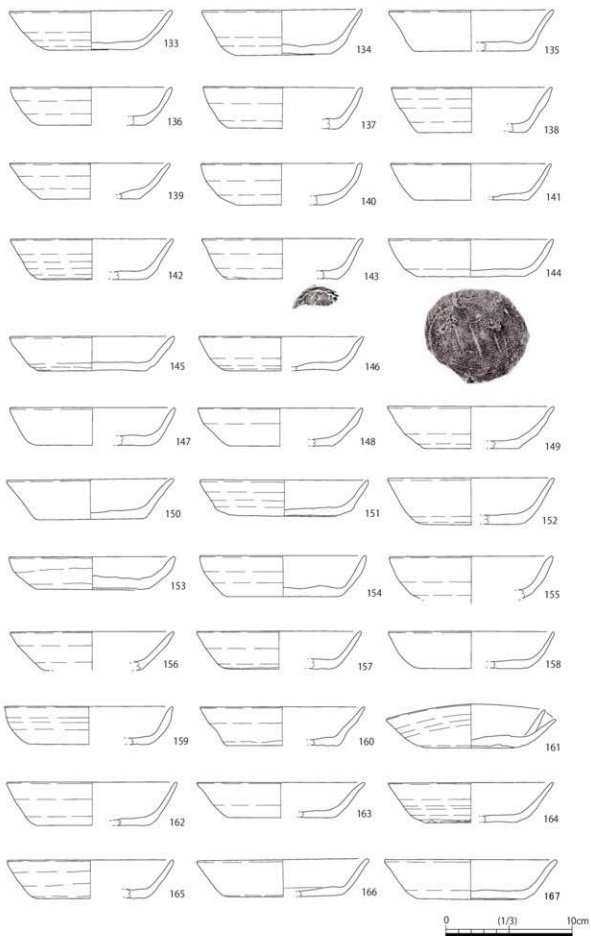




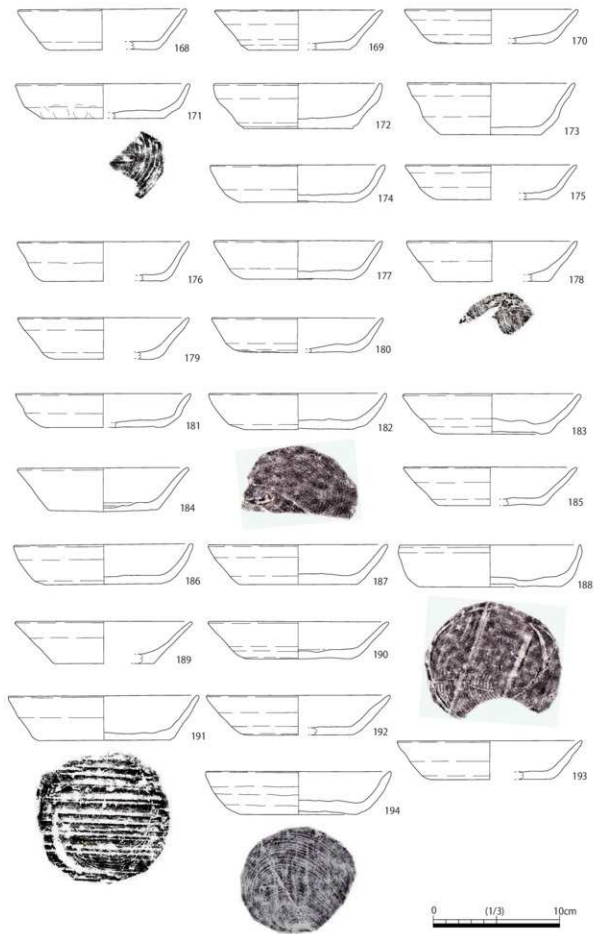
第18图 A区溝出土遺物(1)



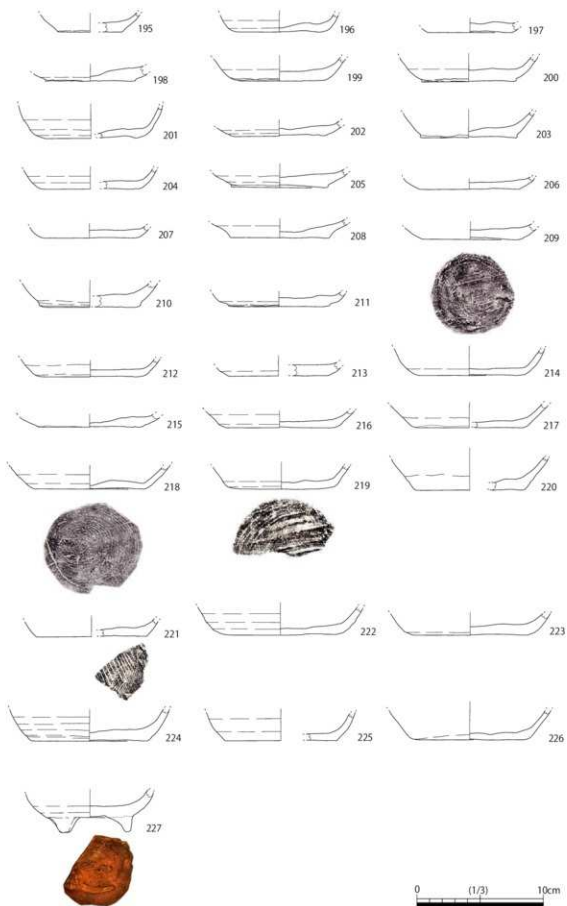
第 19 图 A 区清出土遗物 (2)



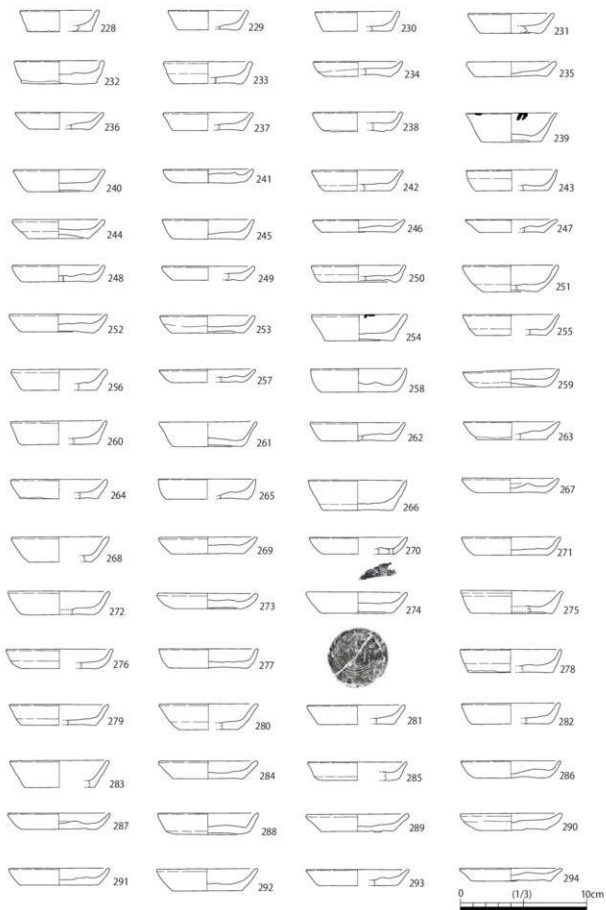
第20图 A区溝出土遺物(3)



第 21 图 A 区清出土遗物 (4)

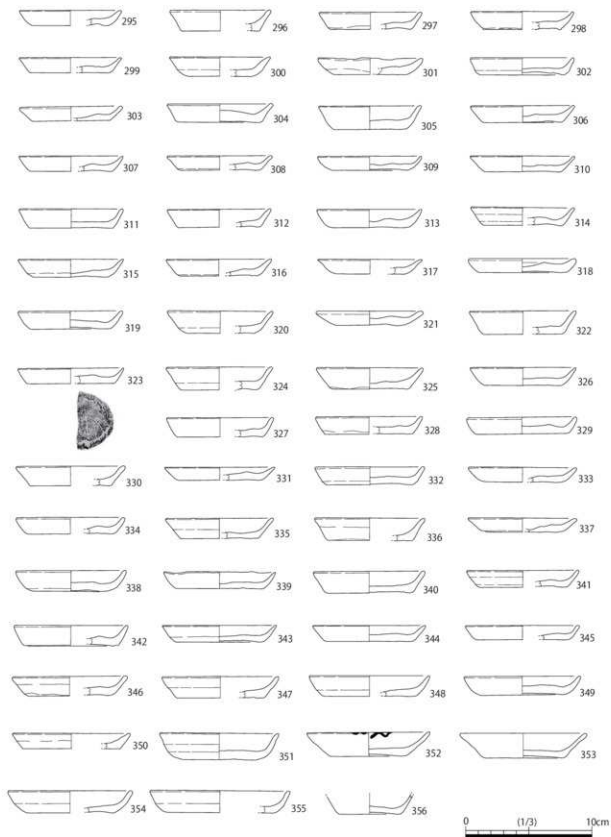


第 22 图 A区溝出土遺物 (5)



第 23 图 A 区出土文物 (6)

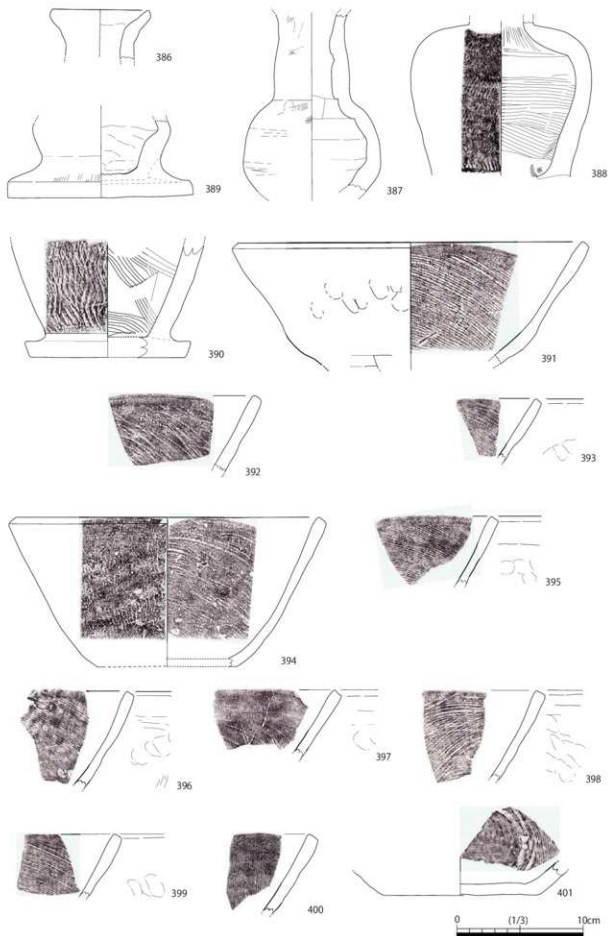




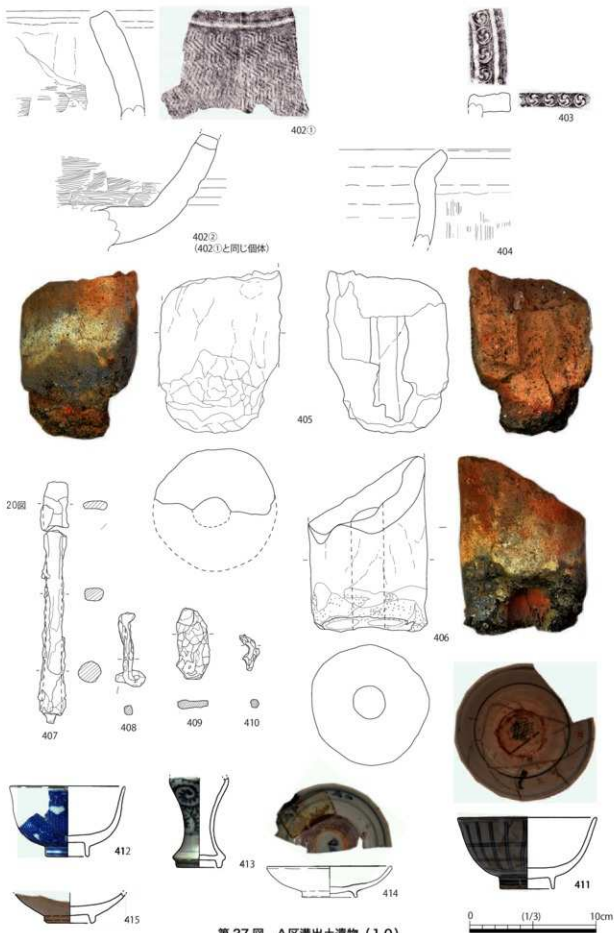
第 24 图 A区溝出土遺物 (7)



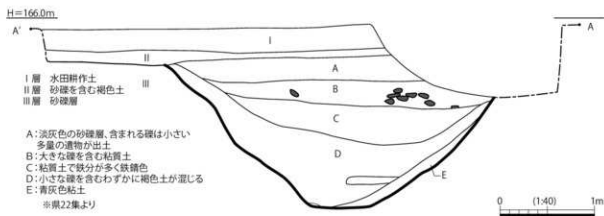
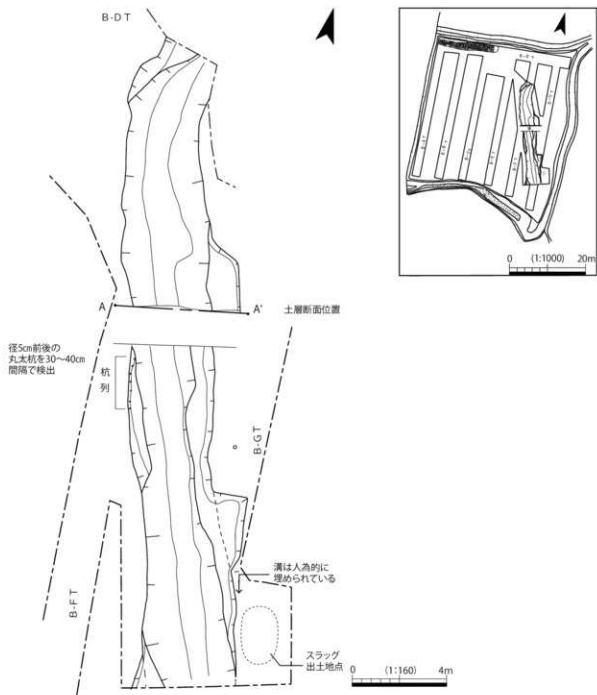
第 25 图 A 区清出土器物 (8)



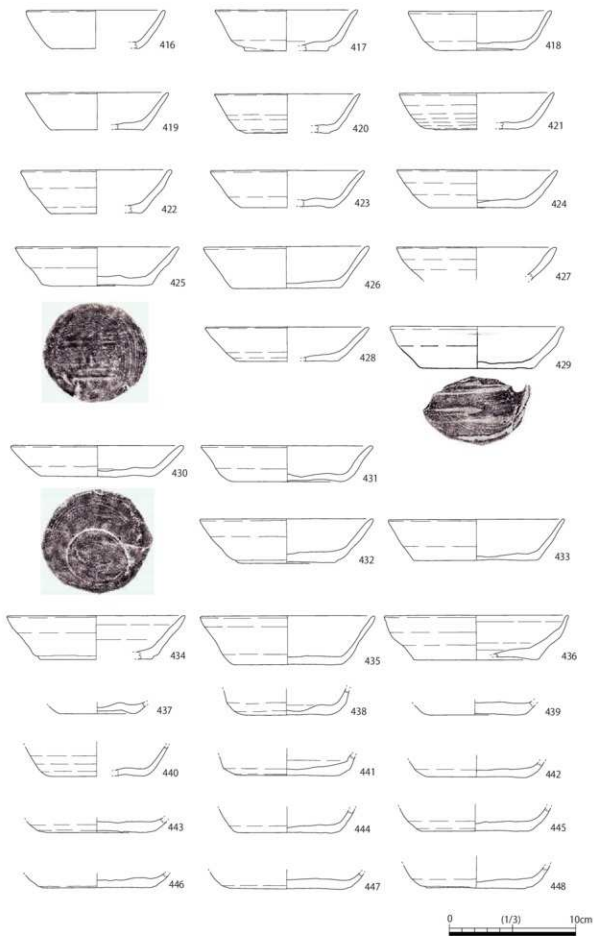
第 26 图 A区溝出土遺物 (9)



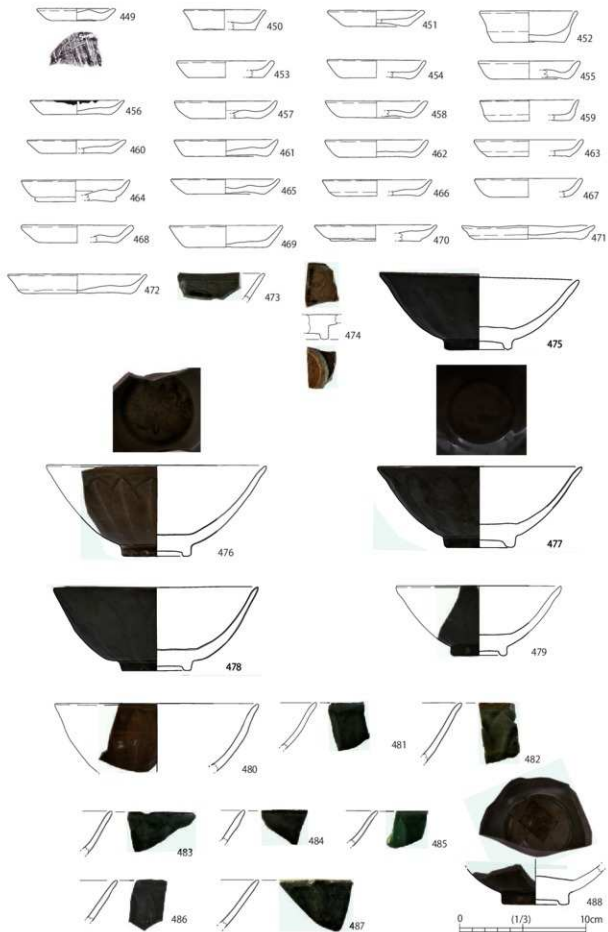
第 27 图 A区溝出土遺物 (10)



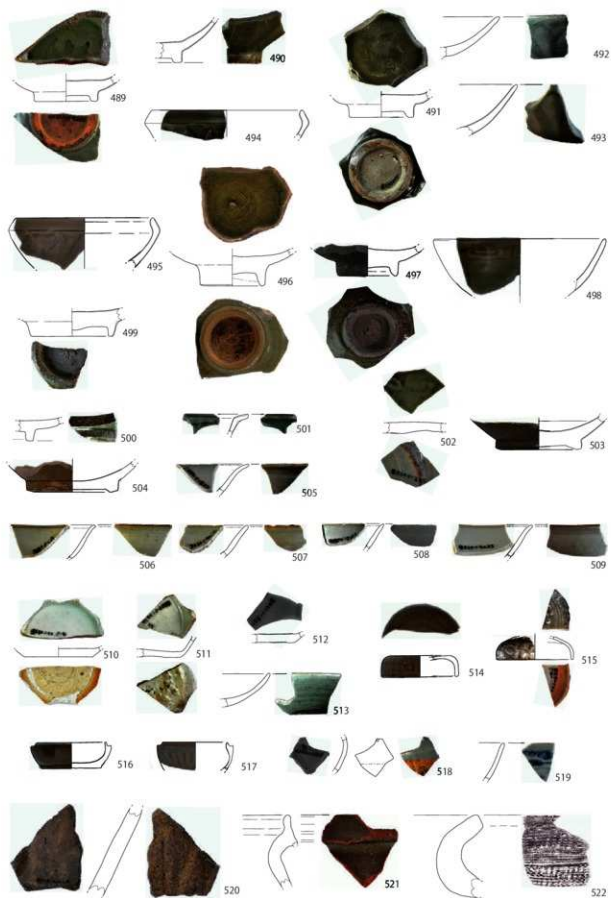
第28図 B区溝及び土層断面図



第 29 图 B 区清出土器物 (1)

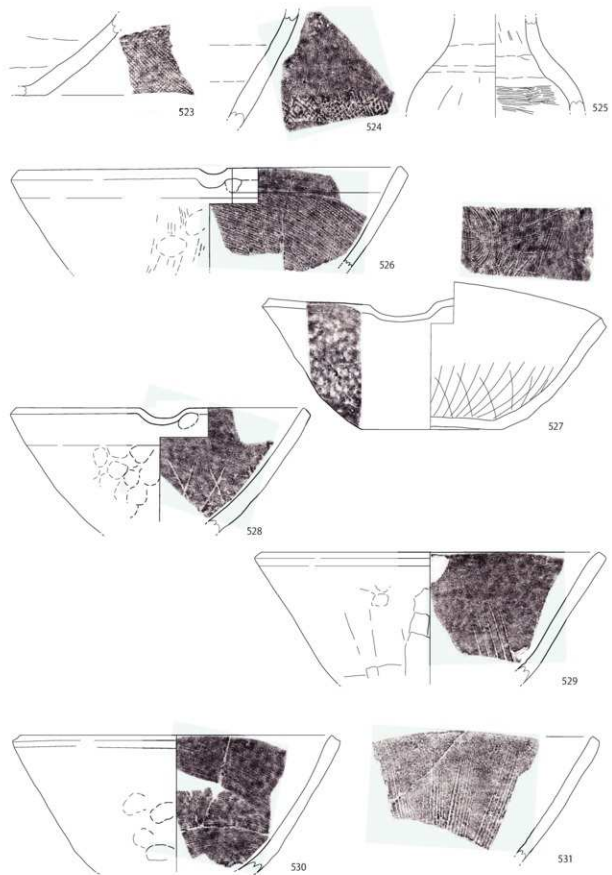


第30图 B区溝出土遺物(2)



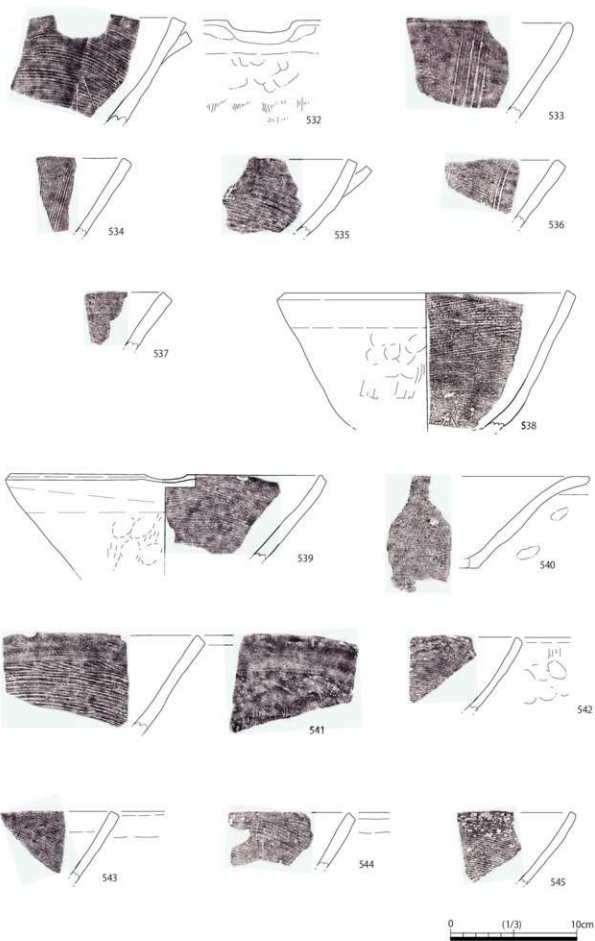
第 31 图 B 区清出土遗物 (3)



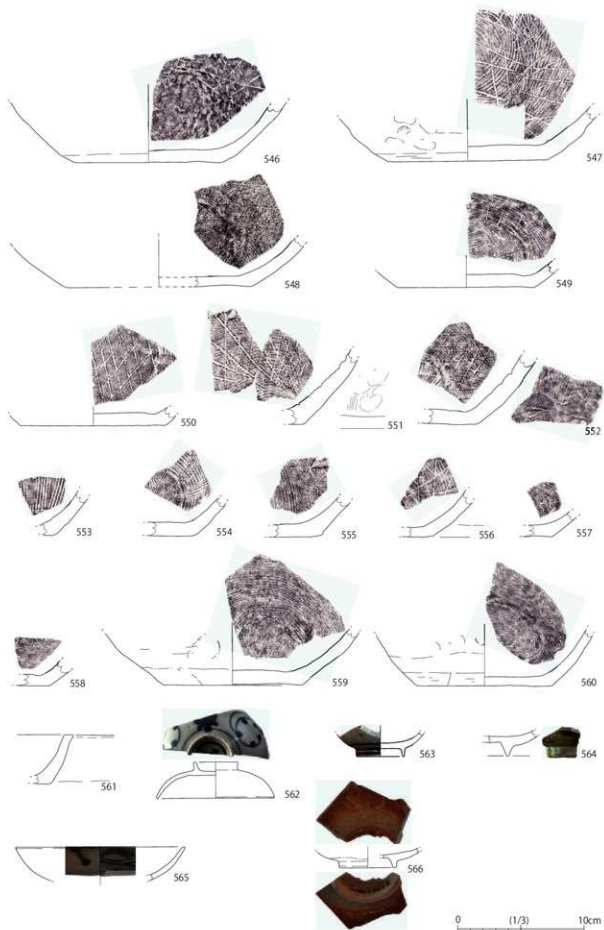


第 32 图 B 区溝出土遺物 (4)

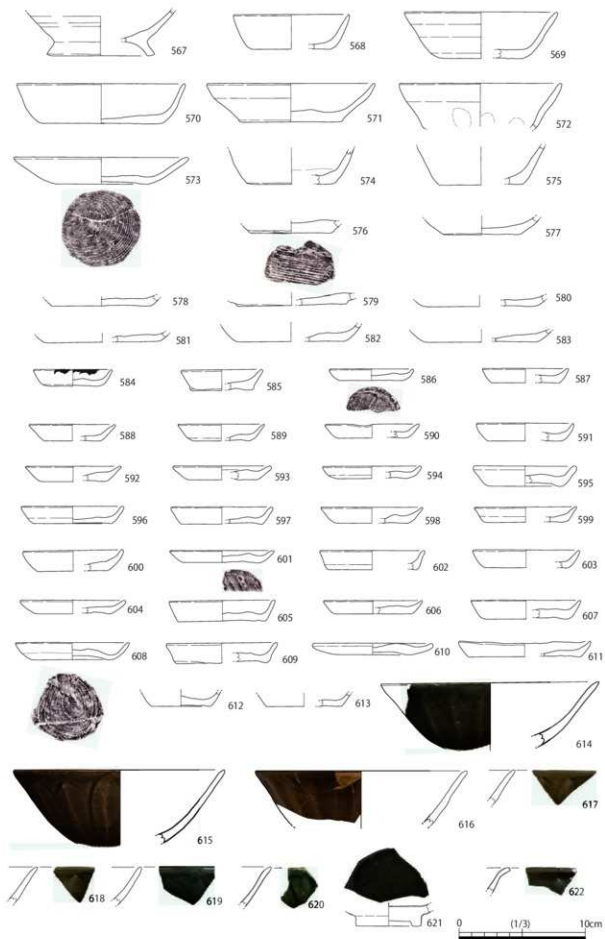
0 (1/3) 10cm



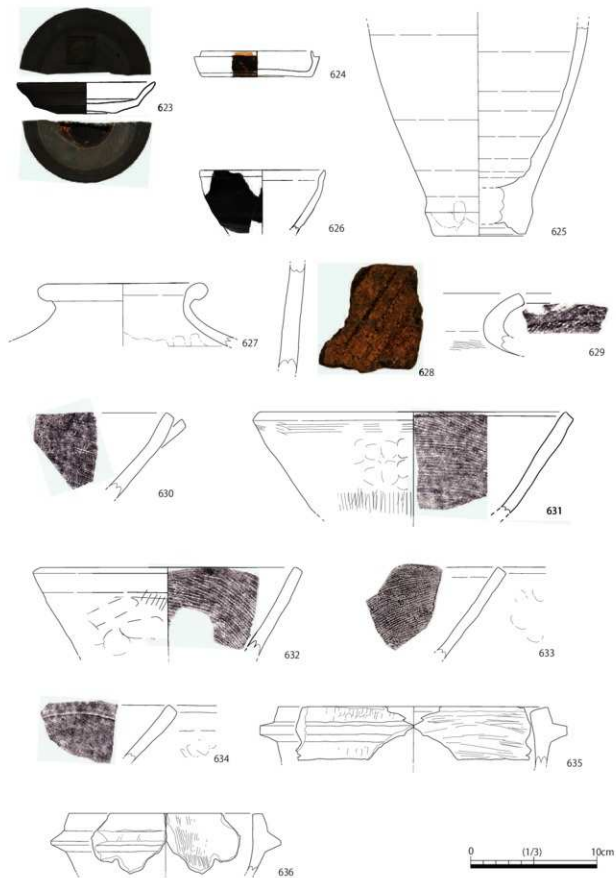
第 33 图 B 区清出土遗物 (5)



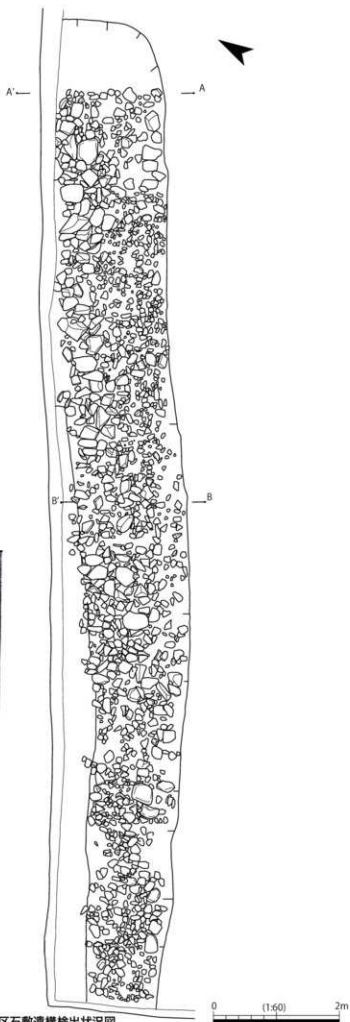
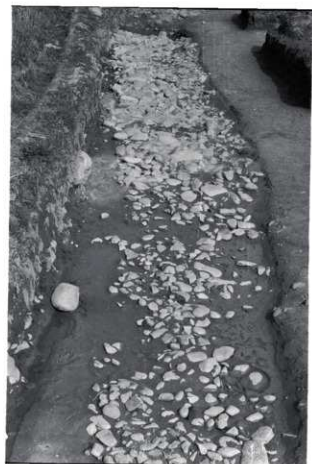
第 34 图 B 区溝出土遺物 (6)



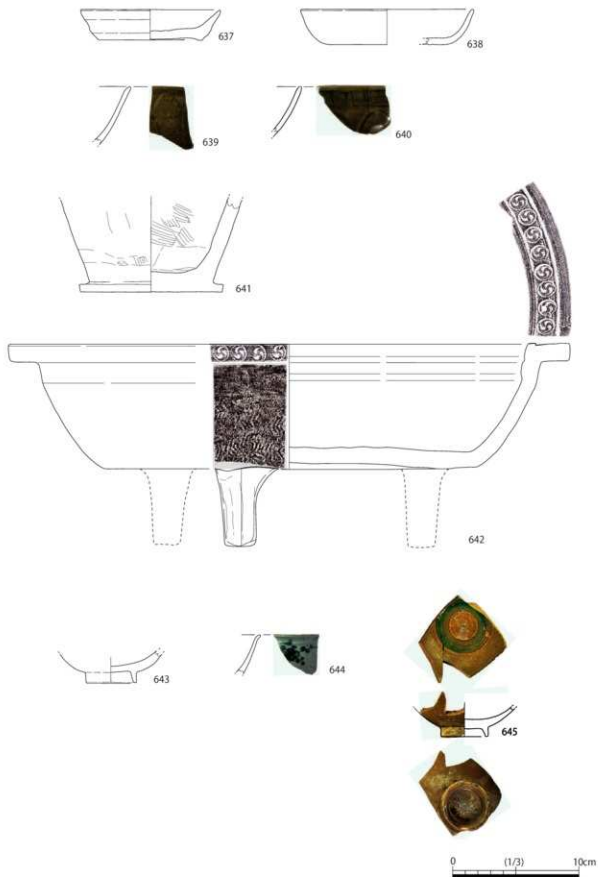
第 35 图 B 区满下层出土遗物 (1)



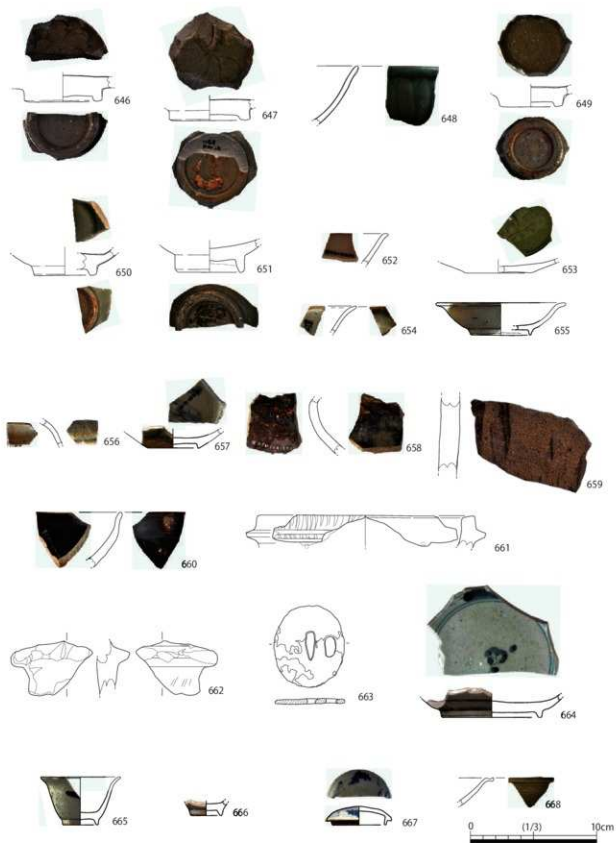
第36图 B区溝下層出土遺物(2)



第 37 图 B 区石敷遺構検出状況図

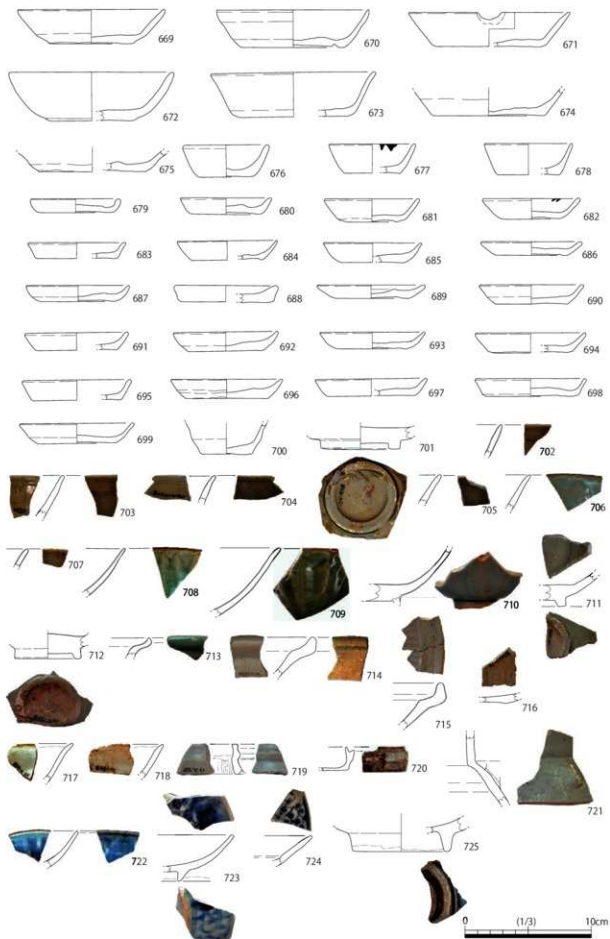


第38图 A区出土遗物

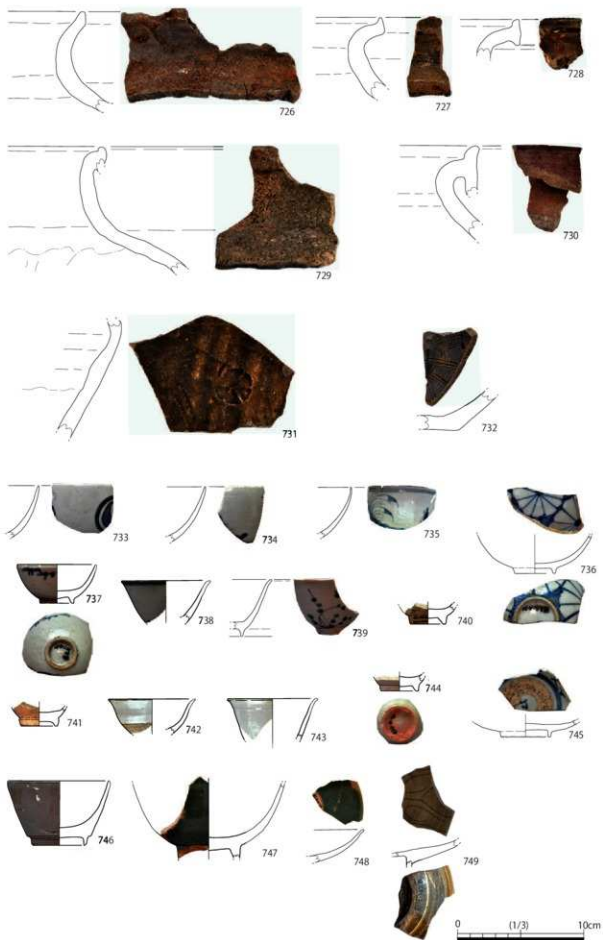


第 39 图 B 区出土遗物

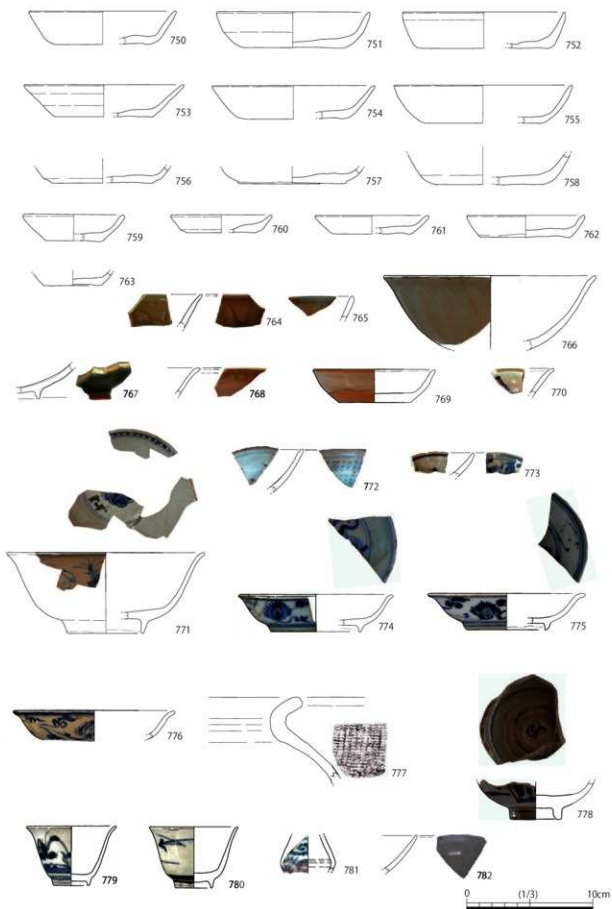




第40图 C区出土遗物(1)



第41图 C区出土遗物(2)



第 42 図 注記不明遺物

### 第3節 相良頼景館跡の再整理の成果

#### 1. 相良頼景館跡の概要 (第43回)

相良家史である『南藤曼綿録』『歴代私鑑』『御当家問書』『嗣誠独集覽』や『球磨絵図』のいずれも「蓮花寺ノ上」「東ノ前」が相良頼景の館とする。

相良頼景館跡が所在する土地は、多良木町税務課が保管する土地台帳の記録では、土地所有者履歴を明治23年まで遡ることができる。明治23年9月16日、個人間の買得が最も古い記録である。芋岡帳(黒肥地村役場保管)には土塁上に墓の記載があり、県22集の掲載されている「宮元氏によるとB4試掘坑の北側に大正の頃まで、五輪塔約30基が在り(県22集66頁)」と状況が合致する。昭和26年10月のルーズ台風の際には球磨川が氾濫、球磨川右岸堤防が決壊し、その決壊部分の補強のために東側土塁の一部を壊し、土塁構築土を蛇籠にして対処したそうである(県22集65～66頁)。



芋岡帳



球磨郡誌より

昭和25年、土塁内を畑地から水田へと開田する際に、椎葉今朝雄氏によって白磁の完形品(遺物№1293)と完形の首磁皿が1点ずつ採集され、宮元尚氏が保管していた。

昭和50年時点の貼之瀬井手からの用水は、土塁北西部にて、北側土塁の外側を西から東へと流れ、東側土塁の外側を沿うように流れて球磨川に排水されていた。県調査当時の土地利用は、土塁内側の北側は宅地・畑地・放牧地であり、南側は水田であった。

#### 2. 熊本県文化課調査の概要と資料の整合

県調査は、東外濠と西外濠の間をB区、B区西側(下流側)をA区、B区東側(上流側)をC区に、土塁内B区北側をD区とし、調査を実施している。

##### (1) 座標及び標高の補正



補正位置図

令和3～4年度調査と県調査当時の測量データの確認を行った。座標系については、県調査当時は座標系を用いていないので、県調査当時に存在し、現在に残る構造物をもとに測量図に座標値を与えた。

標高は約40cmの誤差を確認した。本報告では、県調査当時の標高値をそのまま掲載しているため、現在の標高への補正が必要である。

標高測定地点	標高値	誤差
熊本県調査(昭和49.50年) 黒川氏宅前	160.450 m	-0.414 m
令和3.4年の調査 黒川氏宅前	160.864 m	0.0 m

##### (2) 層序の整理

県調査では、各地区にて層序を付与されているため整理する。

###### 【B区切落しより上段面の層序】

第Ⅰ層：水田の耕作土(約20cm)

第Ⅱ層：酸化鉄の集積した鉄分集積層(約10～20cm)

第Ⅲ層：褐色土層(約30cm)

第IV層：砂礫層

#### 【B区切落しより下段面の層序】

第I層：耕作土

第II層：鉄分集積層

第III層：褐色土層

第IV層：黄灰色砂層

第V層：砂礫層

#### 【A区（西側）層序】

第I層：耕作土

第II層：鉄分集積層

第III層：褐色土層

第IV層：黄灰色砂層

第V層：砂礫層

#### 【C区（東側）層序】

第I層：水田の耕作土（約20cm）

第II層：酸化鉄の集積した鉄分集積層（約10～20cm）

第III層：褐色土層（約30cm）

第IV層：砂礫層

これらを整理すると、基本層順は次のとおりである。

#### 【基本土層】

第I層：耕作土

第II層：鉄分集積層

第III層：褐色土（近世の盛土・B区盛土）

第IV層：黄灰色砂層

第V層：砂礫層

となる。

### （3）遺構の整理

相良領景館跡で検出された遺構は次のとおりである。

東外濠：区画する東側の堀跡

西外濠：区画する西側の堀跡

柱 穴：B区上段面にて確認された柱穴群

溝：B区上段面にて確認された溝跡

排水溝：B区上段面にて確認された水田用溝

土器溜め：B区上段面にて確認された土器溜め

盛 土：B区上段面にて確認された整地層

広 場：B区下段面にて確認された敷石遺構

堤 防：B区下段面の南側にて確認された石積護岸

切落し：B区の上段と下段を区切る基面整形

本報告においても、泉22集の遺構名を用い説明を加える。

### 3. 遺構及び出土遺物

#### （1）東外濠（第44図）

東外濠は館跡東側にて検出された区画濠で、検出面は上段面第IV層上面（砂礫層）である。濠の上面幅は6.3m、

濠底幅は約2m、検出面から濠底面まで2mである。東側の掘り方形状は二段で、底面はゆるやかな皿状となる。

東外濠の覆土は、①黄灰色砂層、②灰色砂層、③暗褐色砂層「濠底に向かって傾斜しながら濠底近くまで堆積」、④黄灰色粘質土「濠底が水をたたえていたことを示す現象」、⑤暗褐色土「濠底に向かって傾斜して堆積」であった。

東外濠の下段部（切落しから南側）は、石組を用いて濠が延長されていた。この石組は、下段部第IV層（黄灰色砂層）を基礎面とする。石組の長さは南北3.5m、幅1～1.5mであった。石組構成礫は約0.2～0.5mの川原石で4～5段に野面に積み、その高さは約0.8mであった。東外濠の南端の基礎面は砂礫層に達していた。

「球磨川の流路は、切落し下面あたりと考えられるので、1m前後の水濠であったと考えられるし、また濠は南側が高く北へ行くにしたがい低くなっているので球磨川から取り入れた水は北流し、調査地外であった北側土塁北側の濠を流れて西外濠を巡って、再び球磨川に流れ出るのではなからうか」との記載が泉22集にある。

#### 【出土遺物】（第45・46図）

783～786は土師器環である。783は器高が高い。787～791は土師器小皿である。792は土師質の土師である。

793～796は龍泉窯系A類の青磁碗である。794は口縁内面に白胎線が巡る。797は龍泉窯系B類の青磁碗である。798は同安窯系の青磁皿である。799は白磁V類碗、800は白磁IX類碗、801～805は白磁IX類皿である。806は白磁四耳壺である。807は瀬戸前期様式の御皿である。

808・809は中世須恵器の胴部片である。810は山形タキ痕を残す底部片である。811～816は中世須恵器の播鉢・鉢である。817は瓦質の花菱文スタンプをもつ風戸である。818は加久藤溶結凝灰岩製の輪羽口である。819は肥前の染付碗、820は肥前の筒型碗、821・822は一勝地の碗と箸口である。

#### （2）西外濠（第44図）

西外濠の東側は、道路下であるため未調査である。上段面第IV層（砂礫層）にて検出された。覆土は①暗褐色粘質土、②礫底は礫を含む褐色粘質土である。礫は全面に混入しているのではなく、東側から西側へ斜めに傾斜して混入している。堀底までの深さは、検出面より1.8～2.0mであった。

出土遺物は、上段面第III層より近代陶器、①暗褐色粘質土及び②褐色粘質土中より土師器、青磁が出土している。

### 【出土遺物】(第 47～49 図)

823 は土師器環で底面に板目瓦痕が残る。824～826 は土師器小皿である。827 は土師質の土甕である。

828～830 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。831～840 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。841～844 は龍泉窯系 B0 類の青磁碗である。844 は無文である。845 は線刻蓮弁文の青磁碗である。846・847 は同安窯系の青磁碗である。848～851 は龍泉窯系 D 類の青磁碗である。852 は龍泉窯系青磁の大皿である。853～856 は折縁皿である。857 は内湾皿である。858 は青磁筒型香炉である。

859 は白磁 V 類碗、860 は白磁 VII 類碗、861・862 は白磁 IX 類碗である。863・864 は白磁 IX 類皿である。865 は白磁皿 C1 群である。866 は白磁の梅瓶である。

867・868 は染付皿 C 群、869 は染付皿 F 群である。870 は涼州窯系の大鉢である。871・872 はかけ流された軸痕が残る大型甕である。872 の内面には同心円の当て具痕が残る。

873・874 は瀬戸の瓶子で、873 の肩部に沈線が 2 重巡る。875 は中世須恵器の瓶である。876 は鈎付きの瓦質の火鉢で、鈎上面に巴文を施す。

877 は滑石製石鍋からの転用で温石である。878・879 は砂岩製の砥石である。

880・881 は肥前の碗である。882・883・884 は肥前的小杯である。885 は肥前の陶器碗である。886・887 は肥前の天目碗である。888・889 は一勝地の碗である。890 は京焼風陶器皿である。891 は肥前見込み蛇の目軸刺ぎ、砂目、白化粘土による刷毛目文の皿である。892 は灰軸葉の皿、893・894 は 17 世紀後半の肥前の皿で、内底に目痕が 3ヶ所残る。895 は内底の鉄軸を溝状に掻きとっている。

### (3) 切落し(第 52～54 図)

B 区上段と下段を区切る基面整形である。地山である砂礫層を人工的に整形した遺構である。

切落しは、東西の外濠間(B区)にわたって確認された。C区(B区北側)は未調査のため不明である。A区のA7 試掘坑まで切落しの痕跡は確認されている。渠 22 集では、切落しの延長を東西 103 mほどと解釈している。

この切落しから石積堤防まで間は、B-10・11Tr の土層図を確認したところ、砂層・粘土層・黄灰色砂層が堆積しており、遺物は出土していない。

### (4) 柱穴と溝と排水溝(第 50・51 図)

B区にて検出された柱穴群と溝である。

柱穴は 203 基検出された。「西側及び東側土塁の延長を推定すると、柱穴 Na.1～Na.29 までは西側土塁下にあり、同じく Na.200～Na.203 は、東側土塁下にあったこ

とになる」と報告されている。

下段面の第 IV 層(黄灰色砂層)上面では Na.38～41、48～59、69～75、87 が検出された。

上段面の第 III 層(盛土:褐色土)中に検出された柱穴の底には、根固めをしたものも認められた。建築物の配置や規模は明らかでない。

溝 I～III および排水溝は、B 区西側に検出された。溝 I～III は第 III 層(盛土:褐色土)上面での検出である。溝 I は西側土塁の延長上に位置している。

溝 II は東西 7 m、幅 1.1 m である。「溝底は盛土の褐色土上面」であり、西端の深さは 40 cm を測り、排水溝南端へ傾斜し、排水溝南端溝底上面に溝 II の東端が位置していた。

溝 III は、東西 2.5 m、幅 1～1.3 m、深さ 15～20 cm で、柱穴 Na.23、24 を切っており、溝東端は排水溝の上面に位置していた。

排水溝は、褐色土(盛土)面で検出、第 IV 層(砂礫層)まで達し、柱穴 Na.22、27、28、30～37 を切っていた。

### 【出土遺物】(第 55・56 図)

896～907 は柱穴 Na.1 の出土遺物である。896～900 は土師器環で、897 の底面には屢状瓦痕が、898・899 には板目瓦痕が残る。901～905 は土師器小皿である。906・907 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

908 は柱穴 Na.3 の出土遺物で、龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

909～918 は柱穴 Na.4 の出土遺物である。909～912 は土師器小皿である。913 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。914・915 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。916 は龍泉窯系 B0 類の青磁碗である。917 は龍泉窯系 D 類の青磁碗である。918 は、肥前現川の製品と思われる。

919～921 は柱穴 Na.6 の出土遺物である。919・920 は土師器環、921 は板目瓦痕を残す小皿である。

922 は柱穴 Na.7 の出土遺物で龍泉窯系の折縁盤である。

923～926 は柱穴 Na.8 からの出土遺物で土師器環である。924・925 の底面に板目瓦痕が残る。925 には板目瓦痕とともに粗紋が残る。

927 は柱穴 Na.9 からの出土遺物で、底面に板目瓦痕が残る土師器環である。

928 は柱穴 Na.12 からの出土遺物で黄釉洗である。

929 は柱穴 Na.13 からの出土遺物で土師器小皿である。

930 は柱穴 Na.14 からの出土遺物で土師器環である。

931・932 は柱穴 Na.15 からの出土遺物で、931 は白磁碗 IV 類、932 は白磁皿 III 類と思われる。

933・934 は柱穴 Na.17 からの出土遺物で、933 は土師器小皿、934 は中世須恵器の挿鉢である。

935 は柱穴 Na.21 からの出土遺物で内野山窯の碗であ

る。

936は柱穴№22からの出土遺物で龍泉窯系B類の青磁碗である。

937～941は柱穴№26からの出土遺物である。937は土師質の土錘である。938は龍泉窯系B類の青磁碗である。939は肥前の染付碗、940は肥前の灰釉の陶器皿である。941は内野山窯の皿である。

942は柱穴№30からの出土遺物で龍泉窯系B類の青磁碗である。

943～952は柱穴№31からの出土遺物である。943・944は龍泉窯系A類の青磁碗である。945・946は龍泉窯系B類の青磁碗である。947は中世須恵器の胴部片である。948は肥前染付の仏飯である。949は内野山窯の碗である。950は肥前の皿で内底に砂目痕が残る。951は砂岩製の砥石である。952は土師質の風戸である。

953～955は柱穴№33からの出土遺物で、953は土師器小皿、954は土師質の土錘である。955は白磁IX類皿である。

956・957は柱穴№34からの出土遺物で、956は龍泉窯系A類の青磁碗、957は肥前染付の小坏である。

958は柱穴№39からの出土遺物で白磁VI類皿である。

959は柱穴№41からの出土遺物で龍泉窯系B類の青磁碗である。

960～964は柱穴№42からの出土遺物で、960は土師器坏、961・962は土師器小皿である。963は白磁IX類皿、964は体部外面に山形タキ痕を残す中世須恵器である。

965は柱穴№48からの出土遺物で体部外面に山形タキ痕を残す中世須恵器である。

966は柱穴№50からの出土遺物で龍泉窯系B類の青磁碗である。

967は柱穴№51からの出土遺物で6a型式の常滑焼の甕である。

968は柱穴からの出土遺物で土師器小皿である。



土器溜検出状況

## (5) 土器溜

B区上段面の南側、第III層(褐色土)上面にて検出された。その規模は、東西2.7m、南北1.9m、深さは0.25mであった。覆土は黒褐色土で、底面から上面まで土師器が廃棄された状態で検出された。底面に2個の柱穴が検出された。

### 【出土遺物】(第57図)

969～981は土師器坏である。982～1010は土師器小皿である。1011は龍泉窯系A類の青磁碗である。1012は東播系の中世須恵器の鉢である。

## (6) B区III層(褐色土・盛土)(第58～60図)

上段面第III層が褐色土(盛土)である。この上面で柱穴と土器溜が重複し確認されている。この褐色土は、整地層と考えられる。県22集142頁にこの褐色土の範囲が示されており、B区上段面の西側を中心に広がっている。

### 【出土遺物】(第58図)

1013～1023は土師器坏である。1024～1038は土師器小皿である。1039・1040は土師器土錘である。

1041～1043は龍泉窯系A類の青磁碗である。1044～1056は龍泉窯系B類の青磁碗である。1057～1061は龍泉窯系B0類の青磁碗である。1062は龍泉窯系C3類の青磁碗である。1063・1064は同安窯系の青磁皿である。1065・1066は折縁皿である。1067は高麗象嵌の青磁鉢である。

1068は白磁四耳壺である。1069は白磁V類碗、1070・1071は白磁IX類碗である。1072～1075は白磁VI類皿である。1076は白磁VII類皿、1077・1078は白磁IX類皿である。1079は型成型の合子蓋、1080も型成型の合子身である。1081は白磁四耳壺である。1082は白磁柳瓶の底部である。1083は青白磁の蓋座小壺である。

1084は染付碗E群。1085・1086は染付皿C群。1087は瀬戸の卸皿。1088は山形タキ痕を残す中世須恵器の壺である。1089～1092は中世須恵器の播鉢である。

1093～1098は肥前系の染付碗。1099は肥前の染付碗で、1700～1750年代。1100・1101は肥前染付の組皿で、17世紀前半に位置付けられる。1102は獣脚の皿。1103は内底蛇の目軸剥ぎの染付皿。1104は壺付露胎の皿。1105は型成型の近代の小皿。1106は肥前染付小坏、1107は肥前の猪口である。1108は17世紀後半の染付瓶、1109は染付の蓋付鉢の身である。1110・1112は球磨郡産の碗、1111は肥前内野山窯の碗である。1113・1114は肥前の碗、1115は肥前の皿で17世紀前半、1116は肥前の大鉢である。1117は八代高田の製品である。

## (7) 広場

泉 22 集では、「広場とは川原石を人工的に配石した集石もしくは石敷状遺構」と報告されている。B 区下段面にて確認された石敷遺構を含む空間である。また、「広場東側は、東外濠南端から西へ約 10 m のところ、西側は、BM の南方延長線あたりである。この範囲の全面に集石がみられるのではなく、ブロック状に検出された。切落し面より下段の土層層序は前述したが、若干説明を加えると、切落し面より上段に第二期の建築物が構築される際、砂礫層を切断して南側に傾斜した切落しを構築した。この切落し面より南側は球磨川で、第二期頃は、川原が川床であったであろう。球磨川の洪水・氾濫によって、砂礫層上に黄灰色砂層が切落し上面ぎりぎりのところまで堆積した。この黄灰色砂層の堆積後、球磨川は流路を南側寄りに変え、流水は南へ迂回することになる。このことにより切落し南面は、土地の増加がはかれることになる」と記載されている。この黄灰色砂層が石積堤防や東外濠延長部の石組の基礎土となっていた。

黄灰色砂層の層厚は、0.68～2.15 m である。黄灰色砂層中からの遺物の出土はない。集石状遺構は川原石の上面は、第 IV 層（黄灰色砂層）上面、あるいは第 III 層（褐色土層）下面にて検出されている。径 10～20 cm の川原石一石並べた集石状遺構は、北側から南側の堤防寄りの方にやや傾斜し、堤防の上面より約 30 cm 下にある。

石敷状遺構は、堤防と同レベルで、西端及び北端は、径 30～50 cm の比較的大きな川原石を用いている。集石状遺構、もしくは石敷状遺構の検出された切落し面より下段と堤防間からは柱穴の検出はなかった。

集石状遺構の上面、あるいは B 区下段面の第 III 層から遺物が出土している。

### 【出土遺物】(第 63 図)

1118 は土師器坏である。1119 は土師器小皿である。1120 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。1121～1127 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1128・1129 は龍泉窯系 D 類の青磁碗である。1130 は白磁 IV 類皿である。1131 は染付皿 B 群。1132 は 7 型式の常滑焼の甕である。1133 は常滑焼の甕底部である。1134 は瓦質の釜である。1135 は瓦質の火鉢である。1136 は滑石製の石鍋である。

## (8) 堤防 (第 61・62 図)

堤防は広場の南側および東外濠南端から東側、西外濠南端から西側に東西に検出され、現球磨川とほぼ並行する石積護岸である。

人為的な石積として認識できる範囲は、東側は C 2 試掘坑、西側は A 4 試掘坑までであった。C 3・A 5 試掘坑では検出されていない。石積護岸の全長は、約 165 m であった。

東端から簡中央付近の南方あたりまで比較的丁寧な積み方をしていた。この範囲内で、堤防の内側及び外側(球磨川)に野面積みが認められたのは、東外濠南端から東側へ約 10 m のところであった。

内外に野面積みが検出された堤防部分の立面図でも判るように、外側の球磨川側は、基礎面に約 30～50 cm の川原石を横位に用いている。その上段を 3～5 段積みしている。その中には凝灰岩がわずかではあるが確認された。石積の高さは 1 m 前後であった。内外石積が施工されている部分の護岸の幅は、2 m 前後であった。

J-1' 部分絵は石積を撤去して、基礎構造を確認されており、基礎面及び石積内から土師器・瓦質土器、青磁片が出土している。

東外濠南端から東側の石積の構造をみると、黄灰色砂層中に構築され、上面及び内部は径 20～30 cm の川原石を 3～4 段乱積みしていた。外側の球磨川側は、ゆるやかな傾斜をもち、上面から傾斜面基礎部までの高さは約 1 m 前後であった。内側は 2～3 段の乱積みであった。

### 【出土遺物】(第 63 図)

1137～1140 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1141 は折縁皿である。1142・1143 は白磁 IX 類皿である。1144 は中世須恵器の播鉢である。

## (9) B 区出土遺物 (第 64～68 図)

B 区の 1・II 層から出土した遺物である。

1145～1158 は土師器坏である。1159～1173 は土師器小皿である。1174 は器高の高い土師器小皿として報告する。1175～1180 は土師質の土鍾である。1181 は土師質の火鉢で口縁部に菊花のスタンプがある。1182 は土師質の羽釜である。

1183 は加久藤溶結凝灰岩製の輪羽口である。

1184～1186 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。1187～1196 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1197 は同安窯系の青磁皿である。1198 は折縁皿、1199 は折縁盤である。1200・1201 は白磁 IX 類皿、1202 は白磁水注の把手である。1203 は白磁四耳甕もしくは白磁水注の一部と思われる。1204 は白磁型成型の合子蓋である。1205 は白磁合子の身である。1206 は染付皿 B1 群。1207・1208 は黄釉鉄給洗である。1209・1210 は軸流し掛けが残る大型の甕で、1210 の内面には同心円のあて具痕が残る。1211 は古瀬戸の皿、1212 は 6a 型式の常滑甕である。

1213～1221 は中世須恵器である。1213・1214 は山形タキ痕を残す甕である。1215 は頸部が直に立ち上がる甕である。1220 は菱形の押型を残す。1221 は仏具の甕である。1224 は突帯を持つ釜である。1222・1223・1225～1229 は中世須恵器の鉢である。1225 は棒番城窯製品の可能性がある。1230 は瓦質の火鉢脚



部である。

1231は滑石製品を転用した温石である。1232は滑石製石鍋である。

1233は肥前染付の小坏である。1234は肥前の色絵碗である。1235・1236は肥前染付の碗である。1237は肥前青磁染付の皿である。1238は一勝地の碗である。1239は京焼風陶器碗である。1240は肥前の天目碗である。1241は肥前現川の皿と思われる。1242は肥前内野山窯の皿である。

#### (10) A区出土遺物 (第69図)

A区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層から出土した遺物である。

1243～1245は土師器坏である。1246～1249は土師器小皿である。1246は顕著な上げ底となる。1250は土師器土踵である。

1251は龍泉窯系A類の青磁碗である。1252・1253は龍泉窯系B類の青磁碗である。1254は龍泉窯系D類の青磁碗である。1255は同安窯系の青磁皿である。1256は内湾する大皿である。1257は折縁皿Ⅲ類である。1258は折縁腹折皿である。1259は筒型香炉の腰部である。1260は緑釉洗である。1261は瀬戸の梅瓶である。

1262は中世須恵器の瓶で仏具である。1263は中世須恵器の播鉢である。1264は肥前染付の碗である。1265は肥前型成型の猪口である。1266は波佐見の雪輪文皿、1267は肥前内野山の碗である。1268は肥前の青磁碗である。1269は肥前の青磁大皿である。1270～1272は肥前の陶器皿である。

#### (11) C区出土遺物 (第70図)

C区Ⅰ・Ⅱ層から出土した遺物である。

1273は土師器坏、1274は土師器小皿である。1275は龍泉窯系B類の青磁碗である。1276は古瀬戸の卸皿である。1277は陶器の瓶と思われる。1278～1280は中世須恵器の壺である。1281～1286は中世須恵器の鉢である。1287は滑石製石鍋からの転用の温石である。1288・1289は肥前天目の碗である。

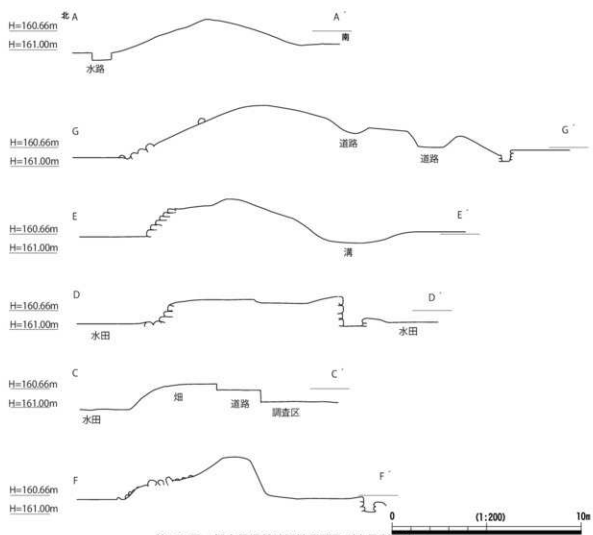
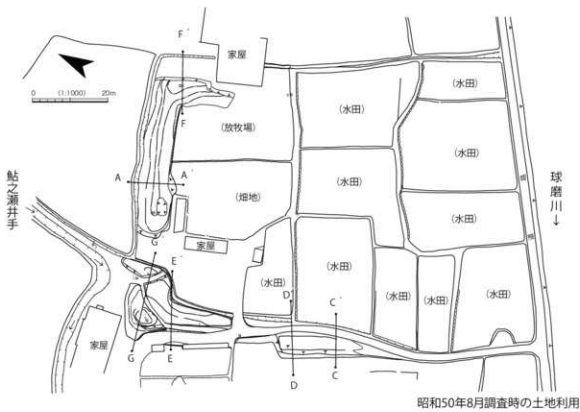
#### (12) D区出土遺物 (第70・71図)

D区から出土した遺物である。

1290・1291は土師器小皿である。1292は龍泉窯系B類の青磁碗で内底に印文がある。1293は宮元尚氏から寄贈された白磁Ⅴ類の碗である。1294は白磁梅瓶である。1295は6b型式の常滑甕である。1296は中世須恵器の壺である。1297・1298は中世須恵器の播鉢・鉢である。1299は瓦質の火鉢で、鈿上面に巴文が残る。1300・1302は肥前内野山の碗である。1301は肥前の陶胎染付の碗である。1303・1304は肥前の紅皿である。

#### (13) 出土地点不明出土遺物 (第71図)

1305・1306は土師器坏である。1307は土師器小皿である。1308は龍泉窯系A類の青磁碗である。1309～1312は龍泉窯系B類の青磁碗である。1313・1314は龍泉窯系B0類の青磁碗である。1315は白磁Ⅸ類皿である。1316は萩府系白磁である。1317は肥前系の染付碗、1318は一勝地の碗である。

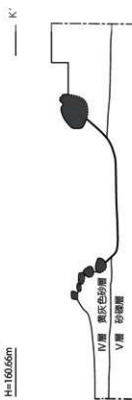


第 43 図 相良精景館跡旧地形図及び土塁断面図

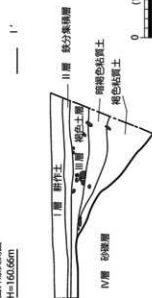
東外濠洲区  
B  
H=160.66m



東外濠洲区  
K  
H=160.66m



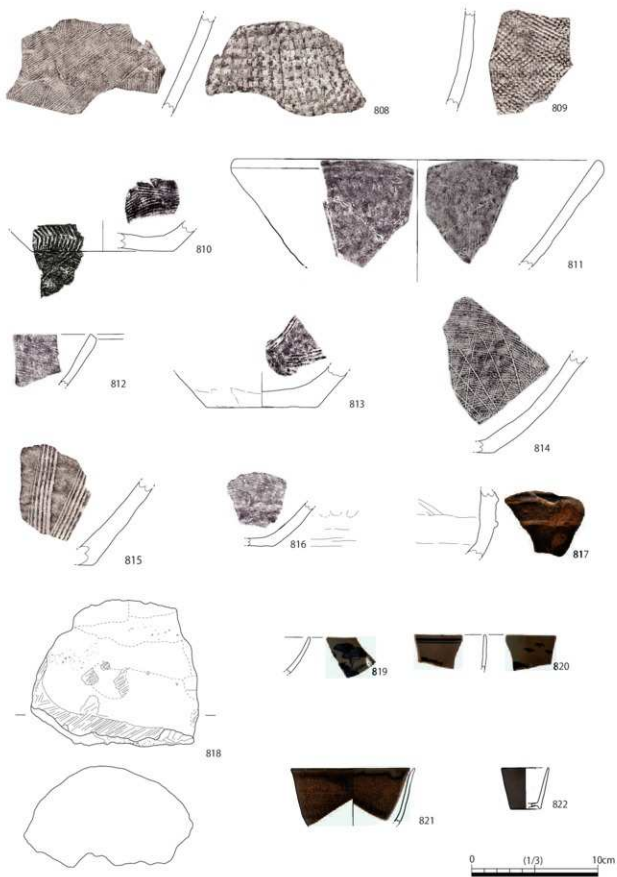
西外濠洲区  
I  
H=160.66m



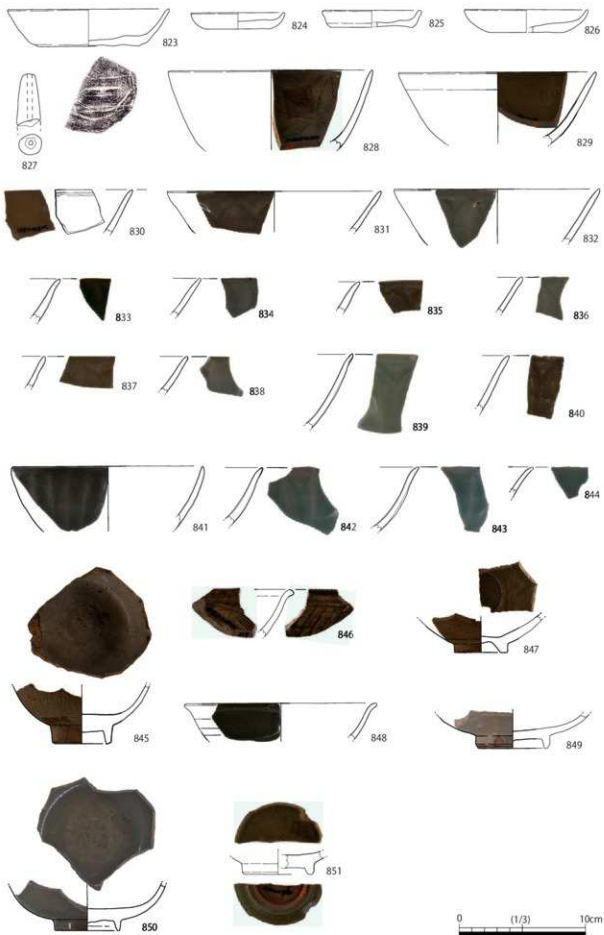
第 44 図 相良橋景観跡遺構配置圖及び土層断面図



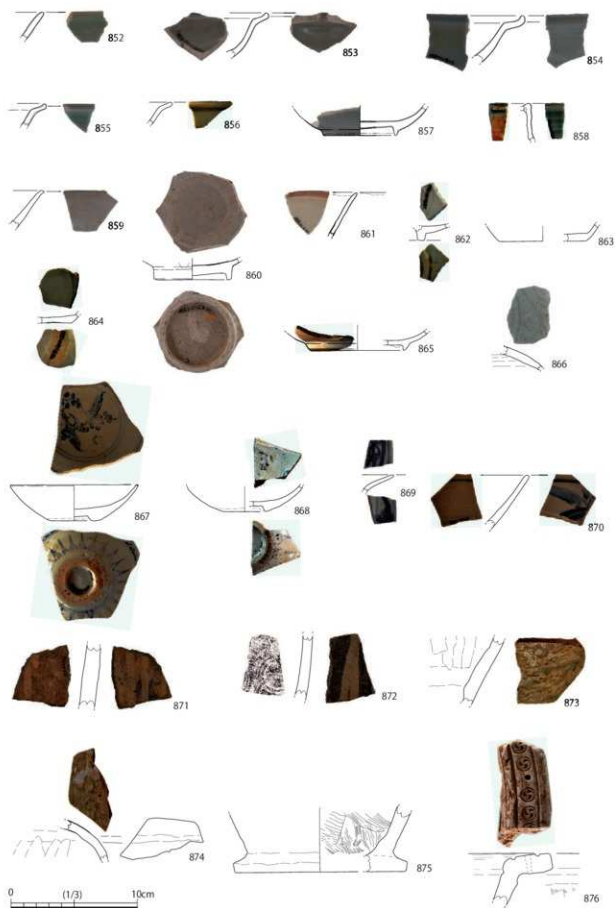
第 45 図 東外濠出土遺物 (1)



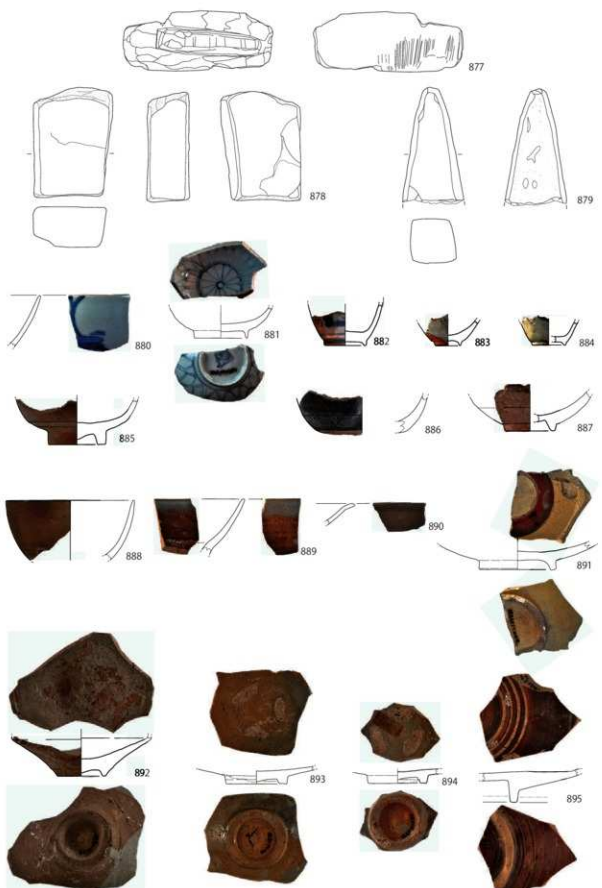
第46圖 東外濠出土遺物(2)



第 47 图 西外濠出土遺物 (1)

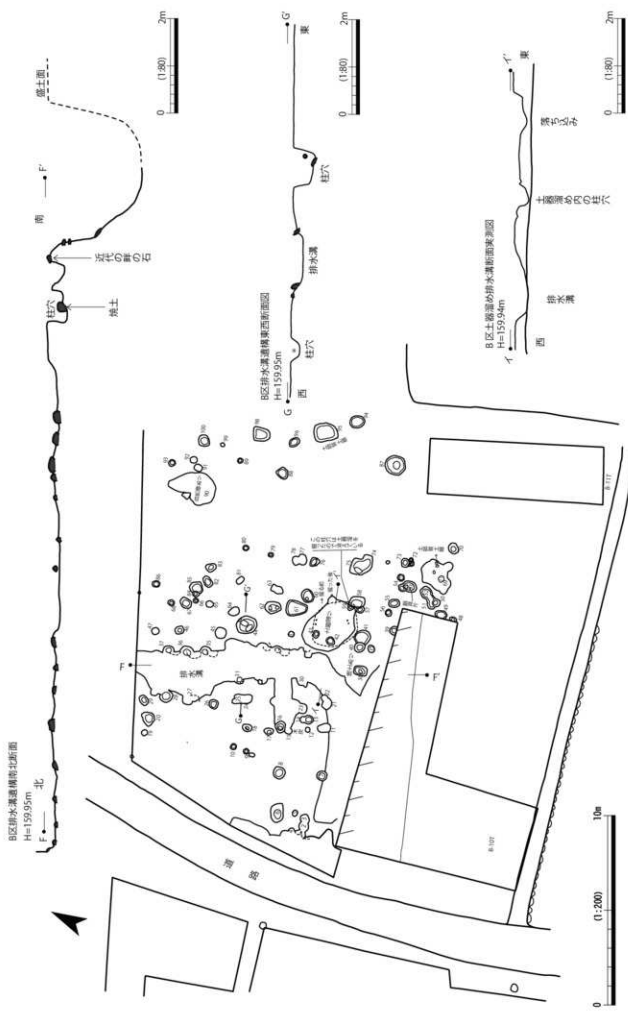


第48圖 西外濠出土遺物(2)

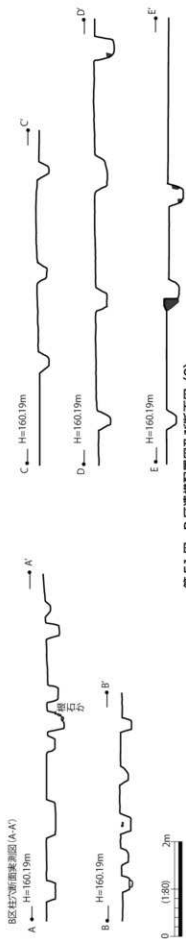
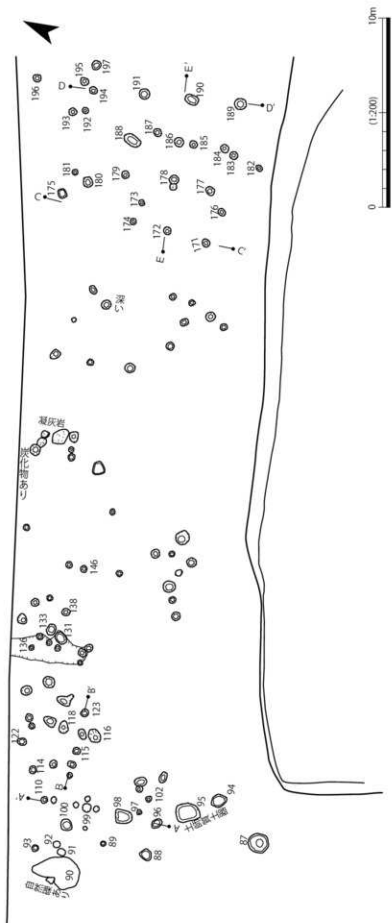


第 49 図 西外濠出土遺物 (3)

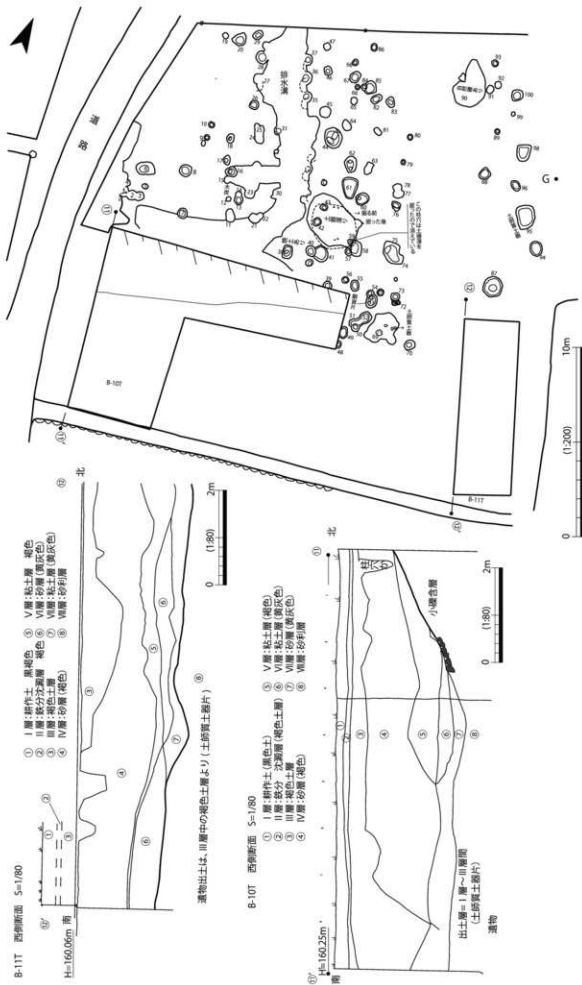




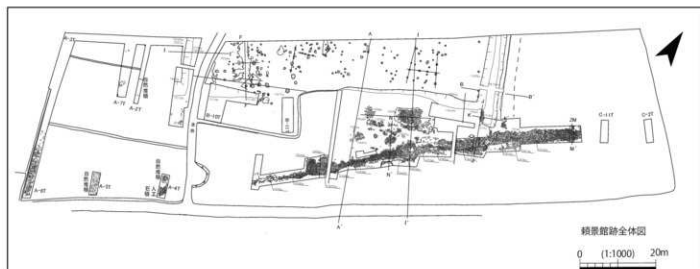
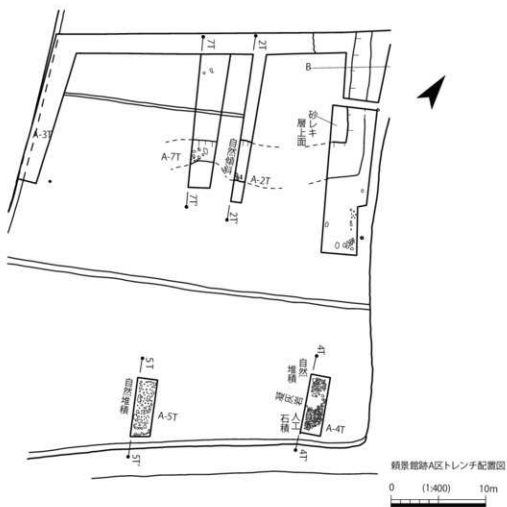
第50図 B区遺構配置図及び断面図(1)



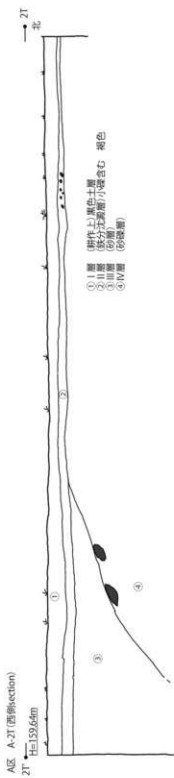
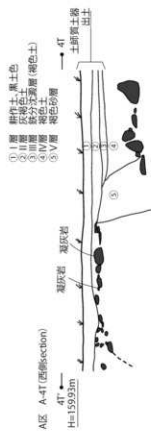
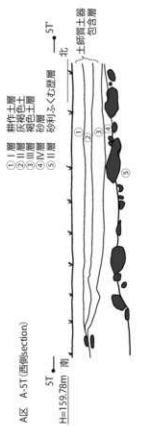
第51図 B区遺構配座図及び断面図(2)



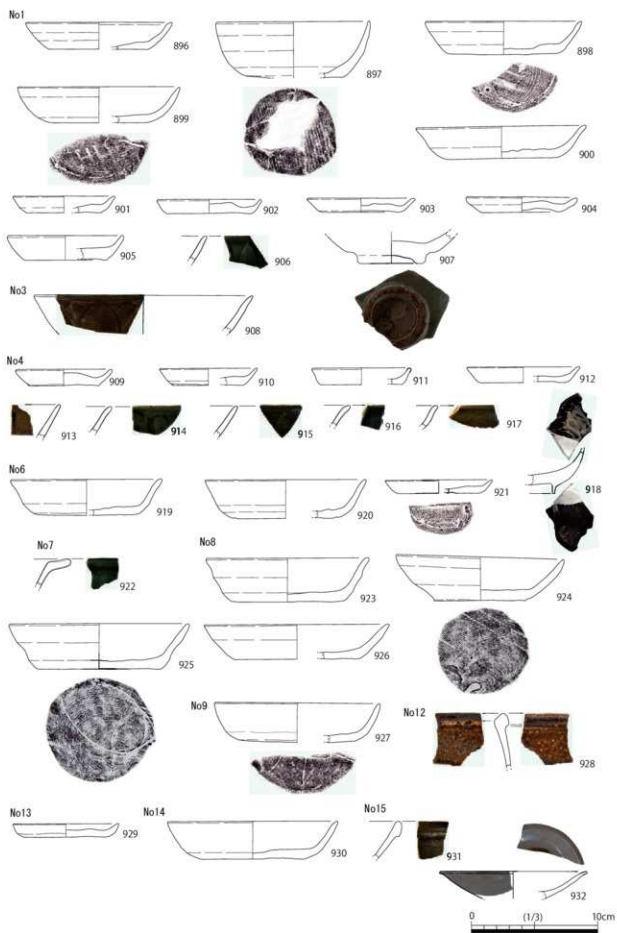
第52図 B区遺構配置図及び断面図(3)



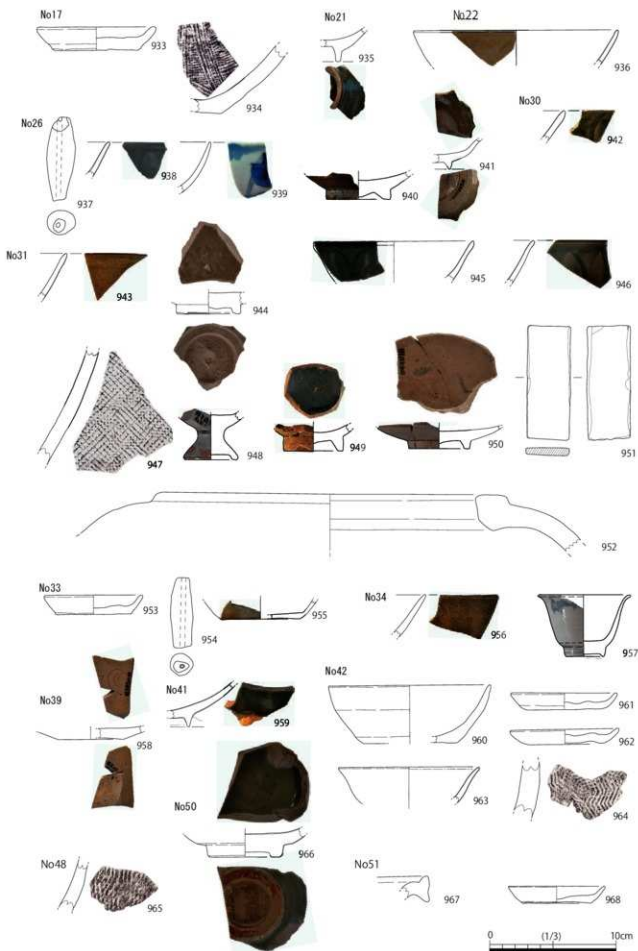
第53図 A区遺構配置図



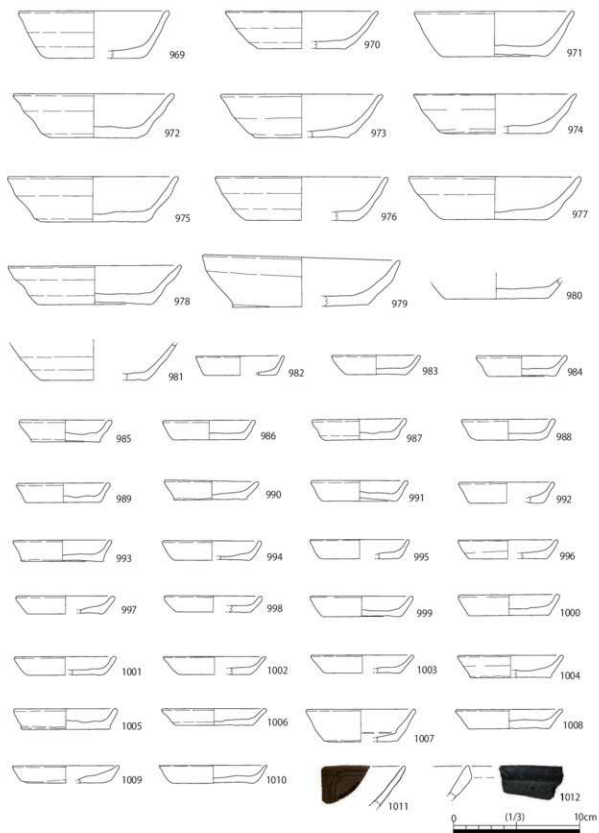
第 54 图 A 区断面图



第55图 柱穴出土遺物(1)

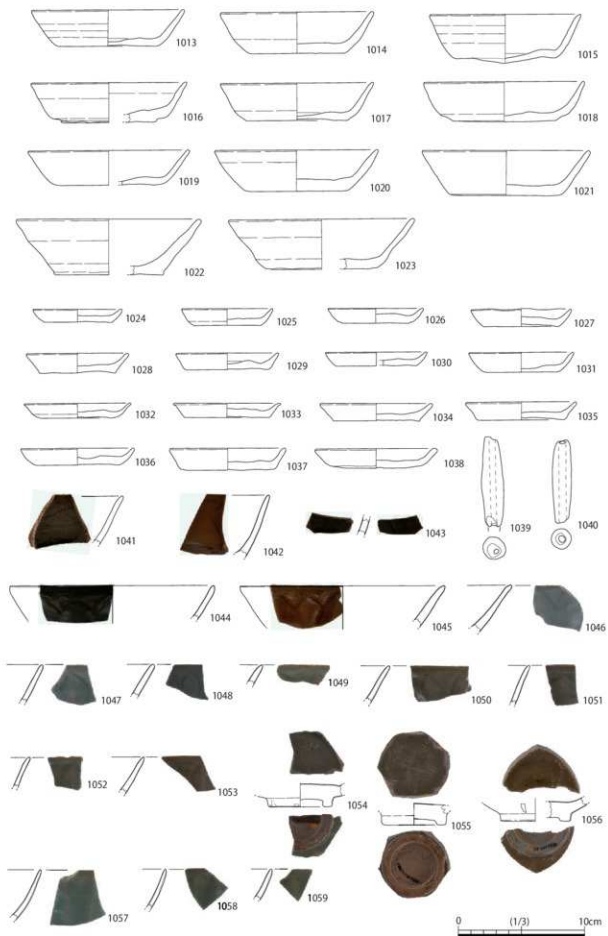


第 56 図 柱穴出土遺物 (2)

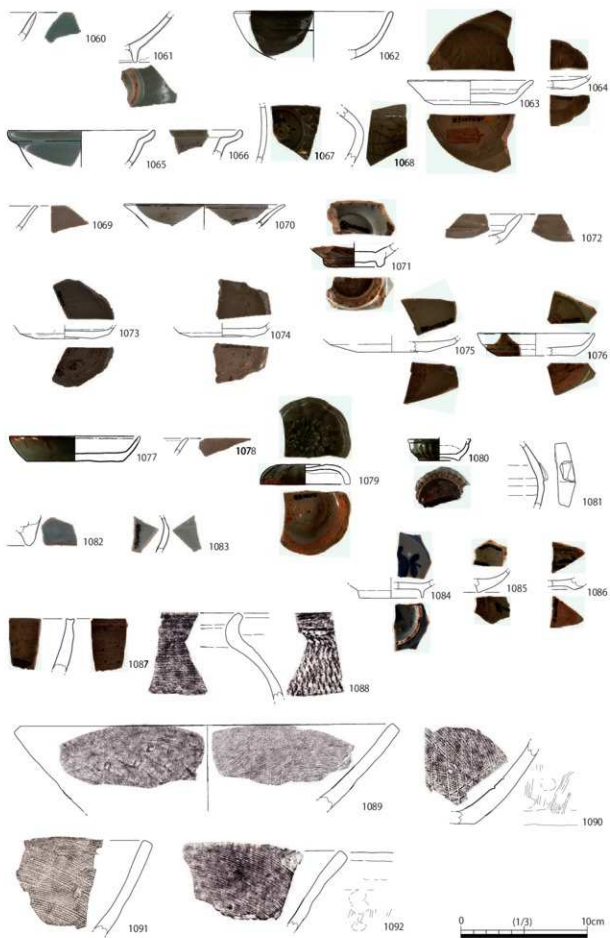


第 57 图 B 区土器溜出土遺物





第 58 图 B 区 III 层 (褐色土·盛土) 出土遗物 (1)

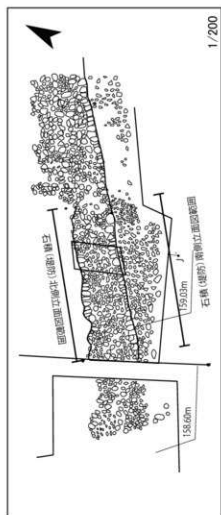


第59图 B区III层(褐色土·盛土)出土遗物(2)

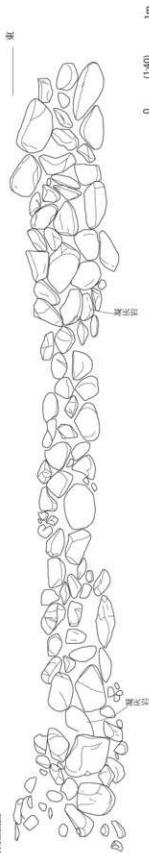


第60图 B区III层(褐色土·盛土)出土遗物(3)

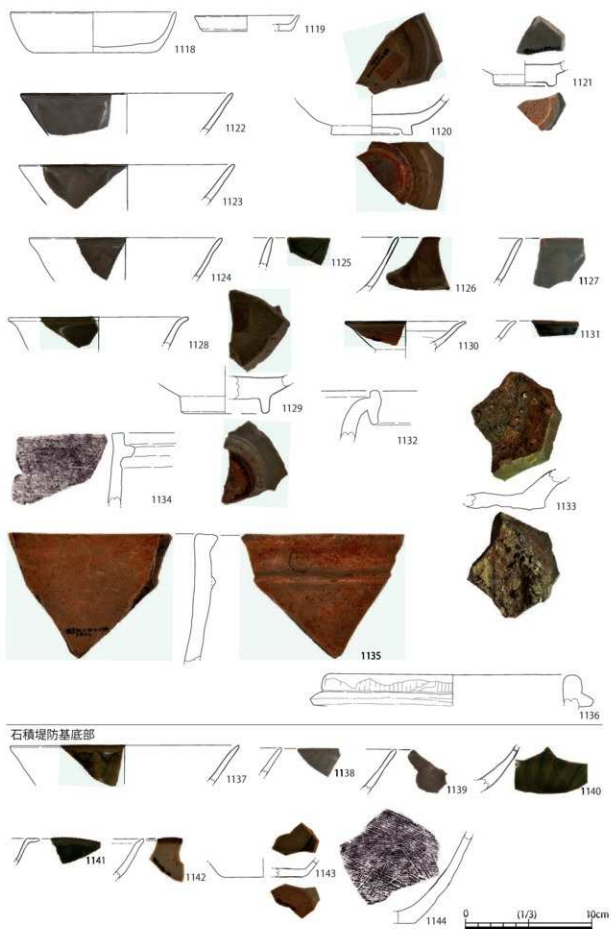




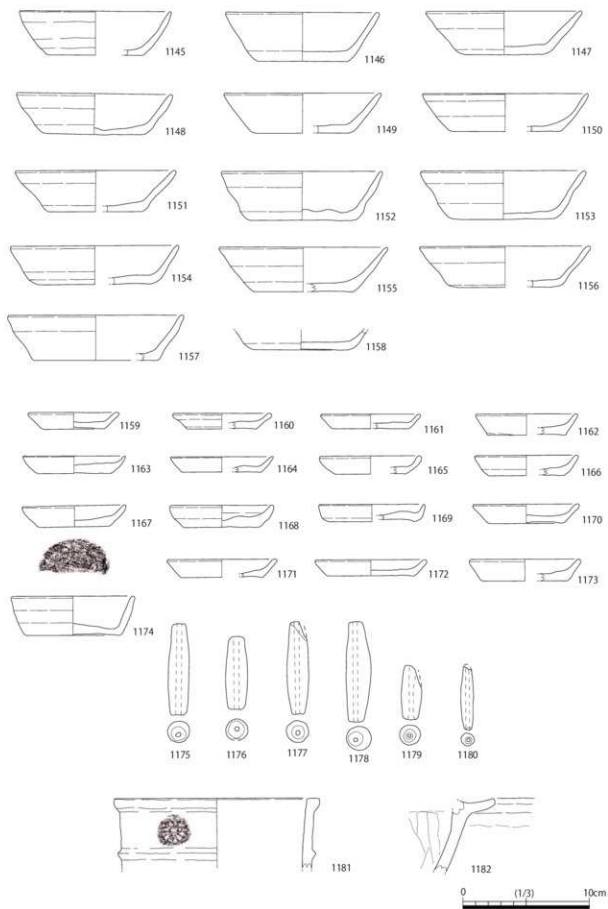
石構 (堤防) 南側立面圖  
西 H=159.42m



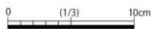
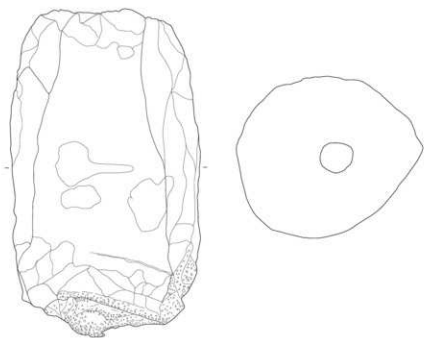
第 62 圖 石構 (堤防) 立面圖



第 63 図 広場出土遺物及び石積堤防基底部出土遺物

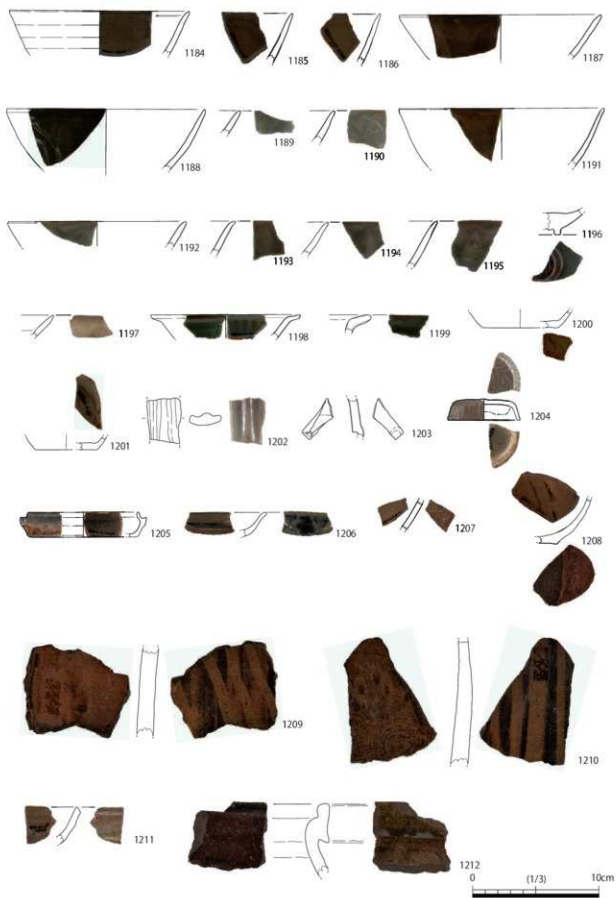


第 64 图 B 区出土遗物 (1)

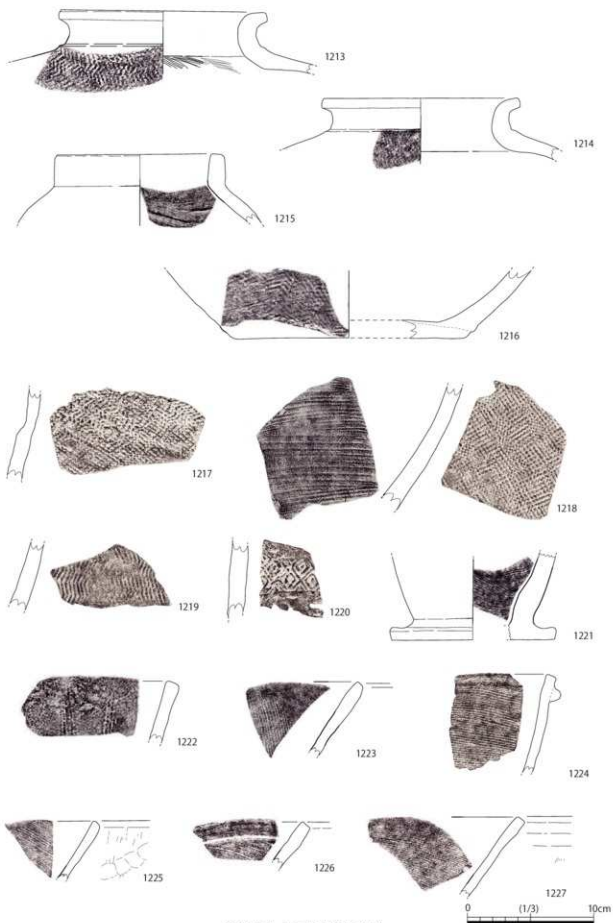


第 65 图 B 区出土遗物 (2)

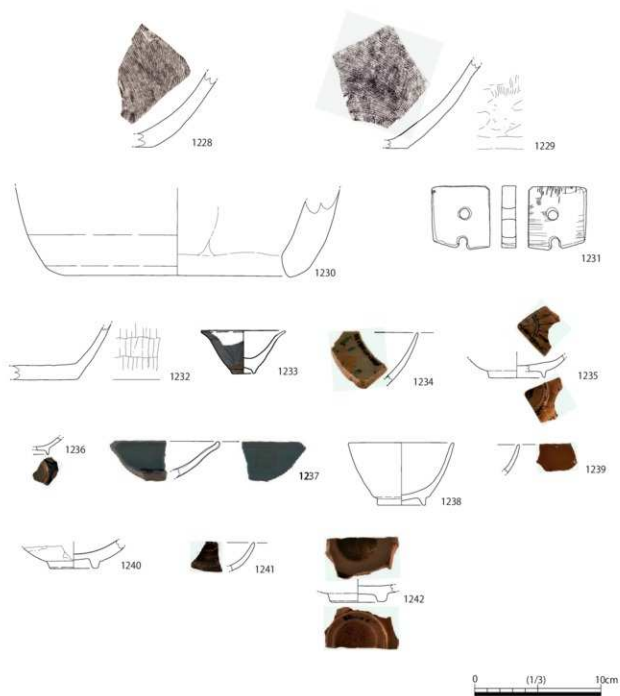




第66图 B区出土遗物(3)



第67图 B区出土遗物(4)

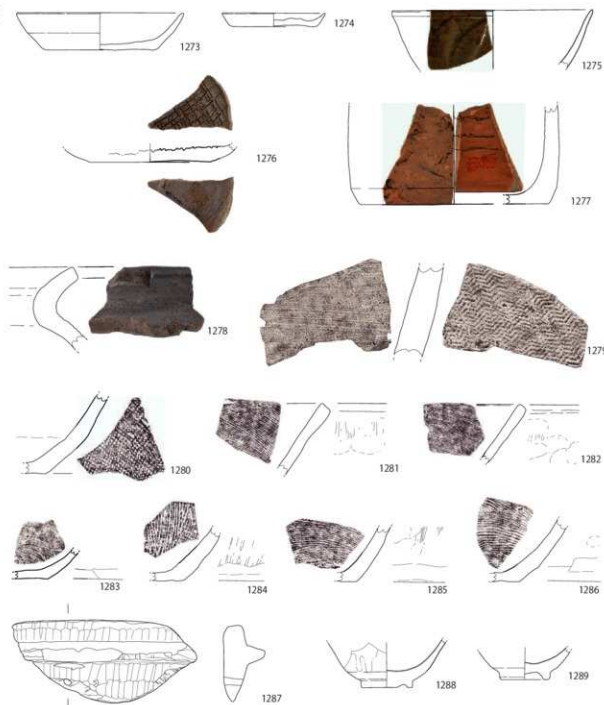


第 68 图 B 区出土遗物 (5)

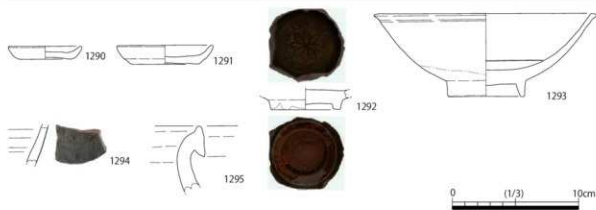


第69图 A区出土遗物

C区



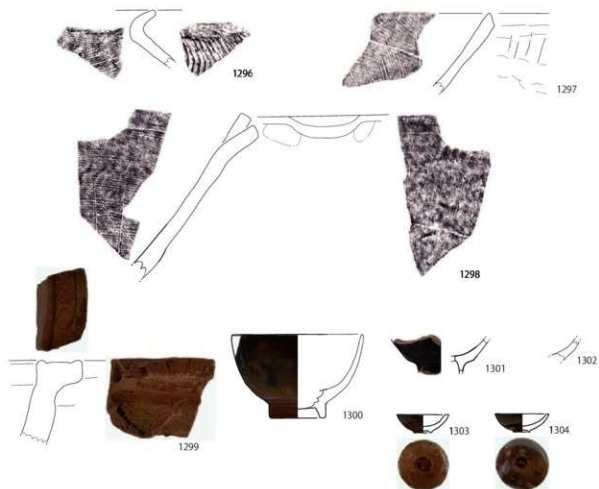
D区



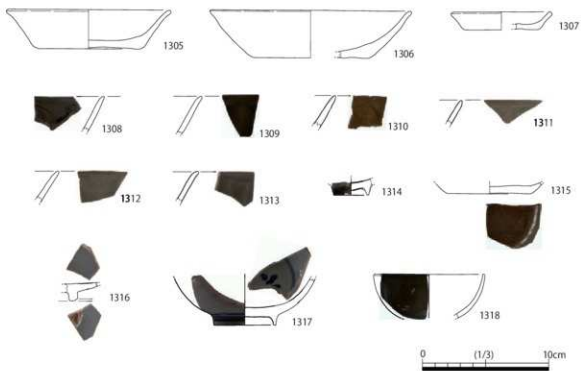
0 (1/3) 10cm

第70图 C·D区出土遗物

D区



注記不明



第 71 图 D区・注記不明遺物

## 第IV章 相良頼景館跡の調査

### 第1節 調査の方法 (第72図)

熊本県調査により相良頼景館跡は、東・西側は濠によって区画、南側は開放され球磨川に面し石積堤防が構築されていたことがわかっていく。

令和3～4年度にかけての相良頼景館跡の調査は、館跡北側の堀の有無の確認、遺跡の範囲確認、遺跡の変遷確認を目的とした。

令和3年度の調査では、北側土塁及び堀想定部分とが1本の断面で観察できるようにトレンチを設定した。土塁への影響を最小限にとどめるため、地権者により開削された箇所にトレンチを設けた。

地権者によれば土塁開削は、県調査後に行なったもので、北側土塁外側の水田にトラクターを通すために開削したとのことだった。その際、土塁の内側から重機を使用して開削したとすることで、発生土は開削部分の両側に振り分けたという。また、北側土塁の外側に積まれた石積も、昭和50年以降に地権者が積み上げたものであった。

多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会では、令和3年度のトレンチ調査結果をもとに、北側堀の走行方向の確認の必要性や、土塁と堀の堆積状況が連続して観察できる部分で、新旧関係を把握する必要があるとの意見が上がり、令和4年度の調査方針が検討された。その結果、令和4年度の調査は、東側土塁及び堀想定部分(東側トレンチ)、北西部の土塁が遺存しない部分(北西側トレンチ)、北側堀部分(北側トレンチ)にてトレンチ調査を行うことになった。東側トレンチでは土塁と堀の新旧関係の確認、北西側トレンチでは出入口の確認、北側トレンチでは北側堀の走行方向の確認を目的としている。

### 第2節 調査の成果

#### 1. 令和3年度の調査成果

##### (1) 北側土塁トレンチ (第73図)

土塁トレンチ掘削時に、整形石材が直角に立てかけるように確認された。地権者による土塁開削後の土留め材である。これらの石材の撤去後は、近世陶磁器が出土した。

北側土塁の構築面はD-18層上面である。D-18層上面は、僅かながらグライ化した水性堆積層を部分的に確認し、これをD-17層とした。その上に土塁構成土であるD-14～16により土塁は造成されている。土塁構成土の土の流れは北側からである。土塁構成土の土質は、水性堆積物と地山層と礫が混ざった砂質土でありはさばどない。明確な層理があるわけではないが、土の流れ・包含する砂礫の大きさによって分層した。

D-11層は、砂利層である。D-5～7層は県調査

当時で確認されている石積に伴う覆土である。D-8～10層・12層は昭和50年～60年代の盛土である。D-13層は昭和50年代の石積に伴う裏込め土で、D-2・3層も昭和50年以降の盛土である。D-4層は、地権者による土塁開削時の発生土である。

地山であるD-24層(礫層)は北側土塁付近で最高位となり、そこから南北へ向けゆるやかに傾斜していくことから自然堤防と思われる。D-24層の直上に堆積しているのが水性堆積物であるD-23層である。

D-22層は、D-23層の風化土であり、粘性を帯びるとともに赤味を帯びる。その上に水性堆積物であるD-21層が堆積する。水性堆積層はともに無遺物層である。D-19・20層は、土師器の小片やカーボンを含んでおり、館跡内部の整地土と考えられる。

##### 【出土遺物】(第75図)

1319・1320はD-16層(土塁構成土)からの出土遺物である。1319は底部糸切り離しの土師器杯、1320は瓦質の鈔付き鉢で、内面にハケメ調整が残り、鈔に有孔がある。

1321～1327は土塁直下のD-18層(整地層)からの出土遺物である。1321は土師器杯、1322～1325は土師器小皿である。1326は龍泉窯系B0型の折縁大皿である。1327は中世須恵器の鉢である。

1328～1331はD-5.6.7層からの出土遺物である。1328・1329は常滑焼の甕。1330は染付碗、1331は肥前の広東碗。

1332～1335は表土からの出土遺物である。1332は湯飲碗である。1333は土師質の土鉢である。1334は龍泉窯系B型の青磁碗である。1335は一勝地の碗である。

##### (2) 北側堀跡トレンチ (第74図)

土塁と堀の新旧関係を確認したかったが、昭和50年以降の石積構築により削平されており、確認できなかった。今回のトレンチ調査は、県調査当時の土塁断面図(第43図A-A'断面)付近であり、当時の土塁断面図が参考になった。

表土から約40cm下で北側堀跡の南側の掘り方を確認した。掘り込み面は礫層上面(D-24層)である。北側堀跡の北側掘り方は表土から約100cm下で確認した。

H-1～19層は、近・現代の水田耕作に伴う堆積土である。H-9・10・11・13層が県調査ときに確認された溝である。H-14層は畦畔跡である。H-15～17層は旧耕作土、H-18・19層は鉄分沈殿の水田床

土層である。

土層断面から北堀は2時期あることを確認した。当初の北堀を北堀1、後の時期のものを北堀2とし、説明を加える。

北堀1は堀幅約6m、深さ約1.8m、堀底幅約0.5mの葉研堀である。北堀1覆土はH-21～30層である。北堀1の鏡層となるのがH-27層である。H-27層から青磁碗2点が出土した。H-27層は明褐色粘土層で、その上下層とは土質が明確に異なる。H-27層の上にはH-21～26層が堆積するが、これらは礫を伴う褐色シルトで人為的な埋戻し土である。H-27層下位のH-28～30層も礫を伴う褐色シルト層である。

北堀2は堀幅約3.2m、深さ約1.3mの葉研堀である。北堀2の覆土がH-20層である。径5～50cmの礫を多量に含む、その空隙に褐色粘土が混じっている。人為的に礫によって埋め戻されていることがわかる。

#### 【出土遺物】(第75図)

1336・1337は北堀1のH-27層からの出土遺物である。1336は龍泉窯系B類の青磁碗の底部で、内底に印花文が残る。意図的に体部は打ち欠けられている。1337は龍泉窯系D1類の端反碗底部である。外底を輪状に軸を抜き取っている。1338～1340は北堀2覆土からの出土遺物で、土師器環である。1341～1344は耕作土・表土からの出土遺物である。1341は土師器小皿。1342は龍泉窯系B類の青磁碗である。1343は中世須恵器の割部片。1344は肥前の染付皿である。

## 2. 令和4年度の調査成果

### (1) 北側トレンチ (第76図)

北側堀の走行する予想地点にトレンチを設定した。

北堀南側の掘り方を表土から約50cm下で確認した。地山面礫層からの掘り込みである。令和3年度のトレンチ調査で北堀1・2が確認されたため、北側トレンチにおいても、その確認を行った。

確認できた北堀1の堀幅は約5.6mである。覆土は18・19層で粗礫を含む暗褐色シルトである。

北堀2は北堀1の北側にて確認した。堀幅は3.8mである。北側に人為的な礫の廃棄を確認した。覆土である16層は炭化物の散在層である。

#### 【出土遺物】(第78図)

1345～1349は北堀1からの出土遺物である。1345は土師器小皿。1346は土師器環で、底部に厚みをもつ。1347は常滑焼の甕である。1348・1349は中世須恵器で体部に山形タキ痕が残る。

1350～1353は北堀2からの出土遺物である。1350～1353は土師器環である。1354は北堀2覆土直上の水田床土からの出土遺物で、白磁C1群の皿である。

1355は瓦質の釜である。

### (2) 北西側トレンチ (第77図)

表土(1・2・3層)を除去したところで、トレンチ中央に浅い掘り方を確認し、これをS-1とした。浅い溝と思われる。幅は2.1m、深さは0.3mである。覆土下位に礫が敷かれるように検出した。

トレンチ北側にて石積を検出した。これをS-2とした。S-2は北側が面で、石積前面の堆積層は人為的に埋め戻されている。7層がS-2の裏込め土となる。

水性堆積層である9層上面にて遺構掘り方を確認した。これをS-3とした。S-3覆土(8層)は北堀1覆土に似る。

#### 【出土遺物】(第78図)

1356は8層からの出土遺物で、土師器環である。1357は9層上面にて出土した常滑焼の甕である。1358～1361は石積前面の6層からの出土遺物である。1358は肥前の筒型碗、1359は肥前系の小杯、1360は近代の瀬戸の環である。1361は肥前の蛸唐草文の皿である。1362は肥前の蛇の目軸剥ぎの皿である。1363は陶器の甕である。

### (3) 東側トレンチ (第77図)

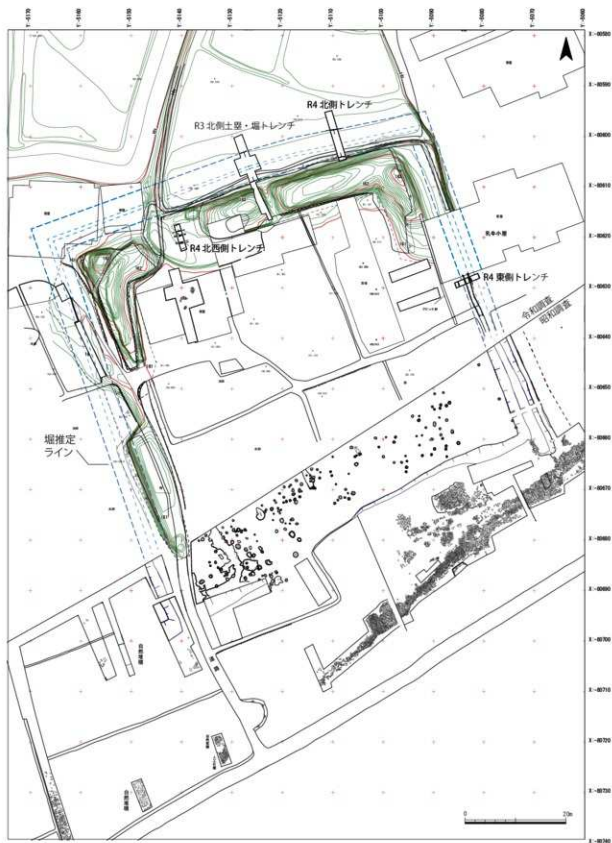
1層表土の直下に硬化層(2層)を確認した。2層は現建築物に伴う硬化層である。6層の水性堆積層(砂層)上面にて東側堀跡の掘り方を確認した。堀の覆土(5層)は黒褐色シルトで粘性を帯びる。

東堀覆土内に近代の暗渠排水路の掘り方を確認した。

#### 【出土遺物】(第78図)

1364は近代暗渠掘り方から出土した土師器の鉢である。1365は表探品で中世須恵器の割部片である。





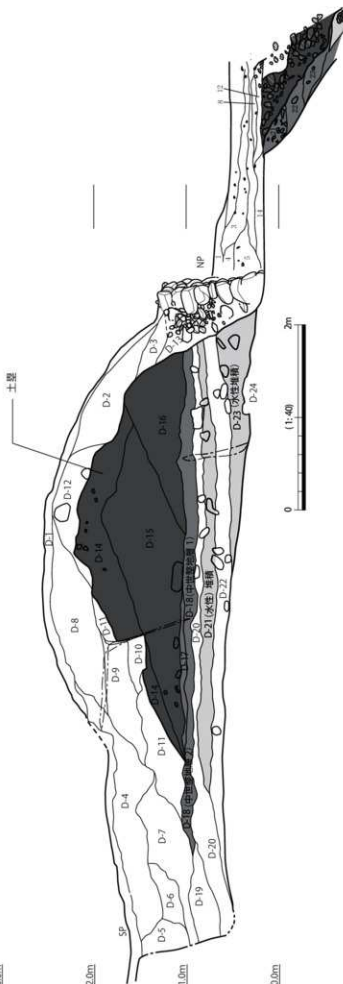
第 72 図 相良頼景館跡地形図及びトレンチ配置図

H=163.0m

H=162.0m

H=161.0m

H=160.0m



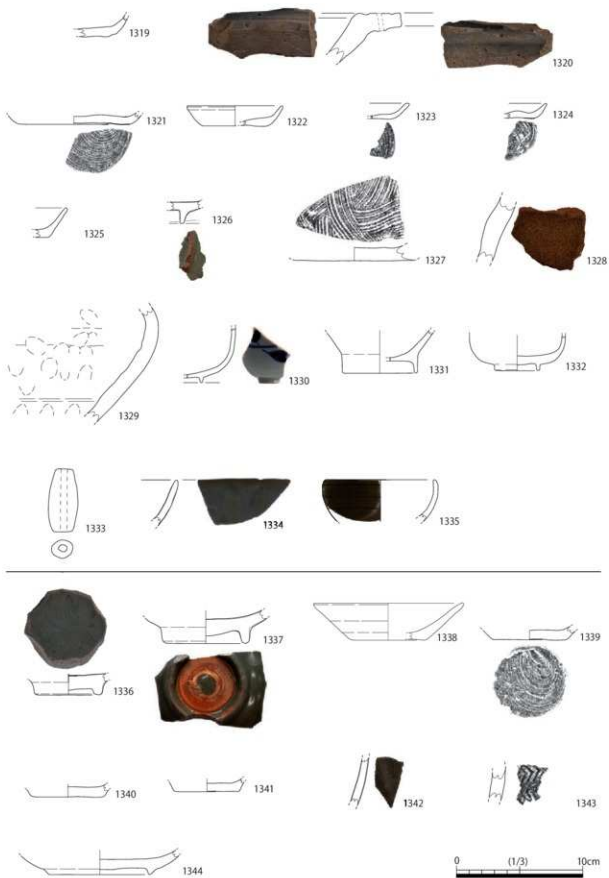
相模原駅前 北側土層トレンチ

- D-1 赤土 10YR4/6 褐色シルト しまりなし 径2～10cmの礫を少量含む
- D-2 盛土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 径2～10cmの礫を中量含む
- D-3 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト ややしきりあり 径2～10cmの礫を少量含む
- D-4 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 径1～2cmの中礫を少量、径2～5cmの中礫を少量含む
- D-5 石積構造 径5～15cmの中礫の層、土は含まず
- D-6 石積構造 7.5YR4/6 褐色シルトを基本とし、細砂と粗砂を少量含む しまりなし
- D-7 硬泥じり 7.5YR4/6 褐色シルト ややしきりあり 径3～30cmの礫を少量含む
- D-8 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 細礫を少量、径3～10cmの礫を中量含む
- D-9 赤土 7.5YR4/4 褐色シルト しまりなし 中礫を中量含む D-8層よりも色調濃い
- D-10 赤土 7.5YR3/4 褐色シルト しまりなし やや粘性あり 中砂を少量含む
- D-11 硬礫 細礫～粗石による硬礫 シルトは含まない
- D-12 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 細礫を少量に含む、径3～10cmの礫を中量含む
- D-13 石積構造 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし、径3～10cmの礫を少量含む
- D-14 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト ややしきりあり 粗砂を少量に含む 中礫～粗礫を少量含む
- D-15 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト ややしきりあり 粗砂を中量に含む D-14層よりも中礫は少ない

- D-16 赤土 7.5YR4/6 褐色シルト ややしきりあり 粗砂を中量に含む 径1～5cm (中礫～粗礫) を少量含む
- D-17 質地層① 質地層② 質地層③ 質地層④ 質地層⑤ (科学分析層層)
- 土層下位層 カーボンが少量含む 鉄分を斑状に混じりグライ化している
- D-18 質地層① 質地層② 質地層③ (科学分析層層)
- 土層下位層 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり カーボン・腐土粒・土層細片を中量含む
- D-19 質地層① 7.5YR4/4 褐色シルト しまりあり やや粘性あり カーボン・腐土粒を少量含む
- D-20 土層下位層 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり カーボンを少量含む 全体的にD-21層が混じっている
- D-21 水性堆積 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし やや粘性あり 堆積構造が確認できないため短期間による水性堆積物
- D-22 粘土層 7.5YR4/4 少し赤味がある褐色シルト しまりなし やや粘性あり 粗砂を中量、径10～20cmの礫を少量含む
- D-23 水性堆積 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし やや粘性あり 堆積構造が確認できないため短期間による水性堆積物
- D-24 地山礫層 細礫を基本とするが細砂～粗礫を少量に含む硬礫

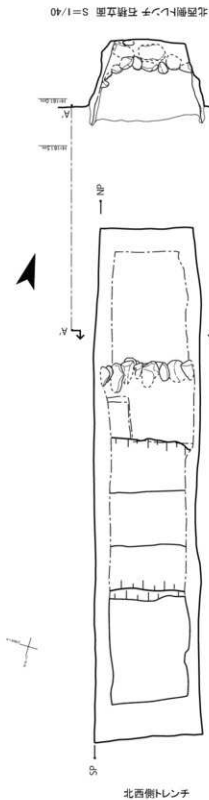
第73図 令和3年度調査 北側土層断面図





第 75 図 令和 3 年度調査時の出土遺物

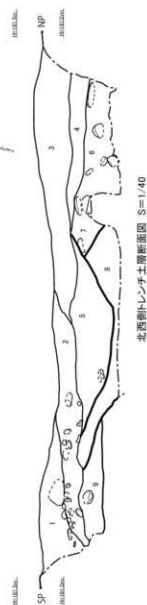




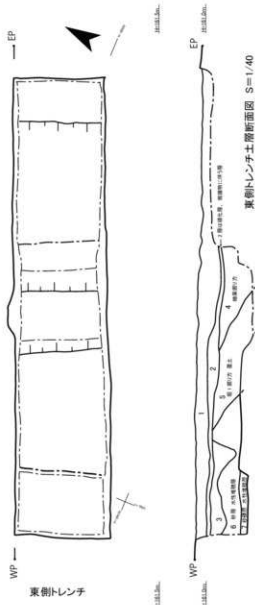
相良積層部跡 北西側トレンチ(令和4年度)

層相 特徴 注記 (土色・土質 (粘土、シルト、砂)・しまり・包埋物・特徴)

- 1 表土 10YR3/2 黒褐色シルト しまりなし  
やや粘性あり カーボンを少量含む
- 2 10YR4/2 暗灰褐色シルトを基調とした堆積  
粘性なし 径3~30cmの礫を多量に含む しまりなし
- 3 10YR4/3 オリーブ褐色シルト しまりなし 粘性なし 相壁を多量に含む
- 4 10YR4/2 暗灰褐色シルト しまりなし 粘性なし 相壁を中量に含む
- 5 10YR4/2 暗灰褐色シルト しまりなし 粘性なし 相壁を多量に含む
- 6 遺構層土 10YR3/2 黒褐色シルト しまりなし やや粘性あり  
径1~20cmの礫を多量に含む 相壁を少量に含む
- 7 石垣遺構土 10YR4/2 暗灰褐色シルト 固くしまる  
やや粘性なし 径3~20cmの礫を少量に含む
- 8 中世遺構層土 10YR4/3 に近い黄褐色シルト ややしまりあり  
やや粘性あり カーボンを少量含む
- 9 水産層土 10YR4/3 に近い黄褐色シルト しまりなし 粘性なし



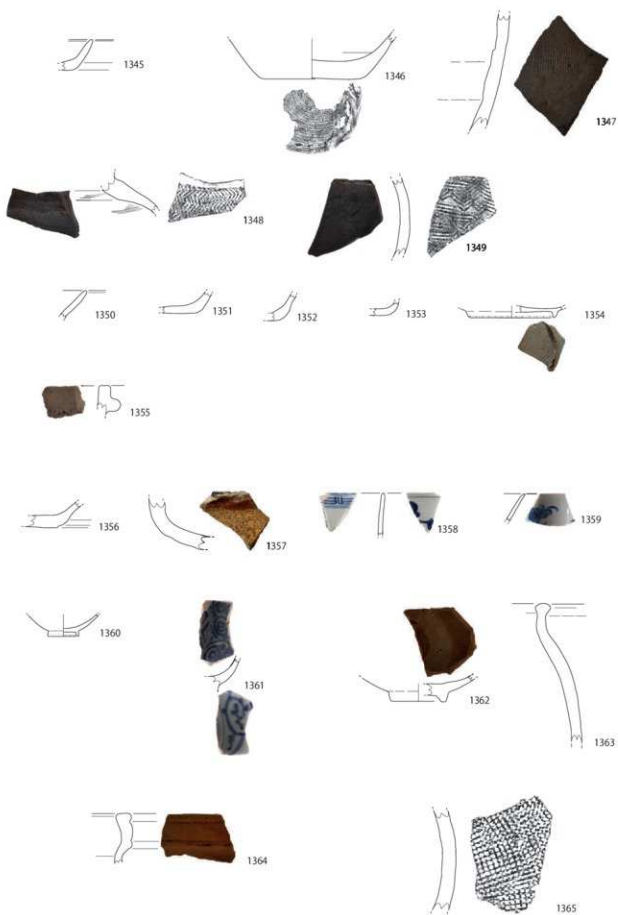
北西側トレンチ土層断面図 S=1/40



相良積層部跡 東側トレンチ (令和4年度)

- 1 表土 10YR3/2 暗褐色シルト しまりなし  
やや粘性あり 径10cmの礫をわずかに含む
- 2 硬化面 10YR4/4 褐色シルト 固くしまる やや粘性あり
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまりなし やや粘性あり  
カーボンを少量含む 褐色ブロックを少量含む
- 4 暗黒板方層土 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまりあり  
やや粘性あり カーボンを少量含む 径3cmの礫を多量含む
- 5 遺構土 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまりあり  
やや粘性あり カーボンを少量含む
- 6 水産層土 10YR4/3 に近い黄褐色シルト しまりなし 粘性なし
- 7 水産層土 2.5YR4/3 オリーブ褐色シルト しまりなし  
粘性なし 相壁を多く含む

第77図 令和4年度調査 北西側トレンチ・東側トレンチ



第 78 図 令和 4 年度調査時の出土遺物

## 第V章 青蓮寺境内の調査

### 第1節 遺跡の概要

#### 1. 遺跡の概要

青蓮寺は多良木町大字黒肥地字北山下に所在する真言宗智山派の寺院であり、その境内に青蓮寺阿弥陀堂がある。青蓮寺阿弥陀堂は、大正2年4月14日（内務省告示第24号）にて、特別保護建造物の指定を受け、その後、昭和32年6月18日（文化財保護委員会告示第32号）付けて、棟札2枚が附指定となっている。また、阿弥陀堂内に安置されている木造阿弥陀如来及両脇侍立像は大正元年9月3日に重要文化財指定を受けている。

『歴代嗣誠独集覽』『南藤曼錦録』『求麻外史』には、青蓮寺は鎮西相良氏の祖である相良頼景の後室とされる青蓮尼の位牌所として、永仁6年（1298）に多良木家の相良頼宗によって草創されたと伝えられる。また、青蓮寺が草創される3年前の永仁3年（1295）に多良木家の相良頼宗が相良頼景の廟を建て、阿弥陀三尊を祀ったとの記載がある。堂内に安置された阿弥陀三尊像の両脇侍の足の柄には永仁3年（1295）の銘があり、これを証とする。阿弥陀三尊は院派仏師である法印院玄の作である。

青蓮寺境内地には、阿弥陀堂の北側斜面に県指定史跡である「青蓮寺古塔碑群」が所在する。



（昭和30年代宮元尚氏撮影）

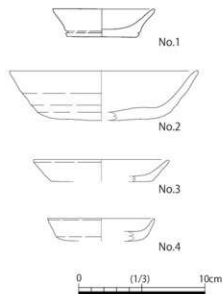
#### 2. 青蓮寺阿弥陀堂の履歴（建築学的見地での履歴表）

平成6年度から平成8年度にかけて、青蓮寺阿弥陀堂の解体修理が実施された。その際の調査結果を次に記す。

天文11年修理時の棟札裏面には、「嘉吉3年」「天文11年」と、ともに「再興」との記述が認められている。建築学的見地から、現在の阿弥陀堂の建立年代としては、嘉吉3年（1443）が妥当であると考えられている。しかし、『歴代嗣誠独集覽』に記載ある阿弥陀三尊を祀る廟の痕跡として、須弥壇の部材に転用部材である正面と東面の上櫃・中櫃、上段の東、格状間板と首連子板が転用されている。これらは鎌倉時代後期の様式である。ま

た、寺に保管されてあった須弥壇高欄の通幅も、その様式から、鎌倉時代後期のものと解釈されている。建築学的見地からの青蓮寺阿弥陀堂の変遷過程は、第4表の通りである。

この解体修理時の基礎工事根切りに伴い確認調査が行われ、土師器が出土している。修理報告書では、土師器の坏1点、小皿3点が掲載されている。今回、報告書をもとに再編集し、参考資料として次に掲載する。



青蓮寺出土土器

Na	口径	底径	器高	色調	底部
Na 1	7.8cm	4.8cm	1.8cm	淡茶褐色	系切
Na 2	12.8cm	7.0cm	3.8cm	淡茶褐色	系切
Na 3	9.5cm	6.8cm	1.4cm	淡茶褐色	系切
Na 4	7.1cm	5.5cm	1.5cm	淡茶褐色	系切

#### 【参考文献】

宗教法人青蓮寺 文化財建造物保存技術協会編 1996『重要文化財青蓮寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』

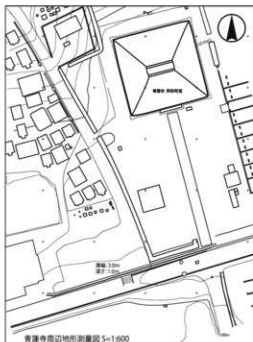
#### 3. 平成25年度下水道再設置時の調査

平成25年7月11日、下水道工事に伴い立会している。県道44号線（人吉水上線）に埋設された下水道管の更新工事である。包含層などへの影響は無かった。本工事の掘削に伴い、土層の状況を確認した。その結果、青蓮寺阿弥陀堂の中軸線（参道）から西側へ15.5mのところを南北方向に走る溝を表土から約80cm下で確認した。溝幅は約2m、深さ1mである。

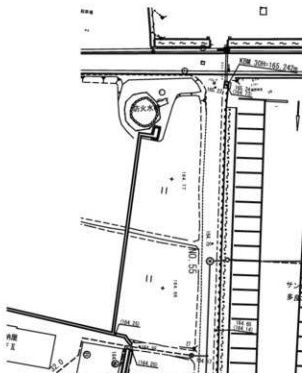
#### 4. 平成27年度下水道設置工事時の調査

平成27年9月8日、マンホール設置に伴い立会している。現在の道路から約70cm下に旧路面を確認した。旧路面は暗褐色シルトで、硬くしまっている。





平成25年度下水道再設置時の調査



平成27年度下水道設置工事時の調査

## 5. 平成28年度の青蓮寺阿弥陀堂保存修理事業に伴う確認調査

平成28年8月1日付け28青蓮寺第6号にて法93条の埋蔵文化財の届出があった。耐震・耐風対策のため、アンカーウェイトの増設部分にて確認調査を行った。

確認した基本層序は次のとおりである。

### 【基本層序】

- I層：表土
- II-1層：黒色シルト Hue7.5YR2/1 5mmの石礫を少量含む 粘性あり しまりややあり
- II-2層：黒色シルト Hue7.5YR2/1 粘性あり しまりややあり
- II-3層：黒褐色シルト Hue7.5YR2/2 1cm～2cmのアカホヤブロックを少量含む 粘性あり しまりややあり
- III層：アカホヤ 黄褐色シルト Hue10YR5/8 2cm大の黒いブロックを少量含む 粘性あり しまりややあり
- IV層：黒褐色シルト Hue10YR2/2 1mm大のアカホヤ粒子を極少量含む 粘性ややあり しまりややあり
- V層：黒褐色シルト Hue10YR3/2 1cm大の黒いブロックを少量含む 粘性ややあり しまりややあり
- VI層：シラスの二次堆積 ぶい黄澄シルト Hue10YR5/4 5mm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりややあり

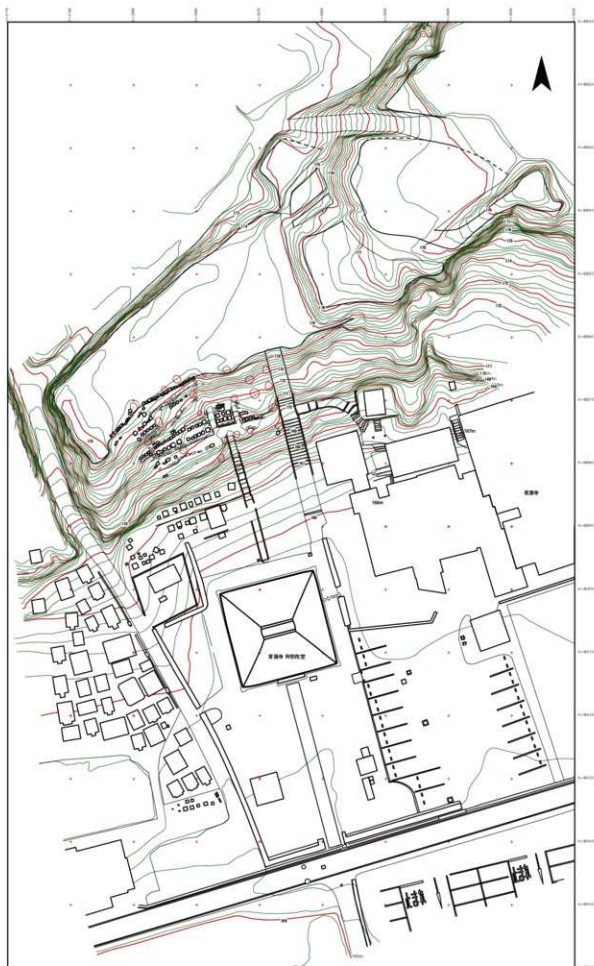
VII層：シラスの二次堆積 ぶい黄澄シルト

Hue10YR6/4 1cm～2cm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりややあり

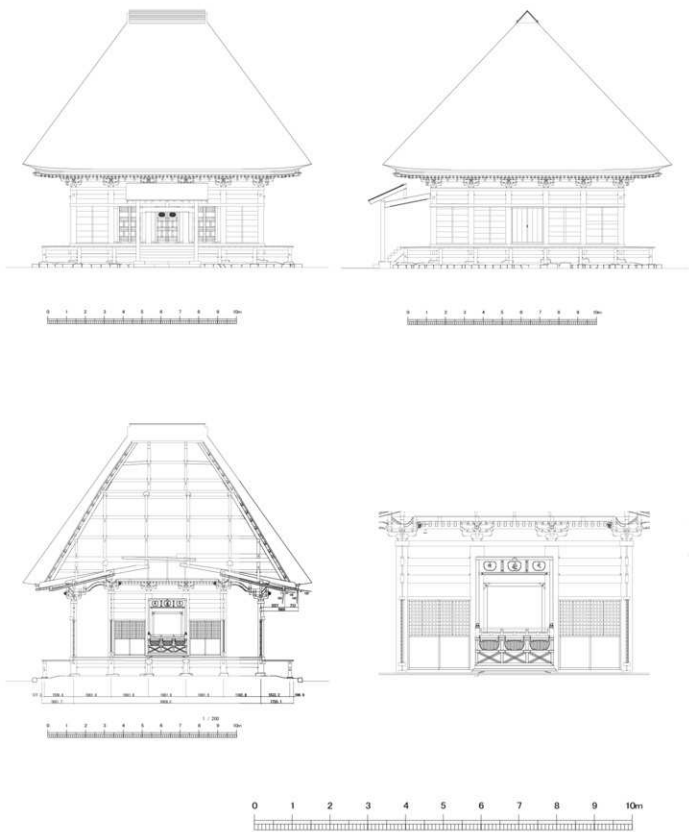
VIII層：河川の二次堆積 ぶい黄澄シルト

Hue10YR6/4 1cm～5cm大の礫を多く含む 粘性ややあり しまりややあり

アンカーウェイト設置場所(A)では、III層(アカホヤ層)上面からビット1基を確認した。遺物の出土は無かった。ビット覆土はII-3層である。アンカーウェイト設置場所(B)では、III層(アカホヤ層)上面からビット1基を確認した。遺物の出土は無かった。このビット覆土はII-3層である。アンカーウェイト設置場所(C)では、III層(アカホヤ層)上面からビット1基を確認した。遺物の出土は無かった。アンカーウェイト設置場所(D)では、遺構・遺物ともに無かった。



第 79 図 青蓮寺境内地形図

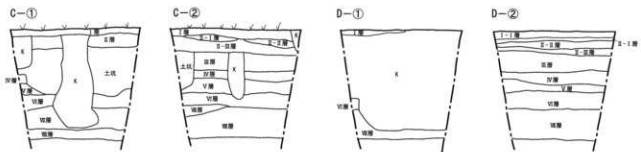
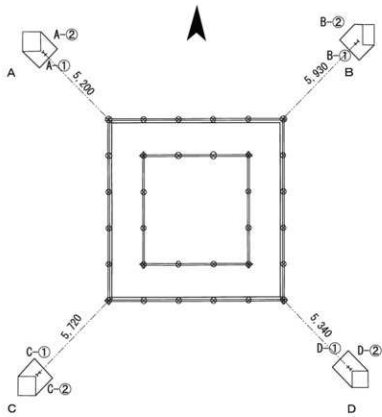
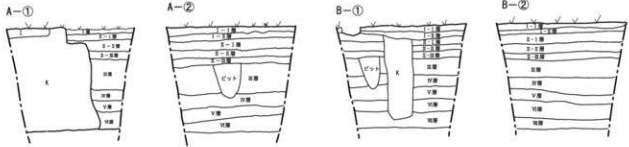


第 80 图 青蓮寺阿彌陀堂立面圖





0 (1:40) 1m



第 81 図 アンカーウエイト掘削時の土層図

0 (1:40) 1m

## 第2節 青蓮寺古塔群の調査

### 1. 石造物の調査 (第82図・第5表)

青蓮寺古塔群は、熊本県の史跡指定(昭和44年3月20日)を受けている。青蓮寺古塔群は『多良木町史(昭和55年刊行)』編纂時に、町史編纂委員会による悉皆調査が行われている。今回、『多良木町史』を基礎資料とし、再度、石造物の個別調査を作成した。

古塔群の中心には壇上積基壇が配置され、その周囲に石造物が並ぶ。壇上積基壇の上には五輪塔が7基配置されている。昭和37年に熊本県警察本部警務部教養課が編集・発行した『管内実地調査書一城南篇一』には「八基の五輪塔が一区画をなし・・・後列右側の一基に蓮寂の二字が深く刻まれ、上相良初代頼景の墓標であることが認められる。八基は頼景より頼氏・頼宗・経頼・頼仲・頼久・頼順の墓標が認められる」との記載がある。このことから、7基の五輪塔は多良木家歴代の当主のものとして伝えられていたことがわかる。

五輪塔の規模・形態・梵字の様子から見て、鎌倉後期まで遡ると思われるのは伝頼景塔である。空風輪は後補である。火輪・水輪・地輪には基準線を縦に刻み、面に対し梵字を薬研に大きく刻んでいる。火輪の軒は強く反る。

壇上積基壇に近い西側に、永留長統・為統らの五輪塔が並び、それらの西側に戦国期～江戸初期の相良氏当主などの五輪塔が配置されている。

### 2. 壇上積基壇の調査

阿弥陀堂裏の南向き傾斜面に段造成を行い、そこに壇上積基壇が設置されている。阿弥陀堂の中軸線上に配置され、堂裏側から石段を登った正面である。石段はその構成石材に残る矢穴から江戸期の整備と考えられる。

昭和16年に刊行された『球磨郡誌』の掲載写真と、昭和30年代に宮元尚氏(元多良木町長)が撮影した写真、現在の状況を比較しても大きな変化はない。

今回の調査は、掘削を伴うものではないため、現状観察の結果を記載する。

基壇北面は完全に埋もれ、東・西面は半分埋もれている。基壇を構成する石材は、すべて加久藤溶結凝灰岩である。

地覆石・東石・羽目石はほぼ完存している。基壇は、東西3間で2.9m、南北3間で2.3mの規模である。地覆石は南面のみ露出している。南面で確認できる中央と左側の羽目石は、幅67cm、高さ59cm、厚さ12cmである。右側の羽目石は2石で、幅78cm、厚さ22cmで、規格が中央と左側と比べ異なる。基壇西面の羽目石は幅45cmである。羽目石の両側面には懸手構造はない。東石は隅と内部では仕口構造が異なる。南面の両隅の東石は、25.5cm角、長さは59cmである。羽目石との懸手は、

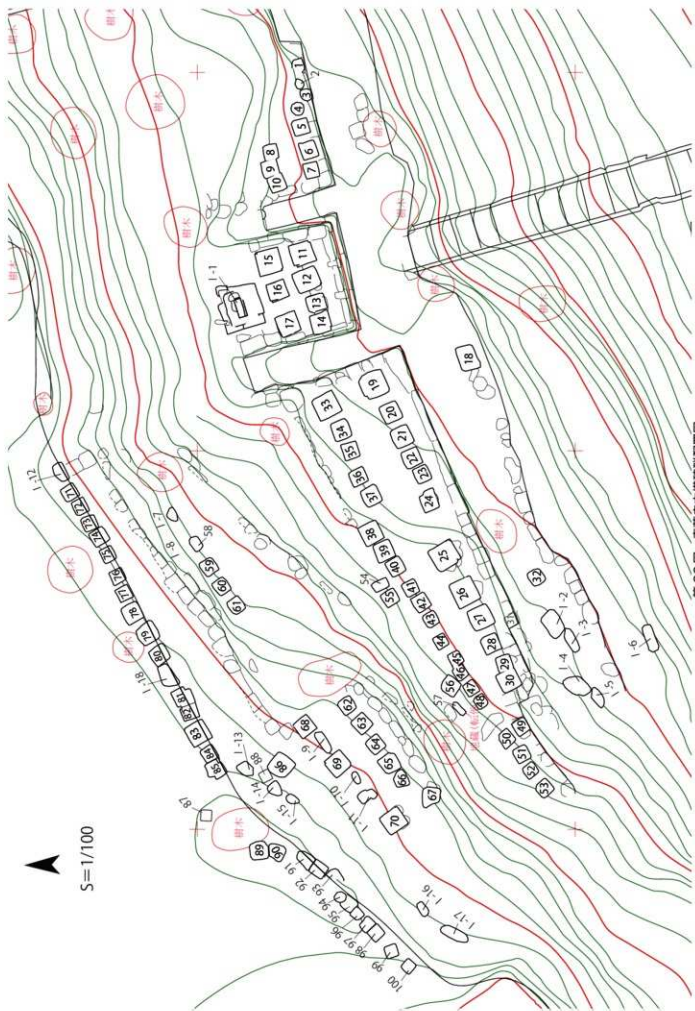
2段の段形となり、この段に羽目石が組まれる。兩末以外の東石は、断面が「T」字形で、正面幅25cm、高さ59cm、厚さ(奥行)33cmである。両側で羽目石が組まれる。葛石と思われるのは基壇上の南東部に遺残しているものと考えられる。敷石はなく、現在の五輪塔は玉石の上に設置されている。



(球磨郡誌より)

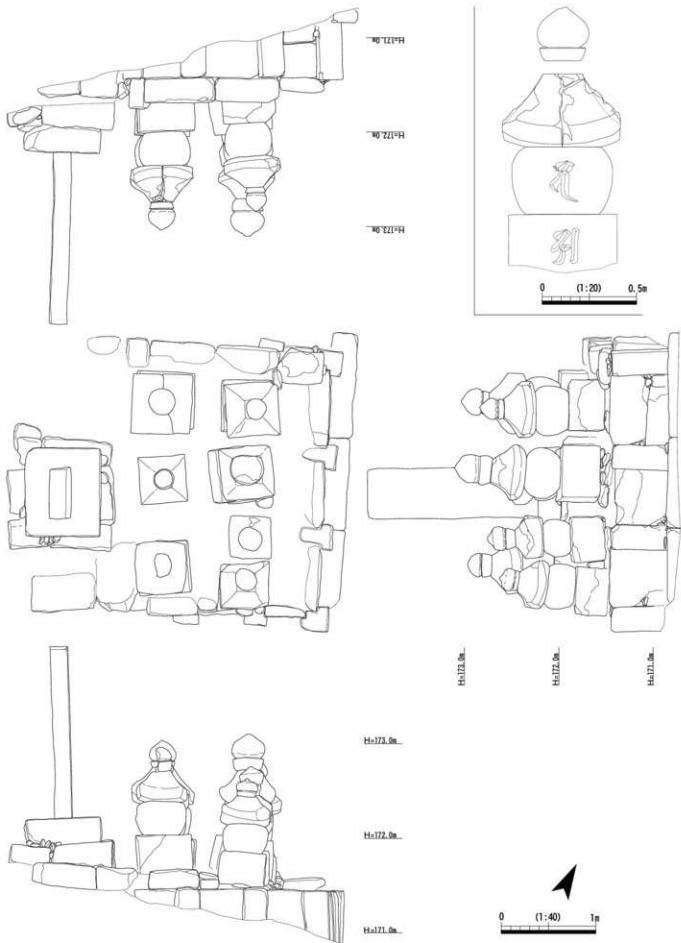


(昭和30年代 宮元尚氏撮影)



第 82 图 青蓮寺古塔碑群配置圖





第 83 图 壇上横基壇実測図及び願景塔実測図





No	年代等	地輪	水輪	火輪	空風輪	記年誌等		備考
						記年誌	部位	
58		○	○	○	○			総高77cm 地輪高20cm 幅36cm
59		○	○	○	○			総高80.5cm 地輪高21cm 幅36cm
60	永禄5年(1502)	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「敬白、奉造立法輪」□、逆書「報口」と三行に讀み、左に「奉造立」□、二行に讀む	総高101.5cm 地輪高28.5cm 幅35cm
61	永禄5年(1502)?	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「敬白、奉造立法輪」□、逆書「報口」と三行に讀み、左に「奉造立」□、水輪□と一行に讀む、梵文風の鳥来珠の彫刻が平切	総高98.5cm 地輪高25.5cm 幅33cm ※梵文の彫りからNo.67と同存月に造られたものと思われる地輪欠損有り
62		○	○	○	○			総高83.5cm 地輪高16cm 幅28cm ※空風輪の欠損大
63	室町時代と推定	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「敬白□□」の、銘名は摩訶止持説不可	総高84.4cm 地輪高15.5cm 幅39cm ※水輪、火輪が逆転
64	地輪 天正年代(1573～1590) 水輪 永禄12年(1569)	○	○	○	○		地輪正面中央に梵字(アール) 右に「香山林菩薩□□□□」左に「天正□□」水輪中央に梵字(アール) 右に「奉造立法輪□□□□」左に「永禄十二□□□□」右に「奉造立法輪□□□□」左に「奉造立法輪□□□□」	総高96cm 地輪高24.5cm 幅36cm
65		○	○	○	○			総高100cm 地輪高25cm 幅40cm 全体の欠損が大い
66		○	○	○	○			総高90cm 地輪高20cm 幅48cm 水欠損部大
67		○	○	○	○			総高113cm 地輪高34cm 幅48cm ※空輪欠
68		○	○	○	○			総高114cm 地輪高34cm 幅54cm ※水輪欠
69		○	○	○	○			総高94.5cm 地輪高29.5cm 幅36cm ※銅質は青蓮寺九代住職
70	文明14年(1482)	○	○	○	○		正面の右に「朝賢の團圓」 左に「文明十二二年四月九日」	総高91cm 地輪高29cm 幅38cm ※空風輪地輪欠損部大
72		○	○	○	○			総高112.5cm 地輪高28cm 幅34cm ※五輪筒には基礎を築える
73	応仁2年(1468)	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「フ□常香輪□□」 左に「應仁二初夜子三月□□」	総高88cm 地輪高25cm 幅40.5cm ※各輪欠損部大
74		○	○	○	○			総高83.5cm 地輪高19.5cm 幅35cm
75		○	○	○	○			総高80.5cm 地輪高18cm 幅36.5cm
76		○	○	○	○			総高80cm 地輪高26cm 幅37cm 水欠損は青蓮寺16代住職
77	正徳4年(1647)	○	○	○	○			総高129cm 地輪高32cm 幅41cm ※銅質は青蓮寺11代住職
78	天文13年(1544)	○	○	○	○			総高118cm 地輪高32cm 幅46cm
79	天文23年(1554)	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「奉造立法輪□□」 左に「天文十三年八月十七日□□」	総高105cm 地輪高28cm 幅34cm ※政興は青蓮寺15代住職
80	元禄2年(1610)	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「傳西園大智度」 左に「法山高僧遺跡」 真圓(北方)の中心に梵字(アール) 右に「天保二二年四月九日」 左に「十月十八日造立」	総高107cm 地輪高30cm 幅36cm ※1勢社は青蓮寺18代住職
81	慶安年間(1648～1651)	○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「十六代法師」 左に「勢社入道部」 背面(南方)の中心に梵字(アール) 右に「天保五年」 左に「十月朔日造立」を町史にあるが、現在は梵文でない	総高100.5cm 地輪高29.5cm 幅32cm ※地輪は青蓮寺19代住職
82		○	○	○	○		正面中央に梵字(アール) 右に「青蓮寺法印遺跡」と町史にあるが、現在は梵文でない 左に「寛平十七代法師」	総高123.5cm 地輪高30.5cm 幅41.5cm ※空風輪欠損大
83		○	○	○	○			

No	年代等	地輪	水輪	火輪	空風輪	部位	紀年銘等		備考
							記	年 銘	
84		○	○	○	-	水輪 本輪のなかに榊行門の文字(ハチ)右に「慶白」(横) 高立五輪一基」と野水 にあるが敬白部分が現在見えない、左に「貞春□□度大船口」		彫高 104.5cm 地輪内 25cm 幅 35cm	
85		-	-	○	-			彫高 70cm 地輪内 25cm 幅 31.5cm	
86		-	-	○	-				
87		-	-	○	-				
88		○	-	-	-				
89		○	-	-	-				
90		○	-	-	-				
91		○	-	-	-				
92		○	-	-	-				
93		-	-	○	-				
94		○	-	-	-	水輪が風 輪がどちら のかが不明			
95		-	-	○	-				
96		-	-	○	-				
97		-	-	○	-				
98		-	-	○	-				
99		-	-	○	-				
100		-	-	○	-				



## 第VI章 東光寺磨崖梵字の調査

### 第1節 遺跡の概要

東光寺は、多良木町大字黒肥地字東光寺に所在し、青蓮寺の北北東1.9kmに位置する。東光寺地域には、磨崖梵字の他にも東光寺薬師堂・東光寺八幡神社・東光寺経筒出土地があり、宗教施設が数多く所在する。また、城内の小字名は東光寺(トウコウジ)と蔵川(ハライゴウ)という。

東光寺八幡神社は、宇佐八幡と同体で草創年紀不明。現在の東光寺八幡神社の拝殿は旧本殿からの転用で、建造物調査の結果(『熊本県文化財調査報告書第277集』、2012)、明応2年(1493)の建造物である。

相良家史によれば、東光寺は文應元年(1260)に相良頼氏により再興と記され、現在は薬師堂のみ残っている。伝承によれば、東光寺主体は磨崖梵字から南東150m地点の愛宕山の麓にあったという。

現在の薬師堂内には薬師三尊が安置され、主尊である薬師如来坐像は平安時代末期の仏像で、銘文によれば秘仏とされている。天正9年(1581)に相良義陽による補修がなされている。脇侍の日光菩薩及び月光菩薩は鎌倉時代末期、十二神将は南北朝期の作とされている。

寛元元年(1243)の「関東下知状」(相5号)に、東光寺村がみえる。この史料から窺える東光寺村の権益関係は次のようになる。建久4年(1193)東光寺を含む多良木村の領知を相良頼景がはじめ、建保2年(1214)頼景が庶子・宗頼に東光寺村を譲渡する。宗頼死去後は宗頼の子・頼重に譲渡されたが、相良長頼が東光寺村を押領する。長頼の東光寺村押領の根拠は、安貞2年(1228)8月に相良頼景から東光寺村を長頼に譲渡する旨の譲状を得ていたこと、更に同年12月に長頼は安塔状を得ていたことである。寛元元年(1243)の裁許により、東光寺村は長頼が押領することになる。

東光寺薬師堂から見て東側の斜面に町史跡である東光寺磨崖梵字は所在する。久々藤結凝灰岩の南向きの岩壁に彫刻され、彫刻面の東側に石窟がある。また、磨崖面の西側にも空洞が確認できるが、開口部が崩落土に埋まっているため、構造は確認できなかった。

### 第2節 東光寺出土の経筒

#### 1. 経筒発見の経緯の整理

東光寺出土の経筒は、文永10年(1273)に多良木家とその近親者や録者とみられる人物たちによって東光寺の東方台地の斜面の塚塚に埋納されていたものである。

昭和11年(1936)2月、黒肥地村(現、多良木町大字黒肥地)の野尻良平氏が通称愛宕山の麓(蔵川4940の1)、東光寺跡の一角で開墾の最中に偶然発見した。『多良木町史』によれば、経筒のほかに銭貨27枚、白磁の

下蕪花いけ1個、肥後銀形の銀1個が確認されている。

経筒筒面に相良頼氏をはじめ、奉納者名や埋納年月、埋納趣旨などの銘文があり、類例の少ない考古資料として、昭和44年3月20日付けで熊本県指定の重要文化財に指定されている。現在は多良木町埋蔵文化財等センターにて展示している。

#### 2. 経筒の出土状況(『九州日日新聞の記事から』)

昭和11年8月10日、坂本經亮氏らによる現地調査が行われ、その記録を昭和11年8月31日の「九州日日新聞」に掲載されている。出土状況の記載箇所を引用する。

「・・・東光寺の石切場の立石を見て経筒発掘者、野尻良平氏を訪ねたのは疑いどころであった。野尻氏は養蚕の忙しい折にも関わらず喜んで現地に案内し発掘状態に就て詳細な説明をして下さった。

東光寺から北方赤木へ小流に添って新道が通ってある行くこと約六百米にして薬師堂がある。ガッチリした茅葺屋根の堂で内陣の扉を開くと薄暗い光線の中に主佛如来像を中央に二尊の明王、数体の天部像等が濃厚な近代採色に一層奇怪な姿を確然と押並べてある。

正面に懸った門口には「干天文十七年甲戌八月一日、東光寺薬師如来彫刻」の銘が刻まれ合祀の「愛宕山東光寺佛」は木素彫の山法師像で脊銘に「天文廿一・・・(略)・・・」とある。勿論東光寺の主佛ではない。境内の片隅には附近出土の板碑、五輪塔石が数多く積られて中には「明暦三年」の銘もある。

この薬師堂は東光寺の一祠堂で愛宕山東光寺の本堂は東側山裾に存したと云ふ。寺跡の後は切り立てた岩壁で刻した雄渾な大梵字の一部が残ってある。其の右側洞穴は横穴古墳の形式を存し、こにも佛が祀ってあったと云ふ。岩間から冷水が滾々と湧出して谷間の風光と共に幽邃な聖域である。今は全く開墾されて曾ての堂塔の配置など知る由もない。

問題の経筒は寺跡の北側を區切る山裾の中腹に當る所に存した積石塚から掘り出されたものであった。野尻氏が村有東光寺跡の小作権を得て昨冬開墾を進めたが本年2月の雪の降る日の夕刻積み重なった川原石を取除け中たまたま平たい一枚の石を除けて其の下に六つの経筒を発見したのが初めである。野尻氏は珍しいものなので注意深く敬虔な心で翌日にかけて八箇の経筒、二十四の孔銭を採取したのであった。勿論学術的な発掘ではなかったが記憶ははっきりしてゐて其大要を知るを得た。山裾の中腹を経約四、五尺、深さ約二尺五寸掘り下げ井筒形に石垣を周し内部の地固めをして敷板を敷き孔

銭を並べ経筒を前に六個、後に二個並べ其の周囲には清浄な山土を以て埋め経筒の上に径一尺五寸、巾八寸五分と径一尺五寸、巾九寸五分との二個のや、平たい川原石を蓋として置き其の上に百に余る川原石を積み重ね封土を小高く盛ったもの、様である。私は他の出土例によって次のことを聞いて見た。

- 経筒の下には敷石はなかったのか
  - 経筒の周囲には木炭或は小石が詰めてはなかったか
  - 孔銭二十四文は経筒一筒に三つの層で下敷としてあったのではないか
  - 他に近くから出たものはないか
- 答へは「そう云ふ風ではなかった附近から口の付いた徳利様のものが出たが割って仕舞った」との事私共は現地の繁茂した陸稲の畑から次のものを採取した。
- 祀部土器○甕腹部破片
  - 高麗磁と見える皿、注口付徳利、土師器等の破片数点
- 前者は横穴古墳に属し後者は経筒が東光寺に添うものであると思ふ。」

この記事から、昭和11年時点で磨崖面に梵字の一部が確認され、すでに梵字が崩落していたことがわかる。石窟もすでにあり、伝承として仏を祀っていた空間であった。

発見された経筒は、現在は多良木町の所有となり、多良木町埋蔵文化財等センターに保管している。銅特有の金属劣化や錆などが進行し、経筒の銘文が以前ほど明瞭に判読できなくなっていた。また、經典の文字についても、ほとんど消失してしまっていた現状であったことから、保存対策として併伴した銭貨を含めて経筒の保存修復を別府大学文化財研究所に委託し、保存修理を行った。

### 3. 経筒出土地点の特定

多良木町教育委員会に保管されていた経筒収納箱の蓋裏に「発掘場所 蔵川四九四〇ノ一 発掘年月日 昭和十一年三月十二日 発掘者 野尻良平」と記録されている。

今回、多良木町税務課・法務局に照会し、この地番の特定に努めた。「球磨郡黒肥地村土地台帳」によれば四九四〇番・四八九〇番ノ1合併という筆となっており、「明治31年法律第32号に依り増徴地租」での所有者は黒肥地村で地目は山林となっている。履歴は次のようになる。

昭和5年3月12日字図訂正
昭和25年3月30日受付 自作農創設特別措置法第30条により 農林省が買上げ
球磨郡黒肥地村字蔵川四八九〇番四九四〇番ノ一 山林寺町八反歩右登記 昭和25年3月30日受付 附第404号 農林省ノ為所有権ヲ登記ス
所有権移転 昭和52年11月28日受付(登記) 第6822号 原因 同44年8月10日売払 所有者 多良木町
昭和53年5月24日閉鎖 四九三九番に合筆のため
昭和54年11月13日 四九三九番がないし四まで分筆

旧字図を確認した際、四九四〇番・四八九〇番ノ一合併だった土地の場所は、四九三九番一及び四九三九番三に分かれており、経筒の発掘場所は、現在では四九三九番となっている。東光寺磨崖梵字は四九三九の三番地であり、磨崖梵字に近くであることは間違いない。

『九州日日新聞』の記述から「問題の経筒は寺跡の北側を区切る山裾の中腹にあたる所に存した積石塚から掘り出されたもの」とある。坂本氏の「寺跡」の認識は「この薬師堂は東光寺の一祠堂で愛宕山東光寺の本堂は東側山裾に存したという。寺跡の跡は切り立てた岸壁で刻した雄渾な大梵字の一部が残っている」であり、磨崖梵字が所在する場所も含め「寺跡」として認識している。地域の話では、東光寺跡は現在の豊永氏宅といわれ、東光寺磨崖梵字の南側である。よって、「問題の経筒は寺跡の北側を区切る山裾の中腹」とは、東光寺磨崖梵字の南側の迫地付近であったと考えられる。

## 第3節 調査の成果

### 1. 調査の方法

昭和55年刊行の『多良木町史』では、東光寺磨崖梵字として掲載され、以後、磨崖梵字として一般的に認識されてきた。

その後、平成26年(2014)6月25日(水)の奥球磨セミナーで前川清一氏は、東光寺磨崖板碑であると説明し、また『中世相良氏の展開と地域社会』(稲葉龍陽・小川弘和編、2020)では、文永10年(1273)頃の碑伝型板碑を模した東光寺磨崖板碑として記載している。

今回は、磨崖面の調査、磨崖面前面でのトレンチ調査、磨崖面右側の石窟の調査を行った。

磨崖面の調査では、彫刻痕跡の確認や梵字痕跡の確認を行った。トレンチ調査では、祭祀痕跡の確認や堆積層の確認を行った。石窟の調査では、東国に見られる「ヤ



グラ」の可能性を視野にいれ、調査を行った。

磨崖面は三次元点群測量を行った。三次元点群測量は、UAV・地上写真測量等・地上レーザスキャナ計測等を用いて、計測データの取得を行った。UAV・地上写真測量等・地上レーザスキャナ計測等は、公共測量作業規定される性能を有する機材を用いた。

UAV・地上写真測量等についてはSIM/MVS(structure from motion/multi view stereo)技術を用いた方法で行い、標定点及び検証点はGNSS・トータルステーション等によって測量を行い、4級基準点と同等程度の精度を有するものとした。

## 2. 調査の結果

### (1) 地形測量及び磨崖面の図化(第86・87図)

愛宕山から北方向へ向かって尾根線が走り、その後、尾根線は東西南方向へと分かれて伸びる。その尾根線を境に、北側の斜面は旧石切場である。磨崖面は、尾根線の南側斜面に所在する。磨崖面は南西方向を向いており、その右側に石窟が隣接する。磨崖面の左側にも石窟らしき空洞を確認したが、土砂により埋まっているため調査は行っていない。磨崖面石材は加久藤溶結凝灰岩である。

磨崖面に板碑形を彫刻し、葉研に梵字を刻む。オリジナル残存部位は梵字周辺のみで、平坦に磨いている。その他は経年劣化により表皮が剥落している状態である。板碑の山形や二条線の表皮は剥落しているが、レリーフのフォルムは残っている。

山形や二条線及び額は陽刻である。板碑痕跡の形状加工は、山形頂点から下に417cmのところまでである。そこから10cmほど前面に緩やかに張り出した後、垂直に地表面へと続く。張り出し部分には円形に納穴が穿つてある。山形の頂点・アークの空点、納穴はほぼ1直線上に並ぶ。山形頂点から納穴までの距離は420cmを測る。

山形の幅は149cm、二条線幅は140cm、額幅は145cmを測る。梵字周辺のオリジナル部分は研磨されている。

調査において、繁茂していた地衣類を除去した結果、納穴の上位に梵字痕跡を確認した。よって、刻まれた梵字は複数あることが判明した。

「アーク(amh)・バーク(vamh)・ウーン(hum)」(胎藏界大日・金剛界大日・蘇悉地)の可能性を視野にいれ、梵字の復元を行ったが、上位の「アーク(amh)」にて確認できる梵字幅は95cmの規模であり、これをもとに復元すると梵字一文字の大きさは100cmを超える。これを基準に三文字並べることはできない。よって、下位の梵字への接続を予想すると、梵字2文字が適当であると考えられる。

以上のことから、磨崖板碑に刻まれた梵字は、五点具

足(āmh)・胎藏界大日如來(amh)・五点具足の金剛界大日如來(vamh)である可能性が高い。

### (2) 令和3年度のトレンチ調査(第88図)

磨崖面前にて1×4mのトレンチ調査を行った。

表土は竹根にとろく乱をうけている。その下位に暗褐色シルト(2層)を確認した。それより下位の層はすべて客土である。3・4層の下位には鉄分の沈殿があり、固くしまっていた。その面を検出する際に、龍泉窯系青磁碗B1類が1点出土した。5～9層は溶結凝灰岩が風化した灰色ブロックを含んでいる客土である。

10層から土師器の甕が出土している。13層はグライ化した土壌ブロックが混ざっている。ここから土師器の杯が出土した。

### 【出土物】(第89図)

1366～1368は2層からの出土遺物である。1366は土師器小皿、1367は中世須恵器の挿鉢、1368は陶器の端反碗である。1369～1379は3～4層からの出土遺物である。1369は厚みのある底部をもつ土師器杯である。1370は底部糸切り離し後に胴を張り付けている。1371～1374は土師器杯である。1375・1376は土師器小皿である。1377は龍泉窯系B類の青磁碗である。1378・1379は中世須恵器の甕で体部に山形タキ痕を残す。1380～1385は10・11・12層からの出土遺物である。1380は土師器杯、1381は脚をもつ土師器杯である。1382～1384は土師器小皿である。1385は瓦質の甕で、口縁の下位に小さな突帯が巡る。

### (3) 令和4年度の調査(第90図)

令和4年7月の調査指導委員会において、磨崖面の東側に開口している石窟が「ヤグラ」ではないかとの指摘を受けた。石窟は昭和11年新聞記事から、防空壕ではない。横穴墓の転用の可能性があるため、町内の横穴墓との比較を行った結果、規模・形態が異なるため横穴墓からの転用でもない。

調査前は、開口部及び内部は崩落土により埋没していた。調査はその崩落土除去から始め、石窟内部及び前庭部の調査を行った。石窟内部の堆積土は持ち帰り、骨片の有無を精査したが、確認されなかった。

石窟内部は西側のみ掘削した。東側半分は未掘である。この石窟開口部の上位に、断面「V」字状の切り込みが水平横位に140cm走る。その幅は36cmで、深さ8cmを測る。庇受けと思われる。

開口方向は西南西で、開口幅215cm、開口高160cmを測る。開口部下位には加久藤溶結凝灰岩の巨礫を3石確認した。石窟の縦断面は、崖面から石窟に入り、水平に奥まで入り、奥壁から奥床までは緩やかに奥に広がり、

奥床からやや水性に石窟中央にまで達し、中央付近で高低差 33cm の段差がある。その段差を降り、削り出しのステップを経て、下方へと傾斜する形状である。中央付近の段差部分には、その段差に沿ってトンネル状の湧水路があり、そのトンネルは磨崖面脇の空洞に抜ける。

石窟内部は段差により、奥床と下段部に分かれる。下段部の天井高は 160cm、奥床の天井高は 150cm である。奥床は幅 190 ～ 215cm、奥行きが 130cm の隅丸方形で床面には凹凸がある。下段部の中央に島状にケズり出しの突起がある。奥床へのステップと考えられる。

石窟中央の段差部分の西側に 15cm×12cm、深さ 2cm の浅い枿穴を確認した。その枿穴に対応するように左側壁に幅 18cm の枿穴が、右側壁に幅 24cm の枿穴が配置されている。木材を嵌め込むための枿穴で、入口構造を持っていたと考えられる。

天井、右側壁には、加工痕が確認できた。

奥床の右側壁には、東側へと延びる高さ 90cm、幅 80cm の開口があり、先細りとなる空洞がある。確認できた奥行きは 400cm で、この空洞奥から湧水がある。その湧水は右側壁脇に設けられた水路を通り、中央部分の段差で落ち、段差に沿うトンネルへと抜ける。空洞床面には土師器が多数散在していた。

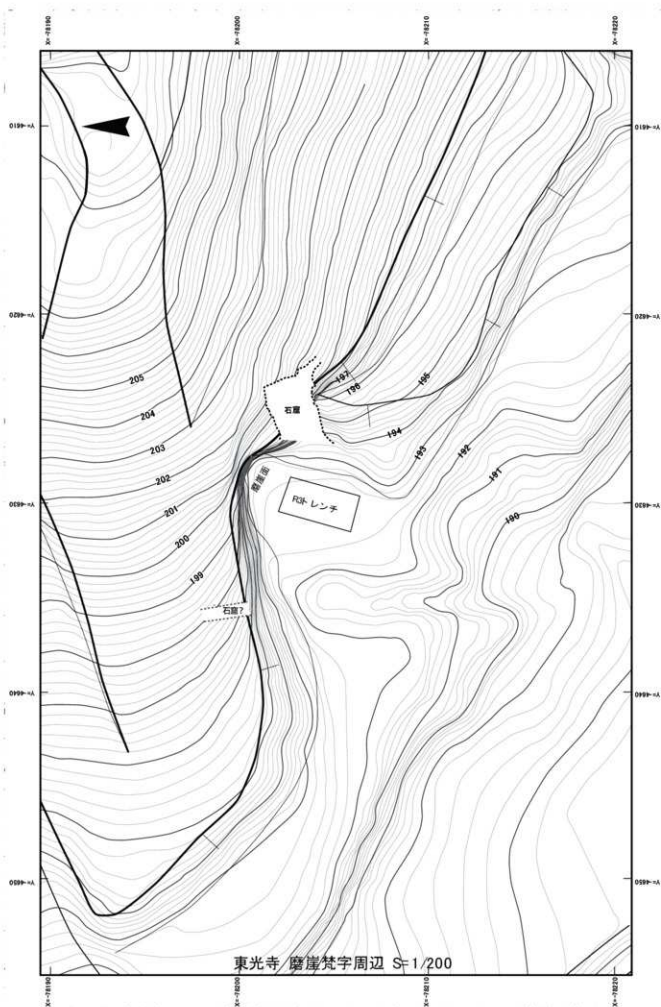
#### 【出土遺物】(第 91 図)

1386 は石窟段差部トンネル内出土の土師器坏である。1387 ～ 1389 は石窟右側壁から奥へと続く空洞からの出土遺物で土師器坏である。1388 の口縁端部は内外面とも凹状に調整している。1390 は石窟前庭部トレンチから出土した土師器坏である。1391・1392 は右側壁から奥へと続く空洞からの出土遺物で土師器小皿である。1393 は石窟内堆積 7 層から出土した中世須恵器の播鉢である。

#### (4) 科学分析

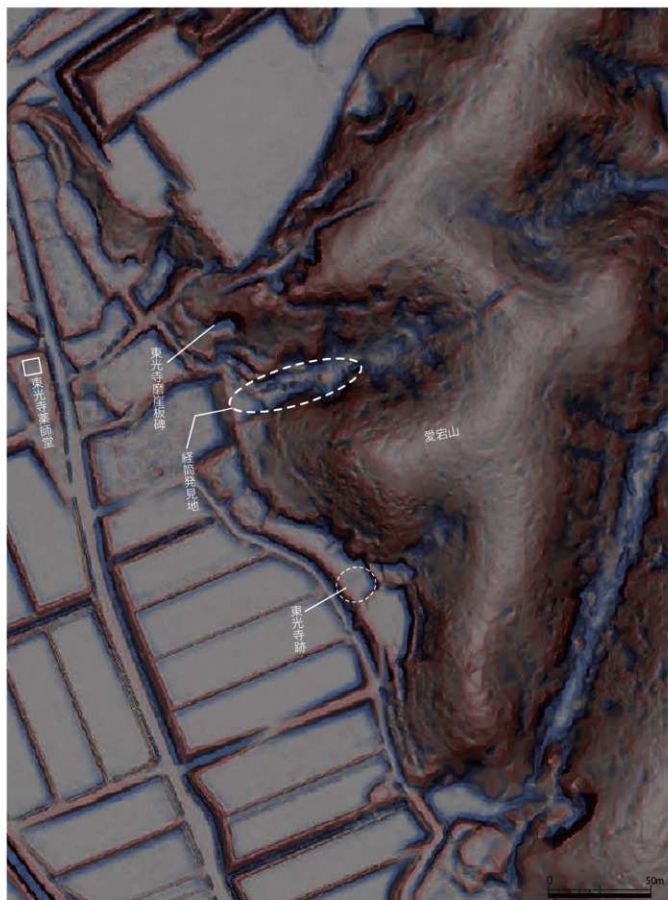
東光寺磨崖板碑の梵字面のみ、黒色物質が付着している。このように梵字内のみが黒くみえる石造物は人吉盆地の各所に見られる。

今回、九州国立博物館の協力を得て、蛍光 X 線分析を行った。その結果は、第 VII 章に掲載している。

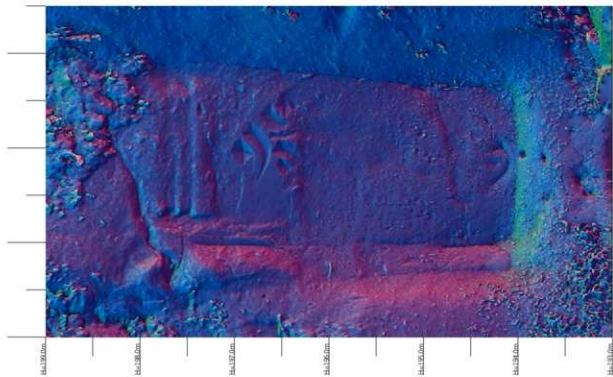


東光寺/磨崖梵字周辺 S=1/200

第 84 図 東光寺磨崖梵字地形測量図

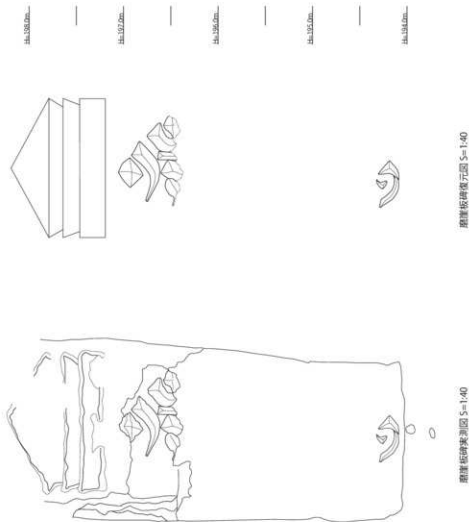


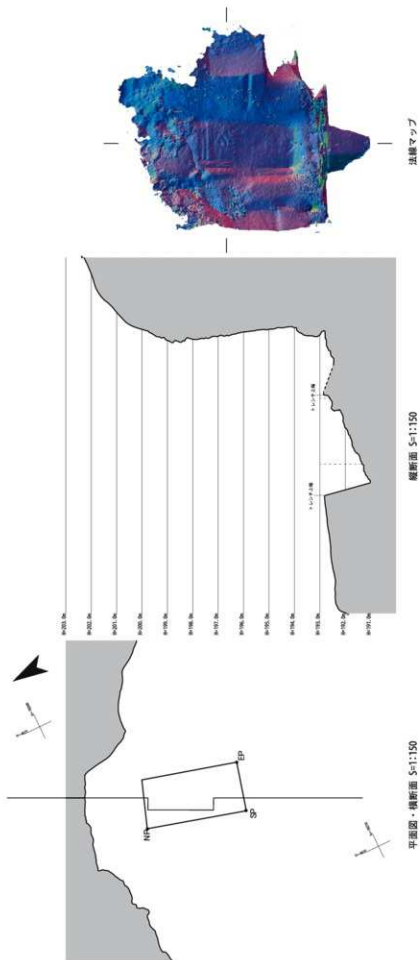
第 85 图 東光寺地区 CS 立体图



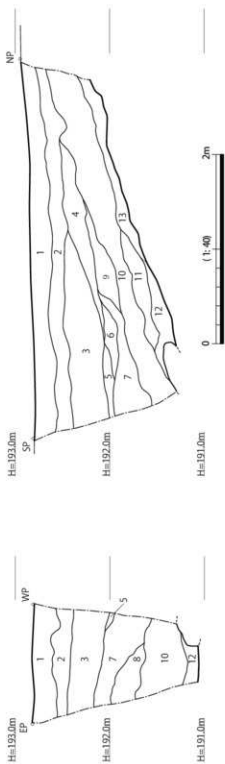
東光寺窟造梵字法線マップ

第 86 図 東光寺窟造梵字法線マップ及び実測図





第 87 図 磨崖面構断及び縦断面

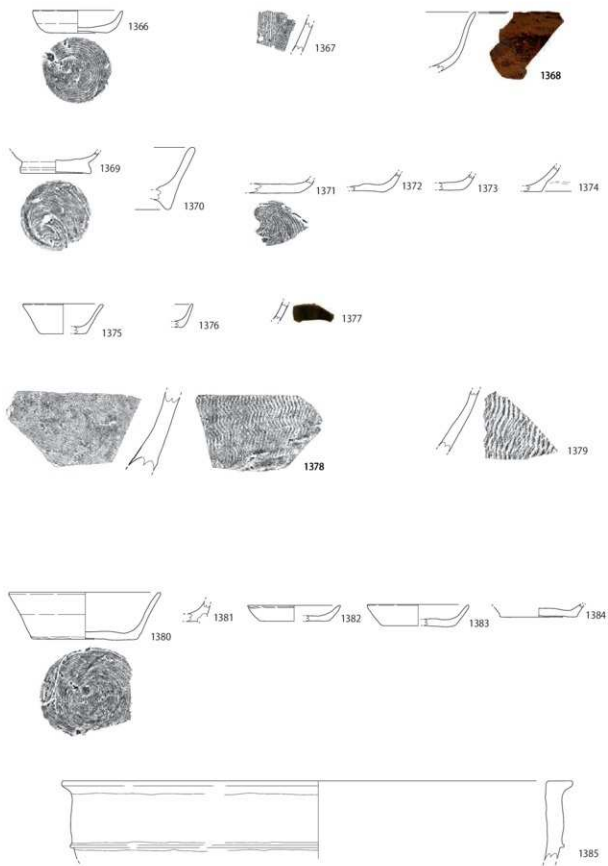


東光寺跡置板碑

(令和3年度)

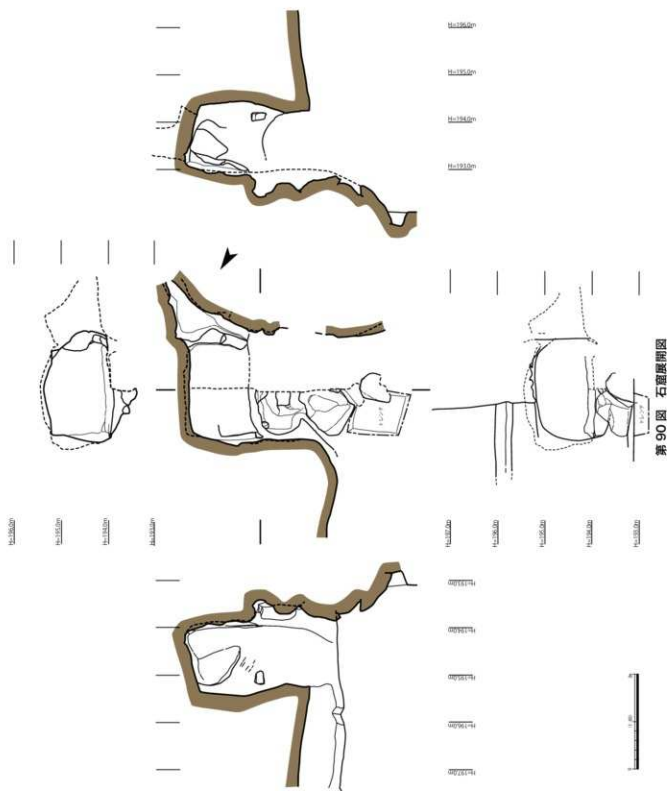
- 1 赤土 7.5YR5/8 明褐色シルト しまりなし 粘性なし 竹類によりかく乱されている 径0.3～3 cmの中礫を少量含む
- 2 惣倉層 7.5YR4/6 暗褐色シルト (やや明い色調) しまりなし やや粘性あり 径0.3～2 cmの中礫を少量、カーボンを含む
- 3 赤土 7.5YR5/6 明褐色シルト しまりあり やや粘性あり 径1～5 cmの粗礫を中量、カーボンを少量含む
- 4 赤土 7.5YR5/6 明褐色シルト しまりあり やや粘性あり 径1～10 cmの粗礫及び粗石を少量、カーボン少量、灰色ブロックを少量含む
- 5 赤土 7.5YR6/6 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり 灰色ブロックを斑状に含み、カーボンを少量含む
- 6 赤土 7.5YR5/6 明褐色シルト しまりあり やや粘性あり 灰色ブロックを斑状に含み、カーボンを少量含む
- 7 赤土 7.5YR5/8 明褐色シルト しまりあり やや粘性あり 径3～10 cmの灰色ブロック中量、カーボンを少量含む
- 8 赤土 7.5YR3/3 褐色シルト しまりあり やや粘性あり 径5 cmの灰色ブロックを中量、カーボンを少量含む
- 9 赤土 7.5YR6/4 に近い暗色シルト しまりあり 粘性あり 径1～10 cmの中礫を少量、鉄分を斑状に含む
- 10 赤土 7.5YR6/4 に近い暗色シルト しまりあり 粘性あり 9層ほどではないが鉄分を斑状に含む
- 11 赤土 7.5YR6/4 に近い暗色シルト しまりあり 粘性あり 鉄分を斑状に含む 10層との境にグライ層が薄く
- 12 岩盤面上 (科学分析層面)
- 13 岩盤面上 5YR3/2 暗赤褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり グライ層 カーボン中量含む 粗灰岩を含む 粗灰岩を含む

第88図 トレンチ土層断面図

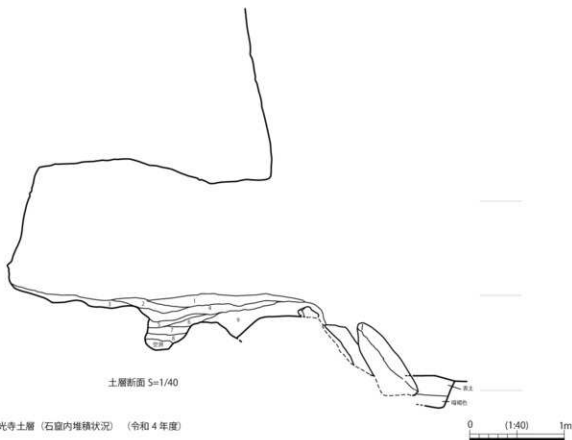


第 89 図 令和 3 年度調査時の出土遺物



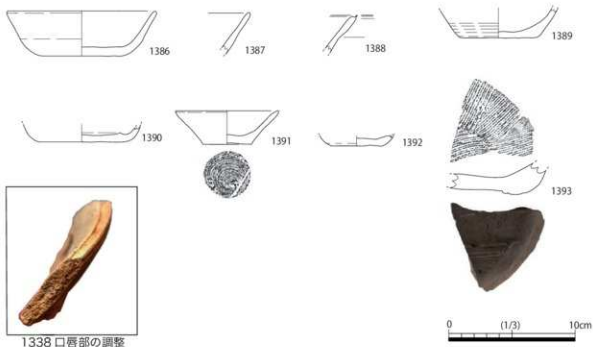


第 90 圖 石室展開圖



東光寺土層（石室内堆積状況）（令和4年度）

- |   |                       |       |        |                            |
|---|-----------------------|-------|--------|----------------------------|
| 1 | Hue7.5YR5/6 橙色シルト     | しまりなし | 粘性なし   | 崖上からの崩落土                   |
| 2 | Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト    | しまりなし | やや粘性あり | カーボンを少量含む                  |
| 3 | Hue10YR7/2 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | 凝灰岩の風化土が混じる カーボン少量含む 奥床堆積物 |
| 4 | Hue10YR6/3 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | 灰色ブロックを含む カーボン少量含む         |
| 5 | Hue10YR4/3 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | カーボン少量含む                   |
| 6 | Hue10YR6/3 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | カーボン少量含む                   |
| 7 | Hue10YR4/3 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | カーボン少量含む                   |
| 8 | Hue10YR4/3 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | カーボン少量含む                   |
| 9 | Hue10YR6/3 にぶい黄色褐色シルト | しまりなし | やや粘性あり | カーボン少量含む                   |



第 91 図 石室土層断面図及び令和4年度調査時の出土遺物

## 第Ⅶ章 科学分析

### 1. 相良頼景館跡の自然科学分析

令和3年度 多良本相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析（年代測定）業務（№29011-1）

令和3年度 多良本相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務（№29011-2）

令和4年度 多良本相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託（№32993）

### 2. 東光寺の自然科学分析

令和3年度 東光寺磨崖梵字の自然科学分析業務（№31326）

令和4年度 多良本相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託（№32993）

### 3. 人吉盆地に分布する石塔に用いられた黒色物質の材質調査

はじめに

熊本県多良木町に所在する相良頼景館跡は、人吉盆地の北東部、球磨川右岸の沖積低地上に位置する。おそらく館は球磨川右岸の自然堤防に由来する微高地を選んで建てられたと考えられる。これまでの発掘調査により、館を取り囲む土塁やその外側に構築された堀などが確認されている。

本分析調査では、北側土塁を構成する土壌および堀を埋積する土壌を対象として、微化石分析、種実遺体分析および抽出された炭化種実と炭化材の年代測定を実施し、土塁の構築時期や堀の埋没時期、周辺環境、植物利用等に関する資料を作成する。

## 1 試料

試料は、令和3年度調査で作成された北側土塁トレンチの土層断面および北側堀跡トレンチの土層断面より採取された土壌試料と、北側トレンチの堀2覆土2層炭化物層より採取された土壌試料である。各トレンチにおける試料採取位置を図1、2に示す。なお、整地層①直上と堀2覆土2層炭化物層は多良木町教育委員会が採取したため、図には反映していない。

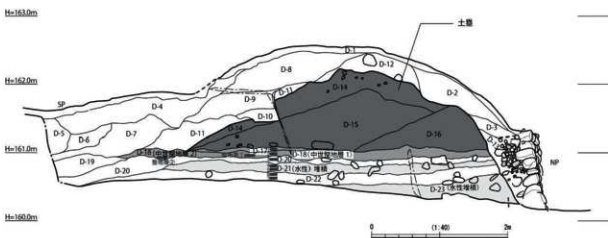


図1 相良頼景館跡北側土塁トレンチの試料採取位置

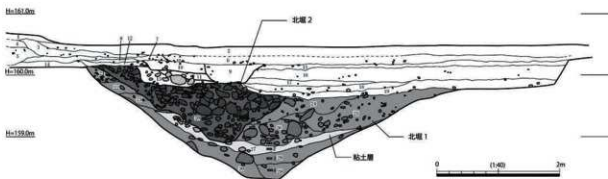


図2 相良頼景館跡北側堀跡トレンチの試料採取位置

## 2.分析方法

火山灰分析と珪藻、花粉、植物珪酸体の各微化石分析、種実遺体分析、抽出した炭化材の樹種同定および炭化種実と炭化材の放射性炭素年代測定を実施した。なお、火山灰、微化石および種実遺体の各分析については対象物の産出に乏しいことが予測されたため、まず産状を確認するのみの概査を行い、産状の比較的良好な植物珪酸体については、通常の分析を実施した。各分析の処理過程を以下に述べる。

### (1)火山灰分析

北側土壘トレンチの試料番号 1(D-17)、2(D-18)、3(D-20)、4(D-21)、5(D-21)、6(D-22)、7(D-22)の7点と、北側堀跡トレンチの試料番号 1(H-26)、2(H-27)、3(H-28)、4(H-29)の4点の、計11点の試料を対象とした。

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

### (2)珪藻分析

北側土壘トレンチの試料番号 1(D-17)、2(D-18)、3(D-20)の3点と、北側堀跡トレンチの試料番号 2(H-27)、3(H-28)の2点の、計5点の試料を対象とした。

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

### (3)花粉分析

上述の珪藻分析に選択した試料と同一の計5点の試料を対象とした。

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製する。

### (4)植物珪酸体分析

上述の珪藻・花粉分析に選択した試料と同一の計5点の試料と、北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)の、計7点を対象とした。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山,2000,2009)。以下に処理過程を述べる。

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原,1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1)試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2)試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3)電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4)超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散

- 5)沈底法による20  $\mu$  m以下の微粒子除去
- 6)封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7)検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に伺えることができる(杉山2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### (5)種実遺体分析

北側土壘トレンチの整地層①直上(D-17)、整地層①(D-18)、整地層②(D-18)、北側堀跡トレンチの試料番号1(H-26)、試料番号 2(H-27)、試料番号 3(H-28)、試料番号 4(H-29)、北側トレンチ堀 2 覆土 2 層炭化物層の、計 8 点の試料を対象とした。

北側堀跡トレンチの試料は、水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。北側土壘トレンチ、北側トレンチ堀 2 覆土 2 層炭化物層の試料は、常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(岩片主体)を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後の試料を双眼実体顕微鏡で観察し、同定が可能な種実遺体の他、主に 4mm 以上の炭化材や土器片などの遺物をピンセットで抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や椿坂(1993)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、岩片主体は重量、土器片は個数と重量、最大径を一覧表に併記する。

分析後は、一部の炭化種実と炭化材を年代測定および炭化材同定に供する。他は分類群別に容器に入れて保管する。他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

#### (6)炭化材同定

種実遺体分析で抽出された炭化材のうち、北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)の大型炭化材各 5 点と、北側トレンチの堀 2 覆土 2 層(炭化物層)の大型炭化材 4 点の、計 14 点の試料を対象とする。

木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。年代測定用試料は、調整を行う際に、3 断面を双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

#### (7)放射性炭素年代測定

種実遺体分析で抽出された炭化種実・炭化材のうち、北側土壘トレンチ整地層①-1(D-18)の炭化材(アカガシ亜属)、整地層①-2(D-18)の炭化材(アカガシ亜属)、整地層②-1(D-18)の炭化材(アカガシ亜属)、整地層②-2(D-18)の炭化種実(コムギ)、整地層①(D-18)の炭化種実(イネ)、北側トレンチ堀 2 覆土 2 層炭化物層の炭化



表2 相良頼景館跡の植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	北側土壘トレンチ					北側堀トレンチ	
		D-18	D-18	D-17	D-18	D-20	H-27	H-28
		整地層 ①	整地層 ②	1	2	3	2	3
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	34	41	20	15	21	16	15
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)			5				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	5	5		5			5
キビ族型	Panicaceae type	5	5	5	5	5	5	5
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	34	26	10	5	5	5	5
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	25	15	10	21	5	11	15
タケ亜科	Bambusoideae							
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	25	20	20	15	16	16	5
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	93	51	25	41	10	42	10
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	10	10	10	5	5	11	10
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	5			5	10	5	5
メダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	39	46	30	46	21	11	10
未分類等	Others	29	51	40	26	26	21	25
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	5	10	5	5	5	11	15
棒状珪酸体	Rod-shaped	79	77	60	62	42	16	56
未分類等	Others	128	92	94	83	73	53	56
樹木起源	Arboreal							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	5	5	5	5			5
クスノキ科	Lauraceae				5	5		
マンサク科(イスノキ属)	<i>Dietylum</i>				5	5	5	5
その他	Others	10	20	10	5	10	11	20
植物珪酸体総数	Total	530	475	348	361	268	236	268

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.01	1.20	0.58	0.46	0.62	0.46	0.45
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.31	0.32		0.33			0.32
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.43	0.32	0.12	0.06	0.07	0.07	0.06
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.28	0.24	0.23	0.18	0.18	0.18	0.06
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.45	0.25	0.12	0.20	0.05	0.20	0.05
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.07	0.08	0.07	0.04	0.04	0.08	0.08
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.01			0.02	0.03	0.02	0.02

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	35	42	54	42	60	38	30
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	55	44	28	46	17	42	24
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	9	14	18	9	13	16	38
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	2			4	10	3	8
メダケ率	Medake ratio	89	86	82	87	77	80	54

## (2)植物珪酸体分析

概査結果を表1に、通常分析結果を表2に示す。検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、結果を表2、図3に示す。主要な分類群について顕微鏡写真を示す(図版1)。



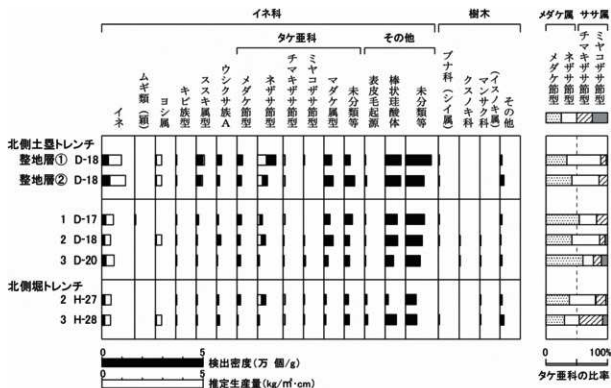


図3 相良稲景館跡の植物珣酸体分析結果

・イネ科

イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

・イネ科-タケ亜科

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチウク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチウ属)、未分類等

・イネ科-その他

表皮毛起源、棒状珣酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

・樹木

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

植物珣酸体の検出状況は以下の通りである。

北側土壘トレンチの整地層①(D-18)と整地層②(D-18)では、イネが比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、マダケ属型、および樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)なども認められた。イネの密度は、整地層①では3,400個/g、整地層②では4,100個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g(状況により3,000個/gとする場合もある)に近い。おもな分類群の推定生産量によると、両試料ともイネが優勢となっている。

北側土壘トレンチの試料番号1(D-17)、2(D-18)、3(D-20)および北側堀跡トレンチの試料番号2(H-27)、3(H-28)でも、おもむね同様の結果であり、すべての試料からイネが検出された。イネの密度は1,500~2,100個/gと比較的低い値である。また、北側土壘トレンチの試料番号1(D-17)ではムギ類(穎の表皮細胞)が検出された。

密度は500個/gと低い値であるが、穎(穎殼)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要はある。また、部分的に樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)が認められた。

### (3)種実遺体分析

結果を表3に示す。8試料合計10.36kgを洗い出した結果、炭化種実、炭化材、土器片、植物片、種実等が検出された。なお、炭化していない種実や植物片は後代の混入と判断されるため、考察より除外する。

北側土壘トレンチの整地層①直上(D-17)(試料800g)は、炭化種実9個、炭化材0.64g(最大1.1cm)、炭化材主体1.06g、岩片主体59.14g、土器片4個5.92g(最大3.3cm)、植物片0.05gが検出された。炭化種実は、栽培植物のイネ類(基部)7個、草本のイヌタデ近似種1個、イヌコウジュ属1個に同定された。

整地層①(D-18)(試料2100g)は、炭化種実35個、不明炭化物2個(残存径3.9mm)、炭化材1.15g(最大0.9cm)、炭化材主体2.06g、岩片主体148.97g、土器片1個2.06g(最大2.9cm)、植物片0.11g、種実2個(草本のザクロソウ)が検出された。炭化種実は、栽培植物のアワの果実1個、イネ類(基部)15個、籾片2個、玄米8個と、草本のイネ科1個、タデ属2個に同定された。6個は保存状態不良の破片で不明としたが、穀類片の可能性はある。

整地層②(D-18)(試料1275g)は、炭化種実8個、炭化材0.85g(最大1.0cm)、炭化材主体2.14g、岩片主体73.12g、土器片3個3.32g(最大2.0cm)、植物片0.06g、種実1個(草本のメヒシバ近似種)が検出された。炭化種実は、栽培植物の栽培植物のアワの穎果1個、イネ類(基部)2個、玄米1個、コムギ2個、草本のタデ属2個に同定された。

北側堀跡トレンチは、試料番号1(H-26)、2(H-27)、3(H-28)、4(H-29)の計4点(2915cc5.31kg)より、炭化材0.001g未満(最大2.9mm)、岩片主体341.16g、植物片0.01g、植物片主体0.26gが検出された。

北側トレンチ堀2覆土2層炭化物層(試料872g)は、炭化種実10個、炭化材0.84g(最大1.4cm)、炭化材主体1.45g、岩片主体42.09g、植物片0.03g、種実1個(草本のカヤツリグサ属)が検出された。炭化種実は、栽培植物のイネ類(基部)1個、籾・玄米1個、穎果(玄米)5個、オオムギ1個、ソバ種子2個に同定された。

以下、炭化種実各分類群の形態的特徴等を記す。

#### ・アワ(*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

果実は径1.7mm、穎果は径1.2mmの半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。穎果は基部正中線上に馬蹄形の胚の凹みがある。表面に残る果皮片は薄く、表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。

#### ・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

籾(内外穎)は完形ならば長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2~3mm程度の偏平な長楕円体。基部に大きき1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稻穂を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。出土籾1個は基部(小穂軸)であり、残存長1.0mmを測る。

玄米(炭化米、穎果)はやや偏平な長楕円体、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で内外穎の縫合部痕の縦隆条がある。炭化米の計測値は、整地層①が長さ3.74mm、幅2.54mm、厚さ1.86mm、堀2が長さ4.05mm、幅2.57mm、厚さ1.71mmである。佐藤(1988)による炭化米の「粒大(長さ×幅)」、「粒形(長さ/幅)」は、整地層①が粒大9.50、粒形1.47、堀2が粒大10.41、粒形1.58となり、2個とも短粒極小型に該当する。

#### ・オオムギ(*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

穎果は残存長4.66mm、残存厚2.47mmのやや偏平な紡錘状長楕円体、両端は尖るが基部を欠損する。腹面正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面基部正中線上の胚の痕跡を欠損する。表面は粗面で微細な縦筋がある。

表3 北側相良郷景観跡の種実遺体分析・炭化材同定結果

分類群・部位・状態・数値	北側土層トレンチ			北側堀跡トレンチ				北側トレンチ				
	D-17	D-18	D-18	H-26	H-27	H-28	H-29	堀2				
	発地層①(直土)	発地層①(土)	発地層②	1	2	3	4	掘土2層炭化物層備考				
炭化種実												
アワ	果実	完形未満	-	1	-	-	-	(個)状態不良				
	縦溝	完形未満	-	1	-	-	-	(個)状態不良				
イネ	胚(基部)	破片	7	15	2	-	-	1 (個)				
	胚	破片	-	2	-	-	-	(個)				
	胚・玄米	破片	-	-	-	-	-	1 (個)堀2層土2層玄米6個合計002g				
	玄米(結果)	完形	-	1	-	-	-	1 (個)発地層①長さ3.74mm幅2.54mm厚さ1.86mm				
	完形未満	完形未満	-	2	-	-	-	4 (個)堀2長さ4.05mm幅2.57mm厚さ1.71mm				
オオムギ	結果	完形未満	-	1	-	-	-	1 (個)①01g残存長4.66mm残存厚2.47mm				
コムギ	結果	完形未満	-	1	-	-	-	(個)状態不良残存長2.41幅1.99厚さ1.59mm				
	破片	破片	-	1	-	-	-	(個)残存長2.59mm				
イネ科	結果	完形	-	1	-	-	-	(個)野生種の可能性				
イヌタデ近似種	果実	完形	1	-	-	-	-	(個)				
タデ属	果実	完形未満	-	2	-	-	-	(個)2面体左右非対称				
	破片	破片	-	2	-	-	-	(個)				
ソバ	種子	完形	-	-	-	-	-	1 (個)ソバ属合計01g長さ3.25mm径2.28mm				
	完形未満	完形未満	-	-	-	-	-	1 (個)長さ3.26径2.21mm				
イヌコウジュ属	果実	完形	1	-	-	-	-	(個)				
不明数種)	結果	破片	-	2	-	-	-	(個)状態不良				
不明炭化物		破片	-	2	-	-	-	(個)残存長さ3.8mm				
炭化材												
アカガシ亜属			-	5	5	-	-	4 (個)				
炭化材			10.77	9.14	9.63	-	1.92	2.84	2.73	13.52	最大径(mm)	
	>4mm		0.33	0.12	0.06	-	-	-	-	0.36	数値(g)→部類種同定・年代測定	
	4-2mm		0.31	1.03	0.76	-	-	-	-	0.46	数値(g)	
	2-1mm		0.81	0.96	1.04	-	-	-	-	0.68	数値(g)	
炭化材主体			1-0.5mm	0.45	1.10	1.10	-	<0.001	-	<0.001	0.77	数値(g)
破片主体			>4mm	22.56	56.69	18.21	30.32	12.18	37.37	41.87	20.68	数値(g)
	4-2mm		6.25	19.26	10.03	3.84	7.25	21.30	20.53	5.59	数値(g)	
	2-1mm		12.38	29.55	18.19	3.79	7.79	21.98	25.31	7.09	数値(g)	
	1-0.5mm		17.85	43.48	26.70	9.79	13.23	35.16	53.39	8.73	数値(g)	
土器片			5.92	2.06	3.32	-	-	-	-	-	数値(g)	
			33.00	28.57	20.39	-	-	-	-	-	最大径(mm)	
			4	1	3	-	-	-	-	-	(個)	
非炭化種実												
メセンバ谷辺似種	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	混入の可能性
カヤツリグ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個)①01g
ザクロノウ	種子	完形	-	2	-	-	-	-	-	-	-	(個)①01g
植物片			0.05	0.11	0.06	<0.001	<0.001	<0.001	0.01	0.03	0.03	数値(g)混入の可能性
植物片主体			-	-	-	<0.001	0.12	0.11	0.04	-	-	数値(g)混入の可能性
分析量			-	-	-	450	990	740	806	-	-	容積(cc)
			800	2100	1275	805	1557	1390	1508	-	-	重量(g)

・コムギ(*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

穎果は長さ3.0~4.0mm、幅2.1~3.0mm、厚さ1.8~2.3mmの丸みを帯びた楕円体。発地層②出土穎果は残存長2.41mm、幅1.99mm、厚さ1.59mmと、残存長2.59mmを測る。腹面正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり長径1mm程度丸く窪む。表面には微細な粒状模様が縦列する。

## ・イネ科(Gramineae)

穎果は長さ0.9mm、幅0.7mm程度のやや偏平な長楕円体。背面基部正中線上に長さ0.4mm程度の楕円形の胚の痕跡がある。表面は粗面で微細な縦筋がある。アワの成熟個体とは区別され、野生種の可能性がある。

・ソバ(*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

種子は長さ3.25mm、径2.28mmと長さ3.26mm、径2.21mmの三稜状広卵体。頂部はやや尖り、基部は切形。

## (4)炭化材同定

結果を表3に示す。北側土層トレンチの発地層①(D-18)、発地層②(D-18)の各5点と、北側トレンチの堀2覆土2層炭化物層の4点の、計14点は、全て常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。一方、北側堀跡トレンチの炭化材は微小な細片で同定ができない大きさであった。以下、植物解剖学的所見を記す。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で1~15細胞高のもの、複合放射組織とがある。

表4 相良鍾景館跡の放射性炭素年代測定結果

試料	性状	分析 方法	測定年代 (暦年校正前) yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正年代				Code No.	
					年代値					確率 %
					$\sigma$	1 $\sigma$	2 $\sigma$	3 $\sigma$		
北側土壘 トレンチ 整地層①-1	炭化材 (アカガシ 垂属)	AAA (1M)	710±15 (710±17)	-27.75 ±0.17	$\sigma$	cal AD 1277 - cal AD 1291	673 - 660 cal BP	68.3	-	PLD- 46491
					1 $\sigma$	cal AD 1272 - cal AD 1300	679 - 651 cal BP	95.4		
北側土壘 トレンチ 整地層①-2	炭化材 (アカガシ 垂属)	AAA (1M)	740±20 (742±20)	-28.74 ±0.27	$\sigma$	cal AD 1269 - cal AD 1282	682 - 668 cal BP	68.3	-	YU- 16034
					1 $\sigma$	cal AD 1230 - cal AD 1243	720 - 707 cal BP	40		
北側土壘 トレンチ 整地層②-1	炭化材 (アカガシ 垂属)	AAA (1M)	600±15 (601±17)	-26.56 ±0.19	$\sigma$	cal AD 1257 - cal AD 1293	693 - 657 cal BP	91.5	-	PLD- 46493
					1 $\sigma$	cal AD 1319 - cal AD 1359	632 - 591 cal BP	56.6		
北側土壘 トレンチ 整地層②-1	炭化材 (アカガシ 垂属)	AAA (1M)	600±15 (601±17)	-26.56 ±0.19	$\sigma$	cal AD 1389 - cal AD 1397	562 - 554 cal BP	11.7	-	PLD- 46493
					1 $\sigma$	cal AD 1305 - cal AD 1365	645 - 585 cal BP	76.3		
北側土壘 トレンチ 整地層②-2	炭化種実 (コムギ)	AAA (1M)	600±15 (602±17)	-24.13 ±0.25	$\sigma$	cal AD 1389 - cal AD 1397	562 - 554 cal BP	11.8	-	PLD- 46492
					1 $\sigma$	cal AD 1305 - cal AD 1365	645 - 585 cal BP	76.6		
北側土壘 トレンチ 整地層①	炭化種実 (イネ)	AAA (1M)	555±15 (553±17)	-24.82 ±0.14	$\sigma$	cal AD 1329 - cal AD 1336	621 - 615 cal BP	8.9	-	PLD- 46490
					1 $\sigma$	cal AD 1396 - cal AD 1419	554 - 532 cal BP	59.4		
北側 トレンチ 堀2 覆土2層 炭化物質	炭化種実 (イネ)	AAA (1M)	425±20 (423±20)	-30.77 ±0.23	$\sigma$	cal AD 1326 - cal AD 1352	625 - 599 cal BP	27.0	-	PLD- 46490
					1 $\sigma$	cal AD 1393 - cal AD 1423	557 - 527 cal BP	68.4		
北側 トレンチ 堀2 覆土2層 炭化物質	炭化種実 (イネ)	AAA (1M)	425±20 (423±20)	-30.77 ±0.23	$\sigma$	cal AD 1443 - cal AD 1466	507 - 485 cal BP	68.3	pal-	PLD- 14696 49539
					1 $\sigma$	cal AD 1434 - cal AD 1485	516 - 465 cal BP	95.4		
北側土壘 トレンチ 1~4	炭化材 (細片のた め 樹種特定 不能)	AAA (1M)	1400±20 (1400±18)	-24.45 ±0.27	$\sigma$	cal AD 1452 - cal AD 1490	499 - 460 cal BP	68.3	pal-	PLD- 14697 49540
					1 $\sigma$	cal AD 1446 - cal AD 1508	505 - 442 cal BP	82.2		
北側土壘 トレンチ 1~4	炭化材 (細片のた め 樹種特定 不能)	AAA (1M)	1400±20 (1400±18)	-24.45 ±0.27	$\sigma$	cal AD 1593 - cal AD 1619	357 - 332 cal BP	13.2	-	PLD- 46494
					1 $\sigma$	cal AD 611 - cal AD 617	1340 - 1333 cal BP	9.5		
北側土壘 トレンチ 1~4	炭化材 (細片のた め 樹種特定 不能)	AAA (1M)	1400±20 (1400±18)	-24.45 ±0.27	$\sigma$	cal AD 1310 - cal AD 1292	630 - 622 cal BP	58.7	-	PLD- 46494
					1 $\sigma$	cal AD 805 - cal AD 629	1345 - 1321 cal BP	25.3		
北側土壘 トレンチ 1~4	炭化材 (細片のた め 樹種特定 不能)	AAA (1M)	1400±20 (1400±18)	-24.45 ±0.27	$\sigma$	cal AD 634 - cal AD 662	1316 - 1288 cal BP	70.1	-	PLD- 46494
					1 $\sigma$	cal AD 634 - cal AD 662	1316 - 1288 cal BP	70.1		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理、AAはアルカリの濃度を下げたことを示す。

5)暦年の計算には、OxCal v4.4Eを使用。

6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7)校正データセットは、IntCal20を使用。

8)校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9)統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ が68.3%、2 $\sigma$ が95.4%である。

## (5)放射性炭素年代測定

結果を表4、図4に示す。今回は加速器質量分析計による年代測定に必要な炭素量は十分回収できている。

同位体補正を行った各試料の年代値は、北側土壘トレンチの整地層①-1(D-18)(アカガシ垂属)が710±15BP、整地層①-2(D-18)(アカガシ垂属)が740±20BP、整地層②-1(D-18)(アカガシ垂属)と整地層②-2(D-18)(コムギ)がともに600±15BP、整地層①(D-18)(イネ)が555±15BP、北側トレンチの堀2覆土2層炭化物質(イネ)が425±20BP、堀2覆土2層炭化物質(オオムギ)が395±20BP、北側堀跡トレンチの試料番号1~4(H-26~29)の炭化材(細片を集めたもの)が1400±20BPである。

測定誤差2 $\sigma$ の暦年代は、整地層①-1がcalAD1272~1300、整地層①-2がcalAD1230~1293、整地層②-1がcalAD1305~1402、整地層②-2がcalAD1305~1401、整地層①がcalAD1326~1423、堀2覆土2層炭化物質のイネがcalAD1434~1485、オオムギがcalAD1446~1619、北側堀跡がcalAD605~662である。

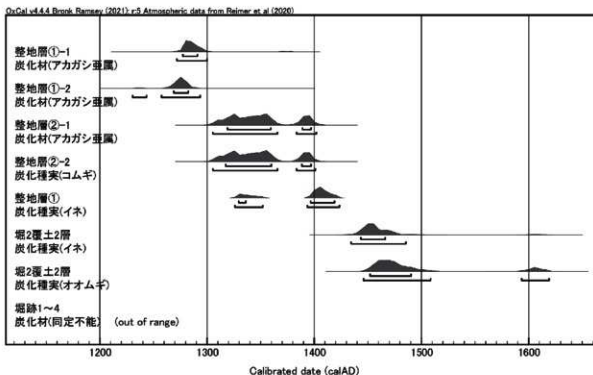


図4 相良頼景館跡の暦年較正結果

#### 4.考察

概査分析の結果、整地層も堀跡堆積物も火山灰の産状は不良であった。これは多良木町の地理的位置が第一の理由として挙げられる。九州地方南部における比較的新しい時代(例えばシラスの噴出した3万年前以降)に活かな噴火活動のあった火山は、霧島火山、桜島火山、開聞岳火山であるが、これら火山を給源とする火山灰の分布は、火山から東方あるいは北東方を軸としており、これら火山のほぼ真北に位置する人吉盆地にはほとんど火山灰の降灰がなかったことが推定される。特に霧島火山は距離的にも多良木町に近く、中世に比較的大規模なテフラの噴出(AD1235年の霧島御鉢高原テフラ:Kr-Th)もあったが、長岡ほか(2010)などの記載を参照すれば、上述したようにその位置的關係により、多良木町は分布範囲外である可能性が高い。なお、テフラを構成する碎屑物も下記の珪藻や植物珪酸体と同様に珪酸分を主体とする碎屑物であり、堆積後の環境によっては分解消失する可能性はある。しかし、その場合でもKr-Thの主な構成物であるスコリアが完全に消失することは考えにくく、風化変質したスコリアの残片などが認められることが考えられる。今回の分析ではそのような碎屑物も全く認められなかったことから、Kr-Th自体の降下堆積がなかった可能性が高いと考えられる。

また、植物珪酸体を除いた珪藻や花粉の産状も不良であり、堀跡堆積物では種実や木材の産状も不良であった。珪藻や植物珪酸体はガラス化した珪酸分から成る。比較的分解に強いが、乾湿を繰り返す場所や、水質が塩基性もしくは水温が高い状態では、溶解しやすいことが知られている。花粉や種実の主成分はセルロース等の有機物である。これらは好気的環境下では細菌等により分解しやすい。以上のことから、当時の地表面など好气的で乾湿を繰り返すような状態と考えられ、化石が残りにくかった可能性がある。

種実遺体分析の結果、北側土壘トレンチの整地層①直上(D-17)、整地層①(D-18)、整地層②(D-18)、北側トレンチ堀2覆土2層炭化地層からは、炭化種実の他、炭化材、土器片などの遺物が確認された。

炭化種実、栽培植物のイネの籾や短粒極小型を含む炭化米、アワ、オオムギ、コムギ、ソバと、草本のイネ科、イヌタデ近似種、タデ属、イヌコウジュ属が確認され、整地層①のイネが14世紀前半～15世紀前半、整地層②のコムギが14世紀初頭～15世紀初頭、堀2覆土2層炭化層のイネが15世紀前半～後半、オオムギが15世紀前半～17世紀前半の暦年代を示した。オオムギは年代幅が広くになっているが、これは当該期の較正曲線が波打っていることに由来する。

穀類のイネ、アワ、オオムギ、コムギ、ソバは、相良頼景館跡近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。また、一部のイネ、アワの炭化穀粒表面に果皮(籾)が残ることから、脱粒(だっぶ:籾殻を取り去る)前の段階で火を受けたと推測される。

栽培植物を除いた分類群は、草本で中生植物のイネ科、イヌタデ近似種、タデ属、イヌコウジュ属は、調査区周辺の明るく開けた草地に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。

種実遺体分析で検出された炭化材は、一部の樹種同定と年代測定の結果、全て常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定され、整地層①-1が13世紀後半～末、整地層①-2が13世紀前半～末、整地層②が14世紀初頭～15世紀初頭の暦年代を示した。

アカガシ亜属は、現在でも遺跡周辺の自然度の高い場所に自生する。アカガシ亜属は、常緑広葉樹林の主要な構成種であり、当時の山野にも普通に生育していたと考えられる。アカガシ亜属は非常に重堅な木材で、古くから農耕具として用いられるほか、火持ちが良いため薪炭材としても有用である。なお、アカガシ亜属の炭化材は堅牢であるため、土壌を水洗した場合でも壊れにくい。本分析調査でアカガシ亜属のみが同定されたのは、当時の植物利用を反映しているということではなく、堅牢という木材の性質によると考えられる。

また、これらの炭化穀類やアカガシ亜属炭化材から得られた年代は、文献資料等から推定された相良氏の中世期の館の存続年代を含んでおり、館の存続年代を示す科学的な証拠となり得るものとして評価することができる。

一方、北側堀跡トレンチの H-26～29 からは、種実は確認されず、炭化材がわずかに検出されるのみであった。さらに炭化材の細片を集めたものが、館の構築年代よりもはるかに古い 7 世紀初頭～中頃の暦年代を示した。これは、試料が抽出された土層の堀内における堆積年代を示すものではなく、土壌が堀内に流れ込む以前に、周辺の地表で土壌が形成された頃に混入した古い時代の炭化材に由来する年代であると考えられる。

植物珪酸体分析の結果、北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)、D-17、18、20)、北側堀跡トレンチの H-27、28 の全ての試料からイネが検出され、一部の試料でムギ類(頰の表皮細胞)も認められた。北側土壘トレンチ整地層①や整地層②からはイネやコムギ、アワ、堀2覆土2層炭化層からはイネやオオムギの炭化種実も検出されていることも考慮すれば、当時は調査区周辺でイネやムギ類の栽培が行われていたと考えられ、その土壌(耕作土)が遺構構築の際に利用されたと推定される。

各層準の堆積当時は、周辺にススキ属、ウシクサ族(チガヤ属など)、キビ族などのイネ科草本類、マダケ属(おもにネザサ節)、マダケ属・ホウライチク属などの竹笹類が生育しており、部分的にヨシ属が生育するような湿潤などとも存在していたと考えられる。また、周辺地域にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

全ての試料から検出されたマダケ属型には、マダケ属とホウライチク属が含まれている(杉山・藤原,1986;杉山,1987)。このうち、マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用品、食用などとしての利用価値が高い。また、ホウライチク属は生け垣や編み細工などに利用され、稈の繊維は火縄銃の火縄に利用された。植物珪酸体分析でマダケ属型が確認されるのは、おおむね中世以降であり、一般的に見られるようになるのは近世以降である。

## 引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―. *考古学と自然科学*, 9, 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―. *考古学と自然科学*, 17, 73-85.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31. 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32. 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33. 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34. 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35. 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 長岡信治・新井房夫・榎原 徹, 2010, 宮崎平野に分布するテフラから推定される過去60万年間の霧島火山の爆発的噴火史. *地学雑誌*, 119, 121-152.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐藤敏也, 1988, 弥生のイネ. 弥生文化の研究 2 生業. 金関 怨・佐原 真編. 雄山閣, 97-111.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of <sup>14</sup>C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定―古環境推定の基礎資料として―. *考古学と自然科学*, 19, 69-84.
- 杉山真二, 1987, タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 31, 70-83.
- 杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史 第四紀研究, 38, 109-123.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール). *考古学と植物学*. 同成社, 189-213.
- 杉山真二, 2009, 植物珪酸体と古生態. 人と植物の関わりあい④. 大地と森の中で―縄文時代の古生態系―. 縄文の考古学Ⅲ. 小杉康ほか編. 同成社, 105-114.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実―形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂―. ネ

イチャーウォッチングガイドブック,誠文堂新光社,303p.

椿坂恭代,1993.アワ・ヒエ・キビの同定.吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

令和3年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析(年代測定)業務(No. 29011-1)

令和3年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務(No. 29011-2)

令和4年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託(No. 32993)



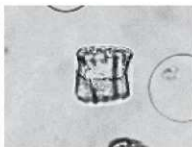
図版1 相良頼景館跡の植物珪酸体



イネ  
整地層①



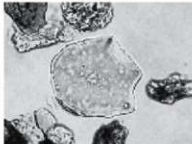
イネ  
北側土屋 3



イネ(側面)  
整地層①



ムキ類( 絹の表皮細胞)  
北側土屋 1



ヨシ属  
整地層①



キビ族型  
北側土屋 1



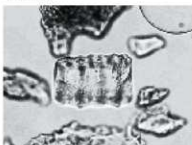
ススキ属型  
整地層①



ウシクサ族A  
北側土屋 1



メダケ節型  
北側土屋 2



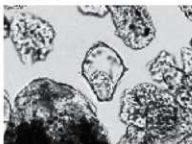
ネザサ節型  
北側堀 2



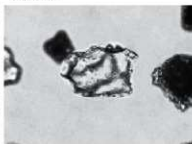
テマキザサ節型  
北側堀 3



ミヤコザサ節型  
北側土屋 2



マダケ属型  
北側土屋 3



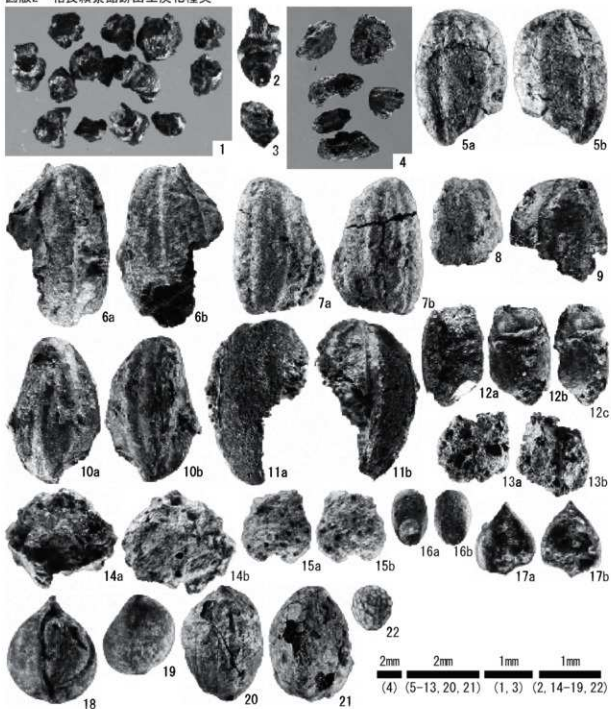
フナ科( シイ属)  
北側土屋 2



マンサク科( イスノキ属)  
北側堀 3

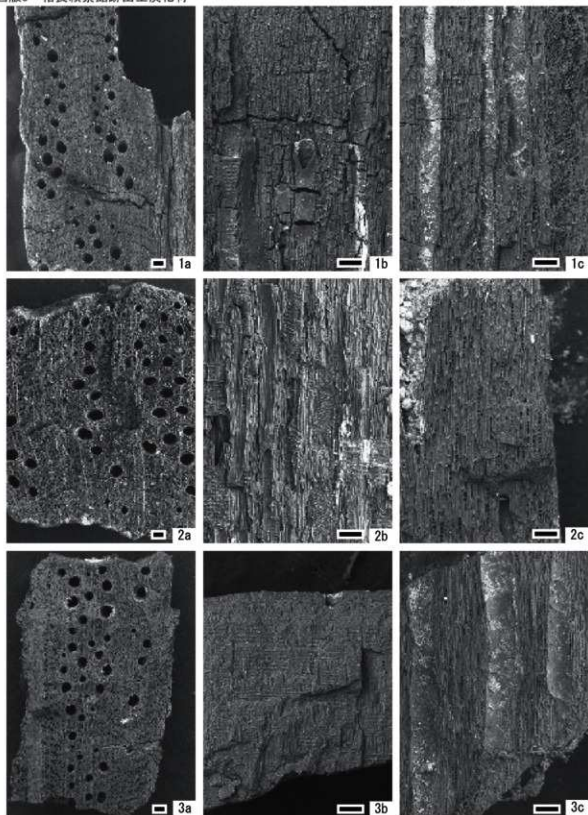
50 μm

図版2 相良頼景館跡出土炭化種実



- |                                  |                                    |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 1. イネ 粳(基部)(北側土壘:整地層①)           | 2. イネ 粳(基部)(北側土壘:整地層①)             |
| 3. イネ 粳(基部)(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層) | 4. イネ 粳・玄米(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層)    |
| 5. イネ 玄米(北側土壘:整地層①)              | 6. イネ 玄米(北側土壘:整地層①)                |
| 7. イネ 玄米(北側土壘:整地層①)              | 8. イネ 玄米(北側土壘:整地層①)                |
| 9. イネ 粳・玄米(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層)  | 10. イネ 玄米(稲果)(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層) |
| 11. オオムギ 穎果(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層) | 12. コムギ 穎果(北側土壘:整地層②)              |
| 13. コムギ 穎果(北側土壘:整地層②)            | 14. アワ 果実(北側土壘:整地層①)               |
| 15. アワ 穎果(北側土壘:整地層②)             | 16. イネ科 穎果(北側土壘:整地層①)              |
| 17. イヌタデ近似種 果実(北側土壘:整地層①)        | 18. タデ属 果実(北側土壘:整地層①)              |
| 19. タデ属 果実(北側土壘:整地層①)            | 20. ソバ 種子(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層)     |
| 21. ソバ 種子(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層)   | 22. イヌコウジュ近似種 果実(北側土壘:整地層①)        |

図版3 相良頼景館跡出土炭化材



1. アカガシ亜属(北側土壘トレンチ:整地層①)
2. アカガシ亜属(北側土壘トレンチ:整地層②)
3. アカガシ亜属(北側トレンチ 堀2 覆土2層:炭化物層)

a:木口 b:柱目 c:板目  
スケールは100 $\mu$ m

## はじめに

本分析調査では、東光寺の磨崖梵字内黒色付着物の材質を検討するために、電子顕微鏡観察を実施する。また、磨崖梵字の崖線下の岩盤直上の堆積層であるグライ化した層を構成する土壌と、石窟奥壁付近の土壌を対象として、種実遺体や炭化材等の微細遺物の洗い出し抽出・同定および放射性炭素年代測定を実施し、時期や周辺環境、植物利用に関する資料を作成する。

## I. 梵字付着物電子顕微鏡観察

## 1. 試料

試料は、崖線を構成する岩石に彫られた梵字内の黒色付着物 1 点である。

## 2. 分析方法

崖線を構成する岩石に彫られた梵字内部の黒色付着物を、カーボン両面テープを用いて剥がす。デジタルマイクロスコープや双眼実体顕微鏡下で、柄付き針等を用いて、両面テープ上の付着物を採取、新しいカーボン両面テープに裏返して貼り付ける(岩石に付着部分が表になっているため、反転させる)。これを電子顕微鏡で観察する。

## 3. 結果

図版11に電子顕微鏡写真を示す。付着物は脆く、両面テープから移し替える際に、注意深く作業しないと簡単に崩れる。電子顕微鏡観察の結果、1~2 $\mu\text{m}$ 程度の不定形の物質が多数吸着しているように見える。漆などの塗料表面は基本的に平滑で、このような形状にならない。また、墨粒子(0.1~0.2 $\mu\text{m}$ )とも大きさの点で区別される。これらは、空中を漂っている1~2 $\mu\text{m}$ 程度の塵と考えられる。細かな塵は、窪みの中では風雨による影響を受けにくいので、徐々に溜まって黒ずんで見えるようになったと考えられる。

## II. 岩盤直上(12層)・石窟奥壁付近の分析

## 1. 試料

試料は、岩盤直上のグライ土層(12層)より採取された土壌 1 点と、石窟奥壁付近より採取された土壌 1 点の、計 2 点である。調査所見によれば、岩盤直上(12層)は、崖線下の現表土から 1.6m 下にグライ化した層が確認されている。この堆積層の年代と磨崖梵字作成の年代とは異なるものとされているが、具体的な年代は不明とされる。

## 2. 分析方法

## (1)種実遺体分析

岩盤直上(12層)試料は水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。石窟奥壁付近試料は、常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(岩片主体)を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後

の試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の他、主に 4mm 以上の炭化材をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、岩片主体、植物片は重量を一覧表に併記する。

分析後は、一部の炭化材を同定と年代測定に供する。他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

#### (2)炭化材同定

試料は、種実遺体分析で得られた炭化材のうち、大きなもの各 2 点の、計 4 点を対象とする。炭化材は微小で年代測定用と樹種同定用に分割できないため、年代測定用試料調製を行う際に木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面を作成し、双眼実体顕微鏡で観察する。分割した試料も含め、全てを年代測定用試料とする。木材組織特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

#### (3)放射性炭素年代測定

試料 4 点は、炭化材同定試料と同一である。試料の表面に付着した泥などの不純物をできるだけ取り除いた後、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置(NEC 社製)を用いて、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定する。AMS 測定時に、米国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(AEA-C6 等)、バックグラウンド試料(AEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$  は試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正は、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、その後訂正された半減期( $^{14}\text{C}$  の半減期 5730±40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020)、Bomb21 NH2(Hua et al.,2021)である。

### 3.結果

#### (1)種実遺体分析

結果を表 1 に示す。岩盤直上(12 層)は、試料 600cc(1kg)より、炭化材 0.23g(最大 0.9cm)、炭化材主体 0.63g、岩片主体 119.17g、植物片 0.12g、種実 5 個(広葉樹のヒサカキ属、アカメガシワ、スノキ属?)が検出された。

石窟奥壁付近は、試料 1023g より、炭化材 26 個 0.26g(最大 1.1cm)、炭化材主体 0.05g、軽石主体(岩片含む)22.84g、火山ガラス主体(植物片含む)72.70g、植物片 0.77g、種実 44 個(広葉樹のコナラ属、ヒサカキ属、フユイチゴ類、キイチゴ属、タラノキ、草本のアキギリ属)が検出された。

表1. 東光寺の種実遺体分析・炭化材同定結果

分類群・部位・状態・粒径	岩盤直上の グライ土層 (12層)	石窟 奥壁付近	備考
炭化材			
スギ?	1	-	(個),年代測定
アカガシ亜属	-	2	(個),年代測定
アカガシ亜属?	1	-	(個),年代測定
炭化材	8.99	10.94	最大径(mm)
>4mm	0.05	0.13	乾重(g),一部樹種同定・年代測定
4~2mm	0.18	0.14	乾重(g),23個
炭化材主体	0.14	0.03	乾重(g)
2~1mm	0.48	0.02	乾重(g)
1~0.5mm			
岩片主体	>4mm	38.52	- 乾重(g)
4~2mm	16.20	-	乾重(g)
2~1mm	14.43	-	乾重(g)
1~0.5mm	50.01	-	乾重(g)
軽石主体	>4mm	-	15.46 乾重(g),岩片含む
4~2mm	-	7.38	乾重(g),岩片含む
火山ガラス主体	2~1mm	-	25.25 乾重(g),植物片含む
1~0.5mm	-	47.45	乾重(g),植物片含む
植物片		0.12	0.77 乾重(g)
種実			
コナラ属 果実 破片	-	1	(個)
ヒサカキ属 種子 完形	1	31	(個)
	-	4	(個)
フユイチゴ類 核 完形	-	1	(個)
キイチゴ属 核 完形	-	2	(個)
	-	3	(個)
アカメガシワ 種子 破片	1	-	(個)
タノキ 核 完形	-	1	(個)
スノキ属? 種子 完形	3	-	(個)
アキギリ属 果実 完形	-	1	(個)
分析量	600	-	容積(cc)
	1000	1023	湿重(g)

なお、炭化していない植物片、種実は、後代の混入と判断されるため、考察より除外する。炭化材は、岩盤直上(12層)より2点、石窟奥壁付近より2点の、計4点を炭化材同定と年代測定試料に供した。

## (2)炭化材同定

結果を表1に示す。炭化材は全てを年代測定に用いたため、電子顕微鏡用の試料を作成できなかった(電子顕微鏡観察にはカーボンテープ等で試料を導通させる必要があり、これが年代測定用に影響する可能性がある)。双眼実体顕微鏡観察では、岩盤直上(12層)が常緑針葉樹のスギと常緑広葉樹のアカガシ亜属、石窟奥壁付近が2点ともアカガシ亜属に同定された。以下、植物解剖学的所見を記す。

### ・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)? スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急である。晩材部の幅は比較的広く、細胞壁は厚い。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1~10細胞高。

### ・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で1~15細胞高のもの、複合放射組織とがある。

表2. 東光寺の放射性炭素年代測定結果

試料	種別/ 性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代			Code No.			
					年代値				確率%		
					$\sigma$	$2\sigma$					
石窟 風簷付近	炭化材 (アカガシ 葉炭)	AAA (1M)	F14C: 1,0207±0.0028	-32.64 ±0.23	$\sigma$	cal AD 1956 - cal AD 1956	5.9	pal- 14662	PLD- 49460		
						cal AD 2014 - cal AD 2016	62.4				
					$2\sigma$	cal AD 1955 - cal AD 1956	12.6				
		cal AD 2014 - cal AD 2018	82.8								
	$\sigma$	cal AD 1898 - cal AD 1723	23.0								
		cal AD 1814 - cal AD 1835	20.6								
岩盤 風簷付近	炭化材 (アカガシ 葉炭)	AAA (1M)	90±20 (92±21)	-25.95 ±0.24	$\sigma$	cal AD 1884 - cal AD 1910	24.7	pal- 14663	PLD- 49461		
						cal AD 1693 - cal AD 1728	26.3				
					$2\sigma$	cal AD 1811 - cal AD 1918	69.1				
	$\sigma$	cal AD 1053 - cal AD 1076	29.6								
		cal AD 1156 - cal AD 1176	30.9								
		cal AD 1194 - cal AD 1201	25.7								
岩盤直上の グライ土層 (12層)	No.1	炭化材 (スギノ)	900±15 (901±16)	-26.25 ±0.13	$\sigma$	cal AD 1201 757 - 750 cal BP	7.7	-	PLD- 46455		
						cal AD 1047 - cal AD 1084	34.8				
						cal AD 1129 - cal AD 1139	82.1				
						cal AD 1149 - cal AD 1216	80.1				
					$2\sigma$	cal AD 1212 - cal AD 1233	736 - 717 cal BP			40.1	
						cal AD 1240 - cal AD 1260	711 - 690 cal BP			28.2	
	No.2	炭化材 (アカガシ 葉炭)	AAA (1M)	830±20 (832±18)	-29.30 ±0.18	$\sigma$	cal AD 1176 - cal AD 1265	775 - 685 cal BP	95.4	-	PLD- 46466

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5)暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用

6)暦年の計算には、補正年代(σ)で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。

7)1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めない。

8)統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$  が68.2%、 $2\sigma$  が95.4%である

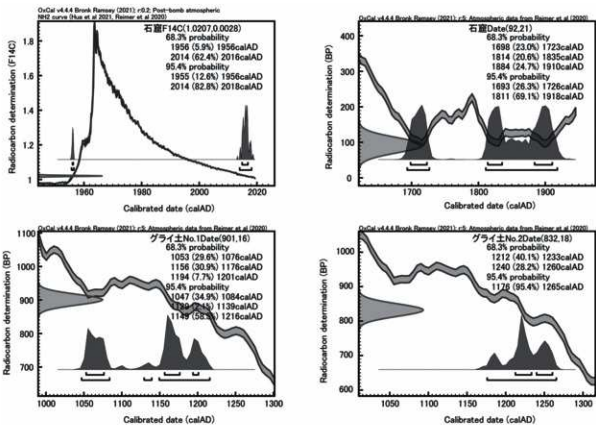


図1 東光寺の暦年較正結果

### (3)放射性炭素年代測定

結果を表 2、図 1 に示す。いずれの試料も測定に必要なグラフィイトが得られた。

同位体補正を行った値は、岩盤直上(12 層)の No.1(スギ?)が 900±15BP、No.2(アカガシ亜属?)が 830±20BP、石窟奥壁付近の pal-14662(アカガシ亜属?)が現代、pal-14663(アカガシ亜属?)が 90±20BP である。

暦年代(2σ)は、No.1(スギ?)が calAD1047~1216、No.2(アカガシ亜属?)が calAD1176~1265、pal-14662(アカガシ亜属?)が calAD1955~1956、2014~2018、pal-14663(アカガシ亜属?)が calAD1693~1918 である。

## 4.考察

### (1)岩盤直上(12 層)

岩盤直上のグライ土層(12層)から抽出された炭化材2点は、年代値が近接しており、暦年代でNo.1(スギ?)が11世紀半ば~13世紀前半、No.2(アカガシ亜属?)が12世紀後半~13世紀後半を示している。発掘調査資料によれば、磨崖梵字に係るとされる東光寺は平安時代創建の寺院とされていることから、今回の年代測定された炭化材は、東光寺創建以降の周辺での人間活動に伴うものである可能性がある。

グライ土層検出の種実遺体はいずれも炭化しておらず、保存状態がよいことから後代の混入物であるが、一方の炭化材は測定年代が示す当時に堆積した植物質遺物に由来すると考えられる。検出された種類は、常緑広葉樹のアカガシ亜属と常緑針葉樹のスギである。アカガシ亜属は、現在でも遺跡周辺の自然度の高い場所に自生する。また、常緑広葉樹林の主要な構成種であり、当時の山野にも普通に生育していたと考えられる。アカガシ亜属は、非常に重堅な木材で、古くから農耕具として用いられるほか、火持ちが良いため薪炭材としても有用である。スギも現在の遺跡周辺に多く分布しているが、これらは植林である。しかし、スギは温暖で多湿な環境を好むことから、かつては谷沿いや低地などに分布していたと考えられ、入手しやすい木材であったと考えられる。スギはたくてまっすぐな木材が得やすいこと、軽軟で加工が容易であること、水湿に強いことから、建築材をはじめ様々な用途に古くから利用されてきた木材である。今回検出されたアカガシ亜属やスギは当時利用されていた木材が火熱を受けて炭化し、残存したものと考えられる。

### (2)石窟奥壁付近

種実遺体はいずれも炭化しておらず、保存状態がよいことから後代の混入物と考えられる。アカガシ亜属に同定された炭化材の年代値も、1点は現代、もう1点は約90年前を示す。アカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要な構成種であり、極相林を構成する高木である。アカガシ亜属は長寿であり、樹齢が100年以上の樹木も珍しくない。このことから、樹心に近い部分であれば、100年前の年代値を示す可能性がある。このことから、炭化材も種実と同様、後代の混入物である可能性が高い。

## 引用文献

Bronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.

林 昭三.1991.日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

Hua Q., Turnbull J. C., Santos G. M., Rakowski A. Z., Ancapichün S., De Pol-Holz R., Hammer S., Lehman S. J., Levin I., Miller J. B., Palmer, J. G., & Turney C. S. M.2021. Atmospheric Radiocarbon For The Period 1950 - 2019. *Radiocarbon*,63,1-23.

伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81-181.

伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83-201.

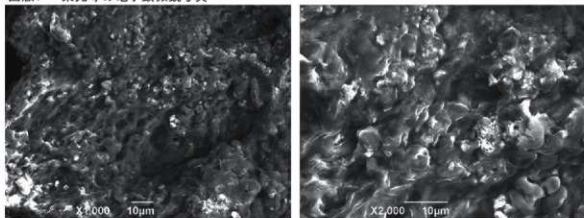


- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京大木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京大木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版),東北大学出版会,678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2018,草木の種子と果実一形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂一.ネイチャーウォッチングガイドブック,誠文堂新光社,303p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

令和3年度 東光寺磨崖梵字の自然科学分析業務(No. 31326)

令和4年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託(No. 32993)

図版1 東光寺の電子顕微鏡写真



梵字内付着物

# 人吉盆地に分布する石塔に用いられた黑色物質の材質調査

九州国立博物館 志賀 智史

## はじめに

熊本県の人吉盆地には、中世の相良氏に関わる五輪塔、層塔、磨崖板碑などの石塔が数多く分布している。石塔のほとんどは凝灰岩製で、刻まれた梵字等の掘り込み内には黑色物質が塗布されているものが多い。今回、多良木町教育委員会からの依頼より、この黑色物質の材質調査を行ったので、その結果を報告する。

## 1. 調査資料

下記7基の石塔を調査対象とした。①～⑤は多良木町に、⑥と⑦は人吉市にある。

- ①東光寺磨崖板碑
- ②青蓮寺伝頼景塔
- ③蓮花寺跡 23 号塔
- ④蓮花寺跡 35 号塔
- ⑤多良木小隣接墓地層塔
- ⑥永国寺層塔
- ⑦大柿地区伝平重盛塔

## 2. 調査方法

多良木町企画観光課の永井孝宏氏の立ち合いのもと、現地において実体顕微鏡および蛍光 X 線分析を用い、非破壊、非接触にて調査を行った。調査風景を写真 1 に示す。

最初に、黑色物質等の付着状況を確認するため、実体顕微鏡観察を行った。観察には、ニコン小型双眼実体顕微鏡ファールブ (20 倍) と白色 LED ライトを用いた。

次に、黑色物質等の主成分元素を知るため、蛍光 X 線分析を行った。測定には、EVIDENT (旧 Olympus) 社 DELTA Standard を用い、X 線管球 Rh (ロジウム)、検出器 SDD、測定径約 9 mm、大気、手持ち、Mining plus モード (管電圧 10kV および 40kV、測定時間各 15 秒の計 30 秒) の条件で行った。検出可能な元素は、Mg (マグネシウム) ～ U (ウラン) である。10kV での測定は、軽元素の検出を目的とした。測定は、資料ごとに 1 回～複数回行った。

蛍光 X 線分析は、多くの元素の測定が可能であるが、一部の元素はピークが重なり、そのどちらの元素かや混在の判断が難しいものがある。また、測定に用いる X 線は、ある程度の深さ方向まで到達するため、測定結果にも深さ方向の元素情報が含まれる。



写真 1 調査風景 (蛍光 X 線分析)

## 3. 調査結果

文化財に用いられた黑色物質には、古代以降では墨が最も良く知られている。古墳時代の九州に分布する装飾古墳では、炭素 (黒以外) や黄色マンガンド物の使用が知られている (山崎 1987)。漆なども候補となるかもしれない。また、石塔は伝世品であることから、後世に補われた材料が存在する可能性も十分考えられる。

実体顕微鏡による観察の結果、黑色物質は明瞭に黒く良く残っており、明らかに塗布されているように見える。顕著な粒子感はなく、炭素やマンガンの使用は想定しがたい。表面には樹脂状光沢や

漆特有の縮みも認められないことから、漆が使用された可能性は低い。その他、塗布を思わせる人工的な附着物は認められなかった。

蛍光X線分析の結果(スペクトル)を図1～10に示す。軽元素主体の10kVのスペクトルは省略した。複数個所の測定を行った資料については、代表的なスペクトルのみを示した。

①～③(図1～6)では、石塔ごとに黒色物質塗布部分と黒色物質が塗布されていない部分の測定を行った。前者に後者よりも高いピークが認められれば、その元素が黒色物質に由来するものと判断できるが、いずれも顕著な違いは認められなかった。

図中の「(Rh)」(ロジウム)と「(散乱)」は、測定機器由来のピークと考えられる。Ni(ニッケル)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)などの低いピークも通常確認されるため、測定機器由来と考えられる。

ある程度以上の高さのピークを持つFe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)等は岩石に一般的に含まれており、黒色物質塗布の有無に関わらず各資料とも類似した状況でもあり、基本的には全て石材由来と考えられる。

低いピークを持つ元素の評価は大変難しいが、ほとんどは石材由来と考えられる。Au(金)やPb(鉛)の検出は気になるが、両元素は石材からも検出されており、少なくとも黒色物質に由来するものとは考え難い。

また、Ba(バリウム)とTi(チタン)のピークのうち4.5keV付近にあるものは、ほぼ同じ位置にピークがあり、ピークが低いこともあってどちらの元素が含まれているのか、また両方の元素が含まれているのか判断が難しい。ただ、①の黒色物質塗布部分には、32keV付近や36.5keV付近にもBaの低いピークが確認されるため、Baが含まれている可能性は考えられる。Tiは岩石や土壌に含まれる元素として一般的である。一方、Baは弥生時代の鉛バリウムガラス以外、江戸時代以前の文化財ではほとんど使用されていない。良く知られているものとしては、近代以降の塗料の増量剤や増粘剤等として用いられる無色透明(粉末では白色)の化合物であるBaSO<sub>4</sub>(硫酸バリウム、重晶石)がある。この同定には、結晶構造や分子構造の調査が必要である。

なお、黒や炭素であれば、C(炭素)が検出される。しかし、Cは軽元素であり、今回の測定条件では検出することができない。

④、⑤、⑦(図7、8、12)では、黒色物質塗布部分のみの測定を行った。いずれも①～③と同様な結果で、黒色物質に由来すると思われる元素は検出されなかった。

⑥(図9～11)では、黒色物質だけでなく赤色物質や白色物質も塗布されており、それぞれ測定を行った。黒色物質塗布部分は、①～⑤、⑦と同様な結果で、黒色物質に由来すると思われる元素は検出されなかった。赤色物質塗布部分は、Fe(鉄)の高いピークが認められるため、ベンガラなどの鉄を含む赤色顔料が使用されている可能性がある。白色物質塗布部分は、Caの高いピークが認められるため、胡粉などのカルシウムを含む白色顔料が使用されている可能性がある。

## おわりに

黒色物質の材料として蛍光X線分析では顕著なピークは認められなかったため、消去法的には今回の測定機器では検出できない元素であるCに由来する黒の使用が最も考えやすい。しかし、低いピークながら①の黒色物質塗布部分でのBaの検出を考えると、近代以降の材料が含まれている可能性も考えなければならない。これら未解明な点を明らかにするためには、今回の調査結果を念頭に置いた上で、再度の詳細な観察、元素の面的な分布状況の把握、X線回折やラマン分光による結晶構造や分子構造の調査等を行う必要がある。今後の更なる調査に期待したい。

## 参考文献

- 山崎一雄 1987「装飾古墳の顔料」『古文化財の科学』同朋舎  
(初出：1951「装飾古墳の化学的研究」『古文化財の化学』2)

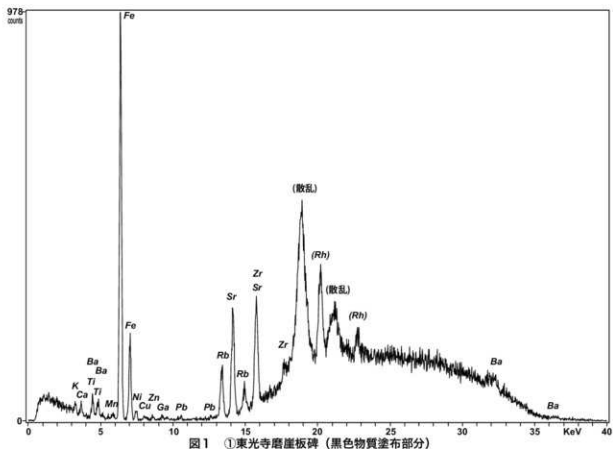


圖1 ①東光寺磨崖板碑 (黑色物質塗布部分)

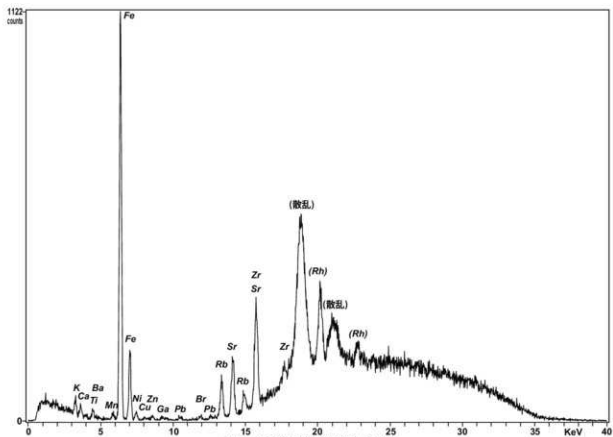


圖2 ①東光寺磨崖板碑 (石材)

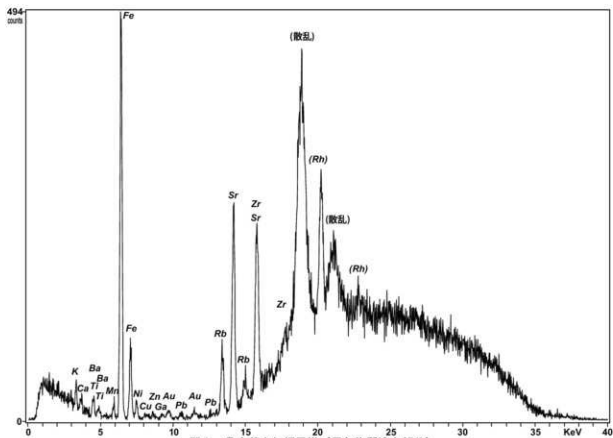


圖3 ②青蓮寺伝頼景塔 (黑色物質塗布部分)

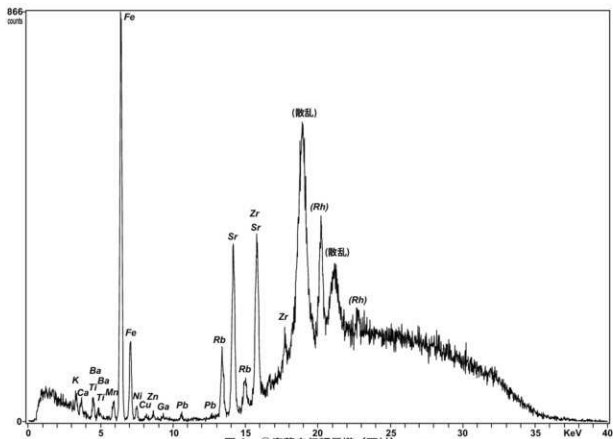


圖4 ②青蓮寺伝頼景塔 (石材)

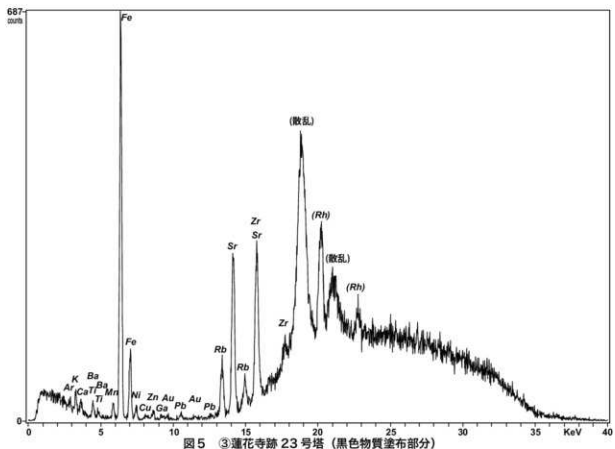


图5 ③蓮花寺跡 23号塔 (黑色物質塗布部分)

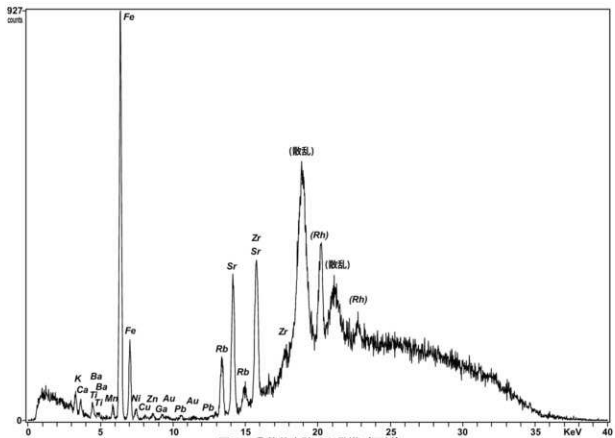


图6 ③蓮花寺跡 23号塔 (石材)

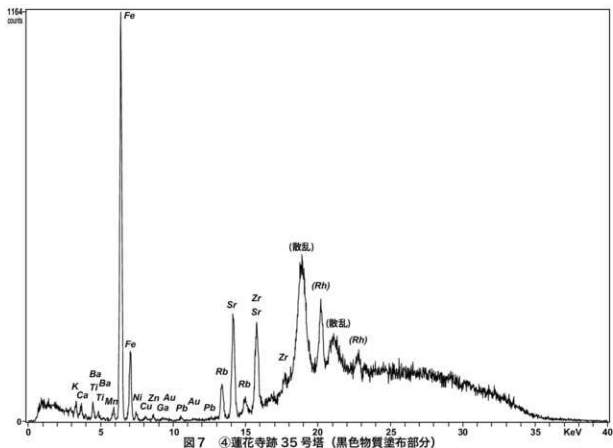


圖7 ④蓮花寺跡 35号塔 (黑色物質塗布部分)

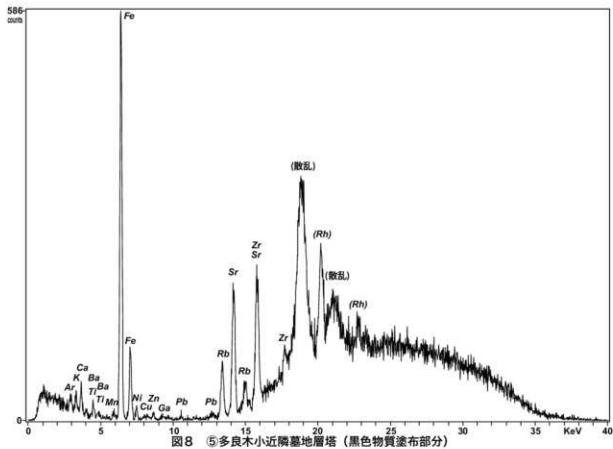
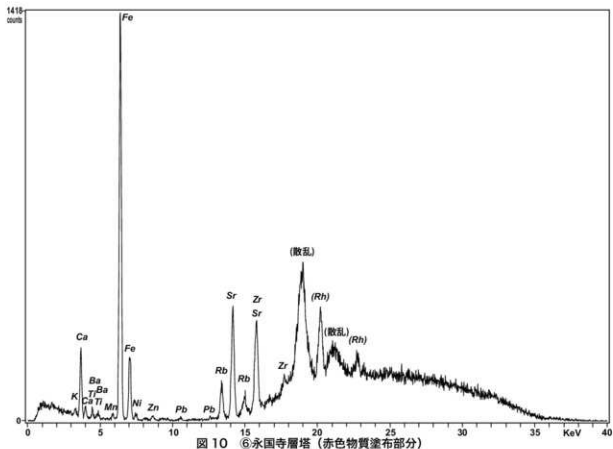
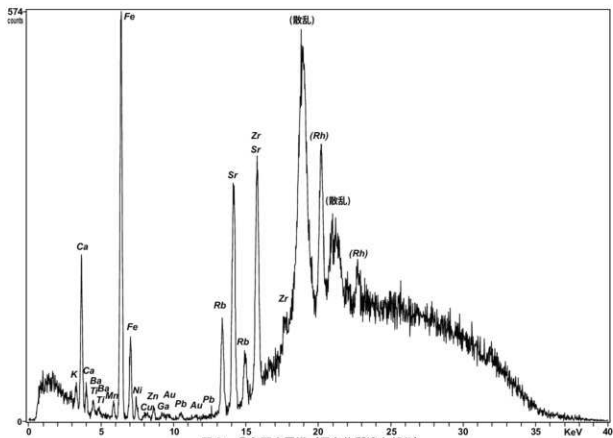


圖8 ⑤多良木小近隣墓地層塔 (黑色物質塗布部分)





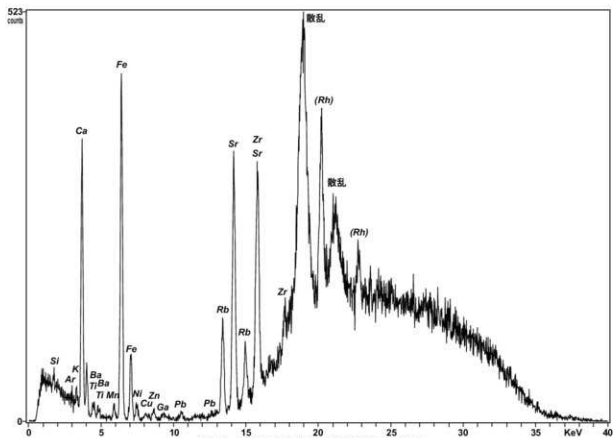


图 11 ⑥永国寺雁塔 (白色物质塗布部分)

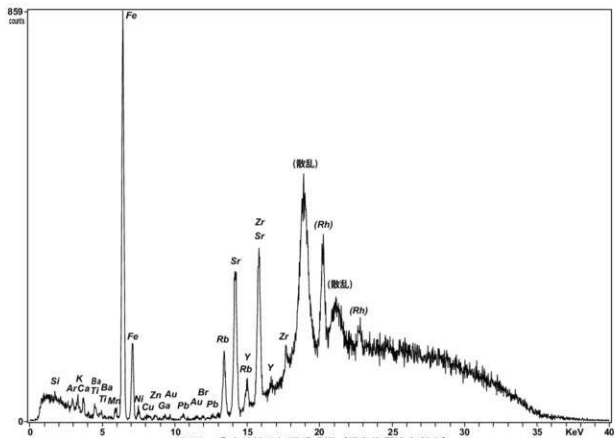


图 12 ⑦大栴地区伝平重盛塔 (黑色物质塗布部分)

## 第八章 総括

### 第1節 多良木相良氏研究の諸論

文献・陶磁器など関係する史資料をとおした視点から、多良木相良氏の地域社会での展開を追究する必要があるため、以下の論稿を掲載する。

**稲葉継陽**（熊本大学 永青文庫研究センター長）

「文献史料から見た多良木相良氏家・相良氏」

**小野正敏**（国立歴史民俗博物館 名誉教授）

「蓮花寺・伝相良頼景館跡と相良氏関連遺跡出土の貿易陶磁器調査」

**狭川真一**（大阪大谷大学 文学部歴史文化学科教授）

「青蓮寺壇上積基壇の系譜」

「東光寺磨崖梵字の系譜」

**鶴嶋俊彦**（元人吉城歴史館長）

「多良木相良氏の城館遺跡」

**有木芳隆**（公益財団法人 永青文庫副館長）

「中世多良木の仏像と多良木相良氏」

**村木二郎**（国立歴史民俗博物館 准教授）

「東光寺経塚と出土資料について」

# 文献史料からみた多良木相良家・相良氏

稲葉 継陽

はじめに

## (1) 文献史料をめぐる状況

遠江国相良荘を本領とし、鎌倉時代初期に球磨郡多良木村および人吉荘地頭職を得て、13世紀中葉までに球磨郡を本拠として在地に定着した鎮西相良氏に関する文献史料は、近世大名相良家のもとに伝来した文書群＝「相良家文書」に恵まれている。同文書群は、すでに大正6・7年の段階で東京帝国大学史料編纂掛編『大日本古文書 家わけ第五』として刊本化され、ひろく利用されてきた。

「多良木相良氏」は、中世多良木村を本領として伝化した「多良木相良家」を核に、上球磨地域に一揆的権力を保持した武士団である(小川・2018)。じつは近世大名相良家は、15世紀中葉にこの多良木相良家・相良氏＝正統相良氏を滅ぼして球磨郡内を統一した永富相良家(本拠地は下球磨の山田)に出自をもつ。こうした、相良氏の長い歴史に孕まれた断層は、多良木相良氏の研究に以下のような制約条件を付与することになった。

第一に、多良木相良家の家伝文書群の大半が、おそらく15世紀中葉に失われたことである。「相良家文書」は、鎌倉～室町前期の相良氏の動向、わけても多良木相良家の動向については、鎮西相良氏の嫡流であったにもかかわらず、多くを語らない。

第二に、傍流のため正統性をもたなかった永富相良家＝大名相良家では、すでに16世紀中葉段階から、鎮西相良氏初代の頼景以来一貫した大名相良家の歴史叙述が試みられた(天文5〔1536〕年「沙弥洞然長状」『大日本古文書 家わけ第五 相良家文書之一』319号。以下、相319のように略記)。それは多良木相良家・相良氏の歴史に一定の改変を施して相良長統以降の事績と接続させ、近世後期の相良家における家史『歴代嗣誠独集覽』『南藤蔓綿録』『求麻外史』へと引き継がれて、定説化することになった。その結果、永富相良長統による人吉相良家や多良木相良家の実力による抹殺という歴史を隠蔽し、大名相良家の歴史を頼景以来の正統性を誇るものとする、いわば「正史」が定着することになった。この問題が明確に指摘され、「正史」が自覚的に批判されるには、じつに1980年まで待たねばならなかった(服部・1980)。

その後の相良氏研究は、中世球磨郡の荘園公領制秩序の形成過程と、相良氏の球磨郡への定着の事情を追究した工藤敬一の研究(工藤・1992)を媒介に、2015年の熊本県立美術館特別展「日本遺産記念展 ほとけの里と相良の名宝 人吉球磨の歴史と美」の図録に結実した学際共同研究へと発展し、その成果は稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』(戎光祥出版、2020年)にまとめられた。特別展準備の過程では、現在慶應義塾図書館に所蔵されている「相良家文書」のうちから、永富相良家による操作が加えられる以前の相良氏系図(相良・工藤系図)が発見されるなど、多良木相良氏に関する研究も大きく進展する可能性が示された。

## (2) 多良木相良家と多良木相良氏

なお、相良頼景を始祖とし、13世紀前期から15世紀中葉まで上球磨のうちの多良木村を領有する主体(「惣領」)は、限られた中世史料と相良・工藤系図の記載によれば、次のように変遷すると考えられる。

頼景—長頼(蓮仏)—頼氏(浄蓮)—頼宗—経頼…頼忠…頼久

本稿では、13世紀段階には相良氏「惣領」とされ、多良木の領主として上球磨地域の在地領主層の結合の核となり、15世紀中葉の頼久期に永富相良長統に滅ぼされた上記の家筋を、「多良木相良家」と呼ぶ。そして、その周辺に分出された一族庶子・庶子家をも含めた多良木相良一族の総体を、「多良木相良氏」と呼ぶことにする。

### ③ 球磨郡の荘園公領制と相良氏

多良木相良家・相良氏の歴史を限られた中世史料から復元するに際しては、まず、工藤敬一・小川弘和によって明らかにされた中世球磨郡の荘園公領制的秩序（工藤・1992、小川・2015、2016）について確認する必要がある。

前提となるのは、平安最末期における蓮華王院領（領家は八条女院）「球磨御領」と呼ばれる半不輸の一部荘園の立荘と、それを在地側から支えた郡司の須恵氏や、中球磨に本拠をもち須恵氏と対立・協同を繰り返す平河氏といった有力在地領主が存在したことである。

しかし元暦2（1185）年に平家が滅亡すると、九州は幕府の内乱後処理政策にさらされ、球磨御領は没官されて建久3（1192）年頃に領域的に再編成（「片寄」）をうけ、一部2,000町が蓮華王院＝八条院領人吉荘600町、鎌倉殿御領500町、公田900町に三分割された。それを具体的に示すのが建久8（1197）年閏6月の球磨郡田数領主等目録（相2）であり、図示したのが工藤の作図と小川の修正にかかる図1である。

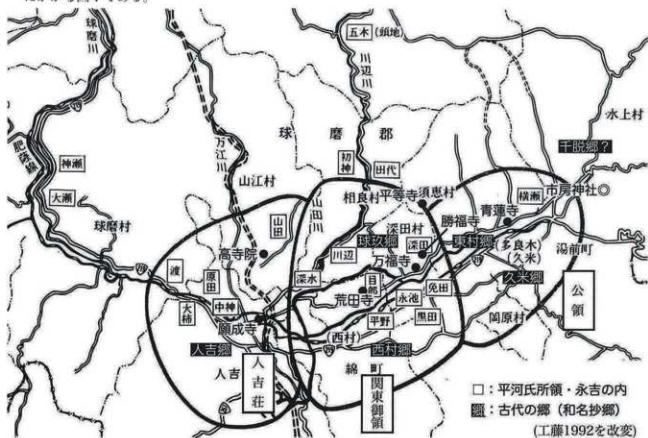


図1 中世球磨郡の荘園公領制（小川2015・2016）

工藤によれば片寄の眼目は、半不輸領であった球磨御領からの得分取得権として設定されていた平家領を、関東御領として郡衙のある中球磨で領域化し、平家のもとで組織されていた在地社会の中核に「関東のくさび」を打ち込むことであった。そして球磨御領に対する国衙支配権は上球磨の公田に、蓮華王院＝八条院のそれは下球磨の人吉荘へと集約・領域化された。

田数領主等目録によれば、上球磨＝公田の内部は大きく「豊富五百丁」と「豊永四百丁」とに区分されており、後者の内部単位的所領として「多良木村百丁 没官領」と記載されている。さらに多良木村を領有する主体として「伊勢弥次郎 不知実名」との名が記されている。球磨郡ないし肥後国に伊勢氏の存在はこれ以外知られないことから、伊勢弥次郎はこの平家没官領の地頭職を新恩として給与され関東から送り込まれた者であったと考えられている（松本・1977）。そして伊勢氏の跡をうけ、関東による上球磨支配の尖兵に採用されたのが、球磨御領と同じく蓮華王院＝八条院領であった遠江国相良荘を本貫地とする相良頼景であり、頼景の子息長頼は、やはり蓮華王院＝八条院の一円所領となった人吉



で、頼景が孫の頼重・頼元に宗頼の遺領を配分した。そのときには自分も譲状に加判し、そこには、頼元・頼重不和の場合には遺領を悔い返して長頼が知行するべきだと記載されていると主張している。両者ともに、①の本主が頼景であることに異論は唱えていない。頼景の肥後国での所領獲得が平家滅亡後の12世紀末であったことは確実である。

次に④について、頼重は、頼景が京女房に譲与し、その女房が出挙の質に入れ置いて流れそうになったとき、宗頼が請け出して知行したものを自分が伝領したと主張する。一方の長頼は、くだんの敷地は自分が親父の頼景から米30石で買徳したのであって、頼重の主張を虚言だとする。頼景は本領から都のぼつて番役をつとめる関東御家人の典型であった。

そして③について、頼重は「件四箇村井田地四十町」は建保2(1214)年に頼景自筆の譲状でもって宗頼に譲与されたが、宗頼は頼景に先立って死去した。そのため頼景のもとに戻り、一期の後は頼重が伝領するはずであった。ところが長頼が押領したと主張している。一方の長頼は、四箇村は宗頼には譲られておらず、自分が譲り得て「安堵御下文」を給わっていること。そして頼景が宗頼に所領を譲与する際に安堵の御下文を申請したときには、問題の四箇村は対象外だったはずだと主張している。幕府は、長頼が提出した安貞2(1228)年の頼景譲状等関係文書3通を証拠に、長頼の主張を認めている。

すでに多くの研究が指摘しているように、相良氏本領の相良荘には「相良堀内」があり(相33)、頼景自身が内乱初期に遠江国に在地していたことも『吾妻鏡』治承5(1181)年3月13・14日条に明らかである。頼景が12世紀末に①③の所領を獲得していたことは事実だが、頼景自身が球磨郡へ下向した事実を窺わせる一次史料を見いだすことはできない。

ここでは④「多良木村」が鎮西相良氏の12世紀末以来の根本所領であった事実、そこに今次の調査対象である東光寺のあった東光寺村が含まれていることが重要である。なお、本報告書収録の鶴嶋俊彦「多良木相良氏の城館遺跡」によれば、4村の地名から、中世所領「多良木村」の範囲は近世多良木村・黒肥地村の範囲に比定される。また「古多良」村は現多良木町東部の字「古多良木」に比定され、付近には横馬場、地藏堂、宮床、馬場田、門田といった在地領主制にまつわる字名がこのころ(松本・1977)。

## (2) 相良長頼(運仏) — 13世紀前期、多良木相良家の成立 —

このように、頼景の子息にして彼の遺領である多良木村等を相伝し、甥の頼重と争った長頼(運仏)は、元久2(1205)年に人吉荘地頭職を獲得した人物である。

下 肥後国球磨郡内人吉庄

補任 地頭職事

藤原永頼

右庄が平家没官領之間、可被補地頭之由依申、殊施軍功之故、以永頼可令為彼職之、但至有限之御年貢以下雜事者、地頭全不致違乱、可存公平之状、依鎌倉御下知如件、

元久二年七月廿五日 遠江守平朝臣御判

(奥裏書)

「此御下文、正文者、多良木殿令帶持給候之間、為中安堵、頼廣令借用、令持參候、下向之時者、可返進候、仍其間案文書留候焉、

元弘三年八月廿一日 頼廣(花押)(相3)

長頼はもとの「球磨御領」の蓮華王院=八条女院徳分を実体化した人吉荘が「平家没官領」であることを理由に地頭職を望み、補任されている。この背景に、相良氏の本領である相良荘が蓮華王院領であったという事情が存するとみられることは、前述したとおりである(小川・2015)。

なお奥裏書によれば、本下文の正文は「多良木殿」(相良経頼)が所持していたものを、元弘3(1333)年に人吉(佐牟田)相良家の頼広が人吉荘北方の還付(後述)を申請するに際して、借用して書写したものであることがわかる。長頼が人吉荘は多良木村とならんで相良氏の根本所領となったのであった。

長頼について、以下の点が注目される。

第一に長頼は人吉荘内に菩提寺として願成寺を建立するに際して、嘉禎3(1237)年に人吉荘福高

名の田地五町余を免田として寄進しているが、これは「運仏開発之余田」であった（『熊本県史料中世篇3』所収「願成寺文書」1・2号）。さらに仁治2（1241）年には、願成寺の掃除用途として荒野2か所を寄進し寺家の開発に委ねるとの旨を記した寄進状を施入している（同前4号）。相良荘、京、鎌倉、そして鎮西の所領を行き来して活動していた相良氏の惣領が、球磨郡に基盤を置いた活動を開始したのは、まさに長頼（運仏）代の1230年代であったとみられる。

しかし第二に、寛元元（1243）年にいたり、長頼は前述の頼重との相論にかかる①の山井名の押領と狼藉の料を問われて、人吉荘地頭職の半分を幕府に没収されてしまう（相5）。これに伴い長頼は、幕府方の「当給人之御代官調所七郎忠康」とともに人吉荘の「田島芋桑在家并山野江河狩倉等」を南北に中分し（相6）、南方を地頭として支配し、領家に対する貢納を請け負うことになった。

そして第三に、人吉（佐牟田）相良家の分出である。すなわち長頼は寛元4（1246）年、人吉荘南方のうちの名田、在家、桑木等を分割し、庶子の六郎頼利（頼俊）、九郎頼員、藤二綱それぞれに譲る（相7・8・9）。このうち最も多くの荘田を譲られた頼俊の系統が人吉（佐牟田）相良家となる。一方、多良木家は長頼から頼俊の兄頼氏へと継承される。

このように長頼期は、多良木村と人吉荘南方を根本所領として氏寺・願成寺を擁する鎮西相良氏のベースが確立された時期であり、それは相良氏惣領としての多良木相良家と下球磨人吉荘南方に本拠をもつ人吉（佐牟田）相良家とを二本の柱とするものであった。

## 2. 鎌倉後期の文献史料—相良頼氏（浄運）・頼宗・経頼—

多良木相良家を長頼から継承した頼氏、そしてその後継者頼宗さらに経頼の時代には、多良木村支配が深化するとともに、モンゴル襲来への対応とも絡みながら、多良木相良氏の惣領制的な結合と一族紛争とが展開された。

### (1) 蓮花寺の建立

まず注目するべきは、モンゴル襲来期における頼氏・頼宗の宗教的活動である。

近世相良家史のひとつ『歴代綱鑑獨集覽』では、嘉禎元（1235）年に頼氏が蓮花寺を造立したとされる。こうした説との関係で重要なのは、蓮花寺跡の五輪塔群の中にある笠塔婆（高さ108cm）の次の銘文である（多良木町史編纂会・1980）。

石塔志趣者奉為沙弥上蓮尊靈往生極楽證大菩提造立如件

文永六年己巳七月十四日 比丘尼妙阿弥陀仏敬白 孝子藤原□□敬白

文永6（1269）年7月、蓮花寺では「沙弥上蓮」すなわち相良頼氏の極楽往生を祈念する生前供養が営まれていた。願主の比丘尼は頼氏の妻、孝子は頼宗であろう。対モンゴル外交の危機が高まる中で、蓮花寺は多良木相良氏惣領の供養所として、相良一族の氏寺＝菩提寺である人吉荘内願成寺とは別に多良木の地に設けられたものと推察される。

### (2) 東光寺の祭祀

頼氏代の史料として特記されるべきは、多良木黒肥地の東光寺跡にある磨崖板碑前の経塚から発掘された文永10（1273）年11月4日銘の銅製経筒8個である。前述のように「東光寺」はすでに相良頼景の所領であった時代の多良木村にその名がみえるが、経筒の一つには次の銘文がある（多良木町史編纂会・1980）。

奉納 如法書写妙法蓮花經一部銅筒一

右志者為藤原頼氏現世安穩後生善所乃至法界平等利益也仍供養奉納如件

文永十年癸酉十一月四日 藤原頼氏敬白

また、他の7個の経筒のうち6個にも、同様の銘文とともに「藤原氏女」「藤原頼□」「比丘尼如阿弥陀仏」「比丘尼阿弥陀仏」「大秦□清」「幡摩氏女」「大神宗□」といった願主の名が、それぞれ刻まれている（多良木町史編纂会・1980）。伝承では、東光寺には頼氏が八幡宮を勧請したとされ、経筒に見える大神宗氏は八幡宮社家と推測されている（松本・1977）。

モンゴル帝国の東への拡大によって対外的危機が高まり、異国警固体制が構築されるまさにその最

中、頼氏は多良木相良家当主として東光寺で現世と来世の安穩を願う法会を家族らとともに催し、書写した法華經を埋納して祈りを捧げた。そして、後に経塚背後の磨崖には、多良木相良家の祭祀の象徴として板碑が彫り込まれることになるのである。

### (3) 多良木村の開発

当該期における本領多良木村の水田開発の進展を示唆するのが、黒肥地の字溝ノ口で球磨川から取水し、球磨川北側一帯を灌漑する「鮎ノ瀬井手」の存在である。取水口脇にある近世の石碑には、「鮎ノ瀬井手碑 永仁三年五月 領主 相良頼宗建」とある。石碑自体は近世の造立であるけれども、鮎ノ瀬井手の灌漑用水の一路は現在も黒肥地の伝相良頼景館跡の至近を通り、また蓮花寺跡の発掘調査では、13世紀の遺物を伴う溝が検出されているのである。石碑は、13世紀における多良木相良家による多良木村の開発事実の伝承化の上に立って、近世に鮎ノ瀬井手の由緒を公示するために造立されたのであろう。

このように、確立されたばかりの多良木相良家は、東アジア情勢の激動に起因する異国警固の軍事動員に対応する必要から、本領多良木村の開発を進展させるとともに、独自の濃密な宗教空間をも創出していったのであった。

### (4) 多良木相良氏の惣領制

次いで正応6（1293）7月20日、頼氏は「多良木田島在家」をはじめとする所領を、嫡子となった頼宗だけでなく、頼宗の甥（頼氏の孫）にあたる頼包、頼高、頼秀、頼実の「兄弟四人」に分割相続させる旨を記した譲状を作成した（相32、33、36）。このうち多良木村の在家12字および田地15町を譲与された彦三郎頼秀に宛てた譲状（相32）に、頼氏はこう記している。

右件田地在家島、所譲与彦三郎頼秀実也、但、至 公家・関東御公事、異国警固番役者、随惣領所勘可致沙汰、仍譲状如件、

庶子も所領を譲られはする（分領相続）が、朝廷・武家に対する「御公事」や、博多での「異国警固番役」といった御家人役については、惣領の「所勘」すなわち指揮・管理下で勤仕せねばならないとする。典型的な惣領制の一族編成である。

東光寺、蓮花寺とならんで頼氏以来の多良木相良家が信仰したのが、黒肥地字居の球磨川畔に鎮座する王宮社である。同社の延享元（1744）年の棟札（往古の棟札を一札に写したもの）には、①文応2（1261）年に「大旦那藤原頼氏御宝殿造営」、②永仁6（1298）年に「大旦那藤原牛房丸（経頼）御神殿造営」、③応永3（1396）年に「大旦那藤原頼忠御宝殿修造」、そして④同23（1416）年に「大旦那沙弥大運（頼忠）同邊江守頼久神殿八棟作仁而拜殿御所迄新仁造営 同年頼久樓門建立」と記されている（多良木町史編纂会・1980）。すなわち王宮社は、多良木相良氏の歴代惣領＝多良木相良家歴代当主によって造営・修造されたのであり、それは多良木における惣領権の脈々とした継承を目にみえるかたちで内外に示す事業であったと考えられる。

### (5) 青蓮寺の建立

青蓮寺は永仁6（1298）年に相良頼宗によって頼景とその後室青蓮尼の菩提を弔うために建立されたといえられる。

同寺の伽藍は頼景墓と阿弥陀堂を中心に配した象徴的な構成をとっている。13世紀末に多良木における惣領制が展開されるに際して、多良木相良氏としての一族結合を強化する必要が生じ、人吉荘内願成寺や蓮花寺とは別の、頼景の独自の廟所と青蓮尼の位牌所が求められ、頼宗による建立につながったものと推察される。

この点に関して小川弘和は、多良木相良氏が13世紀後期の段階から一族内紛争を繰り返していく一方で、人吉相良家は単独相続制に移行して結束を強めていたと指摘し、青蓮寺の建立は多良木相良家が人吉相良家等も含む一族全体に対する惣領権を主張したものと位置づけている（小川・2015）。

### (6) 惣領相良経頼と一族内紛争

小川が指摘するように、青蓮寺の建立や王宮社の相次ぐ造営・修造の背景には、多良木相良氏内における惣領・庶子間の領主権をめぐる紛争、すなわち惣領制からの独立をめざす庶子家の運動が展開し



ていた。

正安4（1302）年6月、多良木村地頭相良牛房丸（頼宗の子息で惣領の経頼）代の左衛門尉資氏は、頼氏の孫にあたる庶子頼包、頼高、頼秀、頼実を相手に、頼氏譲与の外の所領の押領・蓋妨そして惣領経頼への不服従を停止するよう六波羅に訴え出た。その際に作成された申状案（相36）によれば、惣領と頼包らの対立はすでに何年前にも訴訟沙汰へと発展し、そのときは頼包らから和を望み、和与状が作成されたが、頼包らはまたも所領押領・蓋妨・対捍に及んだとされる。惣領への不服従の具体的内容としては、検断物の略奪（「蓋妨検断」）、守護方への役負担（「国方济物」）を惣領を通さずに行い、あるいは異国警固番役以下の用途負担を拒否するといった対捍行為であった。

さらに惣領経頼と庶子頼秀とは延慶2（1309）年にも訴訟沙汰となっており（相38）、経頼側は頼秀が「国方济物并関東御公事者、属惣領可弁勤」との頼氏讓状（前引の相32）に違背して、異国警固番役も含めて「別勤」を望んでおり、「惣領敵対」の咎は逃れがたい、と主張している。典型的な庶子の独立運動であった。

このように、鎌倉時代後期の多良木相良氏は、惣領家＝多良木相良家と庶子家との深刻な対立を抱えていた。しかしそれは多良木相良氏のみならず、この時代の在地領主階級に共通する状況であった。むしろ、一族紛争を抑止凍結するために、多良木の地に多くの宗教施設が整備された事実注目すべきである。

すなわち、頼氏の供養所・蓮花寺、多良木相良家の供養所・東光寺、氏神としての王宮社、そして頼景以来の正統相良家としての多良木相良家を象徴する青蓮寺。これらの祭祀を紐帯として、多良木相良氏は一族結合を維持した。さらに多良木相良氏は、上球磨一帯の在地領主層と連携しながら、惣領相良経頼のもとで14世紀の内乱へと突入していくのである。

### 3. 14・15世紀の文献史料

球磨郡における14世紀内乱は、おおそ多良木相良氏が宮方、人吉相良氏が武家方に属して激しく対立する過程であった。そこでは、多良木相良家・相良氏を中核とした在地領主層の地域的な結合態が文献史料上に明確な姿をあらわし、上球磨・中球磨地域における中世的秩序の到達点を示される。だが、15世紀中葉には人吉（佐牟田）相良家そして永富相良長統の権力によって圧倒され、上球磨＝多良木地域は戦国大名相良家の分郡領域支配へと包摂されていき、球磨郡の中世史は新段階を迎えることになる。

#### (1) 14世紀内乱期の文献史料

前引の相3の裏書に明記されているように、鎌倉幕府滅亡の時点では、多良木相良経頼と人吉（佐牟田）相良頼広は協力して人吉荘北方の還付を新政権に申請していたが、結果的に建武5（1338）年にいって人吉相良家が独占的に還付を受けることになる（相79～82）。建武5年8月日付の人吉相良定頼申状案（相82）は、その間の事情を次のように描く。

自分は足利尊氏に属して建武3年の上洛にも供奉したが、同年には球磨郡で「相良孫三郎経頼、須恵、永里、岡本、奥野、橘佐渡八郎以下凶徒等」が宮方の菊地武敏らと「同心」して「大勢」で挙兵した。これに対して自分は「山田城」（現山江村山田）に「親類若党等」を「籠置」いて防戦し、凶徒を退散させた。山田城は球磨郡の「無雙城郭」で宮方凶徒に占拠されるわけにはいかなかった。自分はこのような忠勤を重ねてきた。それが上聞に達し、一色殿から「本領北方半分地頭職」を返付していただいた（もう半分は祖父の長氏に返付、相80・81）。さらに軍忠を注進させていただき、恩賞の不足分については「一族経頼并庶子等跡」を預け給わりたい。

ここからは、以下の3点が読み取れる。

第一に、多良木相良経頼を統率者とした球磨郡宮方の軍勢が、上球磨から中球磨東部一帯の在地領主層によって構成されていたことである。すでにみたように、惣領経頼のもとには多良木相良氏庶家一族が存在していた。その周辺に地域の在地領主たちが結集するという二重構造が、14世紀の上球磨・中球磨地域における秩序の特質であった。

第二に、内乱最初期における人吉勢と多良木勢の奪い合いの地が山田城であった点である、山田の

地は中球磨と下球磨の境界にあたる要地で、人吉相良氏と多良木相良氏が球磨盆地内の領域支配を争うという、内乱の地域展開の構図が読み取れる。

第三に、人吉相良定頼が恩賞として多良木相良氏の所領を希望していることである。これは、人吉荘北方地頭職を手中にした人吉（佐牟田）相良家が、多良木相良家の保持する頼景以来の正統性を奪取し、球磨郡の一円支配を志向しはじめたのが、14世紀内乱の初期であった事実を示している。

小川弘和が指摘するように、人吉（佐牟田）相良家は人吉荘内の田地を庶子および平河氏・須恵氏などの中球磨の在地領主に知行として配分し、「人吉庄一分地頭」として編成していく（小川・2015）。そして1340年代の主戦場は原田、西村、東方など中球磨の奪い合いへと展開し（相108）、さらに上球磨の久米郷木原（相112・113）へ、そしてついに50年代には「球磨郡内所々」（相142）へと拡散していくのである。

こうして、現存する一次文献史料をみると、人吉（佐牟田）相良家勢力の軍事的優位のもとで球磨郡における14世紀内乱の幕が引かれたかにも見えるが、永和3（1377）年10月、内乱終結とともに結ばれた著名な南九州国人一揆の契約状案（『瀨寝文書』）には、その時点での球磨郡内における在地領主の存在が示されていて貴重である。すなわち、契約状への署判者61名のうち、球磨郡内の者は以下のとおりである。上球磨は多良木相良頼忠、宮原橘公冬、永里武綱、久米為頼、奥野助景。中球磨は平河師門、須恵重宗、岡本頼季。そして下球磨は相良前頼・右頼の兄弟のみであった。

つまり、上球磨では多良木相良家を核とした建武以来の一揆二重構造はまだまだ健在で、伝統的在地領主らが温存されている中球磨を挟んで、人吉（佐牟田）相良氏へと権力一元化を遂げた下球磨勢力と対峙していた。これが球磨郡の室町期的地域秩序の骨格であり、それは両者が南九州国人一揆のメンバーとして実力行使を相互に停止している限りにおいて維持されるものであった。元中8（1391）年に人吉（佐牟田）相良前頼（立阿）が多良木相良家の孫五郎に宛てた次の契約状は、その点をよく示している。

契約申候、右之意趣者、於多良木親望之事不可有候、此旨偽申候者、奉仰候、阿蘇十二宮大明神之御罰ヲ至子々孫々可罷蒙候也、

元中八年二月十八日

立阿（花押）

相良孫五郎殿（相186）

前頼は多良木相良家に対して、多良木支配を実現するための実力行使や訴訟を留保する旨、誓約している。多良木相良家・相良氏の存続は、人吉（佐牟田）相良家が多良木に対する権利主張を主体的に凍結することによって保障され、また、正統相良家の本領としての多良木の歴史的地位も保全されたのである。これが内乱を経た14世紀末における現実であった。

## (2) 15世紀中葉の文献史料

前述のように人吉（佐牟田）相良家は内乱期に獲得した所領を原資にして、中球磨の在地領主層をも主従制のもとに組織していき、多良木相良氏への圧迫を強めていったと推察される。14世紀末から15世紀前期にいたるまでの状況を示す一次文献史料は途絶えてしまうが、最近、鶴嶋俊彦が注目した次の相良が統置文（『熊本県史料中篇3』所収「願成寺文書」16号）には、貴重な情報を書き込まれている（鶴嶋・2015）。

（願成寺）「願成寺江参」

肥後国求麻郡久米郷多良木村之内、当家长祖長頼法名蓮仏彼御方御奇進願成寺之田地、三四代自多良木致押領候、然者多良木之事、近江守前統合退治之時、願成寺江如本文書被至寄進候、其以後前頼・亮頼依無子孫、多良木遠江守頼久令蟻起、郡内人々過半属彼手候処、当家如順次、親候長統当部知行之時、裏里之人依忠節、先彼領地被宛行給分候歟、今年如前代、彼三町願成寺并供僧様之御中江付進之候付付在別紙、如前代御知行可目出候、当家於御祈念者弥奉憑候、京都国役等、又者弓矢向可隙入時節者、如諸寺家御心得可然候、仍所定如件、

文明十九年丁未七月十日

左衛門尉藤原朝臣為統（花押）

発給者の為統は、15世紀中期に多良木相良氏を滅亡させて戦国期の球磨郡領域支配を確立した永高相良長統の後継者である。為統は文明19（1487）年に多良木村内田地三町を前代の如く相良家祈念料として願成寺・供僧中へ寄進するとし、それに際して鎌倉時代以来の経緯を以下のように説明して、次

代に伝えようとしたのである。

①当該の田地3町は、相良家の先祖長頼が願成寺に寄進したが、3・4代のあいだ多良木相良家から「押領」され、願成寺は知行できなかつた。

②人吉(佐牟田)相良近江守前統が多良木を「退治」したとき、前統は長頼代のとりの寄進状を作成して願成寺にこれを納めた。なお、この前統は前頼の孫にあたり、人吉(佐牟田)相良家家督であったのは応永24(1417)年から嘉吉3(1443)年までであった(鶴嶋・2015)。

③ところがその後、佐牟田前統と弟の堯頼には「子孫」がおらず、多良木遠江守頼久の蜂起を呼び起こすことになり、「郡内人々過半」が多良木方に付き、球磨郡は混乱におちいった。

④そこで為統の父永富長統は、人吉相良家を継承する順序に従ってその地位につき、混乱を取束させて球磨郡の「知行」を実現した。このとき味方した郡内全域の衆への恩賞に願成寺の3町をも充当せざるを得なかつたが、今年にいたって改めて寄進することにした。

従来の研究において④は文安5(1448)年であることがほぼ確定されているので(服部・1980、新名・2015)、本置文の執筆はその39年後のこととなり、出自の明確でない永富家出身の為統が統一相良家督としての自己の正統性を強調する意図をもって脚色した可能性がないとはいえない。しかしここには、近世相良家史にはみられない記述が含まれている。

それは第一に②で、すでに15世紀前期の段階で人吉(佐牟田)相良長統による「多良木退治」がなされていたとすること。第二に③で、「多良木退治」の後の佐牟田家の混乱が多良木相良頼久の「蜂起」を誘発し、それに郡内在地領主の過半が味方したとすること。そして④で、勝利した永富相良長統が莫大な恩賞を費やしつ、郡内一円で主従制的支配を構築したことである。

### ③ 15世紀中葉の仏神像銘文史料にみる永富長統の活動

このような事情により、永富長統は文安5(1448)年の統一以降、頼景・長頼以来の正統相良家=多良木相良家の由緒をわがものにして、一郡支配を安定化するための活動に取り組みざるを得なかつた。具体的には、長統のものにいたと考えられる「慧麟」という仏師が長祿4(1460)年～文明元(1469)年に、上球磨で集中的に仏神像を製作しているのが注目される。中西真美子の研究によれば、現在確認される9体(表)のうち5体(表№1・4・5・6・8)の銘文に、多良木相良家を制圧した本人である相良長統の名がみえることが確認されるのである(中西・2020)。

中西によれば、慧麟の造像活動の特徴は、次のようにまとめられる。

第一に、9体のうち8体までが、長統によって滅ぼされた多良木相良氏の勢力圏だった上球磨に造

表 慧麟作 仏神像一覧

No	名称	所蔵	現所在地	制作年月日
1	木造釈迦如来立像	熊野神社	あさぎり町	長祿4年(1460)11月29日
2	木造千手観音菩薩立像	熊野神社	あさぎり町	寛正2年(1461)6月2日
3	木造大辯功德天立像	龍泉寺	水上村	寛正3年(1462)3月18日
4	木造婆伽仙入立像	龍泉寺	水上村	寛正3年(1462)3月18日
5	木造虚空蔵菩薩坐像	小林虚空蔵堂	多良木町	寛正6年(1465)4月26日
6-1	木造薬師如来立像	八日薬師堂	多良木町	寛正7年(1466)2月20日
6-2	木造菩薩形立像	八日薬師堂	多良木町	文正2年(1467)か
6-3	木造菩薩形立像	八日薬師堂	多良木町	文正2年(1467)か
7	木造男神坐像	永岡大王神社	湯前町	文正2年(1467)2月15日
8	木造十一面観音菩薩立像	城山観音堂	山江村	応仁3年(1469)8月6日か
9	木造女神坐像	某神社	水上村	文明元年(1469)10月24日

出典 中西真美子「仏師慧麟の造像活動と相良長統」の「表1」から作成

立されていて、慧麟の造像活動は長統の球磨郡統一をうけて始まり、長統の死とともに終わるとみられること。

第二に、像の作風は素朴であり、作風・技法・図像に対する姿勢から、慧麟は中央の仏師について伝統的な技法を深く学んだ仏師ではない、在地の仏師であること。

第三に、慧麟作の仏神像の大きな特徴は銘文で、光背背面、台座背面を書面のように使って、完成後も視認可能なところに長文を記し、そこに「長統」の名が書き込まれること。かつこれらは、かつて

の多良木相良家の支配領域にいる各地の領主層が造営主体となり、永富相良長統の統治への賛意とともに地域の安泰を祈願する文言となっていること。

このように慧麟作仏神像の銘文は、永富長統の土球磨支配の特質を示す文献史料として貴重なものである。柳田快明の研究（柳田・2020）も参考としながら、2点の銘文を具体的にみよう。

まず、表No.5の黒肥地寺虚空蔵坐像の墨書銘である。

右、奉造立虚空蔵者、正睦僧依先祖相傳之三蔵、手於借佛師慧麟僧、寛正六年二月廿一日始之、為光金輪上皇天長地久、殊者當郡主相良之長統、嫡子為統、同多良木殿頼泰□□□、別者千里内子孫□□□□此時壽也、其外結縁之一味同心之志、作天人師虚空満願之故也、於黒肥地寺住持惠雄、佛法無退転、世法實富貴者勿如此、諸佛擁護加護蒙日々衆生利益□志者、遂末代乃至法界平等利益而已、

寛正乙酉卯月廿五日

大願主族峯 道号 正睦僧

黒肥地寺當住惠雄

□之大檀那千里内幸統子息幸□

佛師慧麟書作之

虚空蔵坐像造立の大願主正睦僧については未詳だが、造立に関与した惠雄が住職をつとめる「黒肥地寺」は、かつて青蓮寺から西に1kmの位置にあった。本像は同寺の本尊と推察される。次に大檀那の千里内幸統父子は、柳田が指摘するように黒肥地の山間部にある千里内を苗字の地とする土豪とみられる。

以上を確認した上で、第一に注目すべきは、本坐像が正睦や千里内らによって「當郡主相良之長統」と「嫡子為統」、それに相良「多良木殿頼泰」のために造立されていることだ。頼泰は、表No.6-1の銘文に「大旦那相良長統並三男多良木殿頼泰為息災延命子孫繁昌」とあることから、長統の庶子だとわかる。すなわち長統は「郡主」という直截的な称号を冠してかつての多良木相良氏の本拠に父子で君臨し、かつ、庶子に「多良木殿」と名乗らせて、頼景以来の歴史的象徴性を帯びた多良木の地域支配を担当させ、その事実を多良木の土豪である千里内らから承認・安泰祈願されることで、一部支配の枠組みとともに在地的正統性をも獲得せんとした事情が浮かび上がるのである。

第二に、本坐像が大願主・大檀那のみならず、「其外結縁之一味同心之志」をもって造像されていることである。「一味同心の志」というからには、相互の結び付きもない単なる結縁＝奉加者の集合ではなく、黒肥地や多良木といった特定地域において社会的関係を保持する住民らの一揆的集団が造像を支えたとみねばなるまい。

次に注目したいのが表No.4の土球磨郡岩野善土寺観音像脇侍の台座背面墨書銘である。

右奉造立縛婆仙人者（中略）天下太平国土豊饒、殊者藤原氏相良長統老幼繁昌、別者代官湯前殿檢前氏政久子息政山并岩野殿宗朝子息吉宗富貴英雄之祈禱、住持長堅所願成辨之闕也、乃至法界平等利益耳、寛正三年壬午三月十八日 敬白 大願主住持長堅 仏師慧麟

大願主の住持長堅について詳細は不明だが、同時作の表No.3の銘文でも「妙意女」とともに大願主となっており、岩野善土寺の住持であったことがわかる。その長堅が、「天下太平国土豊饒」とともに、相良長統と「代官湯前殿檢前氏政子息政山」「岩野殿宗朝子息吉宗」の繁盛・富貴英雄を祈禱している。湯前殿檢前氏は同地域の湯前に設定された長統直轄領の代官に任命されたとみられる。岩野殿は善土寺が存在した（現在は廃寺）岩野の殿原（土豪）と考えられる。湯前と岩野は土球磨で隣り合った地域で、わけても湯前は日向国と接する境目でもあった。

柳田も指摘するように、長統は湯前のような郡内の要地を代官支配の直轄領とし、前出の千里内氏と同様に、郡内の地名を苗字とする殿原層を被官・給人化していったものと考えられるのである。

以上、これら銘文からは、「郡主」と郡内要地支配者（多良木殿・湯前殿等）および直轄領代官によって構成される分郡支配の上部構造の枠組みの設定と、郡内各地域における「結縁之一味同心之志」によって、永富相良長統の地域支配事実が正当化され得た事情を読み取り得るのである。

なお、15世紀中葉における永富相良長統の活動との関係で、青蓮寺の現況は興味深い。

すなわち、現在の青蓮寺阿弥陀堂は嘉吉3（1443）年の阿弥陀堂が原型であり、その造営時期は、まさに佐牟田相良前統による「多良木退治」から文安5年までの間にあたる。天文11（1542）年の阿弥陀堂棟札の追記部分によれば、この再興は佐牟田相良亮頼によるものとされているのである（鶴嶋・2015）。

それに加えて、頼景墓の壇上積基壇の西側という象徴的場所には、永富長統・為統の供養塔や戦国・江戸期の五輪塔が配置されている。総じて阿弥陀堂の裏の墓所にある五輪塔の形式は15世紀後半以降のものである。すなわち、青蓮寺の墓所は多良木相良家滅亡後に永富家の支配のもとで開放され、性格を変えたものと考えられる。長統・為統は、自身と頼景とを結び付けて一部支配の正統性とするため、青蓮寺に手を入れたのであろう。

さらに、伝相良頼景館跡の北側の堀は15世紀中頃に埋め戻されて再度掘り直された遺構であり、土塁もそれに伴って造成されたことが今回の調査によって判明している。これも、多良木相良家・相良氏の滅亡と永富長統・為統による新たな多良木支配体制の構築に伴う改変であった可能性が指摘できよう。

### おわりに—多良木相良家・相良氏の歴史とその画期—

12世紀末から15世紀中葉にいたるまでの多良木相良家・相良氏の展開を、文献史料をはじめとする一次的文字史料によって概観してきた。そこから明確になった同家・同氏と多良木地域史としての画期は、以下の三つとなろう。

第一の画期は、頼景から多良木村を相伝し、人吉荘地頭職を獲得した相良長頼（運仏）が、人吉荘内に氏寺・頼成寺を建立し、開発田を寄進した1230年代である。遠江国相良荘、京、鎌倉、そして鎮西の所領を行き来していた相良氏の惣領が、球磨郡に基盤を置いた活動を開始した時期である。

第二の画期は、1270年代から90年代にかけて、惣領制の展開と異国警固番役の賦課という経済的・政治的変動に直面した多良木相良家が、一族紛争を抑止凍結するために、多良木の地に多くの宗教施設を整備していった時期である。頼氏の供養所・蓮花寺、多良木相良家の供養所・東光寺、氏神としての王宮社、そして頼景以来の正統相良家としての多良木相良家を象徴する青蓮寺であり、多良木における相良氏関係史群像の全容が整った時期として重要である。

第三の画期は15世紀中葉である。人吉（佐牟田）相良前統による「多良木退治」から多良木相良頼久の蜂起、そして郡内を二分する地域紛争に勝利した永富長統による上球磨統治体制の構築という、一連の政治変動であった。わけても長統の上球磨地域に対する政策は、頼景以来の正統性を手に入れるために上球磨の要所の寺社で結縁造像し、多良木相良家の継承者としてのみずからの地位をアピールするという積極性を伴うものであり、第二画期以来の寺社や伝相良頼景館跡などの史跡には、この時期に長統らによって改変が加えられている可能性が高いことを指摘しておきたい。

### 【参考文献】

- 小川弘和・2015『総論 中世球磨郡の形成と展開』『日本遺産記念展 ほけの里と相良の名宝 人吉球磨の歴史と美』熊本県立美術館
- 小川弘和・2016『平安時代の球磨郡と造寺・造仏』小川弘和『中世的九州の形成』高志書院
- 小川弘和・2018『鎮西相良氏の惣領制と一揆』『歴史』130 東北史学会
- 小川弘和・2020『相良・工藤系図とその周辺』稲葉継陽、小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』戎光祥出版
- 工藤敬一・1992『肥後球磨の荘園公領制と人吉荘』工藤敬一『荘園公領制の成立と内乱』思文閣出版
- 多良木町史編纂会・1980『多良木町史』熊本県球磨郡多良木町
- 鶴嶋俊彦・2015『文安五年相良家政変の実像』服部英雄・貴田潔編『歴史を歩く・時代を歩く』九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
- 中西真美子・2020『仏師僧慧麟の造像活動と相良長頼』稲葉継陽、小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』戎光祥出版
- 新名一仁・2015『室町期島津氏領国の政治構造』戎光祥出版
- 服部英雄・1980『戦国相良氏の誕生』『日本歴史』388 日本歴史学会
- 松本寿三郎・1977『相良氏の球磨下向と多良木支配』『熊本県文化財調査報告 第22集 蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県教育委員会
- 柳田快明・2020『文安五年の政変』前後の相良氏支配と球磨郡地域社会—上球磨地方を中心に— 稲葉継陽、小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』戎光祥出版

# 蓮花寺・伝相良頼景館跡と相良氏関連遺跡出土の貿易陶磁器の調査

小野 正敏

## 1 悉皆調査による数値化

### 1) 目的と方法

蓮花寺、伝相良頼景館跡を評価、検証する方法のひとつとして、出土陶磁器の分析があり、今回関係者の協力を得て、この2遺跡並びに関連する灰塚遺跡、山田城、高城、相良頼俊館（佐牟田館）、奥野城、矢黒城、中世人吉城の上原城と中原城の8遺跡から発掘された出土陶磁器のうち貿易陶磁について全点の分類と計数を行った。

遺跡から出土した陶磁器は、その遺跡の年代、継続のあり方など、遺跡の特長を復元するための遺構と並ぶ必須の資料である。だが多くの報告書では実測図として掲載される復元可能な破片や日用品の碗皿ではない陶磁研究で注目される特殊な器種などが選択的に記載され、出土陶磁器の全体像がわかる形で報告されることは少ない。これには小さな破片の分類が難しいことや、大量の出土品があるときには、その全量を調査、把握する困難さが伴うことがその原因である。しかし、消費された陶磁器からその遺跡の年代変遷や器種組成に反映された遺跡の性格等を推定するためには、小破片を含むすべての出土陶磁器の分類とその数値化を基礎資料とすることが有効で、これにより豊かな歴史像復元が可能となると考える。

こうした視点から、列島規模で、または一定の地域、あるいは同じような性格の遺跡の比較のために、出土陶磁の悉皆調査による数値化を行い、これまでも静岡県全域の全発掘遺跡の数値化をはじめ、貿易陶磁に限定した悉皆調査を沖縄県、鳥根県益田地区など各地で実施してきた（小野 2005、池谷他 2021 など）。悉皆調査で求められるのは、多くの遺跡について出土陶磁器数の多少や破片の大小による分類の差を吸収することであり、そのために精緻な分類ではなく、大分類を用いてより多くの遺跡で同じ基準で数値化することの有効性を選択している。

また、本来その目的のためには、小野・藤沢編 2005 で実施したように、貿易陶磁のみならず、同じ機能をもつ瀬戸美濃をはじめ、焼締陶器の壺甕鉢、地元産陶器、土器なども数値化するのが望ましいが、力量上そこまではできていない。

### 2) 貿易陶磁の分類と年代

この調査で準備した分類は、菊川町教委 2000 の分類を継承し改訂した国立歴史民俗博物館 2021 の分類である。この分類は、上記の目的のために用意した大分類を採用しており、それまでの大宰府編年や上田、森田、小野による詳細な分類編年案との対応関係などに関してはそれに抛られたい。

遺跡における青磁、白磁、染付の分類編年によって大まかな時期設定をすると、それらの共存関係から消費段階の群として捉えることが可能である。その視点から、どの遺跡でも普遍的な碗と皿を目安にしてⅠ～Ⅵ期にまとめた。Ⅰ期は、白磁碗Ⅱ、Ⅳ、Ⅴなど白磁を主体とする 11 世紀後葉～12 世紀後葉、Ⅱ期は、龍泉窯系青磁碗 A、同安窯系統など青磁が主体となり、白磁碗Ⅶなどが残る 12 世紀後葉～13 世紀前葉、Ⅲ期は、青磁碗 B Ⅰ、B Ⅱと白磁碗Ⅸなどを主体とする 13 世紀中葉～14 世紀初頭、Ⅳa 期は、青磁碗 D Ⅰなどを主体とする 14 世紀前葉～14 世紀後葉、Ⅳb 期は、青磁碗 D Ⅱと少し遅れて白磁碗 B など加わる 14 世紀後葉～15 世紀中葉、Ⅴ期は、青磁碗 B Ⅳ、青磁碗花皿と染付碗皿 B、C、白磁碗 C などを主体とする 15 世紀後葉～16 世紀前葉、Ⅵ期は、染付碗皿 E や菊皿などを主体とする 16 世紀中葉～後葉に設定する。各型式の年代幅は、モデル的なものであり、特に継続する遺跡ではより後まで使用されたと考えられる。

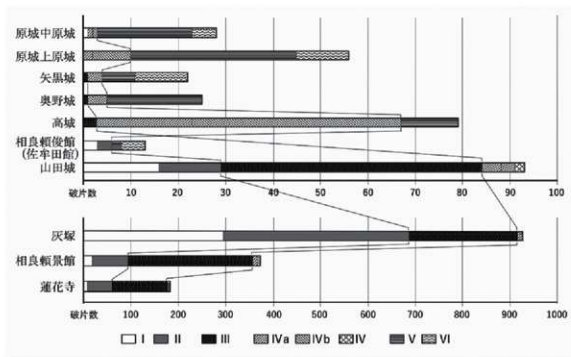


図1 時期別陶磁器組成

## II 貿易陶磁からみた遺跡の年代と特徴

### 1) 遺跡と存続年代の検討

各遺跡について、種別、器種、型式分類の点数をまとめたのが基礎資料の表1, 2である。さらに、この中から特殊な器種を避けて伝世的な使用がほとんどないと考える日用品碗皿鉢の破片数をI~VI期にまとめたグラフが図1である。グラフでは、分類できた点数100点を境にスケールを変えて表示した。

このグラフの年代構成の特徴からは、大きく3つのあり方をもつ遺跡群として指摘できる。

- I, II期から主体があり、III期にも継続する遺跡で、相良頼景館、蓮花寺、灰塚遺跡、山田城である。I, II期に注目すれば、灰塚と相良頼景館、蓮花寺との量的差が大きい。さらにIII期より後に注目すれば、IV期以降が急激に減少する相良頼景館、蓮花寺、灰塚と、IV期が一定量認められる山田城との差異がある。またこれらの遺跡群では、山田城も含めてV, VI期がないことも特徴的である。
- III期から確認される遺跡で、高城、奥野城、矢黒城などである。このうちIV期に主体がある高城とV, VI期に主体が確認できる奥野城、矢黒城の差異があるが、いずれもV, VI期に使われることで共通する。
- V, VI期に主体があることに注目すると中世人古城、奥野城、矢黒城、相良頼俊館が共通する。一方、遺跡の開始をみると、奥野城、矢黒城はIII期から、相良頼俊館はI, II期から、中原城でも少量ながらI, IVa期の破片が確認される。これにより本来はI, II, III期など中世前期から使われた可能性がある。中世人古城もそうした前段階があり、V期になると上原城や中原城を中核の曲輪群とする、東国にみる実城一中城一外城のような階層構造を持ったひとつの城として大きく整備されたという想定もできよう。逆に人吉地区のV, VI期の遺跡は、いずれも既にIII期あるいはIVa期に前身があり、それが継承されるという言い方ができるのかもしれない。残念ながら現時点では、これら分類資料数が100点以下の遺跡については不確実性が強く、今後の調査によってその位置づけが変更されることもあるといえよう。

### III 貿易陶磁からみた相良頼景館と蓮花寺遺跡の位置づけ

貿易陶磁の悉皆調査による数値情報の結果から、これまでの先行研究による相良氏関連の各遺跡の評価を再確認、各遺跡の位置づけを考えてみたい。

相良氏関連の遺跡については、既に多くの成果があるが、特に出合宏光 2020 年「相良氏の拠点」(『九州の中世Ⅱ 武士の拠点鎌倉・室町時代』)には、今回扱った遺跡を含む相良氏関係の多くの先行研究の成果と客観的な視点からの要点がまとめられており、原典を再確認できず係引的であるが参考とすることを寛容願いたい。

#### 1) 陶磁器の年代変遷から

今回の貿易陶磁からみた遺跡の年代変遷を、これまでの文献史学による指摘と関係づけて評価する際に、次の事象が注目される。

- ①建久 2 年 (1191)「永峯師高所領譲状」には永吉庄之内横瀬、山田
- ②建久 8 年 (1197)「肥後国球磨郡田敷領主等目録写」には、須恵氏、人吉氏、平河氏、久米氏の在り領主のみで、相良氏なし
- ③元久 2 年 (1205) (人吉) 長頼、人吉庄補任
- ④安貞 2 年 (1228) (多良木) 頼景から長頼へ多良木村譲状
- ⑤嘉禎元年 (1235) (多良木) 頼氏、蓮花寺創建  
文永 6 年 (1269) (多良木) 頼宗、蓮花寺に笠塔婆
- ⑥文永 10 年 (1273) 頼氏、東光寺に経塚
- ⑦永仁 6 年 (1298) 頼宗、青蓮寺阿弥陀堂創建
- ⑧興国元年・暦応 3 年 (1340) (多良木) 経頼、山田城に陣
- ⑨文安 5 年 (1448) 山田城永富長統が人吉城頼親を多良木へ退去させ、多良木を侵攻し、多良木相良氏滅亡。球磨郡統一
- ⑩長祿 4 年 (1460) 人吉城永富長統、守護菊池為邦から芦北郡安堵

伝相良頼景館、蓮花寺の成立期の状況は、a) の時期的な変遷の特徴に反映されていると思われる。この 2 遺跡は、Ⅲ期に最盛期があり、蓮花寺の嘉禎元年 (1235) 創建など⑤、④～⑦によってもこの時期に相良氏の本拠として多良木の整備が急速に進展したことが確認される。一方、その前段階のⅠ、Ⅱ期についてみると、相良氏存在を確認できるのが 13 世紀初頭の③や④であり、逆に①、②からは平河氏や須恵氏、人吉氏、久米氏といった在り地の開発領主の存在感が大きい。①では多良木の横瀬、人吉の山田も平河氏所領と記される。山田城や須恵氏本拠とされる灰塚遺跡のⅠ、Ⅱ期の状況がそれを反映したものとなっている。また、伝相良頼景館、蓮花寺にもⅠ期段階の陶磁が一定量確認されることも相良氏の本拠化が進む以前からの施設があったことを示している。①、②からはそれが平河氏に関わるものとするのが自然であろう。そのことは、球磨川の川湊、用水堰口の開発とどのように関わるかについても議論の余地が残されている。

伝相良頼景館、蓮花寺、灰塚遺跡の陶磁器変遷は、共通して 14 世紀ⅣA 期以降になると急激に減少している。多良木相良氏関連の拠点がいずれもそれまでの本拠としての機能を失ったことを暗示している。この変化は、この時期が、相良氏のみならず、九州全域が南北朝の戦乱の影響を受けた結果であり、奥野城をはじめ内城、鍋城など、館から山城へと拠点の機能が変化していったものと考えられる。現時点では、発掘されたⅣ期の遺跡は、人吉地区に偏っているが、b) に指摘したように、いずれの遺跡もⅤ、Ⅵ期へと継続、その時期が主体となっており、戦国の城への変化を語っている。中世人吉城の陶磁器変遷はそれをよく示す例である。

令和 4 年 (2022) の伝相良頼景館北堀のトレンチ調査では、堀が新旧 2 時期あり、旧堀は 13 世紀中頃に掘られ、15 世紀中頃以前に人為的に埋められ、新堀は 15 世紀前葉以降に同じ位置に規模を縮小して新たに土塁を伴い再整備されたことが判明した。この改変はⅣ期の陶磁器急減からⅤ期にかけての時期に相当し、先の変化と連動する可能性が指摘できよう。伝相良頼景館については、館内部の



発掘がまだになく、今後の発掘による解明が期待される。

一方、同じ山江地区で近距離にある山田城と高城の変遷は、各々異なる個性を示しており、興味深い。山田城は、中世前期Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期が主体であり、Ⅳa、Ⅳb期には減少して戦国期Ⅴ期には継続しない。高城では、前段階のⅢ期はあるものの少なく、Ⅳa、Ⅳb期を主体としてⅤ期へと継続する。山田城は、⑧南北朝期に人吉地区の北朝方の拠点として知られ、またその後、戦国期Ⅴ期にむけて、多良木相良氏を滅亡させ、久米、平河、須恵、岡本、永里氏などの有力国人を排除して人吉城に入り、球磨郡を統一した永富長統の本拠としても知られる。これに対して高城は記録に見えない、分布調査で確認された城とされる。この両者の陶磁器変遷をみると、Ⅰ～Ⅲ期を主体としてⅣ期に終わる山田城がおそらく平河氏の本拠とした山田城であり、Ⅳ期を主体としてⅤ期に継続する高城が、人吉相良氏庶流永富長統氏の本拠であった可能性が高い。文献史料にいう「山田」の城は山田にある城という意味の記載だと考えると二つの城が山田城と呼ばれたことに矛盾はない。既に鶴嶋 2013 が高城を永富長統の拠点と指摘したことに異論はなく、この陶磁器変遷からも首肯される。

現状で確認できた各遺跡の陶磁器の変遷を地域構造のなかで概観すると、多良木地区に中心があった鎌倉期から、南北朝期を経て、その拠点が戦国期には人吉地区へと移り、さらに近世へと継続したと評価できよう。

## 2) 非日用的陶磁器の所有から

前項まで碗皿を主とした数量的な変遷から遺跡の特長を考えてきた。もうひとつの比較がどの遺跡にも共通する日用品ではない、表1、2で「その他」とした特殊な器種の所有である。青磁の酒会壺、花瓶、白磁四耳壺・水注、梅瓶、陶器では華南三彩の緑釉洗、黄釉洗、高麗象嵌青磁瓶などが注目される。これらの時期はいずれもⅢ期、Ⅳa期の鎌倉時代のものである。蓮花寺、伝相良頼景館、灰塚ともに、特に白磁四耳壺・水注、梅瓶、華南三彩の緑釉洗、黄釉洗などが複数個確認されている。

これらは、鎌倉や東国の御家人クラス、あるいはそれに準ずる館からも出土するセットで、特に華南三彩洗は緑釉が好まれ限定されているのが特徴である。東光寺では、大型の磨崖武蔵型板碑やそれに伴う鎌倉のやぐらに似た岩窟のセットが注目された。どちらも相良氏の本領遠江にはないものであり、西遷御家人として肥後の地で鎌倉御家人としてのアイデンティティーを主張する装置としてあえて作られたと評価された。この陶磁器セットは、館クラスの所有品としては相応しいものと評価できるが、灰塚でも同じ状況であることを考慮すると、さらに踏み込んで、新たな地方で所領を得た御家人たちが、鎌倉とのつながりを誇示、階層意識を表現する手段となったというには、消極的にならざるを得ない。今後、さらに発掘例を集めることで考えてみたい。

陶磁器の分類計数調査には、浅野晴樹、上村麻妃、佐々木健策、鈴木康之、中島圭一、永井孝宏、村木二郎の各氏が参加した。

## 引用文献

- 熊本県教委 1977 「蓮花寺跡・相良頼景館跡」熊本県文化財調査報告第 22 集
- 熊本県教委 1988 「高城跡」熊本県文化財調査報告第 95 集
- 熊本県教委 1989 「山田城跡」熊本県文化財調査報告第 102 集
- 熊本県教委 1990 「山田城跡Ⅱ・Ⅲ」熊本県文化財調査報告第 112 集
- 菊川町教委 2000 「横地城総合調査報告書 資料編」
- 熊本県教委 2001 「灰塚遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第 197 集
- 小野正敏 2005 「貿易陶磁と中世陶磁組成」『中世の伊豆・駿河・遠江—出土遺物が語る社会』
- 鶴嶋俊彦 2013 「肥後球磨郡の群郭式城郭の登場と展開」『平成 25 年度南九州城郭談話会・北部九州中近世城郭研究会合同研究大会資料集』
- 出合宏光 2020 「相良氏の拠点」『九州の中世Ⅱ 武士の拠点鎌倉・室町時代』
- 池谷初恵他 2021 「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告第 226 集』

種類	器種	分類	遺跡名	蓮花寺	観音館	灰塚	奥野城	山田城	高城	上原原	中原城	相良館復元	矢黒城	
青磁	碗	同安楽系B	Ⅱ	6	12	39			32				3	
		A1	Ⅱ	3	1	2								
		A2	Ⅱ	10	14	7		1	7					
		A4	Ⅱ	3	13	4		3	1					
		A6	Ⅱ	0	2	5								
		A不明	Ⅱ	32	33	247			6	11				
		A梅花	Ⅱ			1		1	1					
		B0	Ⅲ	3	3	14			4					
		B1	Ⅲ	87	210	200	1	35	2				16	1
		B1か	Ⅲ					1						
		B3	V	1										
		B4	V	5	1	1	16	2	43	7	6			2
		C1	Ⅳa						1					
		C2	Ⅳa	1	1		2		10	1				2
		C2か	Ⅳb						1					
		蓮弁 C2相当	Ⅳb						1					
		C3	Ⅵ		1						1	1		
		D1	Ⅳa		8	12	2	5	34	1	1			2
		D1相当	Ⅳa	5										
		D2	Ⅳb	5	2	1	9	2	50	4				8
		D2 蓮弁文	Ⅳb						1	1				
		E1	V				1	4	1	2	1			
		不明 D2相当	Ⅳb											
		不明			13	10	83	1		47	5	3	4	5
小碗	BO相当	Ⅲ	1											
	不明												1	
皿		同安楽系	Ⅱ	5	9	63		1	9					
		劃花文系(A類)	Ⅱ			6		1	1					
		折縁皿	Ⅳ					1						
		折縁皿 D2相当	Ⅳb				1		1					
		折縁皿 D1orD2相当	Ⅳ	5		3		1						
		折縁皿 BO相当	Ⅲ		15	4		1						
		折縁皿 14C	Ⅳa						1					
		腰折皿	Ⅳb						1					
		腰折皿 D2相当	Ⅳb						1					
		内彎皿	Ⅳb		3				1					
		内彎皿 D2相当	Ⅳb					1	1					
		嚢反皿	Ⅳb								1			
		嚢反皿 D1相当	Ⅳa							2				
		嚢反皿 D2相当	Ⅳb				1	1	7	1				
		棧花皿	V				5		9	2	1		1	
		薬皿	Ⅵ								1			
		大皿			1					1				
		不明 D1相当	Ⅳa						2	3				
		不明 D2相当	Ⅳb						1	1				
		不明		2						1				
盤類		折縁盤 無文	Ⅲ、Ⅳ	1	6				11	2			9	
		折縁枝花盤	Ⅲ、Ⅳ										3	
		内彎系盤	Ⅲ、Ⅳ						2					
		盤 BO相当	Ⅲ					1						
		盤 D2相当	Ⅳb			3			1					
		不明							4	2			2	
鉢		小鉢BO相当	Ⅲ			2								
		深鉢					1							
		大鉢							1				1	
杯		杯 BO相当	Ⅲ			3								
		不遺理書											1	
		淨瓶									1			
		型作象形袋物											1	
その他		香炉		1	4				2	1				
		酒会壺		1										
		花瓶		1				1	1					
		大型品の部品												
器種不明							1							
費 磁 計				191	349	700	39	78	305	32	14	23	43	

表-1

種類	器種	分類	道跡名	蓮花寺	経農館	灰塚	奥野城	山田城	高城	上原原	中原城	相良頼俊館	矢黒城		
白磁	碗	I類	I			1									
		II類	I			2									
		皿類	I			6									
		IV類	I	1	3	68		6	3			1	3		
		V類	I	5	6	212		8	42						
		VI類	I			1		1							
		VかⅧ	I、II			2									
		IX類	Ⅲ	2	4	6		2	2				2		
		ピロースクI	Ⅱ			1									
		ピロースクII	Ⅲ												
		ピロースクIII	IVa			2				12					
		ピロースク不明		1		2									
		不明I2	I	1		2									
		不明		3	8	29					2				
	小碗	皿	根付系	IVa							1				
			II類	I											
			III類	I		2	5								
			IV類	I					1		1				
			V類	Ⅱ		1	17								
			VI類	I	1	7									
			IX類	Ⅲ	20	31	1		11	1				3	
			ピロースクⅢ	IVa						1					
			B群	IVb	1				2	14	1				8
B群(轉折)			IVb						3						
C1群			V	2			4			2	6	1	2	4	
腰折皿 14C			IVa			2		2							
端反皿 澁州窯			V									1			
秘府皿			IVa	1											
不明					3					1					
その他			皿	面取杯	IVb							4			1
				小杯	IVb							2			2
				小杯 B群	IVb										
				合子		7	8	14							1
	四耳巻	Ⅲ、IVa		7	17	65		3	1						
	腰反小盥			1											
	盥			4											
	梅紙	Ⅲ		2	4	7									
	水注			1	2										
	繡刺文付花瓶 13C	Ⅲ							20						
白磁計				53	98	448	6	54	92	7	3	11	15		
青白磁	碗	合子						1	1						
		口类小盥			2										
		口类皿	Ⅲ					1							
		口类腰折れ皿	Ⅲ			1									
		口类碗	Ⅲ			1									
		型押し皿				2									
		口类器種不明	Ⅲ					1							
青白磁計				0	0	6	0	3	1	0	0	0			
染付	碗	B	V	1					1	1	2				
		C	V	3			4			10	2	2			
		C 澁州窯系	VI			1				2	1	1	3		
		D	V												
		E	VI					1		2	3		6		
		E 澁州窯系	VI				1								
		B1	V						2	6	7	1	1		
		B2	VI										2		
		C	V	1	5	3				7	1				
		C 澁州窯系	VI				1			2			2		
		E	VI				1			2			1		
		F	VI		1					2					
		F 澁州窯系	VI										1		
		大皿 不明										1			
その他	面取巻 16C後半	VI							1		1				
染付計				5	12	6	8	1	3	35	17	6	14		
総計(陶器除く)				249	459	1160	53	136	401	74	34	40	72		
陶器 -参考-	天目茶碗			3		1		4	5						
	茶入				1			1							
	湯輪壺							1							
	黒湯輪壺							1	7						
	緑釉洗	Ⅲ		2	6										
	黄釉洗	Ⅲ	2	4	3										
	鎌倉三草の写像	VI			1										
高麗青磁 象頭瓶	Ⅲ		2												
朝鮮印紙	V										1				

表-2

## 青蓮寺壇上積基壇の系譜

狭川 真一

青蓮寺本堂の背後は低い丘陵となり、その中腹に中世の石塔が並べられている。その中央部で本堂の真後ろ、本堂の中軸線を北へ伸ばした位置に1基の壇上積基壇がある。かなり偏っており、部材の入れ替わりも著しいが、当初はかなり立派な基壇であったことを思わせる。

### 1. 基壇の現状

まず現状を整理しておこう(第83図)。基壇は加久藤凝灰岩製の地覆石・東石・羽目石・葛石の各部材から成る壇上積基壇で、南面のみほぼ全容を知ることができる。南面両側の東石外辺間の距離は2.96mを測り、内側に2個の東石を立てて南面を3区分している。中央と西の東石間はほぼ0.55mを測るが、東の1間のみ0.72mとやや広い。これは、羽目石に別材が用いられていることに起因し、本来は中央間と同じ幅で作られたのであろう。地覆石は3石から成るとみられ、各0.93m前後で、幅0.28m、高さ0.23mを測るが、西端は埋もれていて観察できない。

東石と羽目石はすべて別石で作られており、東石の幅0.25m前後、高さ0.56～0.59mで、中央の2個は横断面凸形を呈し、羽目石との段差は約0.10m、凸部の長さは0.22～0.25mを測る。両側の東石も内側を切り込んで、羽目石端部を受けている。西側の東石上面に直系5.7cm、深さ3.5cmの浅い窪みがあるが、他の東石にはなく納穴とは断定できない。羽目石は幅0.65～0.67m、高さ0.595m(西側)で、東石の段差に左右4～7cmずつか嵌まり込んでいる。東の区画では別材を用いており、やや幅の広いものを2段に積んでいる。葛石は南面が全部失われているため情報がないが、東側面北寄りに2個残存しており、長さ66.0～69.9cm、高さ24.0～24.8cmで、幅は内側が埋没していて不明である。

基壇上面には現在7基の五輪塔が並び、最奥部に石碑が建てられている。各五輪塔の部材は混在しており、これが当初の姿でないことは明らかだが、現状ではどの塔が中心に座っていたのか断定は難しく、また塔以外のものも候補に考えておく必要がある。基壇内の調査を待つ必要がある。

### 2. 基壇の復原と類例

これをもとに復元を試みる。当該基壇の平面形状が正方形であるとする、東石部での全幅は約2.65m、東石間は約0.55m、地覆石基部から葛石上面までの高さは推定で約1.1mとなる。葛石・地覆石ともに正確な数値は得られないが、全幅は概ね9尺、高さは3.5尺目安で造られたと推定される(図1)。

さて、この少ない情報から特色を拾わねばならないが、東石と羽目石がすべて別材で作られていることは大きな特徴である。近畿地方の事例ながら14世紀にかかる石塔の壇上積基壇は、各辺1枚の石材を彫成してそこに東石と羽目石を彫り出し、4枚を組み合わせて作るものが主流である(組み合わせ方は、狭川・鈴間2011)。これに対して各部材を別石で構成する事例はあまり多くないが、やや古手の資料に見受けられる。

香川白峰寺十三重石塔東塔<弘安三年/1280>(岩下ほか1963)

2基のうちの東塔が花崗岩製の壇上積基壇を持っている。解体修理された時の簡易な報告書があり、概要は理解できる。基壇正面は3間とし、両端東石の外辺間の長さは1.96mで、東石と羽目石の構造は青蓮寺基壇と同一である。地覆石、葛石ともに残存しており、基壇高は約53cmを測る。銘文は初層軸部東面の梵字の両脇に彫刻される。

奈良西大寺観尊墓<正応三年/1290>(狭川2003)

西大寺中興・観尊の墓は西大寺奥之院に現存し、巨大な壇上積基壇の上に安置されている。基壇の

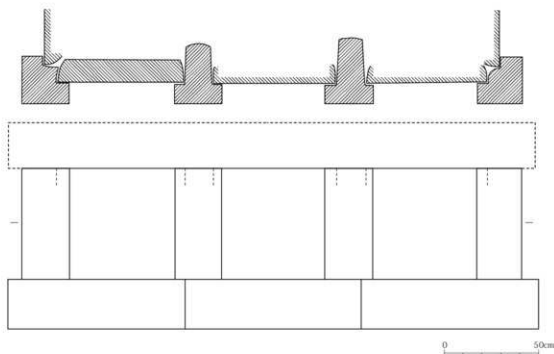


図1 青蓮寺壇上積基壇復元図

幅6.47m、高さ約0.90mを測り、解体は行われていないが東石と羽目石が別石で作られていることは明らかである。葛石は下面に小さな段を設けており、各面横方向に3石と向かって右端に側面の葛石の小口面が見えており、各面同じパターンで組み上げられる。地覆石は正面3石となるよう調整されている。

石塔に銘文は確認されていないが、「西大寺観上人遷化之記」（奈文研 1956）によるとこの地を茶毘所とし、その上に五輪塔を造立したものであることが分かり、没年（1290年）からあまり時間を経ない建造とみられる。

石塔に伴う各部別材の壇上積基壇で、ある程度の情報が知られるのは以上の2点である。この他、京都市神護寺文覚上人墓と性仁親王墓（五輪塔は鎌倉時代中期頃）も東石・羽目石を別材とする壇上積基壇であるが、詳細な情報を得にくいため割愛する。石塔関係ではこれら以外に管見に及ばないが、近接する時期の建築遺構にも若干確認することができるので紹介しておく。

#### 神奈川県極楽寺本堂跡（大三輪ほか 1980）

1979年度の調査で基壇遺構（第一基壇）が23.6mに及び確認された。壇上積基壇で、地覆石、羽目石、東石を残すが、葛石は確認できていない。東石と羽目石はそれぞれ別材を組合せて構築されている。極楽寺は忍性が正元元年（1259）に創建したとされ、建治元年（1275）の火災を受けるが、その段階でこの基壇は存在していたとみられている。

#### 奈良市春日大社若宮基壇、本殿回廊基壇（狭川 2022）

若宮社西面の基壇は、東石が隅部分と石段基部にしかなく、正式な壇上積基壇とは言えないかも知れないが、それ以外は地覆石、羽目石、葛石で構成されており、作り方は同じものである。この基壇は「中臣祐定記」寛喜四年（1232）閏九月一三日の項に「若宮御前水垣四面壇南北ヲ唐人之作石ニ天、壇カツラヲタ、ミ、壁石ヲ立（以下略）」（『春日社記録一』）と見えるものに該当するとみられ、唐人が製作したと記されている。時代的な背景を考えると、東大寺復興で渡来した「宋人工石四人」（『東大寺造立供養記』）の系譜上にある工人とみられる。東大寺の復興が完了し、周辺の社寺にも修復の手が及び、彼らの活躍の場が用意されたとみられる。

また、同社本殿を囲う回廊の基壇は、東石・羽目石を別材で組み上げる壇上積基壇であり、宋人工石による一連の仕事ではないかとみている。



香川県白峯寺東塔基壇



奈良県西大寺奥之院叡尊塔と基壇



奈良県春日若宮社基壇



奈良県春日大社回廊基壇



神奈川県極楽寺第1基壇（報告書より）



京都二尊院空公上人行状碑と基壇

写真 各地の壇上積基壇の諸例

極楽寺以外の写真は、すべて狭川撮影分を使用した。

3. まとめ—青蓮寺壇上積基壇の年代—

これらの事例をみると、石塔では13世紀中頃から後半の事例にみられるといえ、ここでは紹介していないが、14世紀にかかる多くの事例はすべて、東石と羽目石を一体として加工したものばかりである。もちろんこれより古い古代寺院の基壇には多く確認されているが、中世の資料で管見に及んだ限りでは、13世紀末から14世紀初頭頃を境に構築法が変化しているようであり、それを当てはめるならば、青蓮寺基壇遺構は13世紀後半頃の所産とみなすことができよう<sup>1</sup>。

ここで注目すべきは青蓮寺本堂及び本尊の造営年代である。本堂の阿弥陀堂は、多良木家相良頼宗が曾祖父頼景の廟所として永仁三年（1295）に建立したもので、現在の堂は嘉吉三年（1443）再興のものを宝暦四年（1754）に大改修したものである。しかし、現存する阿弥陀三尊の脇侍・観音菩薩像

の足柄に「永仁三」の紀年銘を朱漆で記載している（久野編 1985）ことから、当初の本尊であることは疑いない。また遺構の配置も本堂の中軸線を北（山側）へ延長したところに、ほぼ正しく当該基壇が設計されていることを思うと、本堂の造営と時を同じくして基壇も設置された可能性が高い。この点から現在の本堂は、当初の位置や規模を正しく踏襲して再興されたものと言え、石造基壇の造営年代も永仁三（1295）年頃に絞り込めると言えるだろう。

そうすると、基壇の中には相良頼景が眠っているのか、最も気になるところであるが、この点については将来の調査を待つこととしたい。

## 註

1. 13世紀に遡るとされる壇上積基壇遺構として、京都市二尊院の法然上人廟堂内に空公行状碑（建長五年／1253）を乗せる基壇が知られている。基壇は見事な壇上積基壇であるが、地覆石・羽目石・東石を一石で作りに出したもの4枚で構成されたものであり、壇上の反花座と墓石は一石で作られるなど高い技術を窺わせるものである。しかし、基壇と反花座の石材は同一とみられるものの、その上の碑本体とは異なるものである。岡本智子はこれを同時期とみなしているが、山川均は反花座を後補とみている。筆者も石材の違いと当該時代の壇上積基壇の造り方が異なる点を踏まえると、山川の意見に賛同する立場をとりたい。

なお、空公行状碑・基壇・堂はそれぞれ時期が異なるが、本堂背後の丘陵上にあり、この堂の左右には墓所が広がっている風景は、青蓮寺の基壇周辺を思わせるものである。

## 参考文献

- 岩下敏也ほか 1963 『重要文化財白峯寺十三重塔修理工事報告書』白峰寺  
大三輪龍彦ほか 1980 『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺旧境内遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会  
岡本智子 2012 『日本国内の宋風石造物』『寧波と宋風石造文化』汲古書院  
久野健編 1985 『造像銘記集成』東京堂出版  
狭川真一 2003 『西大寺奥ノ院五輪塔実測記』『元興寺文化財研究所研究報告 2002』元興寺文化財研究所  
狭川真一・鈴間智子 2011 『奈良県山添村所在五輪塔実測記』『元興寺文化財研究所研究報告 2009・2010』元興寺文化財研究所  
狭川真一 2022 『春日大社若宮神社の石造基壇』（春日大社の石造物⑥）『春日』108号、春日大社  
奈良国立文化財研究所 1956 『西大寺散尊傳記集成』（奈良国立文化財研究所史料第2冊）  
山川均 2007 『重源と宋人石工』『論集 鎌倉期の東大寺復興—重源上人とその周辺—』東大寺

## 謝辞

鎌倉極楽寺資料については、鎌倉市教育委員会 鈴木弘太氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる。

# 東光寺磨崖梵字の系譜

狭川 真一

東光寺磨崖梵字という名称で指定を受けているが、詳細な測量調査を経た結果、板碑形の輪郭が描かれた中に大きな梵字仏を配置したものであることが判明した。本稿ではまず磨崖梵字の調査結果を整理して特徴を列記し、本来の形状を明らかにしたうえで簡単な検討を加えることとする。

## 1. 東光寺磨崖梵字の概要と特徴

東から西へ派生する舌状尾根の南面部分を、東西約23mの範囲で北側へ9mほどU字形に掘削して岩盤を出し、最奥部を調整して幅2m前後、高さ5m以上の平坦面を作り出し、その面に梵字仏を刻んでいる。梵字仏は板碑形に浮き彫りされた中心上位に大きく葉研彫りされ、文字内は黒くなっており黒入れが著しく、色調も異なるものである。さて板碑形の形状を示すと、頂部を山形とし、その下に2条線を入れ、その側面は羽刻みとする。二条線下位から頂部までの高さは約75cm、羽刻みの上部幅約1.42m下部幅約1.3mで、上方へ開いている。この形状はまさに板碑の頭部に一致する。二条線の下には幅1.4m前後、高さ15cmほどの額部を作り出し、以下は大きな梵字（アーク）を葉研彫りする平坦面となる。磨崖碑として特徴的なことは、この二条線や額部などのある面は基盤面から4cmほど浮き出るように彫刻され、レリーフ状を呈している（図1）。ただし、この平坦面は上から約80cmが残り、それ以下の大半は剥落して当初の面を残していない。ただ額部下辺から下へ2.8mほどのところに梵字の一部らしきものがみられ、その直下は横方向の段差となっている。この段差から山形頂部までの高さは約4.1m、幅は1.5～1.65mを測る。その下位には小穴が穿たれている。

多くの部分が剥落しており、上半部のみ当初の面を残している。岩盤は加久藤溶結凝灰岩で、平滑に調整された面は暗青褐色を呈しており、他の面は剥落しているので凝灰岩の風化面となり、混入する礫石の凹凸が著しく、色調も異なるものである。さて板碑形の形状を示すと、頂部を山形とし、その下に2条線を入れ、その側面は羽刻みとする。二条線下位から頂部までの高さは約75cm、羽刻みの上部幅約1.42m下部幅約1.3mで、上方へ開いている。この形状はまさに板碑の頭部に一致する。二条線の下には幅1.4m前後、高さ15cmほどの額部を作り出し、以下は大きな梵字（アーク）を葉研彫りする平坦面となる。磨崖碑として特徴的なことは、この二条線や額部などのある面は基盤面から4cmほど浮き出るように彫刻され、レリーフ状を呈している（図1）。ただし、この平坦面は上から約80cmが残り、それ以下の大半は剥落して当初の面を残していない。ただ額部下辺から下へ2.8mほどのところに梵字の一部らしきものがみられ、その直下は横方向の段差となっている。この段差から山形頂部までの高さは約4.1m、幅は1.5～1.65mを測る。その下位には小穴が穿たれている。

なお、上部の梵字は「アーク」とみられ、その下位にも同規模の梵字を想定することができ、痕跡から「パーク」ではないかとされている。両者をあわせて金胎兩部の世界を表現する壮大なものであることが理解できる。

以上のように、磨崖碑ではあるもののレリーフ状に浮き彫りにする点を考えると、通常の板碑を製作している意識が強いのではないかと推測する。さらに暗青褐色を呈している点も関東地方に多い青石使用の板碑をイメージしてしまう。しかも、わざわざ磨崖仏として製作している点も気になる。板碑であれば近在にも類似のものは存在するし、それを造立する技術が無かったとは考えられない。以下では、近在の磨崖梵字仏や磨崖碑という観点から事例を観察してみる。

## 2. 近在の磨崖梵字仏

熊本県内では山鹿市青木磨崖梵字仏が知られる。基本的には巨大な月輪内に梵字を葉研彫りするもので、巨石の壁面に多数の梵字仏がみられる。梵字を記載するための平滑面を求めするために石材を刻み込んだ結果、それが光背風に見えるものもあるが、基本的には梵字群のみの彫刻にとどまる。

鹿児島県南九州市清水磨崖仏群も著名な磨崖梵字仏群である（齋藤1997）が、やはり巨大な梵字は月輪内に納まっているのみでそれ以上の輪郭線はみられない。また室町時代まで下ると板碑形の周囲をやや深めに彫り窪めるものが登場するが、時間的な差も含めて東光寺磨崖梵字の系譜上にあるとは言えない。

少し離れるが福岡県太宰府市の宝満山中に磨崖梵字仏が知られる（狭川1998）。金胎兩部の巨大な梵字を記す点では共通するが、月輪に納まる梵字を左右に並列させただけのものである。この他にも本地仏を示したとみられる梵字仏を散見するが、板碑様の輪郭を持つものはない。



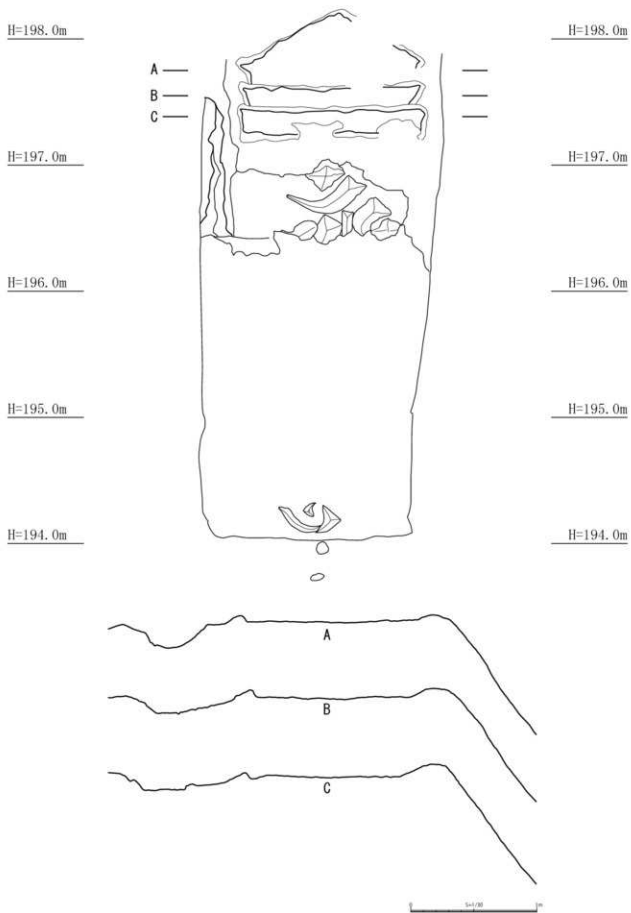


図1 東光寺磨崖板碑頭部の断面形状 (1/30)

こうしてみると磨崖梵字仏は基本的には月輪に納まる梵字のみで構成されるものが多く、板碑形を呈する磨崖仏はきわめて珍しいと言える。

次に、東光寺磨崖梵字の板碑形に似た板碑は存在するのを探ってみなければならない。

熊本県内は自然石板碑が大半で、頭部を山形にする例はほとんどみられない。数の点で多いのは大分県と鹿児島県が突出しており、それらの特徴を拾い出してみる（多田限 1978）。

まず鹿児島県では、岩林寺址碑伝とされる正応六年（1293）銘のものがある。頂部を山形にし、二条線と左右は浅めの羽刻み、その下位を額部とし、額部以下は平坦な碑面を成して上位に大きく梵字を刻み、過半部には銘文を刻む。典型的な板碑であるが碑面の上下幅が異なり、下部がやや広めに作られる。同所には永仁二年（1294）銘のものもある。碑面に梵字を大きく2つ縦方向に刻む点は共通するが、額部の高さが高く、厚みもあって上半部の形状は異なるものである。鹿児島ではこのような額部を高くし、碑面よりかなり厚く作り出す点が地域色とみられる。東光寺磨崖梵字の額部は低く、碑面との高低差も小さいので「板碑」としてのタイプは異なるものである。

大分県の事例を見てみよう。正応四年（1291）銘の護正寺碑伝や正応年間の徳永家碑伝などは古い例であるが、これ以降に登場する板碑も共通して額部の高さが高く、碑面との高低差も大きい。鹿児島県内の板碑に近似するものである。

若干の事例を引き合いに出しただけであるが、東光寺磨崖梵字の板碑形とは特に額部の形状や高さの違いがあり、九州に多くみられる板碑の系譜を引くものではなさそうである。同じ系譜上に乗るものであれば磨崖仏にする必要もなく、独立した板碑を造営すれば良いが、わざわざ磨崖碑として成立させている点は注意すべきであろう。また、線彫りによって輪郭を作り出すのではなく、数 cm ほどの厚みを持たせてわざわざレリーフとしている点から、これが板碑であることを主張する造立者の拘りのようなものを感じるのである。

### 3. 形状の似る板碑

中世前半期の板碑の資料を眺めていると本磨崖碑は、いわゆる武蔵型板碑と称する埼玉県を中心に一定の広がりを持つ一群をイメージさせる資料といえるのではないかと考えた。武蔵型板碑はまさに板碑の典型例であり、その資料的価値の大きさから中世史や考古学の研究者が早くから研究対象としてきたものである。

その形状について磯野治司氏の分類（図2・3）に従えば、I類に属する形状に似ているといえることができる（磯野 2009）。磯野氏のI類とは、頭部を圭頭状（三角形、山形）とし羽刻みおよび二条線・額部を有する形態である。その資料は初発期（13世紀第II四半期から中頃）の板碑、なかで

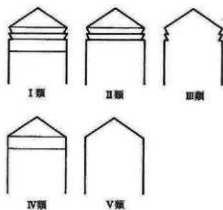


図2 磯野氏の形態分類（磯野 2009）

年代	1226-30年	1231-35年	1236-40年	1241-45年	1246-50年	1251-55年
I類	■	■	■	■	■	■
II類	■	■	■	■	■	■
III類				■	■	
IV類				■		
V類				■		■

図3 初発期板碑の年代別分布（磯野 2009）

もその初期の段階から認められる普遍化した形態と言えそうだが、13世紀前半期の資料では梵字を刻まず像容とするものが中心である（川越市勝福寺板碑、富士見市慈光院跡板碑）。13世紀半ばのものには梵字を刻む資料が確認できるが、頭部の山形が高めに作られていることや二条線の間隔も狭く、東光寺磨崖碑と一致する形状とは言えない。

また、武蔵型板碑が東国武士のステータスシンボリックな存在と仮定して、それをこの地で写すためには、磨崖仏で表示するのが最も形態的に似せることができるのではないかと考えてみた。しかしこの点では、多良木町一帯を支配したのは相良氏でその故地は遠江である。当該地方に武蔵型板碑は伝播しておらず、相良氏が武蔵型板碑をステータスシンボルに用いるという理由が見いだせない。さらに武蔵地域から九州に来た小代氏を例にとると、彼らの墓地（荒尾市浄業寺／多田隈1978）は阿蘇系の凝灰岩を用いた地元の五輪塔が主流であり、武蔵型板碑を意識した墓標は存在しない。

また板碑の多くは個人の墓塔あるいは供養碑、特定の集団の供養碑などが中心で下半部に銘文を刻む空間を設けており、実際に多彩な銘文が残されている。これに対し東光寺磨崖碑では、上下に大きく梵字を刻むだけで細かな銘文を刻む空間は残されていないと言え、一般の板碑とは用途が異なるという点は重要であろうと思われる。

これらの点から東光寺磨崖碑は、武蔵型板碑そのものを写したとは断定できないが、広く九州を眺めても同一形態になる磨崖碑や板碑も確認できないことから、形態の点からみたその位置づけはかなり難しいというほかない。

#### 4. 石窟との関係

磨崖碑に向かって右下に1基の石窟が存在する。壁面には構造物をはめ込んだ形跡があり、扉などの施設を木造で作っていた可能性が高い。窟内の空間は一定の広さがあり、内部に何かを保管する、あるいは人が短期間籠ることも不可能ではなさそうである。さらに窟の奥には、清水が湧き出すような小窟が附属している。

この石窟の評価は、現在まで露出していた点から新しく穿たれたものとみる可能性も残されており、磨崖碑と関連していると断定するのは注意しなければならないが、ここでは両者に何らかの関係があるのではないかと推測を試みる。

磨崖碑は金剛界大日如来と胎藏界大日如来を示す大きな梵字で、両尊つまり金胎両部の主導を主体的に抒することを目的として造営された密教系のもと考えられ、墓標や追善供養碑などとは性格が異なるかと理解しておきたい。おそらく、隣接する東光寺の行場的な位置づけが最も妥当ではないだろうか。

そのように考えると、脇に穿たれた石窟も修行に伴う施設として理解することも可能となるであろう。石仏の脇に小窟を構えるような構成は、奈良県地獄谷聖人窟（奈良時代～鎌倉時代）が知られるところであり、何らかの行場の可能性が推定されている。東光寺磨崖碑のあるこの場所を、そうした修行の場として整備した可能性は十分に考えられるところである。

#### 参考文献

- 磯野治司 2009 「初発期板碑の系譜と様相」『板碑が語る中世—造立とその背景—』「板碑が語る中世」シンポジウム実行委員会
- 多田隈豊秋 1978 『九州の石塔 下巻』西日本文化協会
- 齋藤彦松 1997 『清水磨崖仏群』（川辺町文化財調査報告4）川辺町教育委員会
- 伏川真一 1998 『太宰府の中世石造物』『太宰府市史—建築・美術工芸編—』太宰府市

# 多良木相良氏の城館遺跡

鶴嶋 俊彦

## はじめに

相良氏の政治・軍事動向から得られる政治的時期区分としての最大の画期は、15世紀半ばの人吉の相良前統による多良木相良家討伐と、これに続く永留長統による相良惣領家簞奪である<sup>1</sup>。本稿はその画期までに形成された多良木相良家に関わる城館を検討する。

多良木相良家の城館については、1978年の熊本県教育委員会編『熊本県の中世城跡』や翌年の『日本城郭大系第18巻（福岡・熊本・鹿児島）』、1980年の多良木町史編纂会編『多良木町史』、同年の熊本県教育委員会編『里の城遺跡・宮宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』に論及がある。とくに「里の城遺跡」の調査報告は、多良木周辺の城跡に関して綿密な聞き取り調査や測量調査が実施されるなど、極めて有益な報告で参考となる。

## 1. 史料に登場する城館

**多良木相良家第1期** 初代の頼景・長頼・頼氏・頼宗（人吉相良家では長頼三男頼俊・長氏・頼廣）の時代で、ほぼ鎌倉時代に相当する。相良家惣領で人吉庄惣地頭でもあった相良長頼は、寛元元（1243）年の訴訟で人吉庄の北方地頭職を没収されるが〔相5、関東下知状〕、球磨郡内の多良木や人吉庄に所領をもつ球磨郡を代表する武士として成長していた。人吉庄地頭の後継となり佐牟田家を興した頼俊は、寛元二年の下地中分によって失われていた「佐牟田堀内」（の地頭居館）を、建長6（1254）年の「相博」によって奪還した〔相14、鎌倉将軍家政所下文〕。堀内は私有権が強く認められた領主経営の本拠で、次の南北朝期の暦応3（1340）年には「当城」として城郭化した〔相87、相良運道談状〕とみられる。

この時期の後半、頼氏は多良木の頼宗に本貫地邊江国相良庄の「堀内」を譲与した〔相33、相良上運談状〕。その遺跡は東中館跡（静岡県牧之原市相良大江字箱瀬）とされ、発掘調査の結果、12世紀代に成立し13世紀初頭までの存続が確認されている<sup>2</sup>。

**多良木相良家第2期** 経頼・頼仲・頼忠（佐牟田相良家の定頼・前頼）の時代で、南北朝内乱期に相当する。内乱期の当初は永吉庄の領有をめぐる少武氏・佐牟田相良家・庶氏連合と多良木相良家＋「球磨上郡人々」連合との対立となり、戦場は永吉庄内の木枝城や山田城などの少武氏からの「御預城」の争奪戦が中心となる。興元元（1340）年に多良木相良に同心した人吉の相良祐長は、籠城していた山田城を引退した後に「経頼一所城」に帰籠っている〔相108、相良祐長軍忠状案〕。

その後の多良木家と佐牟田家の両家は、内乱期を通して一揆（「球磨郡一同之義」と離反を繰り返すことになる。康永2（1343）年には少武頼尚から「当城寄宿一族他人」の面々の本領を認める奉書を獲得した経頼が、定頼宛に北朝方となったことを伝えている〔相115、少武頼尚奉書案・相116、相良経頼書状〕。元中8（1391）年に佐牟田家前頼が「（多良木）相良孫五郎」宛てに「多良木競望之事不可有」という多良木領の不可侵契約を結び〔相186、相良立阿契状〕郡内での内乱が収束した。

**多良木相良家第3期** 頼久・頼親（佐牟田相良家の實長・前統・亮頼）の時代で室町時代中頃にあたる。両相良氏の平和条約が維持され、正統上も郡内が平穏な期間となる。一方、応永年間には佐牟田相良家は隣接する薩摩・大隅への積極的な派兵を繰り返す。前統時代（の応永29（1422）年頃）には薩摩国山門院350町を知行する〔相231、相良氏山門知行以下由緒書〕。

その後、年不詳だが両相良家の平和条約が破綻し前統による多良木家「退治」（頼久没年とされる正長元（1428）年頃と推定）があり〔願成寺文書「相良爲統置文」〕、頼久は肥地岡・鍋倉・古多良木の武士たちと五木経由で国中に立ち退く事件が伝わる〔『御当家聞書』〕。『南薩蔓綿録』所収「多良木家御系図」によれば、肥地岡・鍋倉二名は経頼の弟を出自とする庶子に確認され、古多良木も一族であろう。

相良家正史<sup>3</sup>では、嘉吉3（1443）年に前統が逝去して虎寿丸（亮頼）が11歳で家督を継いだとする。同年は虎寿丸が青蓮寺阿弥陀堂を再興した年でもある〔青蓮寺棟札・天文11年棟札の裏面追記〕。現

青蓮寺にある阿弥陀堂は相良家初代惣領の頼景菩提のための堂で球磨郡支配の象徴的場所であった。虎寿丸を惣領後継者として仰ぐ佐牟田家支持の武士たちは、相良家統一を果たした前統を中興の祖として崇拜する意味も込めて阿弥陀堂が再興された可能性が考えられる。

その後、相良家正史では頼朝が薨御へ逃亡し、一族の水留長統が惣領を継承し、多良木家の頼親・頼仙の二人を討伐して球磨郡内を統一したとするが、これを裏付ける同時代史料は一切存在しない。その頃の戦乱を記録した唯一の一次史料「犬童重国軍忠状案写」〔三村講介 2016〕によれば、文安5(1448)年4月の①薩摩瀬村上戸之尾での合戦、②同年5月の人吉勢による永里之山城攻め、③同年5月の真幸の北原勢の「上村之城」攻めでの防戦、④同年7月15日の「水面ノ城」に牧四郎左衛門とともに寄せ合い小田但馬を討ち取った合戦などが記載される。これらは正史に見えない戦で、軍忠状に登場する武士たちは正史にある頼親・頼仙らを討ち取った長統による「多良木討伐」に参陣した武将名と多くが重なる。

天文5(1536)年成立の「沙彌洞然長状」に始まる相良家正史の作成過程で犬童重国軍忠状が引用されたことは『南藤蔓綿録』などに確認でき、水留長統による相良家統一という正史編纂の目的から、犬童重国軍忠状案写にある一連の軍事行動は長統の多良木討伐にすり替えられ、相良家統一のストーリーが作り上げられたと推測できる。

因みに統一後の多良木は、長統の譲りによって、その四男頼泰が知行し「多良木殿」と呼ばれた。文明3(1471)年に頼泰は讒言によって知行を解かれ、13年後の文明16年12月に為統は頼泰に多良木村を進上し、翌年3月に頼泰は嫡子らとともに「先例に任せて」多良木村に入部し「鍋倉城」において祝儀を行った〔相 233、相良頼泰置文〕。しかし、頼泰は3年後の長享元(1487)年6月13日に再び謀反の疑いをかけられて「人吉下原宿所」で生害となる〔八代日記・嗣誠独集覧〕。多良木は再び為統の直轄領となり「多良木役人」を置いて上球磨の支配が行われ、天文14年(1545)7月13日に頼泰の孫である相良治頼が「多良木之城二打入」二ヵ月にわたり占拠した〔八代日記〕。永禄2(1559)年の廻野原合戦では岩崎加賀が城番を務める人吉勢の前線拠点となっていて、8月15日夜半に湯前勢が押寄せ合戦があった〔嗣誠独集覧〕。

## 2. 多良木村の範囲

先ず多良木相良氏所領として一次史料に現れる「多良木」の地理的な位置を確認する。建久8(1197)年の肥後國球磨郡田数領主等目録写〔相 2〕には、人吉庄600丁・永吉300丁・公田900丁・豊富500丁・豊永400丁と並んで、「多良木村百丁没官領 伊勢弥次良実名不知」とあり、この多良木村がやがて相良頼景の所領となる。また、寛元元(1243)年の関東下知状〔相 5〕の3条目事書には、「多良木内古多良 竹脇 伊久佐上 東光寺以上四箇村事」とある。この四箇村の田地が40丁で、多良木村はおよそ10箇村程度の小村から構成されていたと推量される。古多良は大字多良木に古多良木の字があり、伊久佐上と東光寺は大字黒肥地に「軍野」「東光寺」という字が所在する。また、正応6(1293)年の相良上運(頼氏)談状〔相 32〕にみえる在家のうち「う志・ま」(牛島)は大字多良木の球磨川南岸に、「まか」と(馬門)はその対岸に字として確認でき、さらに延慶2年(1309)の肥後国多良木村地頭代陳伏案〔相 38〕に見える「八岡名」は、大字多良木の球磨川北岸に八日の集落名や字八日原に地名として遺る。

これらから鎌倉時代に多良木相良家が所領とした多良木村は、近世の多良木村と黒肥地村を合わせた部分に比定できる。なお、現在の町内にある近世の久米村・奥野村は、豊富庄に含まれる久米郷の内で、黒肥地村は、延宝4年(1676)の多良木村からの分村である〔多良木町史〕。

## 3. 城館遺跡の比定

鎌倉時代の多良木村は相良家惣領頼景の所領地で、その居館は正史では大字黒肥地の字東の前の球磨川河畔の「相良頼景館」が伝承地となるが、これを裏付ける同時代の一次史料はない。この遺跡については、本報告書本文で詳細に報告するため本稿では割愛する。

南北朝時代になると、「経頼一所城」や経頼が一族らと寄宿した「当城」を見出すが、具体的な地

名がなく、その比定には経頼拠点の解明が必要となる。

『誠謙独集覽』の「上相良相良多良木連続之次第」には、「第八(代)、左衛門尉頼親頼久御嫡子也、文安五年戊辰八月四日御忌日也、法名蓮珍古多良木二居住、今ノ城林ト云是也、伝記曰、頼氏ヨリ頼忠迄五代鍋ノ城居住、頼久・頼親二代ハ内城ニ居城ノ由、今ノ里城トハ御飯屋ノ屋敷ニテ御座候由」と伝えている。

また、同書には第二代頼氏が建永2年(1207)に北野天神を鍋城に勧請し、これは今の里ノ城天神でその遷座は正保3(1640)年のことで、里ノ城鍋倉諏訪元屋敷は鍋倉天神とも称したという。このほか文応2(1261)年には鍋城に長運寺が再興され貞治6(1367)年に焼亡したが、永徳年中(1381～1384)に黒肥地永野に移され、今の長野長運寺薬師堂の釈迦如来が長運寺本尊とする記事もある。

ところで現長運寺境内にある西光寺厨子銘文には、人吉相良の長輔(長毎)が大檀那として「当所城内諸侍諸生男女子孫繁昌」などを祈願して明応10(1501)年に厨子を修造した旨が記され、里城弓削田家の氏神堂の御正体墨書名には「多良木鍋城西光寺八王社壇始奉建立、本地御正體千手千眼一輪、長祿四(1460)年三月十五日、住持弘辨七十四歳」とある〔『多良木町史』資料編〕。すなわち西光寺厨子銘文の「当所城内」とは鍋城のことで、明応10年には侍や諸人が住む城郭であったことになる。

江戸時代、「上相良相良多良木連続之次第」のように第2代頼氏から第6代頼忠(13世紀初頭から15世紀前期頃)までは鍋城を居城とし、頼久・頼親の代(15世紀中ごろまで)に内城に移ったという伝承が形成されていた。しかし、鍋城は統一後の相良氏の城として16世紀初頭の長毎時代まで存続していたことになり、相良家正史の利用には慎重が必要となる。

また、一次史料に出る「経頼一所城」や経頼の「当城」は、伝承では鍋城跡となるが、南北朝初期の人吉相良氏は平地館の佐幸田堀内を「当城」と呼んで城郭化していた可能性があり〔相87、相良運道談伏〕、「経頼一所城」や経頼の「当城」が例えば伝相良頼景館や後述の東城跡のような平地館であった可能性も考えておく必要がある。

一方、内城は大字黒肥地字土屋の段丘北西端が伝承地で、飯屋だったという里ノ城も大字多良木に里城という字として伝承されている。

ところで室町時代中期に頼久とともに出郡したという肥地岡・鍋倉・古多良木の庶子一族も名字の地に館を構えていたとみられる。そのうちの鍋倉氏の館は、字里城の一角には「なべくら」の屋号を遺す宅地があり里城に比定できる。また、このことから相良家統一後に登場する多良木殿頼泰の「鍋倉城」の比定地も里城となる。なお、鎌倉時代末期の元応2(1320)年の相良頼資申状案〔相46〕によれば、心蓮(相良頼秀)が館を置き八岡名と称したところを乗心は鍋倉名と名付けて横領していると頼資が訴えていて、八岡名と鍋倉名が隣接した名であったことを指している<sup>4)</sup>。

肥地岡氏の館は、江戸時代後期の「球磨絵図」〔西重美氏所蔵〕に里城西隣の小村として「肥地岡」の記載があり、字馬門付近の台地上に推定できる。また古多良木氏の館は、字古多良木内に該当するような遺跡はないが、柳橋川を挟んだ北隣の字東の河岸段丘に「城山」という小名をもつ鎌倉時代の遺跡が候補地となる。

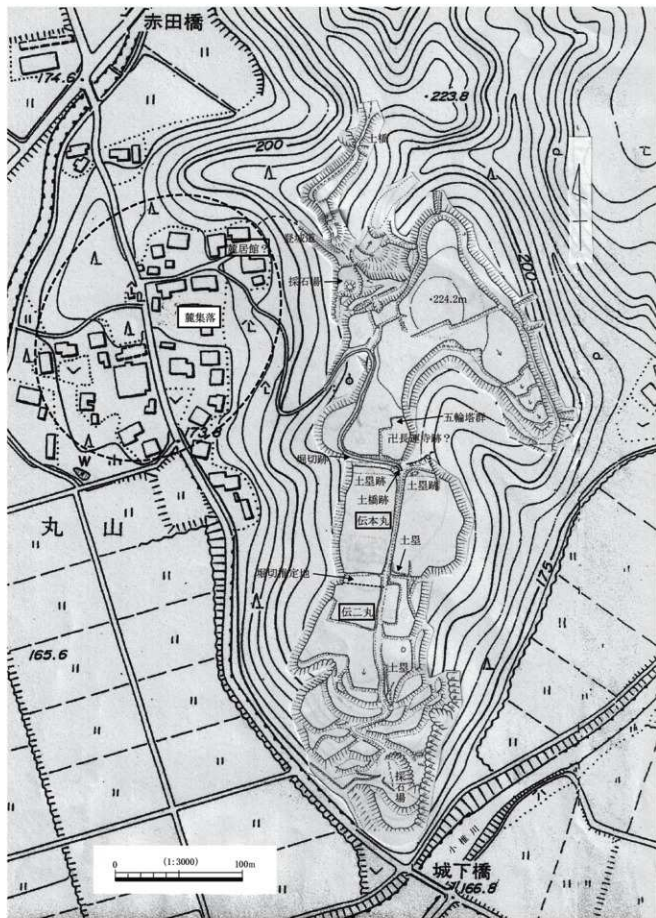
#### 4. 多良木相良氏関係城郭の構造

##### (1) 鍋城跡(大字黒肥地字鍋城)

遺跡は、標高224m、比高差60mの加久藤溶結凝灰岩を基盤とする台地で、周囲には浸食崖が発達する。台地北端に東方からの浸食による迫地が野首を形成しており独立



第1図 鍋城絵図(熊本県立図書館蔵)



第2図 鍋城跡縄張り図



的な地形となる。台地面は南北400m、東西で最大150mの規模があり、台地周りの切り立った加久藤溶結凝灰岩の崖を要害に利用する。

近代初期の「球磨郡村岡附属図」では、台地中央に土橋と見られる通路をもつ東西方向の堀切が描かれる。堀切の南側台地は大きく描かれ「本丸」「二丸」と記入された畑があり、一方の北側は小さくデフォルメして描き城外として意識しているように見える。台地面は北端部を除いて耕地として開墾されており、現在は放置され藪となった部分が多い。1980年刊行の「里の城遺跡」調査報告書に鍋城跡での開墾や踏査の貴重な記録があり、これを準用しながら縄張りを考察する。

現在の堀切部分は農道で、現状は長さ45m、幅3m、深さ1m弱の凹道であるが、1980年頃は幅5～7m長さ50m、深さ1.4m～2.3mの規模があり、堀切東部の南側には長さ10m・幅5mの土塁が残っていたというので、堀切南の伝本丸側に土塁を備えていたらしい。

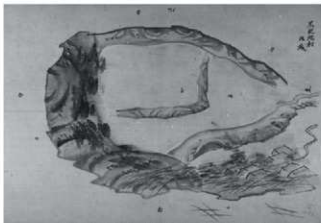
この農道は南側台地を縦断して南端のつづら折れの坂道へと続くが、伝本丸と描かれた畑の南部は台地のクビレ部となり、1.2mの段落ちで伝二丸となる。クビレ部の農道東側には幅6m、長さ10mの東西方向の窪みが残存し、直上の畑南縁には高さ0.6mほどのL字状の土塁跡がある。以上から、クビレ部分に台地を東西に貫く堀切があった可能性が指摘できる。なお、農道西側には道路に沿って野面積みの石垣があり、二丸下の畑の東部には井戸跡があるが年代不明である。また、つづら折れの坂道の中途にある複数の削平段が曲輪跡か耕作地跡か判断に苦しむが、岩壁が露出した箇所は凝灰岩の石切場跡である。

一方、堀切の北部では、すぐ北東の畑(8056番)の奥に五輪塔群(火輪2、地輪4)を確認しており、上述した長運寺か西光寺の跡の可能性が考えられる。台地北端近くの栗林は標高224.2mの最高地点で、北端の北側と北西側斜面に幅4m深さ1m長さ15m～20mの堅堀がある。また、この北部台地の北縁から東縁下には高さ2.5～5mの切岸があり幅3～6mの帯曲輪状の地形となっている。しかし、南東部ではその幅が1m程度となり斜面を下る山道に接続するので後世のものかもしれない。

北部台地の北側には「古城堀」と呼ばれる自然の迫地があり、北方丘陵との鞍部に丸山集落からの登城道が取り付く。村田修三氏が「カニばさみ状の土塁」とした地点があるが<sup>5</sup>、この土塁は石切場の残存部である。北側の尾根筋の二段の削平段を登ると北側縁部に高さ0.7mの土塁をもつ長さ50mの狭小な平場があり、その北東基部に両側が堅堀で土橋となった虎口空間がある。ここから先は幅2～3m長さ25mの通路となった細尾根で北方丘陵本体に接続する。ここが城城の北端であろう。

『多良木町史』には、「城の東方に馬場を回らし、その下に古城堀と称する掘割」、「岩風呂と称する泉」、「城の一隅から当時の遺物である多数の糸切文底の土師器と、中国の南宋時代の青磁片が出土」といった記載がある。また、168頁には「鍋城望楼址」と題された複数の柱穴ないし礎石跡らしい遺構を描いた図面が掲載されている。昭和47年12月下旬に実施された発掘調査であるが、これに関する記述はなく発掘調査箇所や遺構・遺物の詳細は不明である。

以上、鍋城は独立地形に近い溶結凝灰岩台地の周辺に発達する急崖を天然の要害として築城され、その立地や構造は南北朝内乱期の史料に見える「木枝城」に比定される岩城跡(錦町大字木上宇岩城)に類似し、同時代の「経頼一所城」や経頼が一族かと寄宿した「当城」に比定しても矛盾はない。ただし、伝本丸部分は台地を二つの堀切で分断して方80m程度の主郭を形成していた可能性がある。そうであれば、その使用(修築)年代は統一相良時代まで下降するかもしれない<sup>6</sup>。なお、丸山集落は宮ヶ野川左岸の段丘上のもとまった地形に立地しており、麓集落や居館に相応しい位置にあり、往時の登城道は丸山集落背後からのルートであろう。



第3図 内城絵図(熊本県立図書館蔵)



### (2) 内城跡(球磨郡多良木町黒肥地字土屋)

室町時代中期(15世紀前半)の相良頼久・頼親の館城とされる内城跡は、相良氏菩提寺であった青蓮寺の北側にある標高190m比高約30mの台地北西端に位置し、「ウチジウヤマ」と呼ばれる。

「球磨郡村岡附属図」では、鉤型の曲輪縁や堀切と推定される書き込みがあるが正確性に欠ける。現地で縄張りや踏査すると、幅13mの堀切を設けて台地本体から切り離して城域を画し、北・西・南は自然の崖面を利用したシンプルな縄張りであることがわかる。

測量調査報告(『里の城調査報告書』

所収)によれば城内は四区画に分れるとされるが、切岸の連続性や高低差、配置からすると堀際に土塁をもつ北東部分が主郭で、その西側の一段下がった部分に副郭の曲輪群、さらに高さ4.5mの切岸下にある崖際の腰曲輪群から構成される。主郭の東側に推定される堀切の埋没状態が不明で、土橋が存在したのか現状では即断できず後世の農道の可能性もある。縄張りとしては南端の農道付近を出入り口とみたほうが妥当だが、これも確証はない。



第4図 内城跡



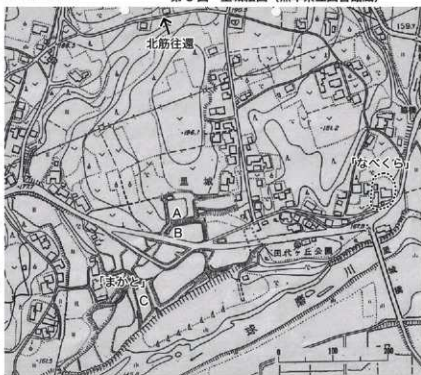
第5図 里城絵図(熊本県立図書館蔵)

### (3) 里城跡(大字多良木字里城・九鹿・馬門)

「球磨郡村岡附属図」では、北筋往還の南側の里城台地一帯を描いているが、城郭の構造に関するものは一切描いていない。

この絵図のちょうど中央あたりに推定される箇所に『里の城調査報告書』所収の「九鹿地内の城跡」が確認されているが、筆者はその南の球磨川右岸段丘上にも連続する曲輪群を確認している。

この城跡は里城と馬門の集落の中間の標高190mほどの丘陵頂部にあり、鍋倉氏館・鍋倉城・多良木之城の比定地でもあるが、肥地岡氏館が存在した可能性も秘めている。そのため遺跡名として地名を



第6図 里城跡

採り里城跡と呼称することにする。

「九鹿地内の城跡」は遺跡の北端 A にあり、西・南・北に横堀を廻し、東を土塁で圍繞したと推定される方 50m 規模の方形居館である<sup>7</sup>。

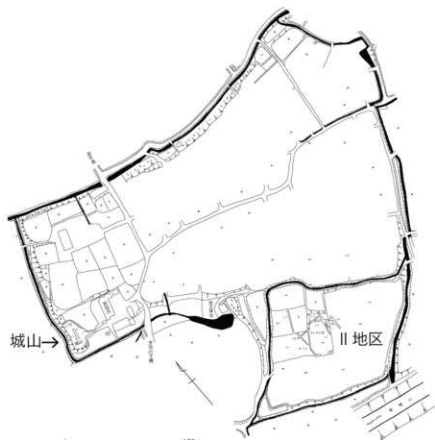
その南堀に接して北辺に土塁をもつ曲輪 B が展開する。この曲輪は新旧の県道によって分断されているが、長軸 150m 短軸 100m の曲輪に復原され、さらに球磨川右岸側丘陵上となる南西側にも堀切で仕切られた南北 70m 東西 20m の曲輪 C がある。また、県道工事前には東側の旧田代公園との間には「里城の堀」と呼ばれた帯状窪地が「九鹿地内の城跡」の南側堀に続いていたという〔「里の城調査報告書」〕ので、一段下がった東部にも附属曲輪があった可能性がある。

#### (4) 東城跡 (大字多良木字東)

標高 155m の球磨川低地に突出した比高 5m の河岸段丘上にある。所在地は古多良木とは柳橋川を挟んだ北岸にあり、古多良氏館の可能性をもつ。この遺跡は多良木町史編纂関係で古代の球磨郡東郷の想定地とされ、段丘先端の「城山」部分と段丘基部のⅡ地区で発掘調査が行われている。大型の鎬蓮弁の青磁や白磁、天目、糸切底土師器、瓦質の播鉢などの破片が出土し、同時に出土した焼米の C14 測定の結果は 1215 年 +80 年とされ、町史では平安後期から鎌倉前期にかけての居館があったと結論している。

現在、その出土遺物を実見することが出来ないが、町史掲載の図面を見る限り、土師器は 13 世紀後半以降で、白磁はよくわからないが、青磁は同安室で劃画文、蓮弁文があり、瓦質土器は頼景館でよく見る播鉢、瓦器は中世須恵器の破片とみられ、年代観は 13 世紀後半～14 世紀くらいという年代観が妥当である<sup>8</sup>。

段丘先端に土塁などの遺構は確認できないが、方形基調の段丘形状や道路、地割・水路から、西端には東西 90m 南北 120m の居館が推定され、出土品からも鎌倉時代の多良木氏関係の館である蓋然性は高い。ただし、15 世紀中ごろの相良頼親の頃まで遺跡年代が下降するのは今後の調査による検討が必要である。



第7図 多良木町東城山付近図 (『多良木町史』所収)

(5) 久米城跡 (球磨郡多良木町久米字古城・天神宇土・今山)

文安5年の内証時、久米城は多良木の相良頼観の持城で、源島某が在番という(『南藤愛錦録』)。久米には北尾根・中央尾根・南尾根それぞれに城郭を確認しているが、構造上の特徴からそれぞれを戦国時代・南北朝時代・室町時代に推定しており、南尾根の城跡が内証期使用の久米城に該当する。

中央尾根から派生した尾根筋の鞍部に2本の堀切を入れて遮断して城郭化したもので、主郭相当箇所は北東半分が削平されているだけでほとんど加工されてい

ない。北西に下降する尾根上には削平地が曲輪なのか耕作地なのか判断に迷うが、尾根筋を断ち切っている町道部分に堀切があった可能性がある。勘代寺がある麓の字古城(フツジョウ)が当時の城代の屋敷の想定地となる。



第8図 久米城跡

## 5. まとめ

これまで多良木相良氏の歴史は相良家正史となる編纂物を参考として語られることが多かった。その滅亡による相良家の統一は、一次史料により15世紀前半の吉佐佐田相良家の前統時代の「多良木討伐」にあり、文安5年とされる永留長統による頼観・頼仙の討伐による多良木家滅亡のシナリオは、改めて吟味する必要がある。

関係する城館についても相良家正史に始まる伝承を根拠に比定されてきたが、鍋倉跡については、主郭が台地を堀切で分断して造成した縄張り構造の可能性があり、その存続も寺社関係銘文から16世紀初頭まで下降し、統一相良氏によって使用されていたと解釈されることを指摘した。南北朝時代の史料にある経頼の城が鍋倉に該当する可能性はあるが、構造も含めて発掘調査による究明が必要であろう。

内城跡は正史の伝承しか根拠がなく、堀切や虎口の構造や出土品による解明がされないと、頼久・頼観時代の城という確信をもつには至らなかった。

里城跡北端には「九郎地内の城跡」と命名された土塁囲みの単郭城館が立地し、それは鍋倉氏ないしは肥田岡氏の館跡であった可能性がある。その南側の丘陵に連続して曲輪が展開する城郭部分は群郭式構造で、永留長統の居城に推定される山江村高城跡に類似する。長統の四男相良頼泰の鍋倉城、それを踏襲した統一相良氏の多良木之城に比定しても矛盾がないことを指摘しておきたい。

古多良木は最後の多良木相良家当主とされる頼観が居住していたという伝承があるが、その隣接地となる東城跡は出土遺物が鎌倉時代のもので、沖積平野に大きく突き出した立地や方形基調の地形・地割などを勘案すると、多良木相良氏の初期拠点形成に係わる居館である可能性が濃厚である。また伝承どおり室町中期に頼観の出自となる館があったとすれば、多良木相良氏一族の中で「古多良木」氏の位置づけや名字の由来など、今後検討すべき事項も浮かび上がってくる注目しておきたい遺跡である。

## 参考文献

- 柳山無一軒著牛島盛光監修 1977 『南藤蔓錦録』 青潮社
- 熊本県教育委員会編 1977 『蓮花寺跡・相良頼景館跡』 熊本県文化財調査報告第 22 集 熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会編 1978 『熊本の中世城跡』 熊本県文化財調査報告第 30 集 熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会編 1980 『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告』 熊本県教育委員会
- 熊本中世史研究会 1980 『八代日記』 青潮社
- 相良村誌編纂委員会編 1995 『副誠独集覽』 相良村誌資料編 2 相良村
- 田代政輔著堂屋敷竹次郎訳 1972 『求麻外史』 青潮社
- 多良木町史編纂会編 1980 『多良木町史』 多良木町
- 東京大学史料編纂所編 『大日本古文書 家わけ五ノ一 相良家文書之一』 東京大学出版会 1970
- 人吉市教育委員会編著 1991 『願成寺文書』 人吉市教育委員会
- 人吉市教育委員会編 2014 『人吉史料叢書 第 1 巻 御当家人書』 人吉市教育委員会
- 三村講介 2016 「犬童重国軍忠状案の近世期写について」 『ひとよし歴史研究』 第 19 号 人吉市教育委員会

## 註

1. 鶴嶋俊彦 2015 「文安五年相良家政変の実像」 服部英雄他編 『歴史を歩く・時代を歩く』 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
2. 小野真一他 1993 『相良町東中館跡』 相良町教育委員会
3. 相良家正史とは、天文 5 年の沙彌洞燃長状に始まり、江戸時代に編纂された『南藤蔓錦録』『副誠独集覽』『求麻外史』などの相良家通史をさす。
4. 松本寿三郎 1980 「上相良多良木連統之次第」 上記参考文献『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告』所収の付論
5. 村田修三 1987 『鍋城』 村田修三編 『因説中世城郭事典』 第 3 巻 新人物往來社
6. 村田修三氏は註 5 において、台地南部を当初の城域、台地北部を後世の拡張部分とする。
7. 「九鹿地内の城跡」報告では、その北 53m に丘陵を東西に横断する幅 7m 全長 85m の帯状崖地を堀切3)としている。縄張り上、「九鹿地内の城跡」との関係が説明しにくく、丘陵を東西に横断する道路痕跡の可能性も指摘しておきたい。
8. 多良木町文化財担当職員永井孝宏氏の教示による。

# 中世多良木の仏像と多良木相良氏

有木 芳隆

## はじめに

本稿は、平安時代から室町時代におよぶ中世多良木地域の仏像の様相を概観し、その製作に関わるいくつかの問題について考察することを目的とする。

以下の考察を進めるにあたっては三つの視点に留意したい。一つは「多良木」という一地域社会における仏像製作のあり方、具体的には製作の主体（発願主、施主、勧進僧など）がいかなる人々であり、いかにして仏像製作にいたったか、それら担い手が時代の変遷によっていかに変化していったかを検討する地域史に関わる視点である。二番目は、本報告書の主旨に関わる多良木相良氏とその造像活動の問題である。三番目は、多良木地域を含む球磨地域という日本国の南辺境に位置する地域の仏像のあり方が他地域の仏像と異なった様相をもつのか、また製作者（仏師）がいかなる技術的系譜にあるのかという彫刻史的視点である。いずれも、多良木の仏像と仏像製作を考える上で相互に関連する重要な視点と思われ、その検討作業は多良木という地域社会の一面を明らかにするだけでなく、「中央」に対する「地方」の仏像製作のあり方を浮彫にする、彫刻史的にも重要な材料を提供できるのではないと思われる。

始めに、平安時代9世紀末～10世紀ころの本地域の最古とみられる仏像から、室町時代にいたる主な仏像作例について概観をこころみる。次に第2章では、とくに注目すべき重要作例について個別に考察する。これらの作業を経て、第3章では多良木相良家（氏）<sup>1</sup>と青蓮寺阿彌陀三尊像の関係について考察する。そして最後に多良木地域の中世仏像のいくつかの問題についての私見をまとめてみたい。

なお、本稿をまとめるにあたっては、戦後に限っただけでも上村重次氏や多良木町、九州大学文学部、熊本県立美術館等の先学や諸機関の貴重な仏像調査の成果に負っていることを注記しておきたい<sup>2</sup>。

## 一、中世多良木の仏像概観

以下、中世多良木地域の仏像について時代ごとに概観する（表1、2参照<sup>3</sup>）。

### 【平安時代】

球磨地域において仏像がまつられ、あるいは製作されるようになったのはいつ頃であろうか。中球磨地域の免田や上村（いずれも現あさぎり町）では9世紀頃の「骨蔵器」が出土しており、仏教の葬送儀礼である火葬がこの地で採用されていたことがわかる。とくに上村の西小原遺跡出土の骨蔵器の場合には、官人の帯装飾品である石製丸轡が相伴していて、官人たちやおそらく有力豪族たちにも仏教が浸透していたことを教えてくれる。平安時代初期までには仏教が信仰され、それとともに仏像もまつられるようになっていたであろう。

今のところ多良木最古であり、球磨地域でも最古とみられる仏像は、中山観音堂の《木造観音菩薩立像》（図-1 像高153.0cm）である。本像の、胸下で胸を絞った腰高の体型と頭頂の大きな髻や、頭部と共木で彫られた山型三面宝冠などは平安時代前期風の古様な作柄である。製作されたのは9世紀末～10世紀頃とみられる。

本像は、この地域の官人や有力者たちに仏教が広がった時期に、すでに仏像もまつられていたことを示す貴重な存在である。本像についての詳細は次章にゆずるが、この頃には多良木にも寺院が建てられていたとみられ、それを外護したのは地域の有力豪族であったと想像される。

その後、10～11世紀前半頃までの平安時代中期の作例は今のところ確か



図-1

められていないが、11世紀半ばに完成された平安時代後期の「定朝様」の仏像は複数存在している。

かつての多良木には、この時代の重要な紀年銘作例が2例伝えられていた。現在は熊本市内の個人蔵となっている《木造釈迦如来坐像》(図-2)と《木造薬師如来坐像》である。両像はかつて鍋城の長運寺あるいは西光寺にまつられていたとされ、いずれも大治5年(1130)に造立された熊本県内最古の在銘像である。像内銘記には「大治五年十一月五日/造立檀主僧快暹(釈迦如来像)」「大治五年十一月五日/造立檀越僧快暹(薬師如来像)」とあり、釈迦像はヒノキ材製で、頭体幹部を一材で彫出し、それを前後に割削いで内彫りする「割削造」の技法で造られている。現状の像容は、後補彩色のためそれぞれ異なっているようにみえるが、両像の耳の形状は酷似しており、同一の作者(仏師)によって造られたものであろう。本像は、この地域の須恵氏や平河氏、久米氏など有力在地領主を発願主として製作されたと想定されるが、具体的にはわかっていない。「檀主快暹」もその関係者の可能性があるが不詳で、同じ大治5年銘の大分県国東の長安寺・太郎天立像の銘文にも快暹の名がみえるが、同一人物か定かでない。



図-2



図-3

黒肥地・東光寺跡薬師堂の《木造薬師如来坐像》(図-3)も注目される「定朝様」の仏像である。像高35.4cmと小振りながら、本格的な優れた作柄の仏像。材質はカヤ材とみられ、頭体の幹部を一材で造る一木造の構造で、おそらく平安時代後期12世紀の作とみられる。なお、本像の背面板は後の補作で、天正9年(1581)に「大檀那相良朝臣藤原義興」を檀那として、「作者常州之住権大僧都頼賢七十五歳」により補作されたことが銘により判明する。

この薬師如来坐像が注目されるのは、12世紀末に相良頼景が獲得していたとみられる「多良木内古多良 竹脇 伊久佐上 東光寺以上四箇村」(『相良家文書』5号)のうちに東光寺村が存し、本像と頼景はほぼ同時代と考えられることである。本像が当初から東光寺にまつられていたものか明らかでないが、もし当初から東光寺ないしその周辺にゆかりの仏像であったのなら、相良頼景との何らかの関係も想像しうるであろう。

つぎに、この時代の記念碑的な作例が、栖山観音堂の《木造千手観音菩薩立像》(図-4)である。本像は像高280.0cmで球磨地域随一の巨像。材質はクス材で、頭体の幹部を巨木の一枚で彫出している。後補の彩色のため面貌も表情がわかりにくくなっているが、修復のため彩色を除去した際のお顔は(図-4(2))、面長で頬が豊かで伏し目がちの「定朝様」の顔立ちである。

注目されるのは、本像の頭部額に着けた「天冠台」の形が、「紐二条+列弁帯」形になっており、この形式は10世紀後半から11世紀前半頃までの仏像作例によくみられるもので、天喜元年(1053)平等院鳳凰堂・雲中供養菩薩像の天冠台で、列弁帯のうえに花形が表現されるようになって以降は、その形式が天冠台の主流となるという<sup>4</sup>。浅く控えめに彫られた面貌や動きの少ない体軀からみて本像が製作されたのは、おそらく12世紀と思われるが、より古い天冠台形式を残していることがわかる。製作にあたった仏師の技術的系譜が、一時代前の様式に属していたことを示しているものか。地方で仏像製作にあたった仏師たちは、造像様式や技術的に一時代古いものをベースにしているも、同時代の様式や技術を習得しアップデートしながら造像していたことをうかがわせる。

本像を本尊像とする栖山観音堂には、本像を守護する毘沙門天立像(像高162.0cm)など3軀の神形立像もまつられており、いずれも像高160～178cmの大型の像である。巨像を取り囲むように大型の毘沙門天立像などを配するのは、あさぎり町・勝福寺跡毘沙門堂の本尊木造毘沙門天立像(像高237cm)



を囲むように、神将形立像3軀をまつていることを想起させる。勝福寺毘沙門天立像は、銘文から久寿3年(1156)に球磨地域最大の在地領主であった須惠氏によって造立されたことがわかっており、栖山観音堂像もおそらく有力な在地領主によって造像されたものと想像されるが、銘文等は発見されておらず造立の経緯や願主、作者は不明である。

栖山観音堂の他にも平安時代後期12世紀の大型の仏像が注目される。中山観音堂の《木造四天王像》も平安時代後期の作柄の優れた仏像であり重要な作例であるが、詳細は第2章の解説にゆずる。

馬門薬師堂の《木造薬師如来坐像》は、像高138.0cmで材質はカヤ材とみられ、頭部部の幹部を一材で造っている。後頭部と背面から内列りを施しており、膝前部と両肘先などは後補に代わっている。素朴な作柄ながら平安時代後期の様式であり、やはり12世紀ころの作と思われる。

平安時代後期の多良木地域には、様式的に判断して11世紀後半～12世紀作と思われる仏神像が、現在管見の限りだけでも29軀ほど残されており、これは一町内としては九州全体でみても破格の分布密度といえる。多良木のみでなく球磨地域全体でみても80軀以上の平安時代の仏神像がまつられており、他に比べてその密度は分厚い。また、当地を含む球磨地域では毘沙門天像、四天王像なども数多くみられる。どのような理由により、多良木および球磨地域に平安期の仏神像が数多く存在しているのか重要な問題であるが、その理由は次章以降で考察していきたい。



図-4



図-4 (2)

#### 鎌倉時代

12世紀の第4四半期ころになると、奈良仏師の康慶・運慶父子を中核とする慶派がそれまでと異なる新様式の仏像を造立しはじめた。柔軟で張りのある肉取りや、自由な衣文構成など実人的写実的な姿の仏像が登場し、とくに治承4年(1180)の南都焼き討ち事件後の東大寺・興福寺復興造営は、慶派仏師が台頭し活躍する大きな契機となった。

一方、球磨地域各地では、12世紀までは数多くの仏神像が造立されていたが、13世紀の鎌倉時代様式の仏像は、じつは寥々たる様相である。たしかに球磨地域でも湯前町・城泉寺阿弥陀堂の寛喜元年(1229)銘《木造阿弥陀三尊像》のように、都の仏師による鎌倉様式の美麗な仏像がもたらされるようにはなったが、それは本像のみにとどまっている。鎌倉新様式を学んで仏像製作をおこなったと思われる、地域性の強い仏師の作例もみられるが(例えば山江村高寺院の仏師源覚が製作した承久2年銘(1220)《木造勢至菩薩立像》)、それも数少ない。

多良木地域でも、今のところ13世紀前半の仏像は見当たらず、在銘像としては青蓮寺の正応元年(1288)銘《木造地藏菩薩立像》(図-5)がもっとも古い。本像は像高156.0cm、ヒノキ材の一本造で後頭部と背面から内列りを施し、後頭部には盖板を当てる。もとはあさぎり町勝福寺跡毘沙門堂にまつられていた仏像で、明治3年に勝福寺が廃寺となった後、青蓮寺に移されたと伝わる。作風と構造は、鎌倉時代後期の像としては古風かつ素朴。

勝福寺跡毘沙門堂には久寿3年(1156)銘や久安3年(1147)銘の毘沙門天立像がまつられており、平安時代末期に須惠氏の拠点寺院として大型の毘沙門天像が造立されたことが銘文から知られる。鎌倉後期にはすで



図-5

に相良氏の勢力下にあったと想像されるが、この地藏菩薩像も相良氏あるいは須恵氏によって地域性の強い仏師を採用して造像されたのであろう。

一方、同じ青蓮寺永仁3年(1295)銘**《木造阿弥陀三尊像》**(図-6)は、足柄の銘記から京都の院派仏師・法印院玄によって造立されたことがわかる。院玄は京都蓮華王院三十三間堂の千体千手観音菩薩像のうち7軀を造立したことが知られ、僧綱位も最高位の「法印」を帯びた当代一流の仏師の一人であった。中尊の阿弥陀如来立像は像高98.9cm、ヒノキ材の寄木造。表面の仕上げも彩色や切金文様、金泥塗りで、都の中心にあって活躍した院派仏師の作らしいものに美麗な仏像である。本像についての詳細も第2章で詳しく述べたい。



図-6

この他、銘文のない作例も含めて、多良木には13世紀～14世紀初めの仏像は見当たらない。鎌倉時代の仏教文化財としても、王宮神社田蔵と伝える文永12年(1275)銘銅造聖観音懸仏と、東光寺経塚発見の多良木相良家二代・相良頼氏とその家族一族を願主とする、文永10年(1273)銘銅造経筒(8口)などがみられる程度である。何故、このように前時代に比較して急激に仏像造立が下火になったのか明らかな理由はわかっていない。さらに次章以下で考察したい。

#### 【南北朝～室町時代】

他の地域と同様に、南北朝時代14世紀後半になると多良木でも仏神像の造立が一気に増加する。これまでの調査で知られているだけで、懸仏などまで含めると約100軀の仏像や神像等がまつられている。

主な銘像では、まず応永19年(1412)銘、槻木大師堂の**《木造弘法大師坐像》**(図-7)。像高56.1cm、ヒノキ材製一木造で、右手を胸前に挙げて五拈杵を執り左手は膝上で数珠を持つ、鎌倉時代以来、通例の大師像。銘によれば、多良木相良家第八代・相良頼仙とみられる「金剛資頼仙」を願主に製作されたことがわかる。惜しまれることに仏師名は判読できないが、引き締まった実人的な顔立ちと柔軟な体軀など、同時代の地域性のつよい仏師とは一線を画す優れた技術を持つ仏師である。

室町時代の仏像でもっとも注目されるのは、寛正6年(1465)銘小林虚空蔵堂の**《木造虚空蔵菩薩坐像》**(図-8)と、同7年(1466)銘八日業師堂の**《木造薬師三尊像》**の2軀。両像は「仏師僧慧麟」という人物によって造立されているが、この慧麟は長祿4年(1460)から文明元年(1469)までのわずか10年間に9軀の仏像を造立しており、うち5軀に相良家庶流の永富相良家から出て人吉相良家を継承し、多良木家をも倒した相良長統の名がみえるのである。また、慧麟の仏像が伝えられているのは球磨郡内だけであり、中西真美子氏の研究によれば<sup>5</sup>、9軀のうち8軀までが多良木相良家(氏)の旧地に造立されていること、光背や台座背面など視認可能なところに長文の銘記と「長統」の名前とその繁栄を祈る願文が記されていることと、各地域の小領主層がそれぞれの造像主体になっていることが指摘されている。

虚空蔵菩薩像の銘文には「當郡主相良之長續、嫡子為統、同多良木殿頼泰(以下略)」のために、近隣の小領主とみられる「千里内幸



図-7



統父子」を大檀那として、「其外結縁之一味同心之志」をもって本像が造像された旨が記されている。稲葉維陽氏は、大願主や大檀那のみならず「一味同心の志」を持ち、特定地域で社会的関係を有する一揆の集団が造像を支えていたのではないかと指摘しており<sup>6</sup>、この時代の仏像製作や地域社会のあり方を示す史料としても重要である。

15～16世紀になると仏像の作風は慧麟の場合のように素朴となり、仏師の活動範囲も限られた地域となる場合が多い。ただ一方で、某八幡宮の永禄9年(1566)銘《木造女神像》を製作した「日高民部少輔藤原秀永」は、自らを「山城国京四条之内」と名のっており、室町時代末期になると仕事を求めて畿内から進出してきた仏師もあったことが知られる。この日高民部は、錦町新宮寺の六観音像の内《木造千手観音菩薩坐像》を天正6年(1578)に製作し、槻木大師堂の《弘法大師像》を天正13年(1585)に修復したことも知られる。郡内でほぼ20年間におよぶ活動歴があり、当地に定着して造仏していたようだ。



図-8

室町時代は仏像造立がそれ以前より飛躍的に増加した時代である。仏師慧麟の造像の場合でも知られるように、この時代の造像の主たる担い手は多良木相良家のような大願主ではなく、その下位に位置する領主層やさらに下位の村落の小領主たちになってくる<sup>7</sup>。多良木においても同様の状況が広がっていたといえるだろう。

## 二、重要作例について

### (1) 中山観音堂の木造観音菩薩立像

本章では多良木地域の平安～鎌倉時代における重要な仏像について、彫刻史的に詳しくみてみたい。

本像(図-1)は球磨郡に現存する最古級の仏像。像高153.0cmで、右肩先部(除・手首)と左肩先部(除・肘先)を含む頭部を、カツラ材の一材から彫出した一木造。かつては足首と台座まで同一材で造られていたと想像されるが、後世、前後に削削いで内削りを施し、両手先・両脚部等が後補されている。つまり、当初は内削りのない丸彫り像だったようだ。

形状は頭頂の髻を球状とし、天冠台は紐一条に列弁帯をめぐらす。三面宝冠をかぶり左右に二条の冠飾をあらわす。体部には天衣と条帛をつけ、天衣の遊離部は本体から彫り出す。下半身に裾と腰布をまとう。積年の損傷により尊容を損なっていたが、平成25年度の解体修理によって見事に甦った<sup>8</sup>。

頭頂の大きな髻や本体材から彫出した三面宝冠、胸下で胸を絞った腰高な体型と肩を大きく後ろに引いた姿勢、もとは台座まで内削りなして造立するなど著しく古様な作風である。北部九州には福岡市荘厳寺・木造観音菩薩立像などの類似点をもつ作例も存するが、今のところ中～南部九州では例を見ない。宝冠の横から左右に垂下する「冠飾」二条の内、一条はまっすぐに垂下し、もう一条はゆるくS字状にカーブして上腕部にかかっている。このような形状は唐招提寺の唐風の仏像にもみられるが、山形宝積院の十一面観音菩薩立像(9世紀半ばころ)や大阪長円寺の十一面観音菩薩立像(9世紀後半ころ)にもあらわれており、足元の裾の裾が台座にかからず足首をみせる表現は山形吉祥院の観音菩薩立像(10世紀初めころ)などにみられる。これらの像との対比から、制作時期についてはなお精査を要するが、9世紀後半～10世紀初めころか。

本像のような作風の淵源としては、同時代の南都の仏像様式からの直接の影響の他にも、天福寺奥の院(宇佐市)の木彫群(約80軀)の存在が想起される。この木彫群には、作風から奈良時代(8世紀後半)にさかのぼるものが存し、宇佐という重要な地域にあることから、九州の多様な平安初期彫刻の起点のひとつとなったであろう。

## (2) 中山観音堂の木造四天王立像

中山観音堂四天王像は、像高もほぼ同大であり作風と構造もよく似ていて当初から一具の四天王像として制作されたとみられる。

仮に左手を挙げて戟を執る像を(その1、図一9)とし、右手を挙げる像を(その2、図一10)、右手を挙げて錘を執る像を(その3、図一11)、左手に塔を捧げ持つ多聞天像を(その4、図一12)とすると、(その1)は像高132.0cmでクス材の一木造。頭体幹部を一材で造り背面から内割りをして背板を当てる構造である。(その2)は像高131.6cm、カヤ材の一木造で(その1)と同じように背面から内割りを施し、背板を当てる構造。(その3)は像高132.6cmでクス材の一木造。構造も1、2の像と同工である。(その4)多聞天像は像高130.5cm、同じくクス材の一木造で同様に背中から内割りを施して背板を当てている。

四天王像は通常、本尊像を中心にして「持国天」(向かって右前方)「増長天」(向かって左前方)「広目天」(向かって左後方)「多聞天」(向かって右後方)と配置される。しかし、「宝塔」を捧げ持つ像容に固定されている多聞天像(単独造立の場合、毘沙門天と称する)以外は、像容と組み合わせがじつに多様であるため、それぞれの像の原配置と名称を想定することが課題となる。

中山観音堂四天王像は、2軀が左手・右手のいづれかを挙げて「戟」をもち、もう1軀は右手を挙げて剣をもっている(残り1軀は多聞天)。この組み合わせの場合(2軀相称形タイプ)は、例えば山口・国分寺四天王像にみられるように、相称形の2軀が前方に置かれる(持国天・増長天)ことが多い。2軀が相称形の場合も、本尊側(内側)の手を挙げるものと、外側の手を挙げる両方があるが、それぞれが「開口」するものと「閉口」するものに分かれる場合は、開口像が向かって左側に置かれることが多い。

以上を総合すると、中山観音堂像の場合は、(その1)像が**持国天像**、(その2)像が**増長天像**、(その3)像が**広目天像**、宝塔をもつ(その4)像は**多聞天像**と想定できるのである。令和元年度からの修理事業で遺像当初の銘文が発見されなかつたので、名称等を断定することはできないが、現在のところ上記の想定がもっとも蓋然性の高いものと考えられる。

つぎに本四天王像の像容をみると、動きを抑えた重量感のある体型、ほかの時代の四天王像に比べて誇張の少ない端正な面貌表現などが特徴である。平安後期の造像様式は、京都を中心にみると11世紀前半の仏師康尚時代→11世紀半ばの仏師定朝時代→仏師長勢ら定朝第二世代→12世紀の院政期、などへと変化していく。毘沙門天など天王像の場合も、京都広隆寺・十二神将像(長勢作、1064年)のように頭部が小さく長身軽快な作風から、重量感が増し目鼻立ちを顔の中央に集めた作風の京都頂法寺・毘沙門天像(1100年ころ)、さらに12世紀半ばから後半になると、大きく腰を捻り動勢を強調した像容へと展開していく。中山観音堂の四天王像のうち(その1)(その2)は、大きく腰を捻って動勢を



図一11 (その3)



図一12 (その4)



図一10 (その2)



図一9 (その1)

強調した像容であり、この時期の像容に近い。このような点をみると、中山観音堂四天王像はおそらく12世紀前半頃に京都で成立した作風の影響を受けて制作されたと推定され、制作された時期については12世紀後半～12世紀後半にかけてを想定してよいと思われる。

また、中山観音堂四天王像は、作風から二組に区分されるものとみられる。(その1)像(その2)像は、前述のように大きく腰を捻って動勢を強調した体型である。一方、(その3)像(その4)多聞天像は、やや直立に近い体勢で前者とは作風がやや異なっている。材質が(その2)像はカヤ材製で、他の3軀はクス材製であることも注目される。

仏像の材料としてのクス材は、中世においては九州でのみ使用されていたもので、カヤ材は平安時代前半頃まで全国で用いられ、それ以降はヒノキ材が主流となる。例えば球磨郡においては、阿蘇釈迦堂・二天像では、より優れた作風の毘沙門天像(仁平2年銘・1152年)はヒノキ材製、より素朴な作風の天王像はクス材製であり、系統の異なる仏師がそれぞれを担当したものとみられる。現在進んでいる修理事業の知見<sup>9</sup>をもとに今後の精査が必要であるが、中山観音堂四天王像の場合も(その2)像が畿内などの外部から招かれた指導的な仏師の作で、その他の3像がクス材を使うことに慣熟した、地方を中心とした比較的狭い地域で活動した仏師の作である可能性もあり得よう。今後の大きな課題は、これら仏像製作を担った仏師たちの技術的な系譜が何処に求められるのか、彼らがどこから来たのか等にあると思われる。

平安時代九州の仏師工房についての史料は皆無にちかく実態がわかりにくいから、この時代の仏像制作のあり方を検討する上でも本四天王像は重要な作例といえるであろう。

### (3) 青蓮寺の木造阿弥陀三尊像

亀田山青蓮寺(真言宗智山派)の本尊阿弥陀三尊像。中尊の阿弥陀如来立像は、像高98.9cm、ヒノキ材の寄木造で玉眼を嵌入。肉髻珠・白毫相には水晶嵌入。両足爪には銅板嵌め込みのうえ、鍍銀。螺髪は別材を貼り付け。

構造は、頭体幹部を耳の後ろを通る線で前後の二材から彫出し、内削りの上、三道下で割首する。また、体部膝以下の裙部分は前後二材から彫出し、体幹部の納衣と裙の境で畑く。両足柄も別材で両足首(別材)を差し込む。両肩部以下は袖外側を含む別材で造り、両腕の袖内側に複数の別材を畑く。両肘先、両手首先、各畑き付け。像表面は頭髪及び足柄を除いて、錆下地丹地に金泥塗り。所々に布貼りあり。

左脇侍(向かって右側)の観音菩薩立像は、ヒノキ材の寄木造で玉眼を嵌入している。頭体幹部は背面半ばの高さで前後二材から彫出し、内削りの上、三道下で割首する。頭部は耳の後ろを通る線で前後に割畑き、面部はさらに一材を畑く。像表面は頭髪及び足柄を除いて、錆下地丹地に金泥塗りとする。右脇侍の勢至菩薩立像は、材質構造とも観音菩薩立像に準じ、表面は錆下地丹地に金泥塗り。

両脇侍像の足柄に、朱漆と陰刻で銘文が記され「永(永カ)阿弥/陀佛」「奉行/龜田/□」「永仁三」「院玄作」とある。この銘記により、本三尊像は永仁3年(1295)に仏師・法印院玄が製作したものとわかる。院玄は、文永3年(1266)完成の京都妙法院三十三間堂の千体千手観音菩薩立像再興像のうち7軀にその名を記した銘があり、いずれも自作と考えられている京都の「院派仏師」である。それらの三十三間堂千手観音像の銘記には僧綱位は併記されておらず、文永から永仁までの間に最高位の法印に昇階したことがわかる。平安時代以来の院派、円派、慶派の主流仏師たちのなかで、院玄は当時の院派最高位の仏師であった。

この中尊・阿弥陀如来立像でとくに注目される点は、足指に銅製鍍銀(蛍光X線調査では銀板の可能性も)の爪を装着し、手指にも同様の工作を施した痕跡が残されていることである。奥健夫氏によれば、手足指爪に異材を嵌める、あるいは異材製の歯相や仏足文をあらわすことは、平安時代末期以来流行した「生身信仰」にもとづいて像に付与されたと考えられ、この種の工作は鎌倉時代の阿弥陀如来像について50例近くが知られているという<sup>10</sup>。奥氏は異材製の歯・髪・爪等に、いわば疑似型遺物としての性格を想定されているが、同氏によれば、爪を銅製鍍銀とするのは三重尊修寺の阿弥陀如来像(13世紀前半)、山形本山慈悲寺の阿弥陀如来像(13世紀末)など本像も含めて3例程度である。

### 三、多良木相良家(氏)の造像—青蓮寺阿彌陀三尊像をめぐって—

1、2章で中世多良木の仏像を概観し、重要作例について詳しく考察してきたが、ここで改めて多良木相良家(氏)の造像について考察してみたい。

すでに述べたように、多良木地域では平安時代後期(11世紀後半から12世紀)の仏像が管見の限りでも29軀ほど知られており、これは一町内としては驚くべき数多きである。ところが、13世紀になると減少し、鎌倉時代を通じて仏像像合わせても15例に満たない。在銘像としては青蓮寺の正応元年(1288)銘《木造地藏菩薩立像》(図-7)がもっとも古いものだが、本像は近代にあざざり町勝福寺跡毘沙門堂から移座された地藏像である。多良木相良家(氏)による鎌倉時代の在銘仏像としては、青蓮寺本尊の永仁3年(1295)《木造阿彌陀三尊像》をまたなければならぬのだ。

相良氏と球磨郡の関係は、相良頼景が上球磨の没官領・多良木村百丁を得たことにはじまった(「肥後国球磨郡田数領主等日録写」「相良家文書」2号)。元久2年(1205)頼景の嫡子長頼は人吉荘地頭職に任じられ多良木も相続して球磨相良氏の祖となる。その長頼の子、頼氏は多良木を継承して嫡流多良木相良家の祖となった。しかし13世紀第3四半期までの多良木には、明らかに頼氏ら多良木家が関わったとみられる仏像などは見当たらない。頼氏は文応元年(1260)東光寺を再興し、弘長元年(1261)王宮神社本殿を造営したと伝えられ、蓮華寺跡古塔碑群のなかの文永6年(1269)石塔婆銘には「沙弥上蓮(頼氏)の名がみえるが、現存する同家ゆかりの仏教文化財の嚆矢は、東光寺経塚から出土した文永10年(1273)銘《銅造経筒(八口)》である。これらの経筒は、頼氏とその家族らが現世安穩後生善処を祈って埋納したもので、当地と多良木家の結びつきが「もの」として確認されるのである。

稲葉鑑陽氏によれば、京都・鎌倉・相良荘・鎮西の所領を行き来していた相良氏惣領が、球磨郡に基盤を置いた活動を始めたのは、相良長頼時代の1230年代であったとされている<sup>11</sup>。加えて《東光寺経筒》や《青蓮寺阿彌陀三尊像》など「もの」からの視点では、頼氏、頼宗らの多良木相良家(氏)は東光寺経塚埋納の頃から、在地との結びつきを一段と深めていったのではないだろうか。

そして、この多良木相良家(氏)が残したもっとも記念碑的な仏像が、亀田山青蓮寺の永仁3年(1295)《木造阿彌陀三尊像》(図-6)である。多良木相良家三代の相良頼宗は、永仁3年(1295)曾祖父頼景と後室青蓮尼の菩提を弔うために廟堂を建立し、同6年廟側に青蓮寺を建立したと伝えられている<sup>12</sup>。先に述べたように本像は、慶派仏師等とともに都を代表し、院や貴族の造像を請け負っていた院派仏師の当時の最高位「法印院玄」が製作した仏像である。青蓮寺は多良木相良家(氏)の一族集結の場、寺院であり、創建にあたって人吉荘の荘園領主蓮華王院との関係を通じて、京都の仏師院玄に本尊像造立が委託されたのだろう。そして、法印院玄という仏師選択には、頼宗と多良木家(氏)の本像と青蓮寺にける思いが感得される。

本像は当時最新流行の美麗な来迎形の阿彌陀三尊で、とくに各像の表面仕上げは精巧美麗、像の内身部は白色(鉛白)下地に金泥塗りを施しており、柔らかく上品な光を放つ山吹色。袈裟や裙などの着衣には切金(鍍金)で蓮華唐草文、卍繋ぎ文や麻葉繋ぎ入り格子文などが精細華麗にあらわされている。また、中尊阿彌陀如来立像の足指には「銅製鍍銀の爪」が装着されていて、手指にも同様の工作を施していたらしい。これは当時盛んであった仏像に生身性を付与する「生身信仰」に基づく工作で、球磨郡では他にみられず、先述のように全国的にも本像を含めて3例程度である<sup>10</sup>。

このように本像は、現在もまことに美しい仏像であるが、造立当初は拝観する者たちが息をのむほど輝かしい姿であったと思われる。最高位の仏師の手になる最上質の仕上げと、手足指爪を鍍銀とするなど特別な性格(生身性)をも付与された仏像であった。ここには、青蓮寺を建立するにあたって、京都でも最上級の作行きて、おそらくたいへん高価であった本尊像を迎えようとした、多良木相良家(氏)のある意図が込められていると思われる。それはひとつには、在地の小領主や荘民たちに対して、西遷して当地に入市した彼らの持つ京都との強い繋がりを文化的・政治的な力と権威を示すためではなかったか。今ひとつは、人吉相良氏との関係である。頼氏の父相良長統が天福元年(1233)に「竹御所」の菩提のため建立した人吉願成寺は相良一族の氏寺的な寺院であったが、次第に人吉系の影響が強

くなくなっていったようだ。正応6年(1293)の相良頼氏と目される「沙弥某」の置文<sup>13</sup>には、沙弥某が願成寺の経営について意見を述べ、訴訟等が発生した場合には多良木家が援助する旨が記されており、池田公一氏はここに人吉相良氏の同寺への影響力を牽制する意図が存すると指摘している<sup>14</sup>。そして頼氏を継いだ頼宗の時代には、人吉系が影響を強める願成寺と並び立つような多良木相良家(氏)独自の寺院が必要と考えられるようになったのではないかと推察される。長頼が開創した願成寺に対して、青蓮寺がその父頼景の菩提のための寺であることも示唆的である。近世の史料ながら願成寺の当初の本尊像は「長頼等身」の阿彌陀如来像であったと伝えられているが<sup>15</sup>、この本尊像は惜しくも大永6年(1526)戦乱によって焼失し、現在の本尊像は近世になって移座されたものである。おそらく当初の願成寺本尊阿彌陀如来像は、京都の仏師の手になり、相良氏の文化的・政治的勢威を示す美麗で当代最先端の作風の仏像であったと想像される。願成寺本尊像に勝るとも劣らない仏像として青蓮寺阿彌陀三尊像は構想され、製作を京都に依頼されたと考えられるのである。

現在、多良木相良家(氏)家の関与が明らかである仏像は青蓮寺阿彌陀三尊像だけであり、前時代のように在地領主が担い手となった地域性の強い仏像も見当たらない。おそらく多良木家にとっての造像活動は、本三尊像だけで充分であったのではないかと推察される。平安時代の在地領主たちと相良氏の文化的な感性の違いが、ここに存するように思われる。

## おわりに

本稿では、平安時代から室町時代に至る多良木の中世仏像を概観し、そのいくつかについて詳細に考察し、さらに多良木相良家(氏)の仏像製作について検討した。本稿での考察をまとめるとともに、今後の課題について述べてみたい。

平安時代前期の仏像では、中山観音堂の《木造観音菩薩立像》(9世紀末～10世紀初めころ)が球磨地域内でも最古級の仏像である。この観音菩薩立像は同時代の仏像造像様式をよく取り入れており、南都(奈良)の仏像からの直接の影響や、天福寺等の院木彫群など宇佐の仏像からの影響も想定できよう。中球磨の免田や上村では、9世紀頃の骨蔵器がみつかっていて、郡内に仏教が受容され始めた頃には仏像も造立あるいは畿内や宇佐などから請来されていたことがわかる。仏像様式の地方展開と球磨における仏教文化の受容を考えるうえでも本像の存在は重要である。

平安時代後期では《中山観音堂四天王像》(図-9～12)、栖山観音堂の《千手観音菩薩立像、毘沙門天像》(図-4)など3軀の神祇像が双壁であり、造像の担い手は球磨郡全域に勢力をもっていた須恵氏、上球磨を拠点する久米氏等の在地領主たちが想定されるであろう。また、黒肥地東光寺跡薬師堂の《木造薬師如来坐像》(図-3)も「定朝様」の仏像で、平安時代後期12世紀の作。造られた当初から東光寺村周辺にゆかりある仏像であったのなら、相良頼景との関係も視野に入ってくる。

多良木地域には11世紀後半～12世紀の作とみられる仏神像が、現在管見の限りでも29例ほどみつかっており、これは一町内としては九州全体でみても破格の分布密度である。球磨全体でみても80軀以上の仏神像が残されていて、特異な集中度といえよう。加えて、球磨郡以外の地域と比べると、当地で毘沙門天像と四天王像など神祇形像が多いことは、注目すべき事象である(球磨の他地域も同じ傾向がみられる)。その明示的な理由ははっきりしないが、当地が大隅薩摩日向など南九州辺境と境を接していることと何らかの関係があったのではないだろうか。かつて論じたように<sup>16</sup>、毘沙門天像や四天王像等の神祇形像の持つ霊的な威力によって、大隅や日向等との国境に位置する球磨郡の境界を護ると同時に、各在地領主たちの領域を護ろうとした祈念のあらわれとする想定も可能だろう。

しかし、平安時代にあれほど豊かに造像されてきた仏像が、鎌倉時代13世紀になると急速に製作されなくなるのは何故か、という次の問題があらわれる。13世紀の多良木には青蓮寺阿彌陀三尊像を別にして、今のところ少数の神像彫刻や懸仏等が知られている程度である。この傾向は球磨の他地域でもおおむね同じで、その理由は明示できないのだが、12世紀末から13世紀初めにかけての地域社会の大きな変動が反映している可能性も想定できよう<sup>17</sup>。それまでの造像の担い手であった須恵氏ら在地領主の力が削がれて、もはや仏像製作に傾注できなくなったのであろうか。あるいは

は、仏像製作以外の信仰活動に意を向けるようになったのだろうか。

一方、鎌倉時代に球磨に入部した相良氏一族の内、多良木相良家(氏)は、青蓮寺の本尊像として精巧美麗でモニュメンタルな、京都仏師院玄作の木造阿彌陀三尊像を造立した。本像を製作させた意図と構想には、在地の小領主たちや荘民たちに多良木家の京都との強い繋がり＝文化的政治的力を示すことや、人吉相良氏に対抗する意味が含まれていたと思われる。そして、平安時代の在地領主たちは、地域性の強い仏師を起用してさかんに造像を行ったが、多良木相良家(氏)の場合には、彼らが日々礼拝する仏像は「京」の仏像であることが求められたのではないだろうか。青蓮寺阿彌陀三尊像には、多良木相良家(氏)の仏像、仏教文化に対する志向性もあらわれているといえるだろう。

南北朝室町時代になると、他の地域と同様に多良木でも仏神像の造立が一気に増加した(表1、2)。管見の限りではこの時代には無銘の像も含めると110軀以上の仏神像が残されており、仏神像制作の主たる担い手は大領主層から地域の小領主たちとなり、室町時代後期になると地域の有力者と地域住民たちが結縁して仏像製作にあたった事例も認められる。その代表的な事例が長祿4年(1460)から文明元年(1469)までの10年間に9軀の仏像を郡内に造立した仏師慧麟である。

以上のように、本稿では多良木の中世仏像について概観を試み、いくつかの彫刻史的な課題を取り上げたが、残された大きな課題のひとつは中世神像彫刻についてである。球磨地域では平安時代10世紀ころに製作された木造神像をはじめに、中世から近世まで数多くの神像彫刻が造られていたことが近年の調査で判明しつつある。多良木地域にも多くの神像彫刻が祀られているが、信仰上の理由もあってほとんどその存在を知られていない。各地域の神像の伝存状況の把握と、その造立経緯の検討も今後の課題である。

## 註

1. 「多良木相良氏」と「多良木相良家」の使い分けは稲葉継陽「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」(本報告書、2024年)を参考とした。
2. 上村重次「改訂増補 九州相良の寺院資料」(青潮社、1986年、原本は1965年金輝堂刊)、『多良木町史』(多良木町史編纂会、1979年)、『九州の中世美術—熊本・球磨地方美術調査概報—』(昭和56～58年度科学研究費補助金研究成果報告書、代表者平田寛、1983年)、『県内主要寺院歴史資料調査報告書(3)人吉球磨・芦北水尻地区』(熊本県立美術館編、1983年)、平成21～22年度多良木町仏像調査(熊本県立美術館)など。
3. 「表1 中世球磨地域の在銘仏神像彫刻一覧」は、拙稿「総論 中世球磨の仏像—人吉球磨の人々と造像」(熊本県立美術館編『日本遺産認定記念 ほとけの里と相良の名宝—人吉球磨の歴史と美展図録』(2015年)中、「別表 人吉球磨地域中世紀年銘彫刻一覧」をもとに編集した。表2はこれより多良木の在銘仏神像を抜粋したもの。
4. 武笠朗「西大寺四王堂十一面観音像について」(『美術史』120号、1986年)、佐々木あすか「平安時代末期から鎌倉時代中期の天冠台形式について—奈良仏師・慶派仏師作例を中心に—」(『MUSEUM』624号、2010年)
5. 中西真美子「仏師慧麟の造像活動と相良長續」(稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』(戎光祥出版、2020年))
6. 稲葉継陽「室町期守護菊池氏の権力とその拠点」(『熊本史学』103号、2023年)、同「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」(本報告書、2024年)
7. 有木芳隆「中世球磨郡の仏像制作と京都—「京都造像様式」の受容と地域社会」(中世学研究会編『中世学研究1 幻想の京都モデル』高志書院、2018年)
8. 『文化財修理解説書 中山観音堂 木造観世音菩薩立像』(浦仏刻所(福岡県糸島市)、2014年)
9. 『文化財修理解説書 中山観音堂 木造天部形立像①②③』(浦仏刻所(福岡県糸島市)、2021～2023年)
10. 奥健夫「生身仏像論」(長岡龍作編『造形の場』、『講座日本美術史4』所収、東大出版会、2005年)、同「歯相、仏足文などを備える阿彌陀如来像」(奥健夫「仏教彫像の制作と受容—平安時代を中心に—」中央公論美術出版、2019年)
11. 稲葉継陽「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」(『本報告書』、2024年)
12. 『歴代私鑑』『歴代嗣誠独集覧』『南藤曼綿録』等による。
13. 願成寺文書1-11号、『熊本県史料中世編第3』所収、(願成寺文書10号)

14. 池田一「人吉願成寺小考—西遷御家人相良氏の族的結合に關連して—」(秀村選三編『西南地域史研究第十三輯』文献出版、2001年)
15. 宝永二年(1705)「願成寺本草堂創之記録」(『九州の寺社シリーズ 15 肥後人吉 願成寺』九州歴史資料館、1996年、所収)
16. 有木芳隆「勝福寺毘沙門堂の仏像群について」(『あさぎり町文化財調査報告書第三集 あさぎり町の仏像彫刻修理報告書』あさぎり町教育委員会、2014年)、有木芳隆「九州球磨部の平安後期・仏師動向と在地領主の造像活動—在銘の天王像を中心に—」(津田徹英編『仏教美術論集6 組織論—制作した人々』竹林舎、2016年)
17. 小川弘和「平安時代の球磨郡と造寺・造仏」(『中世的九州の形成』高志書院、2016年)、同「中世球磨郡の在来領主と相良氏」(『熊本学園大学論集 総合科学』23-1、2号、2018年)

表1 球磨地域在銘仏神像一覧(銅口等を除く)

No	年号	名称	願主など	仏師など	所在地・所蔵者(管理者)
1	大治5年11月5日(1130)	木造業師如來坐像	造立僧越前快通		熊本市・個人
2	大治5年11月5日(1130)	木造釈迦如來坐像	造立僧越前快通		熊本市・個人
3	保延7年2月14日(1141)	木造釈迦如來坐像	天台僧林与		錦町・荒田観音堂
4	久安3年11月4日(1147)	木造毘沙門天立像	僧經覺		あさぎり町・勝福寺毘沙門堂
5	仁平2年4月2日(1152)	木造毘沙門天立像	藤原家實井良峯氏		あさぎり町・阿蘇釈迦堂
6	久寿3年4月6日(1156)	木造毘沙門天立像	当郷領主藤原家永井藤原氏、勧進僧源与	仏師僧經助	あさぎり町・勝福寺毘沙門堂
7	建久元年(1190)10月日	銅造孔雀文磬	常福寺		願成寺旧蔵、相良氏が強江国から持来したと伝承
8	建保6年7月19日(1218)	銅造山王十社垂迹神像懸仏	阿蘇谷願所院主惣公文阿蘇谷領主平景俊		奈良市・奈良国立博物館
9	承久2年6月11日(1220)	木造勢至菩薩立像	平景俊	仏師源寛	山江村・高寺院
10	承久2年8月15日(1220)	銅造十二尊像懸仏	院(主)惣公文平景俊		あさぎり町・某神社
11	嘉祿2年9月1日(1226)	銅造山王九社本地仏像懸仏	院(主)惣公文平景俊		大飯町・個人
12	寛喜元年4月(1229)	木造観音菩薩立像(阿弥陀三尊像)	日本国 僧 匠実明		湯前町・城京寺阿弥陀堂
13	寛喜元年5月6日(1229)	銅造十二尊像懸仏	阿蘇谷願所院主惣公文平景俊		熊本市・個人
14	文永12年(1275)正月	銅造聖観音菩薩懸仏	内蔵全弘(仏入)		多良木町・王宮社旧蔵という
15	正応元年8月13日(1288)	木造地蔵菩薩立像	蓮光房		多良木町・青蓮寺
16	永仁3年(1295)	木造観音・勢至菩薩立像(阿弥陀三尊像)		院立	多良木町・青蓮寺
17	嘉元2年12月4日(1304)	木造文殊菩薩坐像(彌勒佛像)	大願主院主門尔、再興当院主法印良誉		あさぎり町・阿蘇釈迦堂
18	嘉暦2年9月(1327)	銅造十一面観音菩薩懸仏			人吉市・青井阿蘇神社
19	暦応4年1月14日(1341)	木造毘沙門天立像(修理)	地頭藤原重運、当院主金剛仏子祐護、阿蘇山平等寺之院主圓盛		あさぎり町・勝福寺毘沙門堂
20	文和2年(1353)	木造女神像(2尊)	いぬたう□□(ろうか)	ふし(仏師)和(は)みなもとのさいも二良そ(か)ふつ	球磨村・某阿蘇神社
21	延文3年8月(1358)	銅造業師如來懸仏			あさぎり町・某神社
22	正平25年(1370)	木造男神坐像		ふし(仏師)夫(か)きつハふ(か)り	人吉市・某神社
23	応永4年(1397)	木造男神像		大かきのハふり	球磨村・某阿蘇神社
24	応永7年4月21日(1400)	木造弘法大師坐像	願主金剛仏師長院、大宰府山井弘成、(再興)四糸内秀永	仏師祐全、(再興)仏師日高民部少輔	湯前町・下里大師堂
25	応永13年(1406)	木造男神像(2尊)			人吉市・某神社
26	応永16年10月(1409)	不動明王・毘沙門天脇持懸仏	願主五郎大夫妙徳		人吉市・青井阿蘇神社
27	応永19年6月15日(1412)	木造弘法大師坐像	大願主金剛賢頼伯、再興之願主樺木僧都法印直源、別子再興之院主亮辰		多良木町・樺木大師堂
28	永享8年(1436)	木造男女神像(6尊)	願主正祝、大夜叉女、芥三郎、藤四郎、正祝		錦町・某地蔵堂
29	永享8年(1436)	木造地蔵菩薩坐像	願主院主金剛賢祐慶		錦町・某地蔵堂
30	永享9年(1437)	木造業師如來坐像		作者植積僧	山江村・某業師堂

31	永享10年(1438)	木造男神坐像(阿形)	大檀那藤原相良三河守實頼、勧進三郎南門近重		あさぎり町・某神社
32	永享12年(1440)	木造仏観音菩薩坐像	大願主空心居士		人吉市・某観音堂
33	嘉吉3年(1443)	木造女神坐像		作者正徳	錦町・某八幡宮
34	康正2年11月28日(1456)	木造阿弥陀如来立像	大願賀毛重勝		あさぎり町・某神社
35	康正2年11月6日(1456)	木造毘沙門大立像(修理)	藤原(相良)長統、代官藤原信信、当院主金剛仏子弘徳		あさぎり町・勝福寺神混沙門堂
36	長祿4年11月(1460)	木造薬師如来立像	大願主賀毛備後守重房、長統	仏師慧麟書記	あさぎり町・某神社
37	長祿4年(1460)	木造女神坐像		(再興銘々)彩色常州賀賀	雨前町・某大師堂
38	長祿4年 <small>甲</small> (1460)	木造男女神坐像(3尊)			雨前町・某大師堂
39	寛正2年6月(1461)	木造千手観音菩薩立像	賀毛藤原重満	作者慧麟	あさぎり町・某神社
40	寛正3年3月18日(1462)	木造大辯功徳天(大弁功徳天)、藥藏仙人立像(2尊)	大願主住持長賢并妙意女	仏師忠麟	水上村・龍泉寺
41	寛正6年(1465)	木造男神坐像	願主彦左衛門并氏女		あさぎり町・某神社
42	寛正6年4月25日(1465)	木造虚空蔵菩薩坐像	大願主旗峯正勝僧、当郡主相良之[ ],妙心尼公妙 <small>口</small> 佛尼	仏師慧麟	多良木町・某虚空蔵堂
43	寛正7年2月20日(1466)	木造薬師如来立像	住持金剛仏子朝賢上人	仏師慧麟	多良木町・某薬師堂
44	文正2年2月(1467)	木造男神坐像	大願主長岡左景吉古	仏師慧麟	雨前町・某大王社
45	応仁元年(1467)	板絵十一面観音坐像(正体)	木吉庄深田村住人願主日下部宣守		あさぎり町・某阿彌社
46	応仁3年(1469)	木造十一面観音菩薩立像(2尊)	相良能長統、大檀那山田太山酒造	大仏師慧麟	山江村・某観音堂
47	文明元年(1469)	木造女神坐像	大願主上(黒F <small>イ</small> )九良左衛門	仏師慧麟	水上村・某神社
48	文明9年10月(1477)	木造女神坐像		上村権規祝子清字作之	相良村・某阿彌社
49	文明11年(1479)	木造阿弥陀如来立像		権規院(々)子衛 <small>口</small> 正 <small>口</small> 作	山江村・某阿弥陀堂
50	文明12年8月(1480)	木造如來形坐像			あさぎり町・某薬師堂
51	文明14年(1482)	木造男神像(2尊)	願主勢二郎正親		あさぎり町・某神社
52	文明17年(1485)	銅造十尊懸仏	三やつかき田部当鑑		多良木町・某神社
53	文明17年(1485)	木造地藏菩薩立像		権規祝子大神氏 <small>口</small> 惟 <small>口</small> 作也	球磨村・某地藏堂
54	文明年間(1469~1487)	木造女神坐像(2尊)			山江村・某神社
55	延徳2年4月7日(1490)	木造勢至菩薩立像、木造観音菩薩立像	大仏師七条(中御門 <small>イ</small> )仏所		雨前町・八聖寺
56	明応元年(1492)	木造天神坐像	藤原頼貞公御代		人吉市・某神社
57	明応7年閏10月18日(1498)	木造十二神符立像	大願主藤原実冬		錦町・某薬師堂
58	永正2年9月26日(1505)	銅造十一面観音菩薩坐像懸仏	願主公慶		山江村・某阿弥陀堂
59	永正8年10月18日(1511)	木造十一面観音菩薩坐像	入鶴貞馬守重次、飯村歸部重正、岡島光、重定		五木村・某観音堂
60	永正10年9月29日(1513)	木造菩薩形立像(2尊)	願主重泉僧		山江村・某薬師堂
61	永正10年9月29日(1513)	木造隨身倚像(阿形、吽形)	願主中嶋新右衛門尉、藤原重孝	藤田十郎之作	人吉市・某神社
62	永正11年8月(1514)	木造如來形立像	大日蓮藤原長每并満乗丸、当寺院大願主秀導		多良木町・某阿弥陀堂
63	永正13年(1516)	木造男女神坐像(7尊)	願主助兵衛、藤原長松、阿邊之貞(助七 <small>イ</small> )、堀(々)左衛門		多良木町・某神社
64	永正15年(1518)	銅造十一面観音菩薩坐像懸仏	比那小野公慶、沙門以(々)重泉僧願主		山江村・某阿弥陀堂
65	大永2年(1522)	木造男神立像			人吉市・某阿彌神社
66	大永3年(1523)	木造神面(吽形)	大神惟延		あさぎり町・某神社
67	大永7年(1527)5月	木造天神坐像		権律師有護作	あさぎり町・某天満宮
68	享祿2年(1529)	木造男神坐像			人吉市・某神社
69	享祿2年 <small>甲</small> (1529)	木造隨身倚像(吽形)			水上村・某神社
70	享祿5年9月(1532)	木造弥勒菩薩坐像	大檀那清原朝臣成房	仏師慶重僧、作者二見住慶重公	錦町・某弥勒堂
71	天文元年(1532)	木造薬師如来坐像	大願主聡芳知藏神師、檀那藤原朝臣兼秀	仏作慶重	錦町・某薬師堂
72	天文2年(1533)	木造男神坐像			錦町・某神社



73	天文2年9月(1533)	木造男神坐像(10軀)	大檀那藤原朝臣長唯、平等寺天台沙門律師海澄、平等寺権律師國海、主正祝橋実栄、願主橋実栄、当代官藤原武秀、当城人林千代松丸		茨北部芦北町・某神社
74	天文8年(1539)	木造役行者像		作者鏡運	相良村・某佛現
75	天文8年10月15日(1539)	木造薬師如来坐像	大願主伴殊□□□		錦町・某薬師堂
76	天文9年2月25日(1540)	木造如来形坐像	大檀那藤原朝臣長唯并其為、大願主当院主権少部碑義	作者大仏師教規、教誨房	あきぎり町・某観音堂
77	天文9年(1540)3月13日	木造男神坐像			山江村・某大明神
78	天文11年(1542)	木造山伏 <small>α</small> 像			相良村・某神社
79	天文11年(1542)	木造隨身像(阿形、呷形)	大檀那藤原長唯同為晴、座主真盛、大檀那藤原義陽公、同亀丸、座主権大僧都源登	建立作者鏡運房、作者常州賀叶坊	水上村・某神宮
80	天文11年9月8日(1542)	木造女神坐像	住僧律師 <small>(男)</small> 勢隆		多良木町・東光寺
81	天文11年9月8日(1542)	木造男神坐像	権律師勢隆		多良木町・東光寺
82	天文14年(1545)	木造男神坐像	大願主藤原頼朝、藤原頼興並頼孝	作者金剛弘子鏡運	あきぎり町・某神社
83	天文14年(1545)	木造菩薩形立像			あきぎり町・福元寺
84	天文16年(1547)	木造男神坐像		作者權少僧都榮堅、金剛弘子鏡運	水上村・某神社
85	天文16年10月1日(1547)	木造脇侍菩薩立像	大檀那藤原之晴広之御代、大願主権少僧都榮堅		人吉市・長福寺
86	天文16年10月1日(1547)	木造脇侍菩薩立像	大檀那藤原(相良)之晴広		人吉市・長福寺
87	天文17年(1548)	木造菩薩形立像(右脇侍)			錦町・某薬師堂
88	天文17年3月(1548)	木造因縁羅大付像(十二神将12軀の内)	院主善吉		錦町・某薬師堂
89	天文18年10月6日(1549)	銅造如来形半像懸仏			錦町・某薬師堂
90	天文20年(1551)	木造男神坐像(2軀)	權大僧都榮堅	作者鏡運房	あきぎり町・某神社
91	天文21年(1552)	木造男神坐像(2軀)	大檀那藤原晴広并興頼頼忠人林大宮洞(??)再興、願主藤原聖房丸、導師平等寺当住持權大僧都法印長快		あきぎり町・某神社
92	元文23年(1554)	木造阿弥陀如来坐像		作者鏡運	相良村・某仏堂
93	永祿2年(1559)	木造僧形神坐像			水上村・某神社
94	永祿3年11月2日(1560)	木造阿弥陀如来坐像	大檀那藤原頼房公		多良木町・某八幡宮
95	永祿5年(1562)	銅造阿弥陀如来坐像、十一面観音坐像、薬師如来坐像懸仏(3軀)	藤原頼房、權大僧都法院慶圓		相良村・某佛現
96	永祿9年4月28日(1566)	木造阿弥陀如来立像	權大僧都頼實	常州住賀叶権大僧都□□□作	多良木村・某阿弥陀堂
97	永祿9年4月8日(1566)	木造女神坐像	願主西光寺權大僧都永春	仏師山城国京東之内日高民部少輔藤原秀水并肥後内多良木之住龍泉庵清體	多良木町・某八幡宮
98	元龜2年11月18日(1571)	木造如来形坐像	権律師真隆聖位		多良木町・東光寺
99	天正3年 <small>α</small> (1575)	木造阿弥陀如来坐像	座光作者清澄	金剛弘師日高民部少輔秀水、阿等隣、同次良太郎	水上村・生善院
100	天正5年(1577)	木造十一面観音坐像(木造六観音菩薩坐像)	当部都督藤原義陽等、權都清原頼忠、願主沙門珠芳并垂実	大體宮内之住大仏師源朝月	錦町・新宮寺
101	天正5年(1577)	木造男神坐像	相良千景祐藤原頼院		あきぎり町・某神社
102	天正5年4月(1577)	木造大日如来坐像		大仏師朝月	錦町・某大日堂
103	天正6年4月(1578)	木造千手観音・如意輪観音坐像(2軀、木造六観音菩薩坐像)	村山歸部助藤原長直、宮原石京志、藤原頼直、藤原義陽并亀千代并女大進主所主成女等々々		錦町・新宮寺
104	天正7年(1579)	木造男神坐像(2軀)	檀那東加賀守藤原頼秀	清作彩色常州賀叶坊	多良木町・某神社
105	天正8年10月16日(1580)	木造胎 <small>α</small> (阿形・呷形)	願主北崎正市助初親義久(2軀)	作者賀叶 <small>(男)</small>	多良木町・某神社
106	天正9年6月(1581)	木造多羅天立像		関東常州住居権大僧都頼實作者賀叶	あきぎり町・正伝寺
107	天正9年6月(1581)	木造地藏菩薩立像		作者真秀	五木村・某観音堂
108	天正11年 <small>α</small> (1583)	木造菩薩立像(右脇侍像・持蓮華、2軀)	大願主西光寺住持權大僧都法印朝尊	作者大山田藤太良	水上村・生善院

109	天正11年(1583)	木造男神坐像		仏師日高民部少輔秀永	人吉市・観音院
110	天正14年(1586)10月	木造准胝観音坐像(木造六観音菩薩坐像)	藤原氏相良常陸介長用	仏師日州之住人大神氏金堂者之(カ)	錦町・新宮寺
111	天正16年(1588)	木造男神坐像(2尊)			山江村・某祇園堂
112	天正16年8月(1588)	木造天神坐像	施主藤原実方	作者麻生主水助	人吉市・某神社
113	天正18年(1590)	木造男神像(2尊)	願主彦三郎	組工若緒方藤右衛門	あさぎり町・某神社
114	天正19年(1591)	木造男女神坐像(5尊)	園田惣前守、山神藤太右衛門尉、河原右衛門尉、神主山神祀伊守	作者麻生主水助	人吉市・某阿蘇神社

表2 中世多良木の在銘仏神像一覧(表1より抜粋)

No	年号	名称	願主など	仏師など	所在地・所蔵者(管理者)
1	正応元年8月13日(1288)	木造地藏菩薩立像	蓮光房		多良木町・青蓮寺
2	永仁3年(1295)	木造観音・勢至菩薩立像(阿弥陀三尊像)		院女	多良木町・青蓮寺
3	応永7年(1400)9月20日	銅造鯛口	金剛佛子印秀		多良木町・某薬師堂
4	応永19年6月15日(1412)	木造弘法大師坐像	大願主金剛頼頼頼、再興之願主権大僧都法印真那、弟子再興之院主発辰		多良木町・横木大師堂
5	応永20年(1413)4月5日	銅造鯛口			多良木町・某薬師堂(応永10年とも刊誌している)
6	寛正6年4月25日(1465)	木造虚空蔵菩薩坐像	大願主族率正勝僧、当都主相良之[ ]、妙心尼公妙□辨尼	仏師慧麟	多良木町・某虚空蔵堂
7	寛正7年2月20日(1466)	木造薬師如来立像	住持金剛弘子朝賢上人	仏師慧麟	多良木町・某薬師堂
8	文明17年(1485)	銅造十尊懸仏	ミやつかさ田部馬胤		多良木町・某神社
9	永正11年8月(1514)	木造如来形立像	大日那藤原長母并講乗丸、当寺院大願主秀母		多良木町・某阿弥陀堂
10	永正13年(1516)	木造男女神坐像(7尊)	願主助兵衛、藤原長松、阿邊之貞(助七カ)、菊(カ)左衛門		多良木町・某神社
11	天文4年(1535)2月	銅造鯛口	二宮大明神鯛口願主須田二郎右衛門尉		多良木町・某薬師堂
12	天文11年9月8日(1542)	木造女神坐像	住僧権律師(カ)勢埜		多良木町・東光寺
13	天文11年9月8日(1542)	木造男神坐像	権律師勢埜		多良木町・東光寺
14	永祿3年11月2日(1560)	木造阿弥陀如来坐像	大増那藤原頼房公		多良木町・某八幡宮
15	永祿9年4月28日(1566)	木造阿弥陀如来立像	権大僧都頼賢	常州住賀呼権大僧都□□□作	多良木町・某阿弥陀堂
16	永祿9年4月8日(1566)	木造女神坐像	願主西光寺権大僧都永春	仏師山城国京四兆之内日高民部少輔藤原秀永并肥後内多良木之住龍泉庵游清僧	多良木町・某八幡宮
17	元亀元年(1570)12月	板絵十一面観音菩薩御正体	願主且那源義盛古多良木新兵衛尉且那平高柳藏次丸丸		多良木町・某神社
18	元亀2年11月18日(1571)	木造如来形坐像	権律師直隆重位		多良木町・東光寺
19	天正7年(1579)	木造男女神坐像(2尊)	権那東加賀守藤原頼秀	清作彩色常川賀呼房	多良木町・某神社
20	天正8年10月16日(1580)	木造狛犬(阿形・呼形)(2尊)	願主北崎正市助初製匠女	作者賀呼(カ)	多良木町・某神社

## 東光寺経塚と出土資料について

村木二郎

仏教的世紀末思想である末法思想が平安時代の中頃から流行すると、浄土教が広まっていった。仏教は因果応報を説いており、来世で浄土に生まれるためには、現世で功德を積まねばならない。仏教的作善業は功德が大きく、釈迦の教えである經典を書写することが大きな善業であることは法華經のなかでも強調されている。そうして日本で案出されたのが、法華經を主とする経巻を写し、それを埋納して後世まで伝える、経塚の造営であった。

本稿で述べる東光寺経塚については、既にいくつかの論考がある。なかでも山川公見子氏の研究（山川2004）は先行研究を検証したうえで詳細な検討をおこなっており、本稿はそれを超えるものではない。ただ、経筒・銅銭ともに保存修復作業をおこなったことで新しい知見も加わったため、ここに改めて東光寺経塚について拙文を認めることとする。なお、所蔵機関が資料番号を改訂したため、山川論稿と本稿とは番号が異なる。また、経筒に関しては筒身と蓋のセット関係も変わっている（表1）。

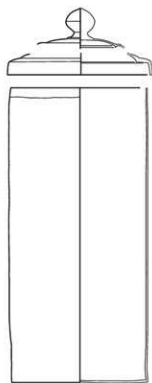
表1 経筒資料番号の新旧対照表（本稿＝新、山川＝旧）

本稿	山川筒身	山川蓋	筒身高	口径	底径	厚	蓋高	蓋径	鈕高
1号	I	VI	15.6	7.2	7.1	0.1		7.7	1.6
2号	II	IV	15.6	7.1～7.2	7.1	0.1		7.5～7.6	
3号	III	V	15.6	7.2～7.3	7.0～7.1	0.1		7.4～7.6	
4号	VI	III	15.5	7.2～7.3	7.2	0.1		7.6	
5号	V	I	15.5	7.2～7.3	7.2	0.1	3.1	7.5～7.6	1.6
6号	VII	II	15.6	7.2～7.3	7.2	0.1			1.6
7号	IV	VII	15.6	7.2	7.2	0.1		7.7	
8号	VIII	VIII	15.5～15.6	7.2～7.4	7.2	0.1	(3.0)	7.5～7.6	1.6

数値の単位はcm



写真1 東光寺経塚出土経筒



1号経筒

奉納

如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一

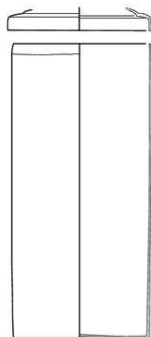
右志者為藤原賴氏現世安穩

後生善所乃至法界平等

利益也仍供養奉□□

文永十年癸十一月四日

藤原賴氏白敬



2号経筒

奉納

如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一

右志者為藤原氏慈父尊靈

往生極樂證大菩提乃至法界

平等利益也仍供養奉納

如件

文永十年

西十一月

四日

原氏女白敬

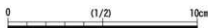
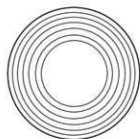
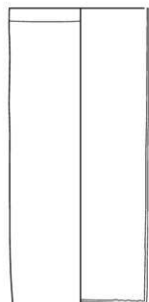
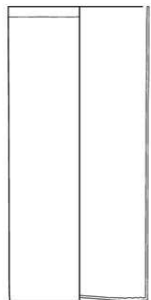
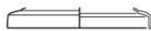


圖1 東光寺經塚出土経筒(1)



3号経筒（下は内底面、以下同）

奉納  
 如法□□□法蓮花經一部銅筒一  
 □□□  
 □□十年□十一月四日  
 藤□□隆白敬  
 □□氏女白敬  
 □□原（藤）



4号経筒

奉納  
 如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一  
 右志者為比丘尼如阿弥陀佛  
 往生極樂證大菩提乃至法  
 界平等利益也仍供養奉  
 納如件  
 文永十年癸十一月四日  
 比丘□□阿弥陀佛白敬

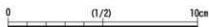
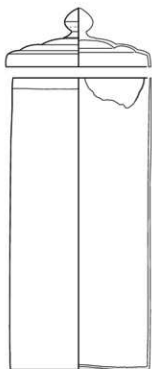
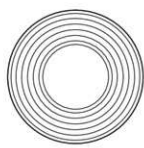
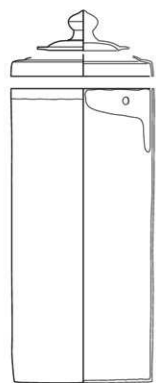


図2 東光寺経塚出土経筒(2)



5号経筒

奉納  
蓮花經一部銅筒一  
 右志者為彌陀佛  
 七世恩所往生極樂證大菩提  
 自他法界平等利益也仍供養  
 奉納如件  
 文永十年癸十一月四日  
西  
阿彌陀佛白敬



6号経筒

奉(納)  
右  
麼氏女現世安善所  
 乃至法界平等利益也  
 仍供養奉納件  
 文西  
大秦清播  
氏女敬白  
 癸十一月四日

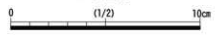
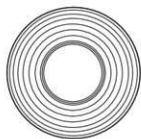
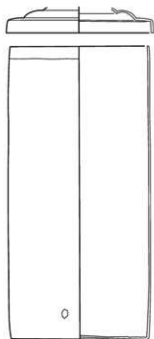


圖3 東光寺経塚出土経筒(3)

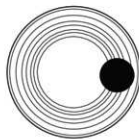
奉納  
 如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一  
 右志者為大神宗氏現世安  
 穩後生善所乃至法界平  
 等利益也仍供養奉納  
 如件

文永十年癸十一月四日

大神宗氏白敬



7号経筒



8号経筒

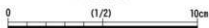


図4 東光寺経塚出土経筒(4)

多良木町黒肥地に所在する東光寺経塚は、東光寺跡背後の愛宕山中腹において、1936年に開墾の際に発見された。発見から半年後の開取り調査によると、径約120×150×深さ約75cmの土坑内に石囲いを設けて中に敷板(?)を敷き、青銅製経筒を前に6点、後ろに2点置いて、銅銭24枚を並べてあった。この土坑は、約45×25cm、約45×30cmの2枚の平石で蓋をしてあり、さらにその上に100個余りの川原石を積んで塚をなしていた、という(坂本1936)。現在確認できる遺物は、青銅製造製経筒8点と銅銭23枚である(写真1)。

経筒は8点ともほぼ同形同大である(図1～4)。3段の甲蓋をもった天井の頂部に宝珠形の鈕を据える蓋と、無文円筒の筒身からなる、三段盛上式経筒である。筒身の高さは15.5～15.6cm、口径は7.1～7.4cm、底径は7.0～7.2cm、器壁の厚さは0.1cmで、蓋の高さは5号経筒から3.1cm、外径は7.4～7.7cm、鈕高は1.6cmである。ただし、2～4、7号経筒は蓋の天井部が欠損している。また、その他の蓋も鈕+天井部と、蓋受け+天井部とが破損により分断しており、1、6号については接合もできず、5、8号についても接合修復しているものも重になっており、図面では補正をしている。これは、天井部のとくに2段目の盛上り筒所の厚さが0.1cm弱と非常に薄い作りであり、土圧等に耐えられず歪曲、破損したためと思われる。

経筒は筒身の底と身を一体に铸造する一鑄式で、これが本経筒の重要な特徴である。12世紀代に盛行する九州の経筒の多くは底板に銅板を嵌め込む別作りであり、それらの系統とは製作技法が異なる。一鑄式経筒は東日本の太平洋側ではしばしば見られるもので、分厚い筒身の底部に湯口痕が残る。ほかには播磨地域に見られる三段笠蓋式経筒が一鑄式で、薄作りのうえ湯口痕が残らないよう丁寧に仕上げ整形を施す。東光寺経筒は底部外面に丁寧なロクロ磨きの痕跡が残っており、湯口の痕が消されている。技法的には三段笠蓋式経筒の系統であるが、時期的に100年以上も隔たっているため、直接的な影響を考える必要はなからう。

底部内面には4号経筒に8巻分の経巻痕跡が明瞭に残っている。銘文にも各経筒に法華経1部を納めた旨が刻まれており、実際に法華経1部8巻が経筒に入れられたことがわかる。また、その経巻痕のさらに下には同心円状の微妙な凹凸が確認できる。これは鑄型の中子を作る際に使った挽き型の痕跡が小口面に残り、それが鑄造した経筒の内底面に転写したものと考えられる。

全体に丁寧に仕上げ調整をしている一方で、8号経筒のみは異なる。蓋、筒身ともに鑄造の際の湯まわりが悪かったようで髭が目立つ。ほかの経筒は蓋の天井部にロクロ磨きをかけて整えるが、8号経筒はそれを施さず粗放である。筒身も鑄造のように粗いままであるためか、この経筒のみは銘文が刻まれていない。

東光寺経筒は相良氏に関する銘文を有する資料として注目されてきた。筒身に刻まれた銘文は必ずしも鮮明ではなく、報告者によって判読が異なる。本稿では多良木町教育委員会が提案する銘文に従うこととする。銘文が刻まれているのは1～7号経筒で、1号経筒が藤原(相良)頼氏の名を刻むものである。銘文は類型化されており、

奉納

如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一

右志者為(人名A)(願意)也仍供養奉納如件

文永十年(癸/酉)十一月四日

(人名B)〈敬/白〉

となる。人名AとBが同じで自らを供養したものが1、4～7号の5点、人名AとBが異なり人名Aに「藤原氏慈父尊靈」と亡父を追善供養したものが2号の1点である。3号は判読不明箇所が多く詳細はわからない。願意には、「現世安穩後生善所乃至法界平等利益」(1、6、7号)、「往生極樂證大菩提乃至法界平等利益」(2、4号)、「七世恩所往生極樂證大菩提自他法界平等利益」(5号)とある。現世安穩を願うものもあるが、後生善所・往生極樂といずれも死後の往生を願う浄土信仰の所産である。人名を特定できないものがほとんどであるが、相良頼氏が中心となり、多良木相良氏の本拠地で大規模な埋経供養をおこなったことが想定される。





9. 開元通寶



10. 開元通寶



11. 祥符通寶



12. 祥符通寶



13. 天禧通寶



14. 元祐通寶



15. 皇宋通寶



16. 景德元寶



17. 熙寧元寶



18. 熙寧元寶



19. 紹興元寶



20. 元豐通寶



21. 元祐通寶



22. 紹聖元寶



23. 紹聖元寶



24. 崇寧通寶



25. 大觀通寶



26. 熙寧元寶



27. 元符通寶



28. 不明



29. 景定元寶



29. 背面



30. 聖宋元寶



31. 天禧通寶

圖5 東光寺經塚出土銅錢(原寸大)

銅銭は24枚出土したとされるが、現存するのは23枚である(図5)。多良木町教育委員会の再整理で、東光寺経塚出土銅銭はNo.9～31の番号が振り直された。内訳は初鋳年順に挙げると、開元通宝2枚(9、10)、景德元宝1枚(16)、祥符通宝2枚(11、12)、天禧通宝2枚(13、31)、皇宋通宝1枚(15)、熙寧元宝3枚(17、18、26)、元豊通宝1枚(20)、元祐通宝2枚(14、21)、紹聖元宝2枚(22、23)、元符通宝1枚(27)、聖宗元宝1枚(30)、崇寧通宝当十銭1枚(24)、大觀通宝1枚(25)、紹熙元宝1枚(19)、景定元宝(背三)1枚(29)、銭文不明1枚(28)である。銭文不明の1枚は下の文字が「元」と認められる。最新銭は景定元宝で裏文字が「三」なので、景定三年(1262)鋳造である。

銅銭のなかで注目されるのは崇寧通宝当十銭すなわち大銭が含まれることである。日本中世社会では中国で鋳造された銅銭が通貨として使用されたが、銅銭はすべて1枚1文として通用した。そのため1枚で3文、5文、10文とみなされる大銭は日本列島では使われなかったとするのが通説である。それは各地で見つかる14世紀以降の大量埋蔵銭のなかに大銭が含まれないこと、含まれる場合には大型である大銭の周囲を削って通常の銅銭と同じ大きさに加工していることが証左となっている。博多や堺など海外との窓口である港湾遺跡では大銭が出土するが、それは大銭が数文の価値で通用する国際港ならでとは考えられる。ところが、経塚に埋納された銅銭のなかに大銭が含まれている事例が散見される。山城・花背別所第5経塚、摂津・滝ノ奥経塚、紀伊・高尾山第1経塚、伊予・村山神社経塚、肥前・古園経塚などで、西日本に限られるとはいえ広範囲で確認される。経塚は12世紀代を中心に造営されており、銅銭が日本で使用されるようになってまだ浅い時期である。そうした初期段階においては、大銭は本来の数文の価値で通用していたとみなければ、このように各地で出土することはなかろう(村木2010)。東光寺経塚からも大銭が出土したということは、13世紀後半でもまだ大銭が通用していた可能性を示唆するものであり、この1枚は非常に重要な意味をもつ。

経筒に刻まれた銘文の初めには「如法書写」と書かれているように、埋納された法華経は厳格な作法に基づいて書写された如法経である。宗快により嘉禎二年(1236)に撰述された『如法経修作法』によると、前方便・正機悔にはじまる作法は料紙迎、水迎と清浄な紙・水を調え、写経者は手袋・覆面のうえ筆立(写経)し、筒奉納、供養(十種供養)をおこなったうえで奉納(埋経)に至る。『法然上人絵伝』によるとその過程は大勢の人びとの目にするとおり、一族や近視者のみならず衆目のもとで実施することで、周辺住民をも交えた多くの人びとを結縁させることに、この埋経供養の意義があったと思われる。

埋納された経巻は釈迦の教えであり、「法身之舍利」と呼ばれて釈迦の骨である肉舍利に擬された。すなわち経塚は舍利を埋納したストウパ(仏塔)であり、そこは聖なる地として人びとの信仰の対象となる。東光寺経塚がつくられた愛宕山中腹から指呼の間には、胎藏界大日如来の種子「アーンク」を葉研彫りで刻んだ4mを超える巨大な磨崖板碑が存在する。13世紀末から14世紀前半頃につくられたと考えられており、経塚とあわせてこの一帯は聖なる空間を形成している。経塚は日本各地に見られるが、なかでも九州地方には11世紀末という早い時期から集中的につくられ、全国的に流行する12世紀半ば過ぎには、逆に急激に造営数が減るといった特徴がある。そのような流れとは別の論理で、東光寺経塚は文永十年(1273)にこの地につくられた。それは多良木相良氏がこの地を領し治めるにあたって、一族および地域住民の結縁核となる信仰拠点を新たに設けるための装置として必要とされたためと考えられる。

## 参考文献

- 坂本経典 1936 「唐磨部黒肥地村出土文永十年在銘経筒に就て(上)」『九州日日新聞 昭和11年8月31日朝刊』  
村木二郎 2010 「経塚出土銭からみた大銭の利用」『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』(『遠古 登攀』刊行会)  
山川公見子 2004 「東国御家人の埋経—熊本県唐磨部多良木町所在東光寺経筒について—」『肥後考古』12

## 第八章 総括

### 第2節 総括

#### (1) 相良頼景館跡

相良家史によれば、鎮西相良氏の祖である相良頼景の館跡は「蓮花寺ノ上」「東ノ前」とされる。現在、館跡は球磨川に直し、東・西・北側には土塁が残っている。昭和49年～50年、熊本県文化課による発掘調査が行われ、館跡の東西に濠跡、球磨川に沿って石積濃岸が確認された。この調査結果から、土塁と濠を併せ持つ方形居館であるとともに、川濠として価値付けられ、報告者は相良頼景の館跡と評価している。

今回のトレンチ調査の結果、北側の堀は2時期あることを確認した。当初の堀を北堀1、掘り直しの新しい堀を北堀2とし説明を加える。

北堀1は13世紀後半に幅6m、深さ2mの規模で薬研に開削され、県調査で確認されている東西外濠とともに館跡を方形に区画するものであった。北堀1の覆土下位には明褐色粘質土(H-27層)の堆積があり、この層から15世紀中頃の青磁が出土した。この明褐色粘質土(H-27層)の科学分析の結果、花粉・珪藻は非常に保存状態が悪い状況で、微化石が遺存し難い環境であったことがわかった。微化石の破壊は、乾燥を繰り返したことが原因である。微化石が残る難い環境でありながら、イネなどの珪酸体は多分に検出された。このことは、遺跡周辺に水田が広がっていたことを示すものである。発掘調査と科学分析の結果から、当初の北堀1は区画堀とともに灌漑機能も兼ねていたことがわかった。

この明褐色粘質土(H-27層)に対応すると考えられるのが、土質が似ている県調査東外濠の下層に堆積する黄灰色粘質土である。

鎌倉時代に多良木相良氏が開発したとされる河川灌漑「粘之瀬井手」は、館跡から上流約450mの場所から取水され、館跡及び蓮花寺跡の北側を流れている。蓮花寺跡で確認されたA/B区溝跡は、県調査当時の「粘之瀬井手」の流路方向と重複していることから(第9図)、「流之瀬井手」の一部であったと考えられる。B区溝最下層から出土した遺物(第35・36図)は概ね13世紀後半のもので、その頃には灌漑用水は機能していたといえる。以上のことから、北堀1や東外濠への水の供給源は「粘之瀬井手」であったと考えられる。

その後、北堀1は15世紀中頃に人為的に埋め戻され、再度、規模を小さくした北堀2が掘り直されている。北堀2の覆土の堆積状況からみて、開削から廃棄まで短い期間に機能した層である。北堀2は、幅3.2m、深さ1.1mの規模で薬研に開削され、人為的に埋め戻されている。北堀2の人為的埋め戻しは、覆土上位層から検出した炭化物散在層のC14分析の結果、15世紀後

半～16世紀前葉である。

次に、北側土塁は残存幅4.6m・高さ1.2mの規模で確認できた。土塁直下に炭化物を多量に含む整地層を確認した。土塁は版築構造もなく、北側からの発生土による盛土であることを堆積状況は示している。整地層よりも下位には2枚の水性堆積層があり、ともに無遺物層である。その下が地山である礫層である。旧地形は土塁部分が高所、旧自然堤防付近に当たると思われる。

整地層で採取した炭化物のC14分析の結果、測定誤差の2σ暦年代は、整地層①-1がcalAD1272～1300、整地層①-2がcalAD1230～1293、整地層②-1がcalAD1305～1402、整地層②-2がcalAD1305～1401、整地層③がcalAD1326～1423である。よって、土塁造成は15世紀前葉以降である。しかし、館跡は13世紀後半からは確実に機能していたことが年代測定結果から分かる。北側堀の開削も併せて土塁造成の時期を総合的に勘案すると、土塁造成は北堀1でなく北堀2に伴うものである。

熊本県調査資料の再整理の結果は次のとおりである。特徴的な陶磁器を挙げると、相良頼景館跡では、白磁四耳壺・瀬戸御皿・青磁香炉・白磁梅瓶・瀬戸瓶子・白磁合子・高麗象嵌漆・緑釉洗・黄釉鉄絵洗・萩府系白磁・白磁水注が出土しており、館として遜色ない高級品を備えている。一方、中世期のコンテナ容器として使用された中国産の大型甕も出土しており、流通拠点に相応しい製品も合わせてもつのが特徴といえる。国産陶器の常滑焼は4型式から7型式で、13世紀から14世紀の年代観である。隣接する蓮花寺跡からは酒海壺蓋・元様式の青磁瓶・白磁合子・白磁梅瓶・白磁甕壺・中国天目・瀬戸天目・白磁四耳壺が出土している。土師器の形態や、陶磁器の年代から見て、遺跡の形成は蓮花寺跡が先行する。

遺構の形成過程や出土遺物とその量から見て、蓮花寺跡・相良頼景館跡は13世紀中頃から徐々に形成されはじめ、13世紀後半から15世紀中頃にかけてピークを迎え、それ以降は衰微する傾向にある。

相良頼景館跡は領主居館としては小規模である。一般に居館であれば堀で四周を囲むが、川側を開放していることから館と断定できない要素も認められる。出土している陶磁器は高級品もあり、有力者の拠点あるいは港湾施設等の流通拠点を示すものである。熊本県調査で確認された石積堤防へと続く石敷遺構の広場は古代～中世の港湾によく見られる構造である。

相良頼景館跡の西側に隣接する蓮花寺は、相良頼氏が創建した多良木相良氏の供養所である。文永6年(1269)銘の多良木相良氏による笠塔婆の造塔、当初の石墓墓に

連続し拡大する石積基壇、その上に配置された五輪塔は、多良木相良氏と蓮花寺との強い関係を示すものである。また、検出された溝は「鮎之瀬井手」の流路の一部で、溝の廃棄は用水の延長と考えられ、それは灌漑域の拡大を意図したものと評価できる。

これらの要素から相良頼景館跡は、多良木相良氏に関連する川渡関連施設か居館の可能性のある遺跡であり、出土遺物から多良木相良氏が大陸や半島の極品を手でできるだけの立場を有するとともに、球磨川という流通経路を確保していたと推定される。西遷御家人の経済活動・地域支配の在り方を示す遺跡と評価できる。

## (2) 青蓮寺境内

相良家史によれば、青蓮寺は鎮西相良氏の祖である相良頼景の後室とされる青蓮尼の位牌所として、永仁6年(1298)に多良木家の相良頼宗によって草創されたと伝えられる。また、青蓮寺が草創される3年前の永仁3年(1295)に多良木家の相良頼宗が祖・頼景の廟を建て、阿弥陀三尊を祀ったとの記載がある。堂内に安置された阿弥陀三尊像の両脇侍の足の納には、永仁3年の銘がありこれを証左する。阿弥陀三尊像は、京都の蓮華王院三十三間堂の観音像を7軀手掛けた法印院玄の作である。

現在の須弥壇の格状間などの一部は鎌倉時代後期の当初村で、これを転用し使用されている。現青蓮寺阿弥陀堂は嘉吉3年(1443)の阿弥陀堂が原型で、宝暦4年(1754)の大規模改修をうけた姿である。また、青蓮寺境内には、阿弥陀堂の北側斜面に県指定史跡である「青蓮寺古塔碑群」が存在する。

阿弥陀堂裏の南向き傾斜面の段造成部分に、古塔碑群が並び、その中心に壇上積基壇が設置されている。壇上積基壇は阿弥陀堂の中軸線上で、計画的な配置といえる。壇上積基壇の構築時期は、その形状や青蓮寺阿弥陀堂の変遷から考慮すると、永仁期の廟所整備の時期が最も整合する。

青蓮寺境内の当初の姿を復元すると、廟所の中に阿弥陀三尊が安置され、その背後中軸線上に、壇上積基壇を設け、その上に五輪塔がのるという景観が復元できる。このような墓所景観は、個人の墓所ではなく、一族の墓所として機能していたと思われる。惣領家の役割として、相伝文書・館・旗の管理とともに、一族の墓所整備及び管理という重要な役割を多良木家は果たしていたことがわかる。

壇上積基壇の周囲に残る石造物群の紀年銘と配置状況を確認すると、基壇西側に多良木家・佐牟田家を統一し、相良木宗家を継承した永留長純・為統の五輪塔や、戦国時期・江戸期の相良氏当主の五輪塔が配置されている。このことから、墓所開放は多良木家が滅亡して、永富家

による多良木村の直轄支配期からである。鎮西相良氏の祖・頼景を祀る壇上積基壇に最も近い位置に長純とその嫡子・為統の五輪塔が配置されているのは、壇上積基壇及びその上の伝頼景供養塔に支配の正当性を求めたからといえる。戦国期・江戸期の相良氏当主の五輪塔が青蓮寺境内に造営されたのは、このような論理が背景にあったからである。

また、青蓮寺阿弥陀堂は数度の修繕がされている。天文11年(1542)の棟札によれば、この時の大檀那は相良氏当主の相良長唯である。このことから多良木相良氏滅亡後においても祖・相良頼景を祀る青蓮寺は、相良氏支配の正当性を示す場所であり続けた。

## (3) 東光寺磨崖梵字

東光寺磨崖梵字は磨崖板碑であることがわかった。磨崖板碑に刻まれた梵字は、五点具足の胎藏界大日如来(amh)と五点具足の金剛界大日如来(vamh)である可能性が極めて高い。造営時期は武藏型板碑の隆盛時期を考慮すると、13世紀末から14世紀前半と考えられる。

磨崖面前面のトレンチ調査によって、磨崖面前面は人為的な造成土であることがわかった。この造成土から13世紀後半～14世紀前半の土師器や13世紀後半の青磁碗が出土している。

磨崖面の右側に開口した石窟は、木造部材をはめ込んだ入口構造を備えることが分かった。右側壁奥には東側へと延びる先細りの空洞があり、空洞床面には土師器片が散在していた。この湧水は石窟内部での宗教行為を構成する一部と考えられる。

中世の「多良木村」の中には東光寺村が含まれ、建久4年(1193)から相良頼景が領知していた〔相5号〕。寛元元年(1243)の裁許により東光寺村は頼景の嫡子・長頼が領掌し、長頼死去後は頼氏が領知することになる。文応元年(1260)の東光寺再興も頼氏によるものとされ、多良木相良氏との関係性は深い。文永10年(1273)11月4日銘の経筒は、モンゴル帝国との対外的な緊張の最中、多良木家の頼氏が一族の現世安穏後生善処を祈願したものである。

このような一族結合の場である東光寺に磨崖板碑は造営される。磨崖板碑の造営は、初代・頼景からみて孫(頼氏)・曾孫(頼宗)の世代の時期である。板碑の形態を採用したのは、東国御家人に出自を持つ多良木相良氏の意図が働いたと考えられる。また、磨崖板碑のその大きさから当時のランドマークであったといえ、地域社会への権威付けの機能もあったと考えられる。

## (4) 遺跡の評価

多良木相良氏遺跡は、豊富な中世文書や建造物、石造

物とともに、西遷御家人による地域開発や本拠形成の様子が具体的にわかる事例である。

相良氏入部以前、多良木の地は平安仏の存在等から京都などとの交流が認められるなど、物流の拠点に当たると考えられる。多良木相良氏は、平安時代以来の伝統的な交易ルートを掌握するだけでなく、当時の対外交易の窓口と考えられる菟北や坊津などと球磨川水運や陸路でつながっていたことを想起させる。

その交易ルートの拠点である多良木村に灌漑を整備し、その灌漑域に供養所である蓮花寺や、居館もしくは川浜関連施設という拠点施設を整備している。また用水の出水口には多良木相良氏の庇護を受けた王宮神社を配置している。史料に「河鹿取」とあるように、多良木村は球磨川水運の最上流地点であった。

灌漑域の北側の河岸段丘上に一族の氏寺である青蓮寺境内があり、青蓮寺境内地の鬼門方向に東光寺磨崖板碑や東光寺薬師堂といった宗教施設が設けられている。

今回の調査で、多良木相良氏による計画的な地域開発の様子が状況証拠により具体化された。中世の寺院等が残るだけでなく、用水の確保や管理といった耕地開発の在り方がわかる。中世の景観を色濃く留めるなど、西遷御家人の本拠形成とともに地域開発・支配を推定することができる事例である。



番号	和題	西暦	史料名	トピック	出典	初本
19			相良頼朝中状書	正応6年調状に父名が付け付いていないにも関わらず、八綱名と綱合名を名無し。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 46号
20	元弘2年6月16日	1332	源通(相良長氏)文書節取状書	源文の入った箱を預かっていることについて。	願成寺文書	熊本県史料館中世館蔵3
21	元弘3年12月10日	1333	相良経朝証文	人吉庄嗣下文3通、受取状	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 61号
22	元弘3年12月20日	1333	相良経朝約状	経朝が同族の北方4分の1の調料を条件に、平文部太の控を(相良家文書3号)と名調状4分の1宛分給を受けるとともに、判取調状の部には、平文部太の品物を供せ、奉職に當つたもの。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 62号
23	元弘3年12月29日	1333	相良経朝約状	人吉庄北方同族のために茶葉調度4分の1の負給を引受け受けるもの。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 63号
24	建永3年9月10日	1336	一色龍氏勢勅取状	佐渡公好を遣わし、相良経朝等を行つた。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 74号
25	建永5年8月	1338	相良定朝中状書	定朝が相良方経朝の兵を本林に遣い込め、経朝の相見。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 82号
26	暦應2年12月17日	1339	一色龍氏地頭職取行状	定朝「多良本村地頭歩調」を宛行われる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 85号
27	暦應2年12月17日	1339	一色龍氏地頭職取行状	定朝「多良本村地頭歩調」を宛行われる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 86号
28	暦應3年正月25日	1340	相良運道(長氏)調状	長氏、解任定朝に人吉庄北方地頭職を譲る。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 87号
29	暦應3年6月19日	1340	少成頼高勢勅取状	相良定長を遣わし、経朝同河部三郎龍高等を行つた。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 88号
30	暦應3年6月19日	1340	少成頼高勢勅取状	相良景宗を遣わし、経朝同河部三郎龍高等を行つた。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 89号
31	暦應3年6月24日	1340	一色龍氏勢勅取状	長氏を遣わし、龍氏、経朝等を行つた。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 90号
32	暦應3年6月25日	1340	勢勅取状	経朝同河部三郎等の事札。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 91号
33	暦應4年正月17日	1341	相良宗頼証文案	長氏相良龍三郎経朝等調状のこと。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 93号
34	暦應3年8月6日	1340	臥成経高通行状	景宗を遣わし、経朝と相良長氏等を行つた。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 94号
35	暦應3年8月11日	1340	相良長宗勢勅	経朝ならびに伊藤八郎三郎龍高と龍高に頼り。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 95号
36	暦應3年8月11日	1340	長宗氏女代調取申状	相良助成、築地頭に頼る。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 96号
37	暦應3年8月28日	1340	相良宗頼勢勅	相良家文書 102号と同行書。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 99号
38	暦應3年9月28日	1340	相良定長勢勅	暦應3年(1340)8月に山内頼に譲取る相良経朝を花めて、本郷の多良本村まで送り込んで合戦についてのも、経朝の軍勢には、佐平田能重調、定朝の長文・相見も加ふる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 102号
39	暦應3月9日	1340	相良景宗勢勅	相良家文書 102号と同行書。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 103号
40	暦應3年12月10日	1340	少成頼高勢勅	定長の功を賞し、経朝の功に出し加ふる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 104号
41	暦應3年12月10日	1340	少成頼高勢勅	景宗の功を賞し、経朝の功に出し加ふる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 105号

番号	和題	西暦	史料名	トピック	出典	刊本
42	寛永4年正月17日	1341	少弐頼尚知行状	定兵に頼朝退治の命を伝える。	相国家文書	相国家文書 106号
43	寛永4年正月17日	1341	少弐頼尚知行状	御宗に頼朝退治の命を伝える。	相国家文書	相国家文書 107号
44	興和2年4月28日	1341	相良直実御忠状	完藏、直良の本領を神領。	相国家文書	相国家文書 108号
45	徳永元年9月20日	1342	徳所宗輝御忠状	肥後国久米郡久米郷本領について。	相国家文書	相国家文書 112号
46	徳永元年10月16日	1342	一色範氏御状	久米郷大里合戦の戦所に関する御忠を賞する。	相国家文書	相国家文書 113号
47	徳永2年7月20日	1343	少弐頼尚御書	頼尚、頼朝を招く。	相国家文書	相国家文書 115号
48	徳永2年8月4日	1343	相良経朝御状	頼尚、経朝に再啓を下す。	相国家文書	相国家文書 116号
49	徳永4年11月	1345	徳所宗輝御忠状	宗輝、相良と所々に戦う。	相国家文書	相国家文書 120号
50	貞和4年7月11日	1348	一色直実御忠状	多良木氏に、少郷内郡に属して肥後郡定を打つよう催促。	相国家文書	相国家文書 130号
51	貞和7年2月29日	1351	足利直冬御教書	横濱江入道、肥後国久米郷西方村にて、幕府致す事。	相編合津風土記巻之3	
52	観應2年7月18日	1351	一色範氏地頭職知行状	相良定兵、三浦隆元跡の地頭職を贈る。「久米郷西方下内田地頭知行状」。	相国家文書	相国家文書 140号
53	観應2年7月18日	1351	一色範氏地頭職知行状	相良経朝、三浦隆元跡の地頭職を贈る。「久米郷西方下内田地頭知行状」。	相国家文書	相国家文書 141号
54	観應2年10月5日	1351	一色範氏御状	完藏、足利直冬の方定頼朝を打つ。頼朝その軍忠を賞する。	相国家文書	相国家文書 142号
55	文和2年2月	1353	平河直家御忠状	兄直世の討ち死、眞前・豊前などで戦績、証書あり。	平河文書	熊本歴史資料館編纂3
56	文和2年2月	1353	平河直家御忠状	前述平河直家軍忠状後半と内容重複。	平河文書	熊本歴史資料館編纂3
57	文和4年4月5日	1355	一色範氏地頭職知行状	相良式部丞、頼朝の賞。「久米郷西方横濱江入道田領・・・」。	相国家文書	相国家文書 156号
58			相良定経行一色宗直御忠状	賢達・宗直をはじめとする一門・縁者が、一色範氏から預て行われた所領を列挙した目録。知行時期の前後が文和4年(1355)4月。内風を避けて、依前相良直家の謀叛御忠状の題紙、日何方前への状大をうかがえる。	相国家文書	相国家文書 161号
59	文和4年11月22日	1355	相良定兵知謀御忠状	定兵、経朝の地頭職を賞さる。「多良木村田郷町相良直三浦経朝御内・・・」。	相国家文書	相国家文書 162号
60	正平21年3月9日	1366	頼朝御忠状	宮原村が久米郷東方下分に含まれ、頼朝御の支配を受けていたことがわかる。	小瀬島文書	徳島県史料館編纂第17
61	永和元年12月1日	1375	今川了俊御忠状	了俊、頼朝の人情に打ける軍忠を賞す。	相国家文書	相国家文書 174号
62	永和3年6月5日	1376	野辺藤久御状	「永澤之上郡之人」と呼ばれる一族的頼朝。	相編文書	熊本歴史資料館編纂 九州編
63			島津氏久御状	島津合戦の事。	相編文書	熊本歴史資料館編纂 九州編
64			多良木頼朝御忠状	相良田嶋合戦の事。	相編文書	熊本歴史資料館編纂 九州編



番号	和題	西暦	史料名	トピック	出典	刊本
65	永和3年10月18日	1377	一般神本史料集	今川了俊のもとに編成された、南九州國人一揆の史料。「相良多良木 遠江守頼忠」かみえる。	神宮文書	南比羅道文 九州編
66	永和3年11月12日	1377	今川了俊書状集	「多良木かた、(中略)之間、ましをきて候。多良木に重々仰候て、いかなる忠告文をもが申せ。」	神宮文書	南比羅道文 九州編
67	元中8年2月18日	1391	相良立河(前編) 契状	前編、多良木を惣望せざることを相良頼五郎に契約する。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 186号
68	應永34年4月7日	1427	相良前頼政分封付	佐和野田原頼政による分封分付。平河氏の南比羅道内領を継いで佐和野田原頼政の傘下にいらったことを示す。	平河文書	熊本歴史資料館編纂3
69	應永34年4月7日	1427	相良前頼政分封付	相良前頼政による分封分付。中継給分封付。	平河文書	熊本歴史資料館編纂3
70	文明3年6月3日	1471	相良為頼宛行状	為頼から大藏三良次良一の宛行状。「久米郷多良木村之内・・・」	豊本文書	多良木町史
71	文明5年10月18日	1473	大藏良式宛行状	大藏良式から大藏人宛書への宛行状。	豊本文書	多良木町史
72	文明10年2月18日	1478	延昭行状付	為頼花押あり。「久米郷多良木村・・・」	信濃文書	多良木町史
73	文明11年12月15日	1479	相良為頼田原目録	為頼から相良五郎に宛行われた田原目録。「久米郷御野村・・・」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 228号
74	文明17年3月18日	1485	相良頼藤源文	長続、多良木村を頼藤に譲る。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 233号
75	文明17年2月吉日	1485	平河伯高守給分封付	為頼による「久米郷西方、内給分封付。	平河文書	熊本歴史資料館編纂3
76	文明19年7月10日	1487	相良為頼源文	為頼が氏守頼政等に長頼が守護した久米郷多良木村の田原目録を示すように書進するので、室町幕府の認定や承認を得るに際しては苦慮を心得よう求めたもの。	細成寺文書	熊本歴史資料館編纂3
77	天文5年11月22日	1536	沙弥頼忠(相良良因) 良状写	最も古い相良家の史書。「長頼頼藤文頼忠之事者・・・」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 319号

観覧表

展覧 番号	展示 場所	出土地点・層位 (所在地・発掘状況)	類別	数量	口徑	通高 (cm)	分 類 (中・大・小型の番号)	年 代	器形の特徴・製作技法等	展 望 図
13-1	A区石橋	A区石橋内	土器部	卍	11.2	3.4	7(2)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-5
13-2	A区石橋	A区石橋内	土器部	卍	11.2	3.2	7(2)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-7
13-3	A区石橋	A区石橋下層部	土器部	卍	14.8	3.5	-		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-6
13-4	A区石橋	A区石橋北端	土器部	卍	-	0(0)	-		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-6
13-5	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	6.0	1.5	4.0		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-6
13-6	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	6.0	1.1	5.0		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-6
13-7	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	0(0)	1.9	(4,8)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-5
13-8	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	6.8	2.4	4.6		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-5
13-9	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	7.0	1.6	5.4		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-5
13-10	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	0(0)	4.0	-		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-5
13-11	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	7.4	2.2	4.0		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-4
13-12	A区石橋	A区石橋内	土器部	小皿	7.4	1.6	6.2		色調：真直褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-4
13-13	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	7.6	2.7	5.6		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-4
13-14	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	0(0)	2.0	0(0)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-1
13-15	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	0(0)	0(0)	1.8	(5,0)	色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-1
13-16	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	8.1	2.0	5.4		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-2
13-17	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	8.2	2.6	5.2		色調：真直褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-2
13-18	A区石橋	A区石橋内	土器部	小皿	8.2	2.0	5.2		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-2
13-19	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	0(4)	2.0	(5,2)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-2
13-20	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	0(4)	1.7	(6,2)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-2
13-21	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	0(4)	1.7	(5,0)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒及び赤色粘土を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-22	A区石橋	A区石橋内	土器部	小皿	9.0	1.9	5.8		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-23	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	-	-	3.5		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-24	A区石橋	A区石橋外北端	土器部	小皿	-	-	4.0		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-25	A区石橋	A区石橋外北端	土器部	小皿	-	-	4.0		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-26	A区石橋	A区石橋内	土器部	小皿	-	-	4.0		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-27	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	-	-	4.4		色調：にぶい褐色 胎土：赤色粘土を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-28	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	-	-	4.5		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-29	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	-	-	(4,6)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-30	A区石橋	A区石橋北端	土器部	小皿	-	-	4.6		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-31	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	-	-	4.8		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-32	A区石橋	A区石橋東3上段	土器部	小皿	-	-	4.8		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-33	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	-	-	(5,0)		色調：にぶい褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-34	A区石橋	基段石組壁面調整区	土器部	小皿	-	-	5.2		色調：褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-35	A区石橋	A区石橋下層部	土器部	小皿	-	-	0(0)		色調：褐色 胎土：Iammの砂粒を含む 調整：内外面同様子 外底：糸切り磨し	7図-3
13-36	A区石橋	A区石橋内	陶器	四角	9.0	9.2	22.0	7.8	*陶板類 胎土：精・長石を含む灰白色 釉：褐色 胎土上に褐色釉を流す、調整の四角片配製、口縁が傾部にて傾部(傾部) 型付→高台内無地	10図-1
14-37	A区石橋	A区石橋北端	中世銅器部	瓶	8.0	-	-	在場	胎土：砂粒を含む灰白色 外底：平底 内面：平子	7図-11
14-38	A区石橋	A区石橋北端	中世銅器部	瓶	6.4	-	-	在場	胎土：長石を含む砂粒を含む灰白色 外底：平底 内面：平子 胎土は山形砂粒を多く含む	7図-10
14-39	A区石橋	A区石橋内	中世銅器部	瓶	-	-	-	在場	胎土：長石を含む砂粒を含む灰白色 外底：平底 内面：平子 胎土は山形砂粒を多く含む	7図-14
14-40	A区石橋	A区石橋北端	中世銅器部	瓶	-	-	12.7	在場	胎土：長石を含む砂粒を含む灰白色 外底：平底 内面：平子 胎土は山形砂粒を多く含む	7図-14
14-41	A区石橋	A区石橋東3上段	中世銅器部	瓶	-	-	11.7	在場	胎土：長石を含む砂粒を含む灰白色 外底：平底 内面：平子 胎土は山形砂粒を多く含む	7図-13
14-42	A区石橋	A区石橋	中世銅器部	瓶	-	-	13.0	在場	胎土：砂粒を含む灰白色 外底：平底 内面：平子	7図-12



階層 番号	出土地点・層位 (所在地)	基土地点・層位 (基本地層名称)	類別	試験 位置	直径 (cm)	深度 (m)	分層 (中大・大層の番号)	年代	形質の特長・製作状況等	頁 22 編 備考
18	95 A区層	A-12区層	土部層	井	12.0	2.6	8(0)		色調：灰色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-6
18	96 A区層	A-13区層	土部層	井	12.2	3.1	8(0)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-6
18	97 A区層	A-14区層	土部層	井	12.2	2.5	(7,4)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
18	98 A区層	A-15区層	土部層	井	12.2	3.0	(8,4)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
18	99 A区層	A-16区層	土部層	井	12.2	3.4	(8,0)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-10
19	100 A区層	A-17区層	土部層	井	12.2	2.9	7(5)		色調：灰白色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し 内底：同	16 頁-25
19	101 A区層	A-18区層	土部層	井	12.2	2.8	7(5)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-26
19	102 A区層	A-19区層	土部層	井	12.2	3.4	8(0)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し、概 目録参照	30 頁-9
19	103 A区層	A-20区層	土部層	井	12.2	3.2	8(2)		色調：灰色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	30 頁-27
19	104 A区層	A-21区層	土部層	井	12.2	3.2	7(8)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	105 A区層	A-22区層	土部層	井	12.2	3.0	(8,3)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	106 A区層	A-23区層	土部層	井	12.2	3.1	8(8)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-9
19	107 A区層	A-24区層	土部層	井	12.4	3.0	(8,2)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	108 A区層	A-25区層	土部層	井	12.4	3.2	(8,4)		色調：灰褐色 粘土・赤色粒子及び1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	109 A区層	A-26区層	土部層	井	12.4	3.6	(8,0)		色調：灰褐色 粘土・赤色粒子及び1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切 り履し	16 頁-17
19	110 A区層	A-27区層	土部層	井	12.4	2.9	8(5)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-26
19	111 A区層	A-28区層	土部層	井	12.4	2.4	8(8)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し、概目録 参照	30 頁-2
19	112 A区層	A-29区層	土部層	井	12.4	2.8	(8,6)		色調：灰色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	113 A区層	A-30区層	土部層	井	12.2	2.6	(8,4)		色調：灰褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	114 A区層	A-31区層	土部層	井	12.4	2.8	(8,0)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	115 A区層	A-32区層	土部層	井	12.4	2.4	(7,6)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	116 A区層	A-33区層	土部層	井	12.6	3.4	9(0)		色調：灰白色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-18
19	117 A区層	A-34区層	土部層	井	12.6	3.2	8(2)		色調：灰褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	30 頁-5
19	118 A区層	A-35区層	土部層	井	12.6	3.0	8(4)		色調：灰色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	30 頁-31
19	119 A区層	A-36区層	土部層	井	12.6	3.1	8(0)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	120 A区層	A-37区層	土部層	井	12.6	2.5	8(4)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	121 A区層	A-38区層	土部層	井	12.6	2.7	(7,4)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	122 A区層	A-39区層	土部層	井	12.6	2.8	8(0)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	124 A区層	A-40区層	土部層	井	12.6	3.4	(8,6)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	125 A区層	A-41区層	土部層	井	12.6	2.5	9(2)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	126 A区層	A-42区層	土部層	井	12.6	3.1	(9,4)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	127 A区層	A-43区層	土部層	井	12.6	3.3	(8,4)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	128 A区層	A-44区層	土部層	井	12.6	2.7	(9,0)		色調：灰褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
19	129 A区層	A-45区層	土部層	井	12.6	2.2	7(8)		色調：灰褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-14
19	130 A区層	A-46区層	土部層	井	12.6	2.7	(9,0)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-23
19	131 A区層	A-47区層	土部層	井	12.6	3.1	8(6)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	30 頁-15
20	133 A区層	A-48区層	土部層	井	12.6	3.4	9(2)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
20	134 A区層	A-49区層	土部層	井	12.6	3.6	7(6)		色調：にぶい褐色 粘土・1mmの砂粒を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
20	135 A区層	A-50区層	土部層	井	12.6	3.3	(8,6)		色調：灰褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	16 頁-5
20	136 A区層	A-51区層	土部層	井	13.0	3.0	(8,6)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	
20	137 A区層	A-52区層	土部層	井	13.0	3.2	(8,8)		色調：にぶい褐色 粘土・赤色粒子を含む 調湿：内外面同粘土 外底：未切り履し	



階層 番号	階層 名称	出土地点・層位 (所在地・層位)	出土地点・層位 (所在地・層位)	標別	標種	口徑 標準	直径 (cm)	分 寸	年 代	形制の特長・製作技法等	図 22 展 覧施設
21-179	A1E	A-179A	A-179A	土師部 卍	卍	13.8	2.9	8.8		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	15 図 31
21-181	A1E	A-181A	A-181A	土師部 卍	卍	13.8	2.7	8.4		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	30 図 10
21-182	A1E	A-182A	A-182A	土師部 卍	卍	13.8	3.2	9.0		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	10 図 1
21-183	A1E	A-183A	A-183A	土師部 卍	卍	13.8	3.4	8.8		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-185	A1E	A-185A	A-185A	土師部 卍	卍	14.0	3.0	8.8		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-186	A1E	A-186A	A-186A	土師部 卍	卍	14.0	3.2	9.0		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-187	A1E	A-187A	A-187A	土師部 卍	卍	14.0	3.2	9.2		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-188	A1E	A-188A	A-188A	土師部 卍	卍	14.0	3.4	11.2		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-189	A1E	A-189A	A-189A	土師部 卍	卍	14.2	2.9	8.4		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-190	A1E	A-190A	A-190A	土師部 卍	卍	14.4	3.6	10.0		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-191	A1E	A-191A	A-191A	土師部 卍	卍	14.4	3.2	8.8		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-193	A1E	A-193A	A-193A	土師部 卍	卍	14.4	3.1	9.4		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
21-194	A1E	A-194A	A-194A	土師部 卍	卍	14.4	3.4	9.2		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-195	A1E	A-195A	A-195A	土師部 卍	卍	-	-	6.5		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-196	A1E	A-196A	A-196A	土師部 卍	卍	-	-	6.8		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-197	A1E	A-197A	A-197A	土師部 卍	卍	-	-	6.8		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-198	A1E	A-198A	A-198A	土師部 卍	卍	-	-	7.2		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-199	A1E	A-199A	A-199A	土師部 卍	卍	-	-	7.4		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-200	A1E	A-200A	A-200A	土師部 卍	卍	-	-	7.6		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-201	A1E	A-201A	A-201A	土師部 卍	卍	-	-	7.0		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-202	A1E	A-202A	A-202A	土師部 卍	卍	-	-	7.6		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-203	A1E	A-203A	A-203A	土師部 卍	卍	-	-	7.8		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-204	A1E	A-204A	A-204A	土師部 卍	卍	-	-	7.8		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-205	A1E	A-205A	A-205A	土師部 卍	卍	-	-	7.8		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-206	A1E	A-206A	A-206A	土師部 卍	卍	-	-	8.0		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-207	A1E	A-207A	A-207A	土師部 卍	卍	-	-	8.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-208	A1E	A-208A	A-208A	土師部 卍	卍	-	-	8.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-209	A1E	A-209A	A-209A	土師部 卍	卍	-	-	8.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-210	A1E	A-210A	A-210A	土師部 卍	卍	-	-	8.2		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-211	A1E	A-211A	A-211A	土師部 卍	卍	-	-	8.2		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-212	A1E	A-212A	A-212A	土師部 卍	卍	-	-	8.2		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-213	A1E	A-213A	A-213A	土師部 卍	卍	-	-	8.2		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-214	A1E	A-214A	A-214A	土師部 卍	卍	-	-	8.2		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-215	A1E	A-215A	A-215A	土師部 卍	卍	-	-	8.2		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-216	A1E	A-216A	A-216A	土師部 卍	卍	-	-	8.4		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	
22-217	A1E	A-217A	A-217A	土師部 卍	卍	-	-	8.5		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同能子デ 外底：糸切り磨し	















階層 番号	階層 名称	基土地点・階位 (標準階位)	基土地点・階位 (階位階級)	種別	面積	口徑	深さ (cm)	分層 (中・大・小の階級)	年代	階層の制作状況等	階級 番号
29	443	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	円	-	8.0	-	-	色調：灰白色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-18
29	444	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	円	-	8.0	-	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-19
29	445	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	円	-	8.5	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-20
29	446	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	円	-	8.6	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-21
29	447	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	円	-	9.0	-	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-22
29	448	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	円	-	9.0	-	-	色調：灰白色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-23
30	449	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(0.4)	1.0	(4.0)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-24
30	450	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(0.6)	1.6	(5.0)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-25
30	451	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	7.6	1.3	5.0	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-26
30	452	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	7.6	2.5	5.6	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-27
30	453	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(7.6)	1.1	(5.4)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-28
30	454	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(7.8)	1.3	(6.0)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-29
30	455	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.0	1.3	6.0	-	色調：灰白色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-30
30	456	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.0	1.5	6.0	-	色調：灰白色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-31
30	457	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.0	1.5	6.0	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-32
30	458	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.0	1.4	5.8	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-33
30	459	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(8.0)	1.6	(6.4)	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-34
30	460	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(8.0)	1.0	(5.8)	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-35
30	461	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.4	1.3	6.6	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-36
30	462	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(8.4)	1.3	(6.0)	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-37
30	463	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(8.0)	1.3	(6.4)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-38
30	464	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.8	1.7	6.4	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-39
30	465	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	8.8	1.2	6.2	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-40
30	466	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(8.8)	1.3	(7.0)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-41
30	467	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(8.8)	1.5	(6.0)	-	色調：にぶら褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-42
30	468	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(9.2)	1.7	(6.4)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-43
30	470	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	(10.0)	1.3	(7.4)	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-44
30	471	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	10.8	1.0	8.6	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-45
30	472	B-F42区3層	B-F42区3層	土留部	小皿	11.2	1.5	8.6	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-46
30	473	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	-	-	-	12c, 12c, 12c	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-47
30	474	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	-	-	-	12c, 12c, 12c	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-48
30	475	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	15.6	6.1	4.8	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-49
30	476	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	17.2	7.3	5.4	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-50
30	477	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	16.0	6.5	5.2	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-51
30	478	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	16.0	6.4	5.3	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-52
30	479	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	小皿	12.6	4.4	5.3	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-53
30	480	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	16.0	-	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-54
30	481	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	-	-	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-55
30	482	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	-	-	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-56
30	483	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	-	-	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-57
30	484	B-F42区3層	B-F42区3層	内壁	円	-	-	-	-	色調：浅黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面両側ナズ 外底：糸切り層シ	31階-58

種別	製機番号 (標準機番号)	出土地点・層位 (標準機番号)	出土地点・層位 (標準機番号)	種別	口徑	口徑 範圍	分量 (g)	分量 (g)	年代	用器の種類・製作技法等	備22番 製機番号
青磁	300_485	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	301 図-5
青磁	300_486	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	301 図-5
青磁	300_487	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	301 図-5
青磁	301_488	B-FY2 区 1層	B-FY2 区 1層	碗	-	-	5.2	5.2	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-12
青磁	301_490	B-FY2 区 1層	B-FY2 区 1層	碗	-	-	5.4	5.4	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-12
青磁	301_491	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	5.0	5.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-12
青磁	301_492	B-FY3 区 1・2 層	B-FY3 区 1・2 層	浅形碗	-	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	
青磁	301_493	B-FY1 1層	B-FY1 1層	浅形碗	-	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	
青磁	301_494	B-FY3 区 1層	B-FY3 区 1層	碗	12.0	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	
青磁	301_495	B-FY3 区 3層	B-FY3 区 3層	碗	11.0	-	136.0	136.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-11
青磁	301_496	B-FY3 区 1層	B-FY3 区 1層	碗	-	-	156.0	156.0	15c. 後半～16c. 1/4	胎土: 中葉明・白磁を含有した灰白色 釉: ネグロ灰	302 図-14
青磁	301_497	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	13.8	-	146.0	146.0	14c. 後半～15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-15
青磁	301_498	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	6.4	6.4	14c. 後半～15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-15
青磁	301_500	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	146.0	146.0	14c. 後半～15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-15
青磁	301_502	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	146.0	146.0	14c. 後半～15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-15
青磁	301_503	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	6.6	6.6	14c. 後半～15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-15
青磁	301_504	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	7.4	7.4	14c. 後半～15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-15
青磁	301_505	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_506	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_507	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_508	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_509	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_510	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	5.4	5.4	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_511	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
青磁	301_512	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	136.0	136.0	13c. 後半～14c. 後半	胎土: 滑・灰白色 釉: 青灰色	302 図-13
白磁	301_513	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	-	-	156.0	156.0	15c. 前半	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-1
白磁	301_514	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	6.2	1.6	合子	合子	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-1
白磁	301_515	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	6.2	1.8	合子	合子	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-1
白磁	301_516	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	5.4	2.0	4.8	合子	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-2
白磁	301_517	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	5.0	-	合子	合子	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	301_518	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	小車	-	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	301_519	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	小車	-	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	301_520	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	小車	-	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	301_521	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	小車	-	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	301_522	B-FY1 1層	B-FY1 1層	碗	小車	-	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	302_523	B-FY3 区 3層	B-FY3 区 3層	碗	-	-	156.0	156.0	15c. 3/4～16c. 1/4	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	302_524	B-FY3 区 3層	B-FY3 区 3層	碗	-	-	156.0	156.0	15c. 3/4～16c. 1/4	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3
白磁	302_525	B-FY3 区 3層	B-FY3 区 3層	碗	-	-	156.0	156.0	15c. 3/4～16c. 1/4	胎土: 滑・灰白色 釉: 灰白色	301 図-3



図号 番号	出土地点・層位 (所在地)	出土品名・種別 (基本品名)	種別	形状	寸法 (cm)		重量 (g)	年代	形態的特徴・製作技法等	図22 裏 見出し
					口径	高さ				
32	526	B-FG 胃	中臣祖遺物	胴体	(31.6)	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。内面は赤褐色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	34図-2
32	527	B-FG 3層	中臣祖遺物	胴体	26.0	10.7	-	在地	新土：砂粒を含む白色。内面：ハケム後ナデ・ユビ押え。口縁部はヨコナデ。胴部前方のケズリ 外面：ハケム後・底面はヨコナデ。口縁部は砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	34図-1
32	528	B-FG 1,2層	中臣祖遺物	胴体	23.4	-	-	在地	新土：赤褐色を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	34図-3
32	529	B-C 1層 B-C 2層	中臣祖遺物	胴体	(27.6)	-	-	在地	新土：赤褐色を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
32	530	B-FG 2区西側 下層	中臣祖遺物	胴体	26.0	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。口縁部はヨコナデ。胴部前方のケズリ。内面：ハケム後	
32	531	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	532	B-FG 3層下層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	533	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	534	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	535	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	536	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	537	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	538	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	539	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	23.2	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	35図-5
33	540	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	(25.0)	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	34図-4
33	541	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	542	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	543	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	544	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
33	545	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	546	B-FG 2区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	11.5	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	547	B-FG 2区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	12.4	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	548	B-FG 2区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	14.6	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	549	B-FG 3層下層	中臣祖遺物	胴体	-	-	11.0	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	550	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	11.8	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	551	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	552	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	553	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	554	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	555	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	556	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	557	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	
34	558	B-FG 1区西側 中層	中臣祖遺物	胴体	-	-	-	在地	新土：砂粒を含む白色。外面：ハケム後ナデ・ユビ押え。内面：ハケム後・底面はヨコナデ	

展覧 番号	展覧 題名	出土地点・墓名 (内閣府管轄)	出土地点・墓名 (国史院管轄)	器種	口縁	高さ (cm)	分 類 (※大・水型別番号)	年 代	形制の製作技法	展 望 展覧地
34-559	B199 IV期	B-FK3区3層	中庄須恵遺跡	鉢	-	11.0	布地		胎土：長石を含む赤褐色・内外両面は灰色。外底：ナズ・ユビ押入。器底四方内のアズリ 内面：ハケメ	展 22 室 展覧地
34-560	B199 IV期	B-FK3区3層	中庄須恵遺跡	鉢	-	10.4	布地		胎土：砂粒を含む灰白色。外底：ナズ・ユビ押入。器底四方内のアズリ 内面：ハケメ	
34-561	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	高野山遺跡	鉢	9.2	3.4	布地	18c-低平	胎土：砂粒を含む灰色。内外面：ナズ	
34-562	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	高野山遺跡	碗	2.9	3.4	肥前赤	18c-低平	胎土：砂粒を含む灰色。内外面：ナズ	
34-563	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	高野山遺跡	碗	-	3.8	肥前赤	18c-低平	胎土：砂粒を含む灰色。内外面：ナズ	
34-564	B199 IV期	B-FK1区1層	助地	碗	-	-	胎地	1820年代～忌天	高野山遺跡に二重周縁	
34-565	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	高野山遺跡	碗	13.8	-	胎地	1820年代～忌天	高野山遺跡に二重周縁	
34-566	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	高野山遺跡	皿	-	4.6	肥前・内野山産	17c末～18c前半	内外面：脚付縁を打削る・打削毛目 外面：下位周縁	
35-567	B199 IV期	B-FK3区内4層上	土師器	杯	-	(8.8)		18c前半	色調：浅黄褐色。胎土：赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ	
35-568	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	(0.4)	2.7	(0.4)		色調：浅黄褐色。胎土：2mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-569	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	(12.4)	3.5	(6.8)		色調：褐色。胎土：赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-570	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	13.0	2.7	9.6		色調：浅黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し 内底：31段・2 葉小輪縁	31段・2
35-571	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	13.0	3.0	8.0		色調：浅黄褐色。胎土：2mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	31段・7
35-572	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	(13.2)	-	8.0		色調：浅黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 内外面に指痕	
35-573	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	13.6	2.1	7.6		色調：浅黄褐色。胎土：赤色砂を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	31段・12
35-574	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(7.0)			色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を多く含む。調整：内外面同軸ナズ	
35-575	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(6.8)			色調：にぶい褐色。胎土：2mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-576	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	-	(6.6)			色調：浅黄褐色。胎土：赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し・重状圧痕	
35-577	B199 IV期	B-FK3区4層	土師器	杯	-	(6.4)			色調：浅黄褐色。胎土：赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-578	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	杯	-	(8.0)			色調：浅黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-579	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(8.8)			色調：浅黄褐色。胎土：2mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-580	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(9.0)			色調：浅黄褐色。胎土：赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-581	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(9.0)			色調：にぶい黄褐色。胎土：2mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し 内 底に指痕	
35-582	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(8.8)			色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-583	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	杯	-	(9.0)			色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し 口唇に ヌメ付着	
35-584	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	小皿	(6.4)	1.3	(4.4)		色調：にぶい黄褐色。胎土：2mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-585	B199 IV期	B-FK2区溝田4層	土師器	小皿	(6.6)	1.6	(5.0)		色調：浅黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-586	B199 IV期	B-FK3区溝田4層	土師器	小皿	6.8	1.4	5.2		色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	
35-587	B199 IV期	B-FK3区内4層上	土師器	小皿	(7.0)	1.1	(5.4)		色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ 外底：糸切り履し	

障子番号	障子名称・部位 (内装・外装)	取手・位置 (取手・位置)	障子	口法	法量 (cm)	分 割 (中・大・取手位置)	年 代	障子の特徴・製作技法等	原 22 画 障子図
35 588	B区東山下 障子	B-FK23 区溝4層 上部	小皿	(7.0)	1.3 (4.4)			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 589	B区東山下 障子	B-FK23 区溝4層 上部	小皿	(7.0)	1.3 (4.4)			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 590	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(7.6)	1.1 (5.6)			色調：にぶい黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 591	B区東山下 障子	B-FK24 層	小皿	(7.8)	1.4 (6.0)			色調：浅黄褐色 軸土：赤色粒子を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 592	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(7.8)	1.2 (5.6)			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 593	B区東山下 障子	B-FK24 層	小皿	7.8	1.1 5.4			色調：灰白色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し・板田匠	
35 594	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(8.0)	1 (5.8)			色調：にぶい黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 595	B区東山下 障子	B-FK24 上部	小皿	8.0	1.6 5.6			色調：灰白色 軸土：赤色粒子を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	31 図・20
35 596	B区東山下 障子	B-FK24 層上部	小皿	8.0	1.4 6.2			色調：灰白色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	31 図・21
35 597	B区東山下 障子	B-FK24 層	小皿	(8.2)	1.3 (6.6)			色調：にぶい黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 598	B区東山下 障子	B-FK24 層上部	小皿	(8.2)	1.2 (5.8)			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 599	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(8.2)	1.2 (6.2)			色調：にぶい黄褐色 軸土：2mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 600	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(8.2)	1.6 (5.6)			色調：灰白色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し・板田匠	
35 601	B区東山下 障子	B-FK24 層	小皿	(8.4)	0.9 (6.4)			色調：灰白色 軸土：赤色粒子を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 602	B区東山下 障子	B-FK24 層上部	小皿	(8.4)	1.5 (7.2)			色調：にぶい黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 603	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(8.6)	1.4 (6.6)			色調：浅黄褐色 軸土：赤色粒子を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 604	B区東山下 障子	B-FK24 層上部	小皿	(8.6)	1.1 (6.6)			色調：にぶい黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 605	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	8.6	1.6 7.0			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 606	B区東山下 障子	B-FK24 層	小皿	(8.8)	1.1 (6.0)			色調：浅黄褐色 軸土：赤色粒子を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 607	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(8.8)	1.5 (7.0)			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 608	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	8.8	1.4 6.0			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	31 図・19
35 609	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	9.0	1.6 7.2			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 610	B区東山下 障子	B-FK24 層上部	小皿	9.4	0.9 6.2			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	31 図・17
35 611	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	(10.4)	1.2 (9.0)			色調：浅黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 612	B区東山下 障子	B-FK24 層上部	小皿	-	(4.8)			色調：にぶい黄褐色 軸土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	
35 613	B区東山下 障子	B-FK22 区溝4層 上部	小皿	-	(6.0)			色調：にぶい黄褐色 軸土：赤色粒子を含む 調整：内外面同軸ナデ 外装：糸切り麗し	



図録 番号	発掘 位置	出土地点・部位 (両面図参照)	種別	群體	口徑	直径 断面	分量 (g・大・小(重量))	年代	形迹の特徴・製作技法等	図録 番号
35-014	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	青磁	碗	17.0	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰色 釉：灰色	32図-3
35-015	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	青磁	碗	16.4	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰色 釉：オリーブ灰色	32図-2
35-016	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層上部	青磁	碗	(16.4)	(5.0)	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰色 釉：オリーブ灰色	32図-7
35-017	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	青磁	碗	-	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰白色 釉：オリーブ灰色	
35-018	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	青磁	碗	-	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰白色 釉：青灰色	
35-019	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	青磁	碗	-	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰白色 釉：青灰色	
35-020	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	青磁	碗	-	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰色 釉：青灰色	
35-022	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層上部	青磁	碗	10.8	2.5	同定部系	15c, 中変～後半	胎土：精・灰色 釉：緑灰色	33図-6
36-024	B区東区下層 IV層	B-FK23区4層溝	白磁	四耳壺	8.8	2.0	同定部系D2期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰色 釉：民オリーブ色、器付～器台内は無釉 内底：草花文	33図-4
36-025	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	白磁	四耳壺	-	-	同定部系	13c	胎土：精・灰色 釉：灰色、底部外部付着から無釉	33図-7
36-026	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層上部	陶器	碗 (大口)	10.2	-	中国・天目	13c～14c	胎土：精・褐色粒子を多量に含む灰白色 釉：入口輪(おつとり) 器下半は露胎 口縁すっぱ口	
36-027	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	陶器	四耳壺	13.4	-	海神山灰	15～16c	胎土：中・精・灰白色 釉：褐色	35図-1
36-028	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	陶器	壺	-	-	鎌日皿(人)?	13 c	胎土：粗・白色砂灰を多く含む灰白色 釉：外面が付着し	
36-029	B区東区下層 IV層	B-FK23区4層	中国磁器	壺	-	-	在地		胎土：砂灰を含む灰色・糊状 外底：ナズ、ユビ押え、口縁部はヨコナズ 内面：ハケム後顔目	
36-030	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	中国磁器	鉢	-	-	在地		胎土：砂灰を含む灰色・糊状 外底：ナズ、ユビ押え、口縁部はヨコナズ 内面：ハケム後顔目	
36-031	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	中国磁器	鉢	24.0	-	在地		胎土：砂灰を含む灰色・糊状 外底：ナズ、ユビ押え、口縁部はヨコナズ 内面：ハケム後顔目	35図-4
36-032	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層上部	中国磁器	鉢	20.0	-	在地		胎土：砂灰を含む灰白色 外底：ハケム後ナズ・ユビ押え、口縁部はヨコナズ 内面：ハケム	35図-3
36-033	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	中国磁器	鉢	-	-	在地		胎土：砂灰を含む灰白色 外底：ナズ、ユビ押え、口縁部はヨコナズ 内面：ハケム、口縁部はヨコナズ	
36-034	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層上部	中国磁器	鉢	-	-	在地		胎土：砂灰を含む灰白色 外底：ナズ、ユビ押え、口縁部はヨコナズ 内面：ハケム、口縁部はヨコナズ	
36-035	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層上部	石製品	石筒	(21.3)	-			滑石 外底：鎌日の工具(3～5mm) 内面：糊状の粗い工具痕	36図-4
36-036	B区東区下層 IV層	B-FK23区溝4層	石製品	石筒	(15.3)	-			滑石 外底：スス付着 内面：糊状の粗い工具痕	36図-3
38-038	AGE区下層 A-A7層	AGE区溝4層	土器部	平	13.0	2.6	7-9期		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂灰を含む 調整：内外面粗ナズ 外底：糸回り磨し	
38-039	AGE区下層 A-A7層	AGE区溝4層	土器部	平	(13.0)	2.8	7-9期		色調：にぶい褐色 胎土：赤色の砂灰を含む 調整：内外面粗ナズ 外底：糸回り磨し	
38-040	AGE区下層 A-A7層	AGE区溝4層	青磁	碗	-	-	遺灰部系B1期	13c, 中変～14c, 前半	胎土：精・灰白色 釉：褐色、無施部有文	
38-041	AGE区下層 A-A7層	AGE区溝4層	青磁	碗	-	-	遺灰部系C2期	15c, 中変～後半	胎土：精・灰白色 釉：オリーブ灰色、器付文 体部に滑石片	38図-19
38-041	AGE区下層 A-A7層	AGE区溝4層	中国磁器	碗	-	-	11.4	在地	胎土：砂灰を含む灰白色 外底：ハケム後ナズ 内面：ハケム後ナズ	





階層 番号	階層 名称	出土地点・層位 (所在地・遺跡名)	出土品 目録	層別	規模	口径	高さ (cm)	分層 数	年代	特徴的特徴・製作技法等	図 22 集 層別表
41_727	C16E15遺物	CCT 1層	5 型式	常滑	壺	-	-	5 型式	1210 ~ 1270 年	新土：長石・黒色灰子・砂粒を含む	図 22 集 層別表
41_728	C16E16遺物	CAT 1層	6A 型式	常滑	壺	-	-	6A 型式	1250 ~ 1275 年	N 字穴口縁 新土：長石及び砂粒を含む	
41_729	C16E17遺物	C穴トレンチ内表 土	-	常滑	壺	-	-	6A 型式	1250 ~ 1275 年	N 字穴口縁 新土：長石及び砂粒を多く含む。自然釉が向かる	
41_730	C16E18遺物	CCT 1層	-	常滑	壺	-	-	7 型式	1300 ~ 1350 年	N 字穴口縁 新土：長石及び砂粒を多く含む	
41_731	C16E19遺物	CCT 1層	-	常滑	壺	-	-	-	-	新土：長石及び砂粒を多く含む。外体部にクランプ 本水(1cm)	
41_732	C16E20遺物	CCT 1層	-	中津川遺跡	団形	-	-	丸地	-	内面に丸文を配置	
41_733	C16E21遺物	C穴トレンチ 土	-	常滑赤付	碗	-	-	18c 後半	18c 後半	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_734	C16E22遺物	CCT 1層	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	18c 後半 ~ 18c	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_735	C16E23遺物	CCT 1層	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	18c 後半 ~ 18c	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_736	C16E24遺物	CCT 1層	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	1710 ~ 1750 年	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_737	C16E25遺物	CCT 1層	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	1710 ~ 1750 年	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_738	C16E26遺物	CCT 1層	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	1710 ~ 1750 年	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_739	C16E27遺物	C穴トレンチ 土	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	1710 ~ 1750 年	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_740	C16E28遺物	C穴トレンチ 土	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	1680 ~ 1740 年	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_741	C16E29遺物	CCT 1層	-	常滑赤付	碗	-	-	肥前系	1680 ~ 1740 年	外側に口縁部を黒釉。底花文 内面：口縁部黒釉。内底：黒釉。ツォルムが正む	
41_742	C16E30遺物	C穴トレンチ内表 土	-	白磁	小杯	φ3.8	-	肥前	1650 ~ 1740 年	底面平年は磨削	
41_743	C16E31遺物	C穴トレンチ内表 土	-	白磁	小杯	φ7.0	-	肥前	1650 ~ 1740 年	底面平年は磨削	
41_744	C16E32遺物	C穴トレンチ内表 土	-	白磁	小杯	φ3.0	-	肥前	1650 新代遺	底面平年は磨削	
41_745	C16E33遺物	C穴トレンチ内表 土	-	常滑赤付	皿	-	-	肥前	1850 ~ 1860 年代	底面平年は磨削	
41_746	C16E34遺物	CAT 1層	-	常滑	碗	φ6.0	5.1	一磨地	1820 初葉 ~ 終末	底面平年は磨削	
41_747	C16E35遺物	CCT 1層	-	常滑	碗	-	-	肥前：内野山野	17c 末 ~ 18c 前半	底面平年は磨削	
41_748	C16E36遺物	CAT 1層	-	常滑	皿	-	-	肥前：内野山野	17c 末 ~ 18c 前半	底面平年は磨削	
41_749	C16E37遺物	CAT 1層	-	常滑	皿	-	-	肥前	17c 後半	底面平年は磨削	
42_750	C16E38遺物	注記欄	-	土師部	弁	(11.6)	2.7	(7.0)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_751	C16E39遺物	注記欄	-	土師部	弁	12.4	2.8	4.2	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_752	C16E40遺物	注記欄	-	土師部	弁	(12.8)	2.9	(10.0)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_753	C16E41遺物	記不	-	土師部	弁	(13.0)	2.5	(8.0)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_754	C16E42遺物	記不	-	土師部	弁	(13.2)	2.6	(7.6)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_755	C16E43遺物	注記欄	-	土師部	弁	(14.0)	3.0	(9.4)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_756	C16E44遺物	注記欄	-	土師部	弁	-	-	(8.2)	-	色調：灰褐色 新土：赤色灰子を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_757	C16E45遺物	注記欄	-	土師部	弁	-	-	8.6	-	色調：灰褐色 新土：赤色灰子を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_758	C16E46遺物	注記欄	-	土師部	小皿	-	-	9.4	-	色調：灰褐色 新土：赤色灰子を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_759	C16E47遺物	常滑赤付	-	土師部	小皿	φ8.0	2.1	4.6	-	色調：灰褐色 新土：赤色灰子を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_760	C16E48遺物	記不	-	土師部	小皿	φ8.2	1.4	(5.6)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_761	C16E49遺物	注記欄	-	土師部	小皿	φ9.0	1.5	(6.0)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_762	C16E50遺物	注記欄	-	土師部	小皿	φ9.2	1.8	(7.0)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_763	C16E51遺物	記欄	-	土師部	小皿	-	-	(4.4)	-	色調：灰褐色 新土：1mm の砂粒を含む 調剤：内外面同灰子ナリ 外底：赤切り磨し	
42_764	C16E52遺物	注記不明	-	青磁	碗	-	-	-	12c、13c 後半	新土：黒・長石、黒色灰子を含む灰白色 釉：灰オリーブ色 外側に黒釉。その後片磨り産生文 内面：黒・長石、灰花文	
42_765	C16E53遺物	注記不明	-	青磁	碗	-	-	-	12c、13c 後半	新土：黒・長石、黒色灰子を含む灰白色 釉：灰オリーブ色 外側に黒釉。その後片磨り産生文 内面：黒・長石、灰花文	
42_766	C16E54遺物	注記欄	-	青磁	碗	φ6.5	-	-	13c、14c 後半	新土：黒・長石、黒色灰子を含む灰白色 釉：灰オリーブ色 外側に黒釉。その後片磨り産生文 内面：黒・長石、灰花文	
42_767	C16E55遺物	注記不明	-	白磁	碗	-	-	-	13c、14c 後半	新土：黒・長石、黒色灰子を含む灰白色 釉：灰オリーブ色 外側に黒釉。その後片磨り産生文 内面：黒・長石、灰花文	
42_768	C16E56遺物	注記不明	-	白磁	碗	-	-	-	11c 後半 ~ 12c 前半	新土：黒・黒色灰子を含む灰白色 釉：灰白色 外側に黒釉。その後片磨り産生文 内面：黒・長石、灰花文	

図録 番号	発掘 番号	出土地点・部位 (調査年度)	出土地点・部位 (所在調査区)	種別	群體	口徑 (cm)	高さ (cm)	分量 (g)	分 類 (母・大塚の別)	年代	形態的特徴・製作技法	備 考
42-769	正史不明	注記不明	注記不明	白磁	皿	9.5	2.7	5.3	白磁ⅢA類	13c. 後半～14c. 初期	口差：胎土：黒・灰色。胎土：灰白色。体下部半角筒	備 22番 群體別
42-770	正史不明	注記不明	注記不明	白磁	皿	-	-	-	白磁ⅢX類	13c. 後半～14c. 初期	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色	
42-771	正史不明	注記不明	注記不明	青花	碗	15.4	5.8	6.4	染付ⅢC群	15c. 4期～3/4	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色。内底に2重厚線の中に青花。肩有部細線施す取付	
42-772	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	碗	-	-	-	染付ⅢC群	15c. 4期～3/4	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色	
42-773	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	碗	-	-	-	染付ⅢC群	15c. 3/4～16c. 1/4	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色	
42-774	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	碗	12.5	2.9	7.0	染付ⅢB1群	15c. 後半～16c. 初期	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色	
42-775	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	皿	12.8	2.8	6.4	染付ⅢB1群	15c. 後半～16c. 初期	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色	
42-776	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	皿	13.0	-	-	染付ⅢB1群	15c. 後半～16c. 初期	胎土：黒色胎土を少量含む灰白色。釉：灰白色	
42-777	正史不明	用本所内中ノイ	用本所内中ノイ	白磁	皿	-	-	-	白磁	18c. 後半	胎土：砂粒を含む灰白色。外底：胎土状タタキ (3mm)。内面：ナメ	38図-21
42-778	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	碗	-	4.2	肥房	白磁	1690～1740年代	胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-5
42-779	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	小杯	7.5	4.7	3.1	肥房	1690～1740年代	胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
42-780	正史不明	注記不明	注記不明	磁器外付	小杯	7.0	4.7	3.1	肥房	1690～1740年代	胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
42-781	正史不明	注記不明	注記不明	陶器	皿	-	-	-	肥房	1790～1890年代	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
42-782	正史不明	注記不明	注記不明	陶器	皿	-	-	-	一筆施	1820年代～幕末	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-783	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	杯	13.0	4.5	6.6	土器部	18c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-784	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	杯	13.4	3.3	7.8	土器部	1690～1740年代	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-785	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	杯	14.0	3.0	7.8	土器部	1790～1890年代	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-786	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	杯	13.0	3.5	7.2	土器部	1820年代～幕末	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-787	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	小皿	7.8	1.5	6.4	土器部	18c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-788	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	小皿	7.8	1.3	6.6	土器部	1690～1740年代	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-789	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	小皿	7.8	1.7	6.8	土器部	1790～1890年代	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-790	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	小皿	6.6	0.9	6.2	土器部	1820年代～幕末	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-791	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	小皿	8.9	3.1	4.6	土器部	1820年代～幕末	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-792	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	16.6	-	-	東外庫A2群	12c. 後半～13c. 初期	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-793	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	-	東外庫A2群	12c. 後半～13c. 初期	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-794	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	-	東外庫A2群	12c. 後半～13c. 初期	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-795	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	7.0	東外庫A2群	12c. 後半～13c. 初期	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-796	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	-	東外庫A2群	12c. 後半～13c. 初期	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-797	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	-	東外庫A2群	12c. 後半～13c. 初期	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-798	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	4.8	同安型者	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-799	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-800	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-801	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗	9.4	1.8	4.4	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-802	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-803	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-804	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-805	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	-	6.6	同安型者	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-806	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	12.2	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-807	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	12.2	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3
45-808	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	皿	8.8	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-4
45-809	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗/皿	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-1
45-810	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗/皿	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-2
45-811	東外庫	B区外庫西内	B区外庫西内	土器部	碗/皿	-	-	-	同安型者	12c. 後半～14c. 後半	胎土：赤褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面胎土ナメ。外底：赤切り磨し	55図-3

階層 番号	階層 名称	国土地点・階位 (階層名称)	建土地点・階位 (階層名称)	類別	仕様	仕様 口径	法量 (cm)	分層 番号	年代	階層の特長・製作技法等	階 22 層 築 築地
46	812	西外壁	東外壁4層	中央垂直部	鉄	-	-	在場	-	新土: 2mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	55 階-17
46	813	西外壁	B 東外壁2層	中央垂直部	鉄	-	8.8	在場	-	新土: 2mmの砂粒を含む灰色 外面: 2mmの砂粒を含む灰色 内面: ナデ・ユビ得え 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	55 階-17
46	814	西外壁	東外壁4層	中央垂直部	鉄	-	-	在場	-	新土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 外面: 断面方向ウエリ 内面: ハケマ	55 階-17
46	815	西外壁	東外壁4層	中央垂直部	鉄	-	-	在場	-	新土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 外面: 断面方向ウエリ 内面: ハケマ	55 階-17
46	816	西外壁	東外壁4層	中央垂直部	鉄	-	-	在場	-	新土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 外面: 断面方向ウエリ 内面: ハケマ	55 階-17
46	817	西外壁	東外壁4層	中央垂直部	鉄	-	-	在場	-	新土: 2mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 外面: 断面方向ウエリ 内面: ハケマ	55 階-17
46	819	西外壁	B 東外壁4層	中央垂直部	鋼	-	-	配筋	18c 中央～16c 平	外面: 卓文	
46	820	西外壁	B 東外壁4層	中央垂直部	鋼	-	-	配筋	18c 中央～16c 平	外面: 卓文	
46	821	西外壁	B 中央垂直部	中央	鋼	10.0	-	一階	1820 年代～卓文	窓及び口縁、取巻	
46	822	西外壁	東外壁4層	中央	鋼	3.8	2.4	一階	1820 年代～卓文	窓及び口縁	55 階-14
47	823	西外壁	S70 通V管	土留部	鉄	13.0	2.9	8.1	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	
47	824	西外壁	S70 通V管	土留部	鋼	7.6	1.2	5.4	-	内色: ナデ	
47	825	西外壁	S8.9C 通4層	土留部	小皿	18.0	1.3	16.6	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	
47	826	西外壁	S8.9C 通4層	土留部	小皿	10.0	1.8	10.0	-	色調: 洗剤色 新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-5
47	828	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	16.0	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	829	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	15.4	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	830	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	831	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	832	西外壁	A17.1T 西外壁	中央	鋼	16.0	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	833	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	834	西外壁	A 西外壁2層	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	835	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	836	西外壁	A 西外壁2層	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	837	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	838	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	839	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-4
47	841	西外壁	S70 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-2
47	842	西外壁	S70 通V管	中央	鋼	15.0	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-2
47	843	西外壁	S70 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-2
47	845	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-2
47	844	西外壁	S70 通V管	中央	鋼	-	-	-	-	新土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面同様にナデ 外面: 糸切種し板目瓦葺	56 階-2
47	845	西外壁	A17.1T 西外壁3層	中央	鋼	-	4.8	-	15c 中央～14c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	846	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	12c 中央～13c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	847	西外壁	東外壁4層	中央	鋼	-	-	-	12c 中央～13c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	848	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	12c 中央～13c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	849	西外壁	S8.9C 通4層	中央	鋼	-	4.2	-	12c 中央～13c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	849	西外壁	S8.9C 通4層	中央	鋼	15.0	-	-	12c 中央～13c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	850	西外壁	A17 西外壁4層	中央	鋼	-	5.4	-	14c 中央～15c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	851	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	5.0	-	14c 中央～15c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
47	851	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	5.0	-	14c 中央～15c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	57 階-2
48	852	西外壁	西外壁4層	中央	鋼	-	-	-	15c 中央～16c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	61 階-14
48	853	西外壁	A17.1T 西外壁	中央	鋼	-	-	-	15c 中央～16c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	61 階-14
48	854	西外壁	S70 通V管	中央	鋼	-	-	-	13c 中央～14c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	61 階-8
48	854	西外壁	S70 通V管	中央	鋼	-	-	-	13c 中央～14c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	61 階-8
48	855	西外壁	S8.9C 通V管	中央	鋼	-	-	-	13c 中央～14c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	61 階-8
48	856	西外壁	A17 西外壁4層	中央	鋼	-	-	-	13c 中央～14c 1/4	新土: 1mmの砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ得え 内面: ハケマ	61 階-8



展覧 番号	展覧 名称	出土地点・単位 (所在地)	出土時期	種別	材質	長さ(cm)	口径	分 類 (※大・大形器類)	時 代	所出の墳墓・製作状況	備 考
48-857	西外墓	S-8-9C 溝5層	西外墓	白磁	皿	15c	4.4c	15c、4.4c 内径不明	15c、4.4c	赤土・黒・灰白色 輪：黒灰色、輪：赤灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-10
48-858	西外墓	A1T 西外墓内	西外墓	白磁	香炉	-	-	11c、平手 向付不明	11c	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-10
48-859	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	白磁	皿	11c	4.4c	11c、平手～12c、平手 白磁厚肉	11c、平手～12c、平手	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-12
48-860	西外墓	S-8-9C 溝10層	西外墓	白磁	皿	12c	4.4c	12c、平手～13c 白磁厚肉	12c、平手～13c	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-12
48-861	西外墓	S-8-9C 溝10層	西外墓	白磁	皿	13c	4.4c	13c、平手～14c、平手 白磁厚肉	13c、平手～14c、平手	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-12
48-862	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	白磁	皿	13c	4.4c	13c、平手～14c、平手 白磁厚肉	13c、平手～14c、平手	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-12
48-863	西外墓	西外堀内	西外墓	白磁	皿	13c	4.4c	13c、平手～14c、平手 白磁厚肉	13c、平手～14c、平手	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-12
48-864	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	白磁	皿	13c	4.4c	13c、平手～14c、平手 白磁厚肉	13c、平手～14c、平手	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-12
48-865	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	白磁	皿	15c	4.4c	15c、平手 白磁厚肉	15c、平手	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-16
48-866	西外墓	S-7C 溝1層	西外墓	白磁	飯椀	13c	4.4c	13c、4.4c	13c、4.4c	赤土・黒・灰白色 輪：赤灰色、輪：黒灰色、黒文、直付型縁線付き	56図-16
48-867	西外墓	A1T 西外堀3層	西外墓	磁器外付	皿	9.8	2.8	15c、平手～16c、初層 変付皿C群	15c、平手～16c、初層	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-868	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	磁器外付	皿	4.0	3.3	15c、平手～16c、初層 変付皿C群	15c、平手～16c、初層	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-869	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	磁器外付	皿	2.1	3.3	15c、平手～16c、初層 変付皿C群	15c、平手～16c、初層	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-870	西外墓	G-9C 田舎	西外墓	土器	皿	-	-	16c、平手 変付皿C群	16c、平手	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-871	西外墓	西外堀内	西外墓	陶器	皿	-	-	変付皿C群	変付皿C群	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-872	西外墓	S-8-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	-	-	変付皿C群	変付皿C群	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-873	西外墓	S-8-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	-	-	変付皿C群	変付皿C群	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-874	西外墓	S-7C 溝2層	西外墓	陶器	皿	-	-	変付皿C群	変付皿C群	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-875	西外墓	S-7C 溝2層	西外墓	陶器	皿	-	-	変付皿C群	変付皿C群	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-876	西外墓	A 西外堀	西外墓	土器	皿	14.0	4.4	13c	13c	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-877	西外墓	A 西外堀	西外墓	土器	皿	14.0	4.4	13c	13c	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-1
48-878	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	磁器外付	皿	10.6	-	17c、平手	17c、平手	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-3
48-881	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	磁器外付	皿	4.0	3.3	1700～1750年代	1700～1750年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-882	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	磁器外付	小片	2.1	3.3	17c、平手	17c、平手	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-883	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	磁器外付	小片	2.1	3.3	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-884	西外墓	A1T 西外堀	西外墓	白磁	小片	2.6	3.3	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-885	西外墓	S-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	4.8	3.3	1610～1650年代	1610～1650年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-886	西外墓	S-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	4.8	3.3	1610～1650年代	1610～1650年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-887	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	陶器	皿	4.0	3.3	1500～1650年代	1500～1650年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-888	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	陶器	皿	10.4	-	1820年代～幕末	1820年代～幕末	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-889	西外墓	A1T 西外堀	西外墓	陶器	皿	-	-	1820年代～幕末	1820年代～幕末	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-890	西外墓	A 西外外堀内	西外墓	陶器	皿	-	-	1820年代～幕末	1820年代～幕末	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-891	西外墓	A1T 西外堀	西外墓	陶器	皿	-	-	1820年代～幕末	1820年代～幕末	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-892	西外墓	S-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	6.0	3.3	17c、平手	17c、平手	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-893	西外墓	S-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	4.0	3.3	1700～1750年代	1700～1750年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-894	西外墓	S-8-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	4.8	3.3	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
48-895	西外墓	S-8-9C 溝10層	西外墓	陶器	皿	4.8	3.3	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	57図-4
55-906	西外墓	HE2061	西外墓	土器部	杯	(11.8)	2.1	1610～1650年代	1610～1650年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	56図-11
55-897	西外墓	HE2061	土器部	杯	12.4	4.4	7.8	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	30と統合
55-898	西外墓	HE2061	土器部	杯	12.6	2.6	9.0	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	30と統合
55-899	西外墓	HE2061	土器部	杯	(13.0)	2.7	(7.6)	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	30と統合
55-900	西外墓	HE2061	土器部	杯	(13.8)	2.5	(8.8)	1650～1680年代	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	30と統合
55-901	西外墓	HE2061	土器部	小皿	皿	(8.2)	1.3	(6.0)	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	30と統合
55-902	西外墓	HE2061	土器部	小皿	皿	8.4	1.1	6.8	1650～1680年代	赤土・黒・灰白色、黒文、直付型縁線付き	30と統合





分類	名称	出土地点・部位 (再掲後)	出土地点・部位 (再掲後)	種別	数量	法量 (cm)	分 類 (※大・小(再掲後))	年 代	用途の特徴・製作法等	備 考
56	942	FE/36/30	FE/36/30	青磁	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	①大・大(再掲後) 龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：緑・灰白色 釉：灰色・灰白 胎土：緑・灰白色 釉：灰色・灰白	53 図-1
56	943	FE/36/31	FE/36/31	青磁	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	龍泉窯系A類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：緑・灰白色 釉：灰色・灰白	53 図-19
56	944	FE/36/31	FE/36/31	青磁	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	龍泉窯系A類	12c. 後半～13c. 初葉	胎土：緑・灰白色 釉：灰色・灰白	53 図-17
56	945	FE/36/31	FE/36/31	青磁	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：緑・黒色胎子を含有灰白色 釉：緑灰色 胎土：緑・灰白色 釉：灰色	
56	946	FE/36/31	FE/36/31	青磁	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：緑・灰白色 釉：灰色	
56	947	FE/36/31	FE/36/31	中国産磁器	黄・黒	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	在席	1690～1800年代	胎土：3.0mmの砂粒を含む灰色 外周：粘土状タタキ (φ3.5mm) 内周：ハタケ	
56	948	FE/36/31	FE/36/31	磁器外付	黄・黒	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	在席	17c. 末～18c. 前半	内周～外周下部に附席	
56	949	FE/36/31	FE/36/31	陶器	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	在席	1610～1630年代	灰黒 内底：砂目積	
56	950	FE/36/31	FE/36/31	陶器	碗	口徑 9.42 底径 6.12 高さ 3.30	在席	1610～1630年代	内周面黄土子	
56	952	FE/36/33	FE/36/33	土器部	小皿	口徑 8.0 底径 6.2 高さ 1.5	在席		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む灰白色 外底：赤褐色磨り	54 図-1
56	955	FE/36/33	FE/36/33	白磁	碗	口徑 6.1 底径 4.6 高さ 1.5	白磁Ⅷ類	13c. 後半～14c. 初葉	胎土：黒色胎子を含有灰白色 釉：灰白色	54 図-4
56	956	FE/36/34	FE/36/34	青磁	碗	口徑 7.4 底径 5.8 高さ 1.6	龍泉窯系A類	12c. 後半～13c. 初葉	胎土：緑・灰白色 釉：灰白～灰黄色	
56	957	FE/36/34	FE/36/34	磁器外付	小片	7.4	肥附	高台付近に三脚附席 裏付に砂付		
56	958	FE/36/39	FE/36/39	白磁	碗	口徑 5.3 底径 4.0 高さ 1.3	白磁Ⅷ類	1680～1740年	胎土：緑・黒色胎子を含有灰白色 釉：灰色 底面：輪周取り 内底：草花文	3 図合
56	959	FE/36/41	FE/36/41	青磁	杯	口徑 13.1 底径 8.8 高さ 4.5	龍泉窯系B0類	13c. 中葉～14c. 後半	胎土：緑・灰色 釉：厚・緑灰色 高台付	
56	960	FE/36/42	FE/36/42	土器部	杯	口徑 13.1 底径 8.8 高さ 4.5	在席		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 外周：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	53 図-14
56	961	FE/36/42	FE/36/42	土器部	小皿	口徑 8.6 底径 6.0 高さ 1.4	在席		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 外周：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	53 図-1
56	962	FE/36/42	FE/36/42	土器部	小皿	口徑 8.8 底径 6.0 高さ 1.3	在席		胎土：緑・黒色胎子を含有灰白色 釉：灰白色 口尻	53 図-3
56	963	FE/36/42	FE/36/42	土器部	碗	口徑 11.4 底径 8.0 高さ 3.0	在席		胎土：砂粒を含む灰白色 外周：山形タタキ 内周：ナデ	53 図-21
56	964	FE/36/42	FE/36/42	中国産磁器	黄・黒	口徑 11.4 底径 8.0 高さ 3.0	在席		胎土：砂粒を含む灰白色 外周：山形タタキ 内周：ナデ	
56	965	FE/36/50	FE/36/50	中国産磁器	黄・黒	口徑 6.0 底径 4.6 高さ 1.4	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：緑・灰白色 釉：灰白～灰黄色 高台付	
56	967	FE/36/51	FE/36/51	密付	蓋	口徑 6.0 底径 4.6 高さ 1.4	6号 密式	1250～1275年	胎土：長石を含む灰白色 N状口尻 自然釉施	53 図-18
56	968	FE/36/51	FE/36/51	土器部	小皿	口徑 7.8 底径 6.0 高さ 1.3	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り・秋目任	
57	969	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 12.0 底径 8.0 高さ 3.7	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	
57	970	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 12.2 底径 8.0 高さ 3.7	在席		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	
57	971	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 13.0 底径 8.2 高さ 3.5	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-17
57	972	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 13.0 底径 8.2 高さ 3.4	在席		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-18
57	973	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 13.0 底径 8.3 高さ 3.7	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	
57	974	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 13.0 底径 8.2 高さ 3.5	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	
57	975	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 13.8 底径 8.2 高さ 3.5	在席		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-19
57	976	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 14.0 底径 8.6 高さ 3.4	在席		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	
57	977	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 14.0 底径 8.3 高さ 3.5	在席		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-20
57	978	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 14.0 底径 8.0 高さ 3.0	在席		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-10
57	979	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 16.0 底径 8.5-4.1 高さ 10.9	在席		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-21
57	980	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 8.2 底径 6.0 高さ 1.6	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	
57	981	FE/36/52	FE/36/52	土器部	杯	口徑 8.4 底径 6.0 高さ 1.5	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	50 図-3
57	982	FE/36/52	FE/36/52	土器部	小皿	口徑 7.0 底径 5.5 高さ 1.5	在席		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-8
57	983	FE/36/52	FE/36/52	土器部	小皿	口徑 7.2 底径 5.5 高さ 1.5	在席		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-11
57	985	FE/36/52	FE/36/52	土器部	小皿	口徑 7.4 底径 5.7 高さ 1.6	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-7
57	986	FE/36/52	FE/36/52	土器部	小皿	口徑 7.5 底径 5.5 高さ 1.5	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-13
57	987	FE/36/52	FE/36/52	土器部	小皿	口徑 7.6 底径 5.6 高さ 1.6	在席		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-11
57	988	FE/36/52	FE/36/52	土器部	小皿	口徑 7.6 底径 5.4 高さ 1.6	在席		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面黄土子 外底：赤褐色磨り	54 図-7

階層 番号	階層 名称	国土地区・階位 (階層階級)	基土地点・階位 (階層階級)	類別	面積	口数	法量 (cm)	分 層 (中・大・小の階層)	年 代	階層の特長・製作状況	展 望 階級
57	980	B区1階	B区1階	土階	小	7.6	1.5	6.0		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	54階・10
57	981	B区1階	B区1階	土階	小	7.6	1.5	5.9		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	54階・12
57	991	B区1階	B区1階	土階	小	7.8	1.6	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	54階・9
57	992	B区1階	B区1階	土階	小	7.8	1.6	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	993	B区1階	B区1階	土階	小	8.0	1.6	6.5		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	994	B区1階	B区1階	土階	小	8.0	1.6	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	995	B区1階	B区1階	土階	小	8.0	1.5	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	996	B区1階	B区1階	土階	小	8.0	1.5	6.2		色調：浅黄褐色。新土：赤色砂子を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	997	B区1階	B区1階	土階	小	8.0	1.4	6.0		色調：浅黄褐色。新土：赤色砂子を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	998	B区1階	B区1階	土階	小	8.0	1.3	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	999	B区1階	B区1階	土階	小	8.2	1.6	6.2		色調：にぶい褐色。新土：赤色砂子を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し。内壁： ナド	54階・6
57	1000	B区1階	B区1階	土階	小	8.2	1.6	6.5		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	54階・14
57	1001	B区1階	B区1階	土階	小	8.2	1.4	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1002	B区1階	B区1階	土階	小	8.2	1.4	6.0		色調：灰白色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1003	B区1階	B区1階	土階	小	8.2	1.4	6.2		色調：灰白色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1004	B区1階	B区1階	土階	小	8.4	1.7	6.4		色調：灰白色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1005	B区1階	B区1階	土階	小	8.4	1.6	7.0		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	54階・15
57	1006	B区1階	B区1階	土階	小	8.4	1.3	6.2		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1007	B区1階	B区1階	土階	小	8.6	2.5	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1008	B区1階	B区1階	土階	小	8.6	1.5	6.4		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1009	B区1階	B区1階	土階	小	8.6	1.4	6.2		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1010	B区1階	B区1階	土階	小	8.6	1.4	6.4		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
57	1011	B区1階	B区1階	土階	小	8.6	1.4	6.4		新土：層・灰白色。層：透明な砂子一色。内層：二方向に異なる状態 新土：1mmの長径の灰色。外内同階ナド	54階・22
57	1012	B区1階	B区1階	土階	小	-	-	-			
57	1013	B区1階	B区1階	土階	小	12.4	2.8	8.0		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・8
58	1014	B区1階	B区1階	土階	中	12.4	3.1	7.4		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・12
58	1015	B区1階	B区1階	土階	中	12.2	3.8	6.0		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・10
58	1016	B区1階	B区1階	土階	中	12.6	3.1	7.6		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
58	1017	B区1階	B区1階	土階	中	12.9	2.9	8.2		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・9
58	1018	B区1階	B区1階	土階	中	13.0	3.1	8.2		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し。壁状 圧縮	50階・11
58	1019	B区1階	B区1階	土階	中	13.0	2.7	6.0		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
58	1020	B区1階	B区1階	土階	中	13.2	3.2	8.2		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・14
58	1021	B区1階	B区1階	土階	中	13.6	3.5	9.0		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・13
58	1022	B区1階	B区1階	土階	中	14.4	4.5	6.4		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・15
58	1023	B区1階	B区1階	土階	中	15.6	3.9	6.0		色調：にぶい褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	
58	1024	B区1階	B区1階	土階	小	7.2	1.0	5.4		色調：浅黄褐色。新土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同階ナド。外壁：糸切り麗し	50階・1



図号 番号	図名	出土地点・層位 (所在地)	出土時期(西暦) 色土・遺物	層別	規模	口径	高さ (cm)	分量 (g)	年代	形態的特徴・製作技法等	図22 遺物 見取図
58-1002	B-1002	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：オリーブ灰色	
58-1003	B-1003	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：オリーブ灰色	
58-1004	B-1004	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	5.2	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：オリーブ灰色	59 図-21
58-1005	B-1005	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	5.2	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：オリーブ灰色、器付～高台内は無輪 内底：印花文	
58-1006	B-1006	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	5.2	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：灰オリーブ色、器付～高台内は無輪	51 図-16
58-1007	B-1007	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色、水を受けている	
58-1008	B-1008	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色	
58-1009	B-1009	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色	
59-1000	B-1000	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色	
59-1001	B-1001	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・細い褐色粒子及び長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色、高台端部は縁線が取り	59 図-19
59-1002	B-1002	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	碗	12.4	-	-	14c. 前半	胎土：やや精・長行を含む灰白色 輪：灰色 口縁部に化粧した部分あり	59 図-25
59-1003	B-1003	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	皿	9.8	5.6	-	12c. 後半～13c. 初頭	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：オリーブ黄色、底部無輪	
59-1004	B-1004	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	皿	-	-	-	12c. 後半～13c. 初頭	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色	
59-1005	B-1005	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	皿	12.0	-	-	13c. 後半～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色	59 図-21
59-1006	B-1006	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	皿	-	-	-	13c. 後半～14c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め、オリーブ灰色、水を受けている	59 図-22
59-1007	B-1007	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	青磁	鉢	-	-	-	14 世紀	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・オリーブ黄色、器付～高台内は無輪	60 図-1
59-1008	B-1008	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	壺	-	-	-	13 世紀後半～14 世紀 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・オリーブ黄色、器付～高台内は無輪	
59-1009	B-1009	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	碗	-	-	-	11c. 後半～12c. 前半	胎土：精・褐色粒子を含む灰白色 輪：灰白色	
59-1010	B-1010	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	碗	13.0	-	-	13c. 前半～14c. 前半	胎土：精・褐色粒子及び長行を含む灰白色 輪：白色 口系、水を受けている	59 図-20
59-1011	B-1011	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	碗	-	4.2	-	13c. 前半～14c. 前半	胎土：精・褐色粒子を含む灰白色 輪：厚みある灰白色 内底：外周は低い状態の縁がつく	
59-1012	B-1012	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	皿	-	-	-	11c. 後半～12c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：灰色	
59-1013	B-1013	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	皿	-	-	-	11c. 後半～12c. 前半	胎土：精・褐色粒子を含む灰白色 輪：灰白色	
59-1014	B-1014	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	皿	-	-	-	11c. 後半～12c. 前半	胎土：精・褐色粒子を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色、器付	
59-1015	B-1015	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	皿	-	5.6	-	11c. 後半～12c. 前半	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚め・緑灰色、内底：縁線が取り	
59-1016	B-1016	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	皿	9.0	6.0	-	12c. 40年～14c. 前半	胎土：褐色粒子を含む灰白色 輪：厚みある灰白色 平底 外周下位：器付、体部は縁角に内周へ凸出	
59-1017	B-1017	B-石列南端下層	B-区色土(陶器) 色土・遺物	白磁	皿	10.6	7.8	-	13c. 後半～14c. 初頭	胎土：精・長行を含む灰白色 輪：厚みある灰白色、器付まで無輪、口系	59 図-20

図録 番号	採集地・標記 (南緯東経)	標記 (南緯東経)	種別	樹形	口径 (cm)	高さ (cm)	分 類 (①大・木質部組織)	年 代	形質的特徴・製作技法等	図録 番号
59-1078	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	白樹	直	-	-	白樹ⅢC群	12c.後半～14c.初頭	幹土：楕・長柱を含む灰白色 輪：オリーブ灰色、口黄	59図-27
59-1079	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1079(南緯東経) 色白・草屑	白樹	合子産	7.0	1.6	合子産	-	幹土：楕・長柱及び灰色粒子を含む灰白色 輪：明緑灰色、型吹削、外口縁～内側面まで無輪	59図-28
59-1080	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	白樹	合子産	-	3.3	合子産	-	幹土：楕・長柱及び灰色粒子を含む灰白色 輪：明緑灰色、型吹削、外口縁～内側面まで無輪	59図-28
59-1081	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	白樹	四耳産	-	-	四耳産即脚(大)	13c	幹土：楕・長柱を含む灰白色 輪：灰白色	59図-28
59-1082	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	白樹	神威	-	-	白樹ⅢB群	13c.前半～14c.中	幹土：楕・長柱、灰白色 輪：緑灰色、高台端部から底面無輪、火を受けている	
59-1083	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	青白樹	小産	-	-	灌漑小産	14世紀中頃	幹土：楕・灰白色 輪：明緑灰色 外側：灌漑	
59-1084	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	急付細E群	15c.前半～16c.後半	幹土：楕・長柱、灰白色 輪：明緑灰色 内底：二重扇脚内口草花文、高台内：流線(内脚)	
59-1085	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	皿	-	-	急付細C群	15c.後半～16c.初頭	滑潤器系 幹土：楕・黒色粒子を含む灰白色、磨製肌、化粧土あり、外底磨削	
59-1086	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	皿	-	-	急付細C群	15c.後半～16c.初頭	滑潤器系 幹土：楕・黒色粒子を含む灰白色、磨製肌、化粧土あり	
59-1087	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	瀬戸	脚皿	-	-	急付細Ⅲ脚皿式Ⅳ内	13c.後半	幹土：楕・灰白色 輪：灰色、外側の輪は割がれおもっている	
59-1088	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	中国産磁器	壺	-	-	在池	-	幹土：砂粒を含む褐色 外側：山前タタキ後子子 内側：ハケメ	
59-1089	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	中国産磁器	脚鉢	30.0	-	在池	-	幹土：砂粒を含む褐色 外側：山前タタキ後子子 内側：ハケメ	60図-7
59-1090	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	中国産磁器	脚鉢	-	-	在池	-	幹土：砂粒を含む褐色 外側：山前タタキ後子子 内側：ハケメ	
59-1091	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	中国産磁器	脚鉢	-	-	在池	-	幹土：砂粒を含む褐色 外側：山前タタキ後子子 内側：ハケメ	
59-1092	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	中国産磁器	脚鉢	-	-	在池	-	幹土：砂粒を含む褐色 外側：山前タタキ後子子 内側：ハケメ	
60-1093	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	10.0	-	肥前系	18c.中葉～末	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	
60-1094	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	肥前系	18c	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	
60-1095	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	肥前系	18c.末～19c	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	
60-1096	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	肥前系	19c	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	
60-1097	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	肥前系	18c.中頃～後半	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	60図-3
60-1098	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	肥前系	18c.末～19c	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	
60-1099	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	-	-	肥前系	1700～1750年代	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	
60-1100	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	13.4	4.4	肥前	17c.前半	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	60図-5
60-1101	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	碗	13.4	4.4	肥前	17c.前半	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	60図-6
60-1102	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	皿	-	-	肥前	-	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	60図-4
60-1103	B区草屑(南緯東経) 色白・草屑	B-1078(南緯東経) 色白・草屑	磁器外付	皿	-	-	肥前系	18c.後半	幹土：砂粒を含む褐色 外側：ハケメ後子子、ユビ髹え、内側：ハケメ	

図号 番号	図名 番号	出土地点・層位 (所在地・出土層位)	類別	形状 口径	法量 (cm) 口径 底径	分 類 (中・大・大型の順)	年 代	形態の特徴・製作技法等	図 22 裏 裏面図
60	1104	B区草葺(南)B区石列南盛土層	磁器灰付	皿	-	肥前系	18c後半	灰付細輪	
60	1105	B区草葺(南)B区石列	磁器灰付	小皿	-	肥前系	近代	体部下葉～高台内無輪、頂成形の菊花文 外面：草花文	60図-2
60	1106	B区草葺(南)B区石列南盛土層	磁器灰付	小片	6.2	肥前系	17c末～18c初	外面：一重帯口文	
60	1107	B区草葺(南)B区石列南盛土層	白磁	器口	5.0	肥前系	1780～1850年代	外面は直線的に開く	
60	1108	B区草葺(南)B区石列	磁器灰付	皿	-	肥前系	17c後半(即期)	体部下葉～高台内無輪、頂成形の菊花文	
60	1109	B区草葺(南)B区石列南盛土層	磁器灰付	鉢	-	肥前系	江戸後期	底面無輪 外面：草花文	
60	1110	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	深	8.4	埴野郡	1820年代～意末	灰付輪縁き取り	60図-8
60	1111	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	碗	-	肥前：内野山産	17c末～18c前半	内外面：刷目輪	
60	1112	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	碗	-	一野地	1820年代～意末	内外面：透切輪	
60	1113	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	碗	-	肥前	18c	内外面：透切輪、体部下葉から無輪	
60	1114	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	碗	-	肥前：内野山産	17c末～18c前半	内外面：刷目輪	
60	1115	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	皿	-	肥前	17c後半	内外面：透切輪	
60	1116	B区草葺(南)B区石列	大鉢	-	-	肥前	17c末～18c前半	輪は外面口縁付まで 内面：白土減毛塗り	
60	1117	B区草葺(南)B区石列南盛土層	陶器	大鉢	13.4)	八代(即期)	18～19c	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-4
63	1119	応明郷土	土器	杯	(13.4)	3.2	(9.0)	色調：にぶい棕色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	
63	1120	応明郷土	土器	小皿	(8.4)	1.2	(7.0)	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-12
63	1121	応明郷土	青磁	碗	-	5	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-13
63	1122	応明郷土	青磁	碗	16.4	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-7
63	1123	応明郷土	青磁	碗	16.8	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-8
63	1124	応明郷土	青磁	碗	15.0	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-6
63	1125	応明郷土	青磁	碗	-	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	
63	1126	応明郷土	青磁	碗	-	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	
63	1127	応明郷土	青磁	碗	-	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	
63	1128	応明郷土	青磁	碗	14.0	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-9
63	1129	応明郷土	青磁	碗	-	-	-	胎土：青・紺灰色、輪：薄い、淡い青緑色 色調：灰白色 胎土：1mmの粒粒を含む 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ 調整：内外面に輪ナダ	61図-11

製品 番号	出土地・産地 (両国産地)	仕立地・産地 (両国産地)	種別	仕様	口徑	寸法(cm)		分類	年代	彫刻の特徴・製作技法等	図22裏 裏面
63	1130	広島県上庄町	白磁	皿	9.4	-	-	白磁Ⅳ類	11c. 後半～12c. 前半	胎土：青・灰白色。釉：灰色。外部下位施釉	61図-10
63	1131	広島県上庄町	磁器胎付	皿	-	-	-	染付類B群	15c. 後半～16c. 中頃	胎土：青・灰白色。施文 胎土：青・灰白色。施文	
63	1132	広島県上庄町	染付	羹	-	-	-	7型式	1300～1350年	胎土：砂粒を含む灰色。N紋口縁	
63	1133	広島県上庄町	染付	羹?	-	-	-	-	13c. 後半～14c.	胎土：砂粒を含む灰色。内面に白文	
63	1134	広島県上庄町	瓦葺土器	煎釜	-	-	-	在産	-	胎土：灰白色。外底：ナズ。内面：ハケメ	
63	1135	広島県上庄町	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	在産	-	胎土：砂粒を含む灰白色。内面は灰色。内外面：ナズ。口縁と凸部の間にスタンプ	61図-18
63	1136	広島県上庄町	石製品	石鏡	19.2	-	-	-	-	磨行。外底：3mmの工具痕	61図-19
63	1137	石川県富山県	青磁	碗	17.8	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：青・灰行を含む灰色。釉：灰オリーブ色	52図-15
63	1138	石川県富山県	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：青・灰色。釉：灰色	
63	1139	石川県富山県	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：青・灰色。釉：灰色	
63	1140	石川県富山県	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：青・灰白色。釉：緑灰色	
63	1141	石川県富山県	青磁	碗	-	-	-	好緑類	13c. 後半～14c. 前半	胎土：青・白色。釉：緑灰色。外底：蓮花文	腹合
63	1142	石川県富山県	白磁	皿	-	-	-	白磁ⅣX類	13c. 後半～14c. 初葉	胎土：青・灰白色。釉：灰白色	
63	1143	石川県富山県	白磁	皿	-	-	6.0	白磁ⅣX類	13c. 後半～14c. 初葉	胎土：青・灰白色。釉：灰白色。施文及び灰行を含む灰白色。釉：灰白色	
63	1144	石川県富山県	中世北陸器	鉢鉢	-	-	-	在産	-	胎土：砂粒を含む灰白色。外底：ハケメ施ナズニシテ、腹面は磨行ハケメズリ。内面：ハケメ後	52図-16
64	1145	B/E上土器	土器	杯	(12.0)	3.4	(7.6)	B-I～2丁-1, II	-	色調：灰黄色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	
64	1146	B/E上土器	土器	杯	12.4	3.8	7.4	B-II～3丁 間II	-	色調：淡黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	51図-12
64	1147	B/E上土器	土器	杯	12.6	3.4	6.8	B-II～3丁 間II	-	色調：灰白色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	51図-6
64	1148	B/E上土器	土器	杯	12.6	3.2	8.2	B-II～3丁 間II	-	色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	51図-7
64	1149	B/E上土器	土器	杯	(12.7)	3.1	(7.6)	B-II～3丁 間II	-	色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	51図-8
64	1150	B/E上土器	土器	杯	(13.2)	3.0	(8.8)	B-II～3丁 間II	-	色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	
64	1151	B/E上土器	土器	杯	13.0	3.2	7.6	B-II～3丁 間II	-	色調：灰白色。胎土：赤色粒子を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	51図-10
64	1152	B/E上土器	土器	杯	13.0	3.8	8.4	G-PTK6丁 間II 裏上土層	-	色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	61図-2
64	1153	B/E上土器	土器	杯	13.4	3.8	8.2	G-PTK6丁 間II 裏上土層	-	色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	61図-3
64	1154	B/E上土器	土器	杯	13.0	3.0	9.0	B-II～2丁 1層	-	色調：にぶい黄褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナズ。外底：糸切り磨し	51図-9



原形番号	出土品名・部位名 (内装品名)	出土品名・部位名 (出土品名)	土質	口径	通高 (cm)	分 類 (※大・小形の別)	年 代	原形の特長・製作技法等	原 22 画 原 23 画
64	1155 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 2層	土埴物	杯	13.6 3.5 8.0	8.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1156 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	杯	(13.3) 3.2 (7.8)	(7.8)		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1157 B16E上土埴物	古銅器貯蓄用行 器土1層	土埴物	杯	14.2 3.5 10.0	10.0		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	61 原・5
64	1158 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	杯	- 8.0	8.0		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	51 原・11
64	1159 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	7.4 1.3 5.0	5.0		色調：にぶい橙 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	51 原・5
64	1160 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.0) 1.2 (5.0)	(5.0)		色調：灰青褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1161 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	8.0 1.1 6.0	6.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1162 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.2) 1.6 (6.4)	(6.4)		色調：浅黄褐色 胎土：赤色胎土を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1163 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	8.2 1.4 6.0	6.0		色調：にぶい橙 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1164 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.2) 1.2 (6.4)	(6.4)		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し 底ナデナデ	
64	1165 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.2) 1.4 (5.8)	(5.8)		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1166 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.2) 1.6 (6.2)	(6.2)		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1167 B16E上土埴物	B-TT~2層 2層	土埴物	小皿	8.4 1.6 6.7	6.7		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色胎土を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し・取目 庄周 内底：ナデ	51 原・2
64	1168 B16E上土埴物	B-TT 1層	土埴物	小皿	8.4 1.7 6.0	6.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	51 原・3
64	1170 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 2層	土埴物	小皿	(8.4) 1.3 (6.8)	(6.8)		色調：褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1171 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.4) 1.5 (6.0)	(6.0)		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1171 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	(8.6) 1.4 (6.6)	(6.6)		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1172 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	9.0 1.2 7.0	7.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	
64	1173 B16E上土埴物	B-TT~3T 甕口 甕	土埴物	小皿	9.0 1.7 6.8	6.8		色調：にぶい黄褐色 胎土：赤色胎土を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	51 原・4
64	1174 B16E上土埴物	G-ST-K87 石 土1層 北土層	土埴物	小皿	10.0 3.0 7.8	7.8		色調：褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面同胎ナデ 外底：糸切り履し	61 原・1
64	1181 B16E上土埴物	G-ST-K87 石 新土1層	土埴物	火鉢	(16.0) - -	-		色調：にぶい赤褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：外面片流文のスタンプ	
64	1182 B16E上土埴物	古銅器貯蓄用行 器土1層	土埴物	羽釜	- - -	-		色調：灰褐色 胎土：1mmの砂粒、灰行・羽釜を含む 調整：外面ナデ 内面胎土ナデ	
66	1184 B16E上土埴物	B-TT~2T 1層	青磁	鉢	14.0 - -	-		胎土：黄白色胎土・灰オリーブ色 内面に點線文	51 原・15
66	1185 B16E上土埴物	B-TT~2T 1層	青磁	鉢	- - -	-		胎土：黄・灰褐色 胎土：黄・灰オリーブ色 内面に點線文	
66	1186 B16E上土埴物	G-ST-K87 石 土1層	青磁	羽釜	- - -	-		胎土：黄・灰褐色 胎土：黄・灰オリーブ色 内面に片流文	
66	1187 B16E上土埴物	B-TT 1層	青磁	鉢	15.6 - -	-		胎土：黄・灰褐色 胎土：黄・灰オリーブ色	51 原・13
66	1188 B16E上土埴物	B-TT~2T 甕口 甕	青磁	鉢	15.4 - -	-		胎土：黄・灰褐色 胎土：黄・灰オリーブ色	51 原・14
66	1189 B16E上土埴物	B-TT~2T 1層	青磁	鉢	- - -	-		胎土：黄・灰褐色 胎土：黄・灰オリーブ色 胎土：黄・灰褐色 胎土：黄・灰オリーブ色	



規格 番号	規格 名称	仕上地色・単位 色(両面塗料)	仕上地色・単位 色(両面塗料)	種別	仕様	質量(cm)	分 類	番 号	用 意	備 考
66-1190	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	①大・大(両面塗り)	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・長行を含む灰白色 釉:緑灰色	用 意
66-1191	B16地上塗料	粗目B1T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	16.0	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・長行を含む灰白色 釉:灰オリーブ色	
66-1192	B16地上塗料	粗目B8T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	14.0	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・灰白色 釉:緑灰色	
66-1193	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:灰色	
66-1194	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:灰色	
66-1195	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・灰白色 釉:オリーブ灰色	
66-1196	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・灰白色 釉:緑灰色、覆付~覆付は無し	
66-1197	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・にぶい顔顔色 釉:灰色	
66-1198	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	11.6	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・灰白色 釉:緑灰色、面塗に凹張り	
66-1199	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:緑灰色、貫入	
66-1200	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗まで無釉	
66-1201	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗まで無釉	
66-1202	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗まで無釉	
66-1203	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗まで無釉	
66-1204	B16地上塗料	B4T~5T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	5.6	1.7	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗に凹張り	
66-1205	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	青磁	鋼	8.2	2.0	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗に凹張り	
66-1206	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	磁器外付	鋼	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:青・黒色粒子を含む灰白色 釉:黒灰色、面塗に凹張り	
66-1207	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	陶器	瓦	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:黒・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:黒灰色、化粧土	
66-1208	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	陶器	瓦	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:黒・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:黒灰色、化粧土	
66-1209	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	陶器	瓦	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:黒・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:黒灰色、化粧土	
66-1210	B16地上塗料	B1T~2T1層	13c.中塗~14c.面塗	陶器	瓦	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:黒・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:黒灰色、化粧土	
66-1211	B16地上塗料	G8T~K8T1層	13c.中塗~14c.面塗	陶器	瓦	-	-	13c.中塗~14c.面塗	新土:黒・黒色粒子及び長行を含む灰白色 釉:黒灰色、化粧土	
66-1212	B16地上塗料	B1T~3T1層	1250~1275年	陶器	瓦	-	-	1250~1275年	N字吹口縁 新土:長行及び砂粒を多く含む、自然釉がかかる、内面面塗はナシ	
67-1213	B16地上塗料	粗目B9T-G8T	在 地	中性磁器	壺	16.0	-	在 地	新土:1mmの砂粒を含む灰白色 外面:山形タタキ・面塗~口縁部ナシ 内面:面塗ナシの下部	
67-1214	B16地上塗料	B9T-G8T1層	在 地	中性磁器	壺	15.0	-	在 地	新土:1mmの砂粒を含む灰白色 外面:山形タタキ・面塗~口縁部ナシ 内面:面塗ナシ	
67-1215	B16地上塗料	粗目G8T~K8T	在 地	中性磁器	壺	13.0	-	在 地	新土:1mmの砂粒を含む灰白色 外面:山形タタキ・面塗~口縁部ナシ 内面:面塗ナシ	
67-1216	B16地上塗料	B1T~2T1層	18.0	中性磁器	壺	-	-	18.0	新土:1mmの砂粒を含む灰白色 外面:山形タタキ・面塗~口縁部ナシ 内面:面塗ナシ	
67-1218	B16地上塗料	粗目G8T~K8T	在 地	中性磁器	壺・甕?	-	-	在 地	新土:砂粒を含む灰白色、ややマーブル状 外面:筒子タタキ (3mm) 内面:亀、ハクメ	
67-1219	B16地上塗料	粗目G8T~K8T	在 地	中性磁器	壺・甕?	-	-	在 地	新土:砂粒を含む灰白色 外面:山形タタキ 内面:ハクメ	
67-1220	B16地上塗料	粗目B1T~3T	在 地	中性磁器	壺	-	-	在 地	新土:砂粒を含む灰白色 外面:面塗に凹張り 内面:面塗ナシ	

図号	原寸	縮尺	出土地点・層位 (出土層・埋没層)	種別	口径	高さ (cm)	重量 (g)	分 類 (※大・小の別番号)	年 代	形態的特徴・製作技法等	図 22 展 覧 順 号
67	1221	B16E上土層	中臣祖遺跡	瓶	-	13.1	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ナメ 内面：ハケム	61図-17
67	1222	B16E上土層	中臣祖遺跡	瓶鉢	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ナメ 内面：ナメのち黒目 (5本単位：1.2cm)	62図-1
67	1223	B16E上土層	中臣祖遺跡	瓶鉢	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色、マーズハ状 胎面：ナメ 内面：ナメ 口縁部は陶工器具による黒目	
67	1224	B16E上土層	中臣祖遺跡	釜	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ナメ・ユビ押入 内面：口縁部ナメ、体部ハケム	
67	1225	B16E上土層	中臣祖遺跡	鉢	-	-	-	押成域?	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ハケム推ナメ・ユビ押入 内面：ハケム	
67	1226	B16E上土層	中臣祖遺跡	鉢	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ナメ 内面：ハケム、口縁部ナメ	
67	1227	B16E上土層	中臣祖遺跡	鉢	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ハケム推ナメ・ユビ押入、口縁部ココナチ 内面：ハケム	
68	1228	B16E上土層	中臣祖遺跡	鉢	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒・糠粒を含む灰白色 外面：ハケム推ナメ・ユビ押入 内面：ハケム、使用跡あり	
68	1229	B16E上土層	中臣祖遺跡	鉢	-	-	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ハケム推ナメ・ユビ押入、裏面は焼付ナメ 内面：ハケム	
68	1230	B16E上土層	丸瓦上層	火舎押部	-	17.5	-	在池	18世紀	胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ナメ 内面：ナメ	61図-16
68	1231	B16E上土層	石製品	石鏡	-	-	-	在池	18世紀	押し 外面：5 mm厚位のナメ	
68	1233	B16E上土層	磁器焼付	小杯	6.6	3.4	1.8	肥前	17c後半	外面：染紙文、体部下位から磁器焼付 内面：色絵	
68	1234	B16E上土層	色絵	碗	-	-	-	肥前	18c 第2・3前半		
68	1235	B16E上土層	磁器焼付	碗	-	4.5	-	肥前	1700～1750年代	一次焼成 外面：二重黒目文 高台内：焼成内面：一重黒目文、内底：染紙文	
68	1236	B16E上土層	磁器焼付	碗	-	-	-	肥前	1710～1750年代	外面：半切花文+水波文	
68	1237	B16E上土層	青磁焼付	皿	-	-	-	肥前	1730～1740年代	内底に染付、口縁部は外反し、口内内側 青磁焼成、夏のみ	
68	1238	B16E上土層	陶器	碗	8.2	4.8	3.2	一帯地	1820年代～幕末	染付焼成	
68	1239	B16E上土層	陶器	碗 (京焼)	-	-	-	肥前	18世紀後半	内外面：透明焼	
68	1240	B16E上土層	陶器	碗 (京焼)	-	-	-	肥前	1500～1630年代	高台内底中央、体部下位から磁器焼付	
68	1241	B16E上土層	陶器	碗 (京焼)	-	-	-	肥前	1690～1740年代	内面：白土打黒目 胎土：灰色	
68	1242	B16E上土層	陶器	皿	-	4.4	-	肥前：内野山原	17c末～18c前半	内面：黒磁焼 内底：影の打輪割ナメ、外面下位まで透明焼、高台割割	58図-5
69	1243	A16E上土層	土器部	弁	13.4	3.5	9.6	肥前	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤色粒を含む 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1244	A16E上土層	土器部	弁	13.4	3.1	9.0	肥前	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤色粒を含む 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1245	A16E上土層	土器部	弁	13.9	3.5	10.6	肥前	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤褐色の厚し 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1246	A16E上土層	土器部	弁	8.0	1.2	6.0	同安楽寺	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤褐色の厚し 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1247	A16E上土層	土器部	小皿	18.4	1.4	16.0	同安楽寺	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤褐色の厚し 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1248	A16E上土層	土器部	小皿	8.6	1.5	6.4	同安楽寺	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤褐色の厚し 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1249	A16E上土層	土器部	小皿	9.4	2.1	6.4	同安楽寺	17世紀	色絵：浅黄緑色 胎土：赤褐色の厚し 調整：内外両面焼ナメ 外面：赤褐色の厚し	58図-4
69	1251	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	15c 後半～13c 初期	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3
69	1252	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	15c 後半～14c 後半	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3
69	1253	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	15c 後半～14c 後半	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3
69	1254	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	14c 後半～15c 後半	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3
69	1255	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	14c 後半～15c 後半	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3
69	1256	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	15c 後半	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3
69	1257	A16E上土層	青磁	碗	-	-	-	肥前	15c 後半～14c 後半	胎土：赤褐色を含む 調整：内外両面焼ナメ 内面：黒目文	58図-3

種別	製法	出土地点・部位 (調査年度)	出土地点・部位 (調査年度)	形状	寸法 (cm)	重量 (g)	分 類 (時代・主要原料)	年代	用途・特徴・製作技法等	備 考
60	1258	A16E上土層	A07E上土層	青磁	皿	-	13c. 中葉～14c. 前半	新土：青・灰白色 輪：緑灰色 輪：赤褐色 底面は黒色を帯びる	55 図-15	
60	1259	A16E上土層	S-7G 溝壁 2層	青磁	瓶	99*	13c. 後半	新土：青・灰白色 輪：オリーブグリーン	56 図-17	
60	1260	A16E上土層	S-7G 1層	陶器	壳	-	13世紀	新土：青・灰白色 輪：黒色 底面は赤褐色を帯びる	56 図-17	
60	1261	A16E上土層	陶器	陶器	瓶	-	13c. 後半	新土：長石を多量含む灰白色、黒色に二重色	56 図-17	
60	1262	A16E上土層	A-1T右側内周	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、黒色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1263	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1264	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1265	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1266	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1267	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1268	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1269	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1270	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1271	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1272	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1273	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1274	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1275	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1276	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1277	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1278	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1279	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1280	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1281	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1282	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1283	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1284	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1285	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1286	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1287	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1288	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1289	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1290	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1291	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1292	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1293	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	
60	1294	A16E上土層	中野東部	陶器	皿	-	13c. 後半	新土：砂粒を含む白灰色、赤褐色 外周：山部タタキ 内周：ハケメ	56 図-17	

階層番号	階層名	基土地点・階位 (基本構造階位)	類別	面積 口蓋 面積	高さ 階高	分層 (中央・大分層階位)	年代	形質的特徴・製作技法等	階 22 階 階位番号
70	1295	D16地上建物	倉庫	-	-	6号型式	1275～1300年	N字状口蓋 軀土：長石及び砂粒を多く含む。内外面は平土 軀土：砂粒を含む灰色。外蓋：灰土。内面：胴部土ナリ。外面：胴部土ナリ・体部山形土ナリ	62階-6
71	1297	D16地上建物	廊下	-	-	在地	-	軀土：砂粒を含む灰色。外蓋：ハマメ後土ナリ。内面：ハマメ後土ナリ。外面：ハマメ後土ナリによる粗目(9本・2.5cm)	62階-8
71	1298	D16地上建物	鉢	-	-	在地	-	軀土：砂粒・長石を含む灰色。外蓋：ハマメ後土ナリ。ユビ層土。口蓋部はヨコナナ。内面：ハマメ後土ナリによる大取の粗目	62階-9
71	1299	D16地上建物	丸鉢	-	-	在地	-	外蓋：砂粒を含む灰白色。内外面：平土。胴上部に巴文・スタンプ	62階-9
71	1300	D16地上建物	高脚 (脚蓋付)	10.5	6.5	4.4	1650～1690年代	内面：胴部土。内面：透明釉。外蓋下半は透明釉	62階-9
71	1301	D16地上建物	高脚 (脚蓋付)	-	-	在地	1630～1650年代	外蓋：鉄釉。内面：製付	
71	1302	D16地上建物	高脚	-	-	在地	1650～1690年代	外蓋：胴部土。内面：透明釉。外蓋下半は鉄釉	62階-4
71	1303	D16地上建物	高脚 足部外付	4.2	1.2	1.4	1820～1860年代	口蓋状・型押し成形。外蓋下半は鉄釉	62階-5
71	1304	D16地上建物	高脚 足部外付	4.2	1.4	1.4	1820～1860年代	口蓋状・型押し成形。外蓋下半は鉄釉	62階-5
71	1305	D16地上建物	注記不明	13.2	3.0	8.2	-	色調：灰青褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外蓋：赤切り磨し	
71	1306	D16地上建物	注記不明	16.2	3.7	9.5	-	色調：灰青褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外蓋：赤切り磨し	
71	1307	D16地上建物	注記不明	8.2	1.4	6	-	色調：灰青褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外蓋：赤切り磨し	
71	1308	D16地上建物	注記不明	-	-	東京窯系A2層	12c. 東室～13c. 初層	軀土：粗・灰白色。釉：灰オリーブ色	
71	1309	D16地上建物	注記不明	-	-	東京窯系B1層	13c. 中室～14c. 前平	軀土：粗・灰白色。釉：灰オリーブ色	
71	1310	D16地上建物	注記不明	-	-	東京窯系B1層	13c. 中室～14c. 前平	軀土：粗・灰白色。釉：灰オリーブ色	
71	1311	D16地上建物	注記不明	-	-	東京窯系B1層	13c. 中室～14c. 前平	軀土：粗・灰白色。釉：灰オリーブ色	
71	1312	D16地上建物	注記不明	-	-	東京窯系B1層	13c. 中室～14c. 前平	軀土：粗・灰白色。釉：灰オリーブ色	
71	1313	D16地上建物	注記不明	-	-	東京窯系B1層	13c. 中室～14c. 前平	軀土：粗・灰白色。釉：灰オリーブ色	
71	1314	D16地上建物	注記不明	-	-	白磁系10層	13c. 東室～14c. 初層	軀土：粗・灰白色。釉：緑灰色。高台部は透明釉を施す	
71	1315	D16地上建物	注記不明	-	-	白磁系10層	13c. 東室～14c. 初層	軀土：粗・灰白色及び長石を含む灰白色。釉：緑灰色。高台部まで当釉	
71	1316	D16地上建物	注記不明	-	-	白磁系10層	14c. 前平～後平	軀土：粗・灰白色。釉：青褐色。高台部は透明釉を施す	
71	1317	D16地上建物	注記不明	-	-	白磁系10層	16c. 後平	高台外面に三重面輪。外底に二重面輪。内底に巴文・面輪	
71	1318	D16地上建物	注記不明	9.0	-	一層式	1620年代～幕末		
階層番号	階層名	基土地点・階位 (基本構造階位)	類別	面積 口蓋 面積	高さ 階高	分層	年代	形質的特徴・製作技法等	階 22 階 階位番号
75	1319	北郷土常 T7/D-16	土器層	-	-	-	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1320	北郷土常 T7/D-16	土器層	-	-	-	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1321	北郷土常 T7/D-18	土器層	-	-	9.0	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1322	北郷土常 T7/D-18	土器層	7.4	1.6	(5.0)	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1323	北郷土常 T7/D-18	土器層	-	-	-	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1324	北郷土常 T7/D-18	土器層	-	-	1.2	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1325	北郷土常 T7/D-18	土器層	-	-	-	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	
75	1326	北郷土常 T7/D-18	土器層	-	-	-	-	色調：にぶい黄褐色。軀土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同様にナリ。外底：赤切り磨し	

発掘 番号	遺跡名	出土位置・単位	種別	規模	口径	高さ (cm)	分 類	年 代	形 状・特徴・製作技法等	備 考
75-1327	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/ⅠD-18 層(第1層)	中庄須恵器	鉢	-	9.8	在池		胎土：輝石及び砂粒を含む灰色。内面：ハケム	備22番 野原跡
75-1328	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/ D-5.6.7層	常滑	壺	-	-	-		胎土：1mmの長石及び砂粒を含む灰色。内面：ナデ	
75-1329	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/ D-5.6.7層	常滑	壺	-	-	-	19c	胎土：1mmの長石及び砂粒を含む灰色。内面：細クズ引後ユビ押し	
75-1330	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/ D-5.6.7層	磁器外付	碗	-	4.4	肥田系	19c	草花文	
75-1331	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/ D-5.6.7層	磁器外付 碗(広底)	碗	-	3.4	肥田	1790～1840年代	内面：細線+草花	
75-1332	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/表土 中	磁器外付	碗	-	3.6	肥田系	19c	外面：新目文	
75-1334	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/表土 中	青磁	碗	-	-	-	13c, 中葉～14c, 後半	胎土：精・灰白色。釉：緑灰色	
75-1335	相模野原跡	北朝土器Ⅶ/表土 中	陶器	碗	-	-	-	1820年代～幕末	胎土：精・灰白色。釉：緑灰色	
75-1336	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/H-27 層(第1層)	青磁	碗	-	5.6	龍泉窯系B1期	13c, 中葉～14c, 後半	胎土：精・顔色粒子を少量含む灰白色。釉：明緑灰色。内底：草花文。底部を焼し打ち火く	
75-1337	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/H-27 層(第1層)	青磁	碗	-	6.2	龍泉窯系D2期	15c, 中葉～後半	胎土：精・長石及び顔色粒子を少量含む。釉：オリーブ灰・高白内面釉施に閉りたる	
75-1338	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/H-20 層	土器滑	弁 (12.0)	3.0	6.0	6.0		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
75-1339	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/H-20 層	土器滑	弁	-	6.0	6.0		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
75-1340	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/H-20 層	土器滑	弁	-	5.6	5.6		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
75-1341	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/耕作土 層	土器滑	小皿	-	5.0	5.0		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
75-1342	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/耕作土 層	青磁	碗	-	-	-	13c, 中葉～14c, 後半	胎土：精・顔色粒子を少量含む灰白色。釉：オリーブ灰色	
75-1343	相模野原跡	北朝陶Ⅶ/耕作土 層	中庄須恵器	壺?	-	-	在池		胎土：砂粒を含む灰色。外面：山部タタキ。内面：ハケム	
75-1344	相模野原跡	相模 表土中	磁器外付	碗	-	-	8.0	肥田	内底：ゴジヤキタ印施瓦片施ヌタツブ。靴の目録参照	
78-1345	相模野原跡	北朝Ⅶ/層1覆土 中位層	土器滑	小皿	-	2.5	-		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
78-1346	相模野原跡	北朝Ⅶ/層1覆土 中位層	土器滑	弁	-	3.1	8.0		色調：褐色。胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
78-1347	相模野原跡	北朝Ⅶ/層1覆土 中位層	常滑	壺	-	-	-		胎土：1mmの砂粒及び長石を含む灰色。調整：外面に細目。内面ゴコナズリ	
78-1348	相模野原跡	北朝Ⅶ/層1覆土 層	中庄須恵器	壺	-	-	-		胎土：砂粒を含む灰色。外面：山部タタキ。胴部ナデ。内面：ハケム	
78-1349	相模野原跡	北朝Ⅶ/層1覆土 層	中庄須恵器	壺	-	-	-		胎土：砂粒を含む灰色。外面：平行タタキ・山部タタキ。内面：ハケム	
78-1350	相模野原跡	北朝Ⅶ/層2最上 層	土器滑	弁	-	-	-		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ	
78-1351	相模野原跡	北朝Ⅶ/層2最上 層	土器滑	弁	-	-	-		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
78-1352	相模野原跡	北朝Ⅶ/層2最上 層	土器滑	弁	-	-	-		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	
78-1353	相模野原跡	北朝Ⅶ/層2最上 層	土器滑	弁	-	-	-		色調：にぶい褐色。胎土：1mmの砂粒を含む。調整：内外面同施ナデ。外底：糸切り磨し	

図号 番号	原稿 番号	遺跡名	出土位置・層位	類別	形状	寸法 (cm)	口徑	底徑	分 類	年 代	形状の特長・製作技法等	図 22 展 陳施設
78 1354	前頁参照	北西 1V/表上	白磁	壺	-	-	-	0.6	白磁ⅢC1群	15c. 後半	胎土：黄・褐色粒子を少量含む褐色。内面：灰白色。筒台部底縁直上より	
78 1355	前頁参照	北西 1V/表上	瓦片上	蓋	-	-	-	0.6	白磁ⅢC1群	15c. 後半	胎土：黄・褐色粒子を少量含む褐色。内面：灰白色。筒台部底縁直上より	
78 1356	前頁参照	北西 1V/中層 遺跡層土	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	色調：灰白色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
78 1357	前頁参照	北西 1V/表上	常持	蓋	-	-	-	-	-	1740 ~ 1780 年	胎土：1mm 砂粒及び長石を含む灰色。調整：外面ケズリ・ナズ。内面無施	
78 1358	前頁参照	北西 1V/表上/石質 部部の確認	磁器外付 銅(Ⅱ型)	磁器外付 小片	-	-	-	-	-	17c. 後半	卓底文	
78 1359	前頁参照	北西 1V/表上	磁器外付	小片	-	-	-	-	-	近代	内面：胡草 外面：胡草文	
78 1360	前頁参照	北西 1V/表上/石質 部部の確認	磁器外付	坏	-	2.4	-	-	-	近代	体部下半露出 内底：絞の目輪滑り	
78 1361	前頁参照	北西 1V/中層 前面の埋戻土	磁器外付	皿	-	-	-	-	-	17c. 後半	胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
78 1362	前頁参照	北西 1V/表上	陶器	皿	-	4.2	-	-	-	近代	胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
78 1363	前頁参照	北西 1V/表上	陶器	蓋	-	-	-	-	-	近代	胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
78 1364	前頁参照	東 1V/南縁部砂	土師器	鉢	-	-	-	-	-	近代	胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
78 1365	前頁参照	東 1V/南縁部砂	中世須恵器	蓋	-	-	-	-	-	近代	胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1366	東光寺南縁部	R376/2 層	土師器	小皿	7.1	1.8	4.8	-	-	在場	胎土：1mm の砂粒を含む。外底：ハケム後磨目	
80 1367	東光寺南縁部	R376/2 層	中世須恵器	圓鉢	-	-	-	-	-	在場	胎土：1mm の砂粒を含む。外底：ハケム後磨目	
80 1368	東光寺南縁部	R376/2 層	陶器	碗(Ⅱ型)	-	-	-	-	-	在場	胎土：黒色粒子・白色粒子を含む灰色。二次焼成かけ	
80 1369	東光寺南縁部	R376/3 層下位	土師器	坏	-	-	5.8	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1370	東光寺南縁部	R376/3 層下位	土師器	餅付坏	-	-	-	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1371	東光寺南縁部	R376/3 層下位	土師器	坏	-	-	-	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1372	東光寺南縁部	R376/4 層	土師器	坏	-	-	-	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1373	東光寺南縁部	R376/4 層	土師器	坏	-	-	-	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1374	東光寺南縁部	R376/4 層	土師器	坏	-	-	-	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1375	東光寺南縁部	R376/4 層	土師器	小皿	6.4	2.4	3.5	-	-	在場	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒及び赤色粒子を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：糸切り磨し	
80 1376	東光寺南縁部	R376/5 層下位	土師器	小皿	-	1.8	-	-	-	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ	
80 1377	東光寺南縁部	R376/5 層下位	有紐	碗	-	-	-	-	-	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土：黄・褐色粒子を少量含む灰白色。胎：明緑灰色	
80 1378	東光寺南縁部	R376/5 層下位	中世須恵器	蓋・破?	-	-	-	-	-	近代	胎土：砂粒及び長石を含む灰色。外底：山形タタキ 内面：ハケム・ナズ	
80 1379	東光寺南縁部	R376/4 層	中世須恵器	蓋・破?	-	-	-	-	-	近代	胎土：砂粒及び長石を含む灰色。外底：山形タタキ 内面：ハケム・ナズ	
80 1380	東光寺南縁部	R376/12 層	土師器	坏	12.0	3.7	8.6	-	-	近代	色調：にぶい褐色。胎土：1mm の砂粒を含む。調整：内外面同軸ナズ。外底：静止糸切り磨し	

品目 番号	製法 番号	製造者名	出土地名・単位	種別	器種	寸法 (cm)			年代	備註
						口径	高さ	底径		
89	1381	東光寺御屋 R377/10.11層	土師部	土師部	餅付杯	-	-	-		形面の特徴・製作技法 色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面同様にナデ 底面に細かな凹み
89	1382	東光寺御屋 R377/10.11層	土師部	土師部	小皿	7.4	1.2	(5.6)		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ 外底：糸切り磨し
89	1383	東光寺御屋 R377/10.11層	土師部	土師部	小皿	8.0	1.7	(5.8)		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ 外底：糸切り磨し
89	1384	東光寺御屋 R377/10.11層	土師部	土師部	小皿	-	-	6.2		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ 外底：糸切り磨し
89	1385	東光寺御屋 トレンチ 10層	瓦葺土師	瓦葺土師	羹	36.4	6.2	-		胎土：砂粒・白色粒子含む 調整：外面ナデ 内面ナデ
91	1386	東光寺御屋 R4石組/橋本ト ンネル内	土師部	土師部	杯	11.7	3.6	6		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面同様にナデ 外底：糸切り磨し
91	1387	東光寺御屋 R4石組/右橋本 トンネル橋本部分	土師部	土師部	杯	-	-	-		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ
91	1388	東光寺御屋 R4石組/右橋本 トンネル橋本部分	土師部	土師部	杯	-	-	-		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ 口縁部内外面に凹凸状に削り
91	1389	東光寺御屋 R4石組/右橋本 トンネル橋本部分	土師部	土師部	杯	-	-	6.0		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ
91	1390	東光寺御屋 R4石組/須賀野 表土	土師部	土師部	杯	-	-	7.0		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ 内底縁を強くナデる 外底：糸切り磨し
91	1391	東光寺御屋 R4石組/右橋本 トンネル橋本部分	土師部	土師部	小皿	8.0	2.7	3.8		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面同様にナデ 外底：糸切り磨し
91	1392	東光寺御屋 R4石組/右橋本 トンネル橋本部分	土師部	土師部	小皿	-	-	4.0		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：外底同様にナデ 外底：糸切り磨し
91	1393	東光寺御屋 R4石組/須賀野 のR28-6部分	中野瓦師部	中野瓦師部	餅付	-	-	-		胎土：砂粒及び白色粒子を含む灰白色 外底：ユビ押入 内面：ナデ後削目 (8本/2.5cm)







# 写真図版

図版 1



令和3年度 北側土塁トレンチ 南側土層断面



令和3年度 北側土塁トレンチ 北側土層断面



令和3年度 北側土塁トレンチ 中央部土層断面



令和3年度 北側堀トレンチ H-27層青磁出土状況



令和3年度 北側堀トレンチ H-27層青磁出土状況



令和3年度 北側堀トレンチ下層状況



令和3年度 北側土壁・堀トレンチ土層断面



令和4年度 北側トレンチ堀検出状況



令和4年度 北側トレンチ北堀2礎廃棄状況



令和4年度 北西側トレンチ 土層断面



令和4年度 北側トレンチ 北堀2覆土炭化物散在状況



令和4年度 北西側トレンチ 石積検出状況



令和4年度 東側トレンチ 土層断面

图版 3



磨崖板碑 上部梵字残存状况



磨崖板碑 下部梵字残存状况



令和3年度 東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面(西側)



令和3年度 東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面(東側)



令和3年度 トレンチ 10層出土状況(1385)



令和4年度 石窟前庭～内部状況



図版 5



令和4年度 石窟内 滴水の水道



令和4年度 石窟内部 土層断面



令和4年度 石窟奥床検出状況



令和4年度 石窟右側壁納内



令和4年度 石窟左側壁納内



令和4年度 石窟天井に残る加工痕



令和4年度 石窟左側壁に残る加工痕



青蓮寺古塔碑群へと続く階段



青蓮寺・壇上積基壇（東側）



青蓮寺・壇上積基壇（西側）



青蓮寺・壇上積基壇（南側）

図版 7



相良頼景館跡 B 区土器溜め出土・土師器



蓮花寺跡 B 区溝下層出土・土師器



蓮花寺跡出土・中世須恵器（仏具）



蓮花寺跡 B 区溝出土・粘土塊



蓮花寺跡出土・瓦質土器（火舎）



蓮花寺跡 B 区溝出土・鉄滓





多良木町文化財調査報告 第3集

## 多良木相良氏遺跡

—多良木相良氏関連遺跡群総合調査報告書—

---

発行日 令和6年3月31日

発行 多良木町教育委員会  
〒868-0595 熊本県球磨郡多良木町大字多良木1648番地

印刷 コロニー印刷  
〒860-0051 熊本県熊本市西区二本木3丁目12-37

---